

明治三十三年十二月
第三種郵便物認可
明治三十八年三月五日發行
毎月一回五日發行
女學世界
第五巻第四號
口繪
彌生 油繪
雛様へ 水彩画
利根の春風 鉛筆画
雙眼鏡 鉛筆画
汐干の家づと 毛筆画
曲水宴 毛筆画
春の野 繪端書
露國皇帝と皇后
莫斯科の王宮
王宮内の壮観
露皇室の御親族
櫻花爛熳
貴婦人互禮會
神童の筆蹟



女學世界 第五巻第四號 目次

滋養強壮と次亞燐

次亞燐は世界無比の滋養新藥なり常に服用せば血を増し肉を肥し食物の消化を補け血色を能くし身體を強健ならしむ本劑は肺病、肋膜、胃病、心臓、神經、喘息、たんせき脚氣病其他貧血衰弱症に特効あり尙ほ産前産後の肥立は勿論病後等の補血に缺くべからざる新藥にて牛乳に優る數十倍の効ありて飲み安き藥劑なり



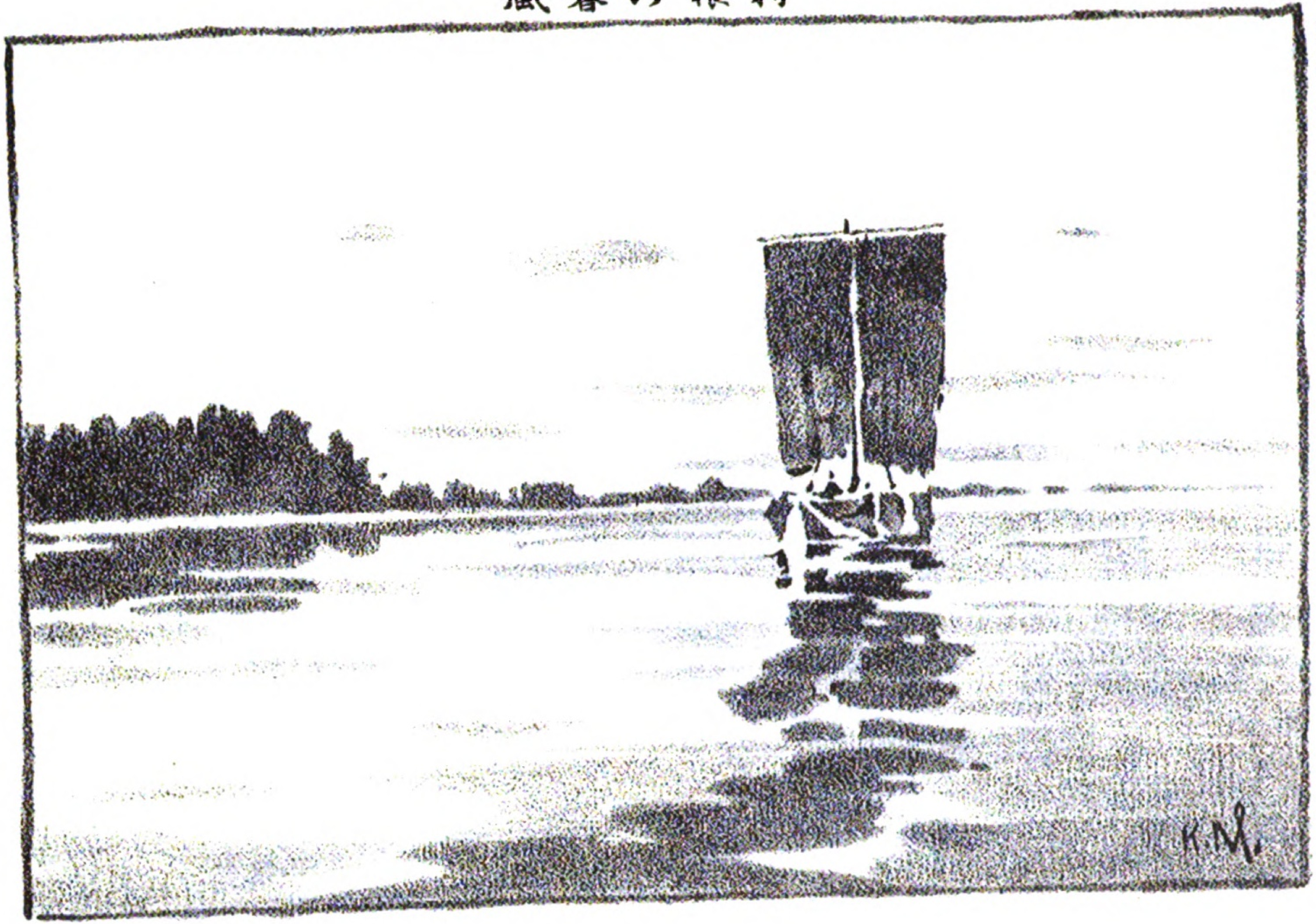


五姓田芳柳筆



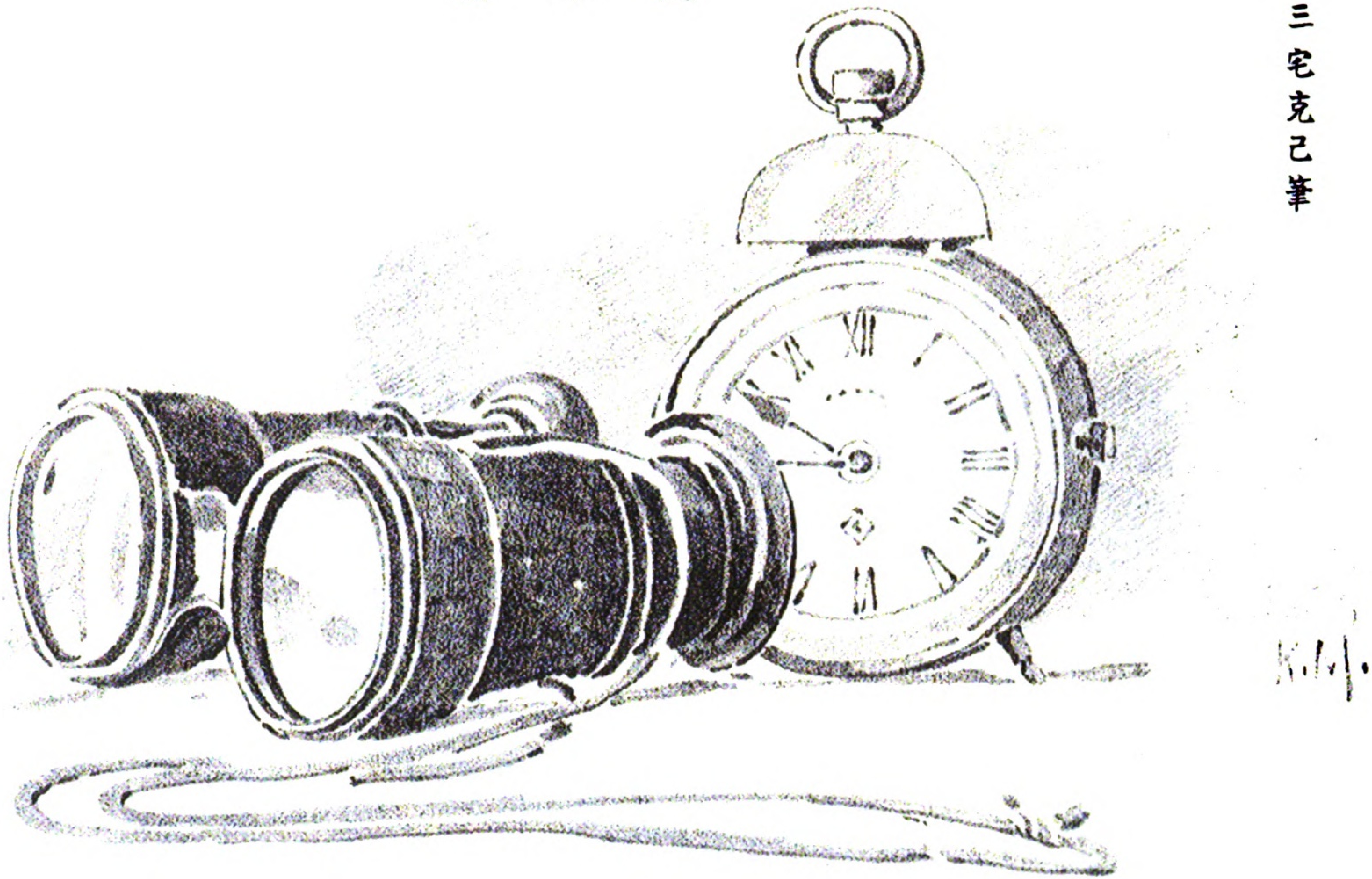
利根の春風

三宅克己筆



雙眼鏡

三宅克己筆



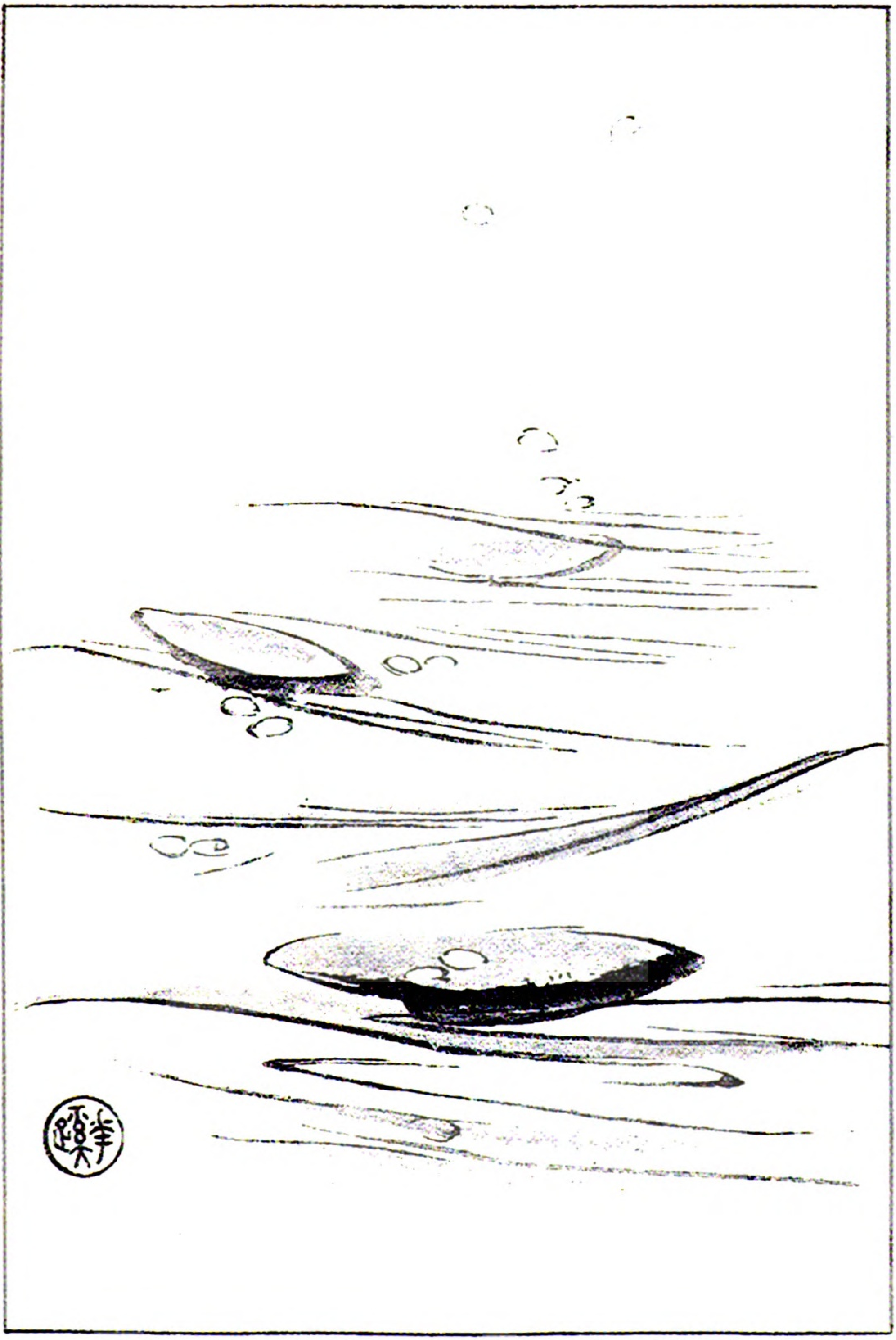
汐干の家づと



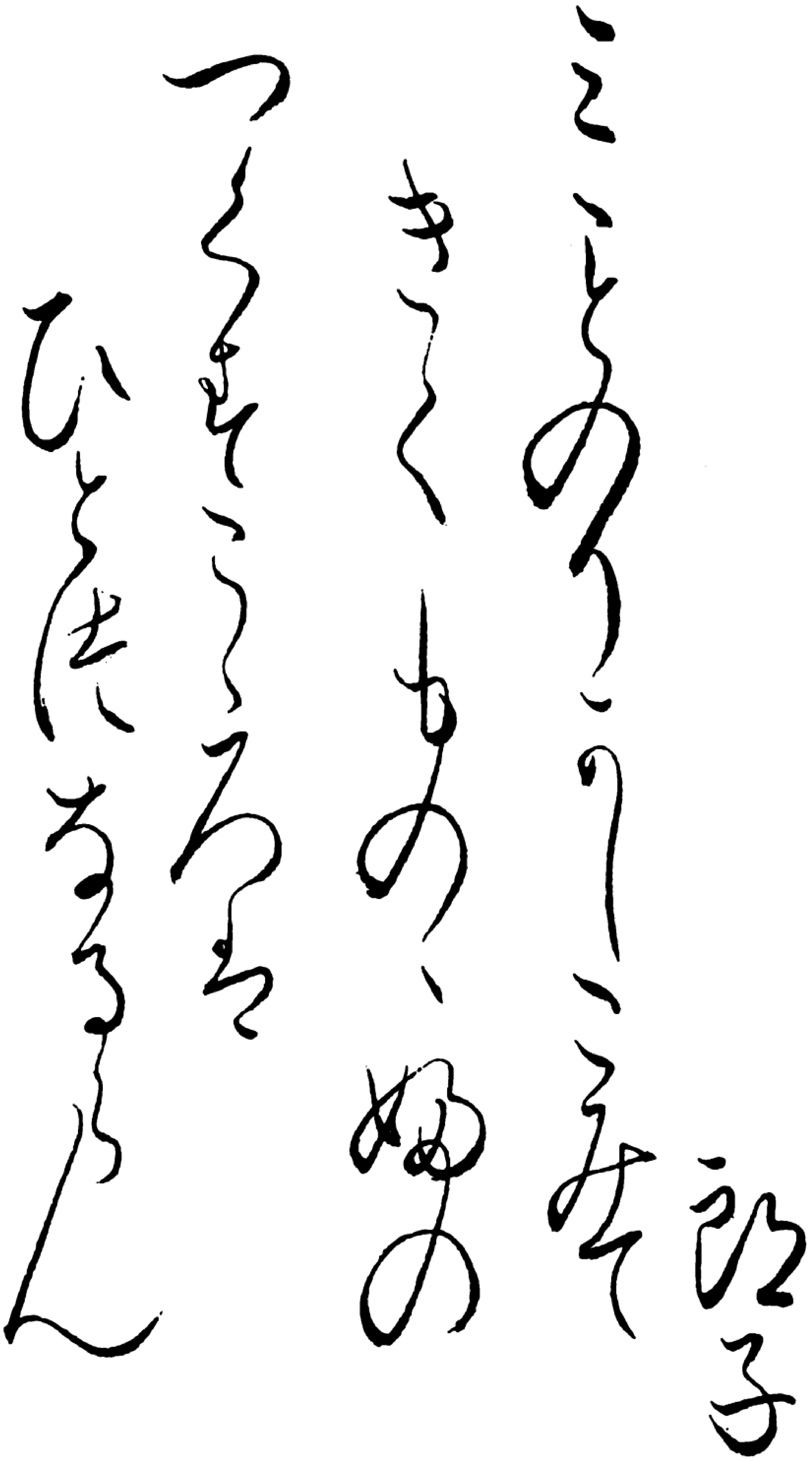
跡見花蹊女史筆

曲水の宴

跡見花蹊女史筆



前田侯爵母堂筆



行路柳　朗子

さしてゆくりのきのめ
うつるかくりやう
のなれこちの
あをやぎのいと

前田侯爵母堂筆

各種美術漆器類

御婚禮道具蒔繪美術品各種重箱膳椀家具一式其他各種共特別に注意調進可仕候

御用の節は電話にて御申越被下候はゞ店員相伺せ可申候尚階上に陳列場の設け有之候間時々御來觀奉希上候



(柏)

東京市日本橋區通壹丁目

黑江屋漆器店

電話本局八百拾四番

米國セントルイス萬國博覽會
第五回内國勸業博覽會
銀牌受領

象印歯磨は品質無比にして衛生上及び歯牙に殊効あるの故を以て豫て陸海軍の御用品たる事既に江湖多數愛顧者の熟知せらるゝ所なりと雖も猶今回の事局に際しては出征軍士の為めに**恤兵部**の**御買上品**に選定せられ益々御用命を蒙るに至りしは本品の最も光榮名譽とする所なり



本舖 東京 **安藤井筒堂**

(甲の二)

(其の二)

◀實際的にして趣味清新▶

日本の家庭

▶第壹號 三月十日發行 定價金八錢 郵稅金五厘

初號附錄 **家庭の團欒** 小林習古畫伯筆 石版十度刷大判

▲口繪―武家時代の教育(寫眞版)

▲發刊の辭……記者

▲日本の家庭に望む……學習院教授 大村仁太郎

▲發刊を祝ふ……女子高等師範 佐方鎭子

▲家政雜談……成女學校講師 嘉悅孝子

▲音樂のはなし……白井規矩郎

▲主婦のつとめ……愛國婦人會評議員 山脇房子

▲主婦の心得……三輪田女學校長 三輪田眞佐子

▲中山幸子刀自を訪ふ……記者

▲兒童に關する俚諺……女子高等師範 東基吉

▲衣服の衛生……女醫 前田園子

▲福島少將の家庭……記者

▲室内の裝飾法……女子大學講師 松浦政泰

▲家庭の軌範十則……佐治實然

▲米國婦人の新職業 ▲猫のまねした兎……おぢさん

トントン、チクチク……ばんがく

▲奥ゆかしき妻君……志葉田ふみ子

▲未婚の女子に與ふ ▲春日局 料理、編物、交際法 和歌、學校案内等

▲卷中挿入寫眞版 木版數十個 ▲定價 六冊前金五拾錢(郵稅共) 十二冊前金九拾五錢(郵稅共)

大好評の新著

◎我子の惡德 學習院教授 大村仁太郎先生編述 定價金六拾錢 郵稅八錢

◎太郎は如何にして教育すべき乎 大村仁太郎先生譯補 定價金六十錢 三月十日發賣 郵稅八錢

◎征伐日本魂雄(やまとだまを) 露國 樋口勘治郎先生編 定價金三拾錢 三月十日發賣 郵稅四錢

◎武家時代少年士道の訓 文學士久保得二先生編 定價金六十錢 三月十日發賣 郵稅八錢

◀發兌元 東京神田表神保町二番地 同文館▶

大賣捌所 東京堂 東海堂 北隆館 良明堂 大阪 寶文館 盛文館


元和二年創業
田中玄蕃釀造
千葉縣銚子港
HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
PATRONISED BY THE IMPERIAL HOUSEHOLD
Awarded First Class and Gold Medals at the various International Exhibitions held at home and abroad
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor
G. TANAKA
Choshi, Chiba-ken, JAPAN

(甲の四)

彼及び彼の妻



露國皇帝ニコラス二世及皇后アレキサンドラ兩陛下

彼の宮殿

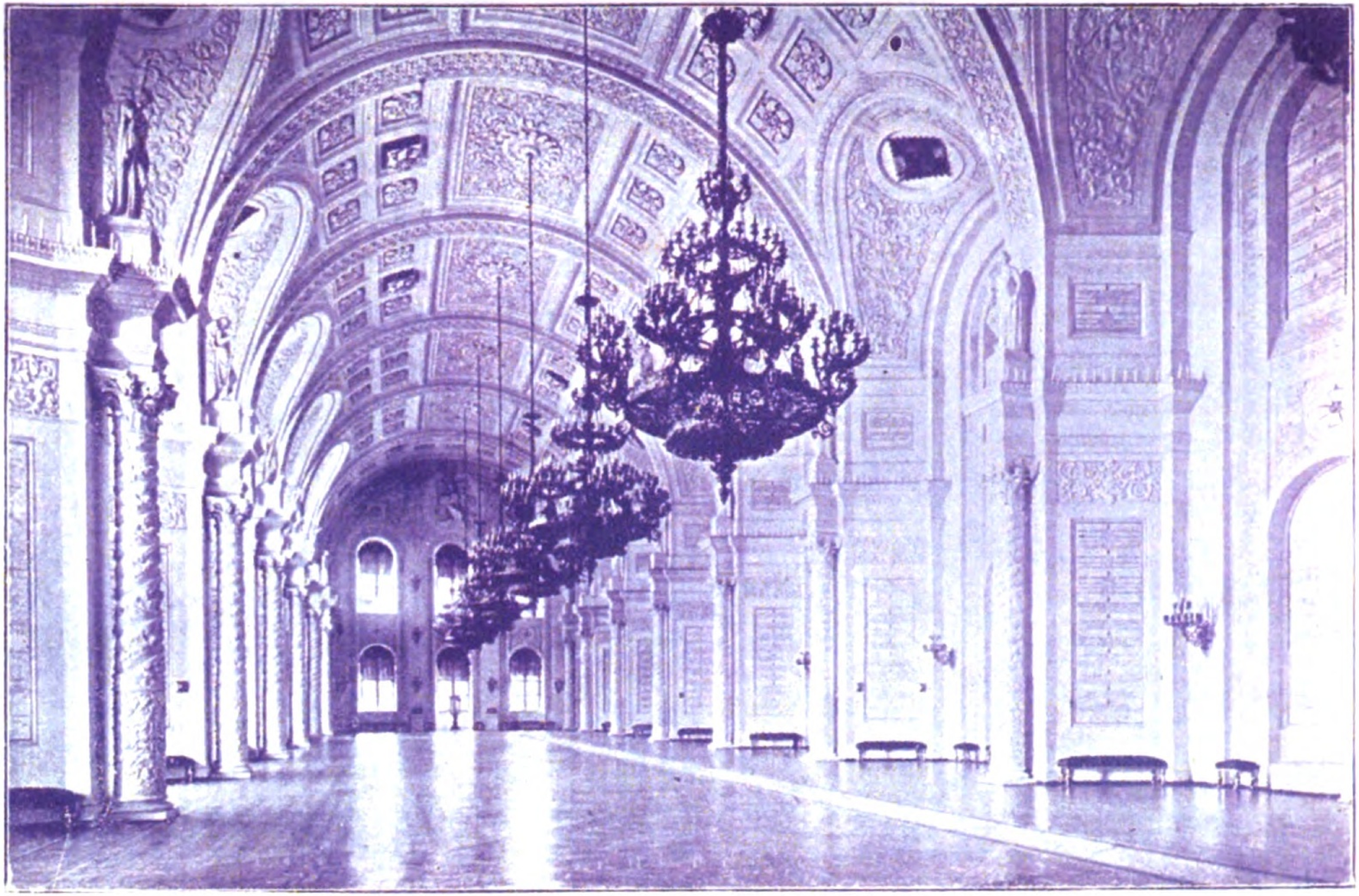


莫斯科クレムリン宮殿

（記事參照）

宮殿の内部

クレムリン新宮殿の内部



（記事參照）

彼の親族



露帝室と其の親姻

（記事参照）

愛國婦人會新年互禮會



前列右方　閑院宮妃殿下　上村中將　毛利公母堂　大山侯夫人

前列左方　東郷大將　岩倉公夫人　近衛公母堂　九條公夫人

輕暖



本莊子爵（宗義）攝影

三版

家政百箇條

此書は本會が多年の經驗を積みて一般家政上の法則となるべき事ども百箇條三百六十七項を一冊にまとめ軍國の際能く家政の法則を心得て家を齊へ堅忍持久の覺悟を十分ならしめんが爲に發行せるものなり

定價拾貳錢(郵送料を要せず)郵便切手代用苦しからず

東京麹町區下二番町三七

大日本女學會

電話番町千三百三十番

家庭百箇條世評一斑

○國民新聞　「なんな」の臨時增刊で料理、裁縫、洗濯汚點拔、家事衛生、家庭敎育、禮法、家庭に關する法令等百箇條を集めてある何れも實際適切なるもので一家の主婦及主婦たらんとするものに取り至極よい心得草であらうと思はれる

○中央新聞　家政に關する百般の法則を婦人に辨へしめ軍國多事の際家内に無駄を生ぜずして能く家事を整理せしめんがため特に增刊したるものにして(中略)記事着實にして妄りに高尚に走らず家を齊ふる婦人の熟讀すべき良書なり

○都新聞　(前略)一般に婦人の心得べき事百箇條を簡單平易に記述せしものにして家を齊へんと欲する婦人等の益友と爲すに足るものなり

○京都日出新聞　(前略)日常家庭に於ける須要の事どもを網羅して遺憾なし寔に主婦の良益友たるを疑はず

○大阪朝日新聞　(前略)家政を執る婦人の座右に缺くべからざる參考書なり

○大阪新報　大日本女學會が多年女學講義錄を編輯するに當り廣く諸名家の講義中より家政の法則となるべき事項を摘記し(中略)所謂懇切穩當是非家庭に一本を備ふべき良書なり

○神戸又新日報　本書は家政に關する法則を一般婦人に知得せしめ戰時は勿論何の時にあたりても所謂無駄なる者を生ぜざる樣克く家事を整理せしめんとするにありて(中略)行文解し易くして懇切

○中京新報　(前略)一般婦人殊に軍國婦人の爲發刊せるものなり家政を執る御婦人達には座右の寶たり處世の羅針盤たり

○横濱貿易新報　(前略)同會が多年女學講義錄編輯上ひろく蒐輯したる名家講話中家政の法則となすべきものを選び上は禮法敎育の事より下は料理の鹽梅漬物の加減に至るまで婦人として日常心得べき必要の箇條を網羅したり夫人令孃もこの卷を誦んずるを得ば一家の幸福を增進すること少からざるべし

○滋賀日報　本書は雜誌「なんな」の臨時增刊にして同誌主筆山澤俊夫氏が家政を掌る婦人の爲にものせられたる者にして(中略)何れも家政の珍とすべく家政を掌る婦人の座右に備付すべき良書とすこれ記者が讀者に一讀を薦する所以なり

○鶴岡新聞　(前略)何れも有益の記事を以て充滿せり殊に同會にては世人の普及の目的にて印刷實費を以て其需用に應ずる者なりと

○常總新聞　(前略)軍國健婦の好伴侶として見るに足るべく又時機に適したる册子と云ふべし

○高知新聞　(前略)ありとあらゆる家政向きに必要なる廉で百箇條を纏めて一册と爲し婦人齊家の金科玉條とすべきものなり

○尾道新聞　(前略)齊家の婦人は勿論將來理想の家庭を組織せんとする女學生諸孃は必ず一本を購ひて座右に備へざるべからず

○竈城新聞　こは一家の主婦には平生より心得おくべき日用家事心得の項を分ちて錄したるものにて理論にはあらず誠に家政上一寸都合よき者にして何處の家々にも一本づゝは備へおくが宜しからん

女子清韓語學講習所生徒募集

現時社會の趨勢に鑑みるに幾多有望の女子たる者進むで清韓に向て帝國固有の美質と燦爛たる我文明とを須て彼等が女子を開發し啓沃するの任に當らざるべからず吾等此に感ずるところあり大に此道を講じ之が速成と實用とを考量して其志望を補翼し其志業を成就せしめむことを期す是を以て女子清韓語學講習所を設け同好の女子を教養せむと欲す吾等切に希望す有志諸姉が奮て茲に就學あらむことを

○本校は明治三十八年四月十日より開始す

○本校の授業は毎日午後三時より三時間とす

○入學者の資格は高等女學校若くは女子師範學校卒業生又は之と同等以上の學力を有したる者とす

○入學志望者は本年三月二十五日までに入學願書に履歴書を添へ差出されたし

○規則入用の御方は郵券二錢を添へ申出らるべし

東京小石川區表町八十八番地

淑德婦人會

(乙の二)

淑德女學校生徒募集

○本校は　貞淑の女子を養成するを以て唯一の目的と爲す

○本校は　明治二十四年創立以來氣品高き良校風を備へ懇切教養しつゝあるは世既に定評あり

○本校は　本年四月より從來の學年に於て更に一學年を加へ教場に於て更に二教場を增築す

○本校は　改正の結果新に一年二年各級の生徒百五十名を限り募集す第三年級欠員に就き十名を募集す

○本校は　高等小學二年級以上の課程を卒へたる者は無試驗にて相當學級に入學を許す

○入學志望者は　三月二十五日までに入學願書に履歷書を添へ差出されたし

東京小石川區表町八十八番地

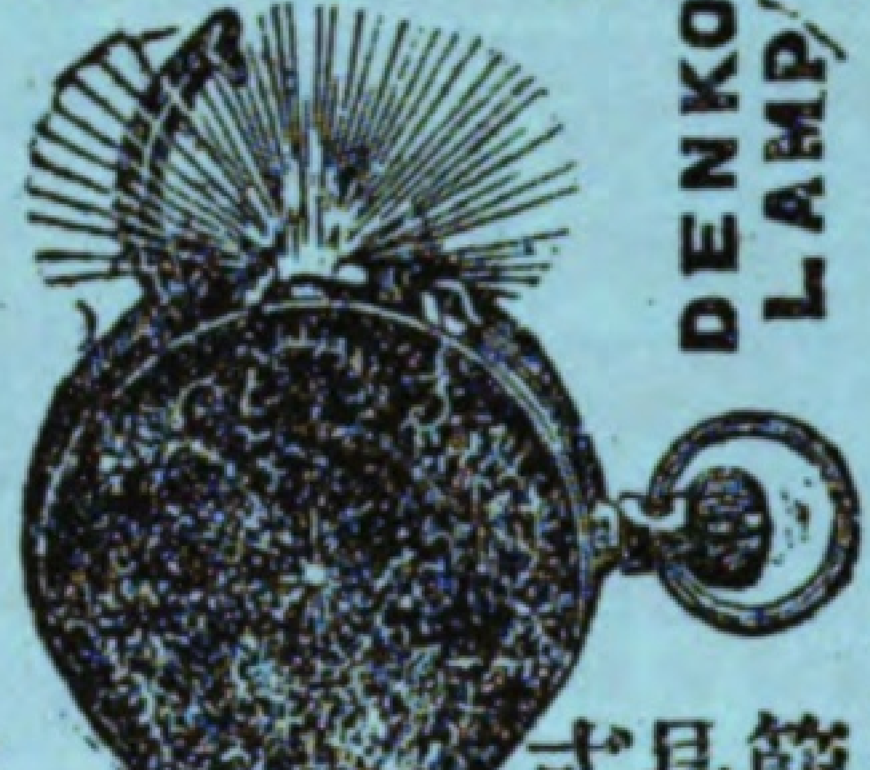
淑德女學校



●大好評 女學生諸婦人等必要品 戰捷紀念メタル進呈

龍頭押明時計形銀貨入

物は愛する處に集り財は容れ器に溜まる本器は上等ニッケル十八形時計側にて携帶に製し體裁は優美便利にて婦女老少を問はず和服洋服者に論なく懷中腰下げポケット用として小銀貨入には無比の適品なり 甲價五拾錢 乙價四拾五錢送費四錢



嶄新有益 懷中燈 文明利器

DENKO LAMP

簡易式 發光點火

圖の如きニッケル時計側に器械藥品を裝置しイボを押せば蓋明き龍頭を廻せば側面忽開き發光と同時に點火す風雨暗夜汽車探險其外時と處を不撰隨意點火す本器は全部金屬製永久使用に堪ふ原料附一組上製五十五錢特製八十錢小包料十錢



時計文具

磁石文具は兩蓋にて一面は墨池肉壺捺印等を備へ一面は日光時計を仕込み時計と磁石の效用を兼ぬ又龍頭に伸縮自在の筆を仕込ありて便利なりニッケル側七拾五錢金着側九拾五錢送費四錢

換筆自在 文具專用 上等ニッケル時計

形唐草模樣入片蓋特製は正價五十五錢送費四錢也

製造發賣元 大阪南區天王寺電信局東隣 東洋社

新發明

美音錠

將校軍人	定價
教師	十錢
僧侶	廿錢
演舌家	五十錢
音曲家	壹圓
謠曲家	

右は從來內藤家の製劑に有之所今回弊店に讓受候間猶引續御用命給り度此段奉希望候定價廿錢以上のものへは引繼御披露のため極めて美麗なる丸藥及楊枝入を封入進呈仕度各地有名藥店に差出し有之候得共若し品切の場合には直接御註文被下度全國は無遞送料にて御郵送申上候

美音錠發賣所 東京日本橋區兩國米澤町二丁目一番地 稀僉丸本舗 萬珠堂藥店 吉田安五郎

子宮病 自宅療法

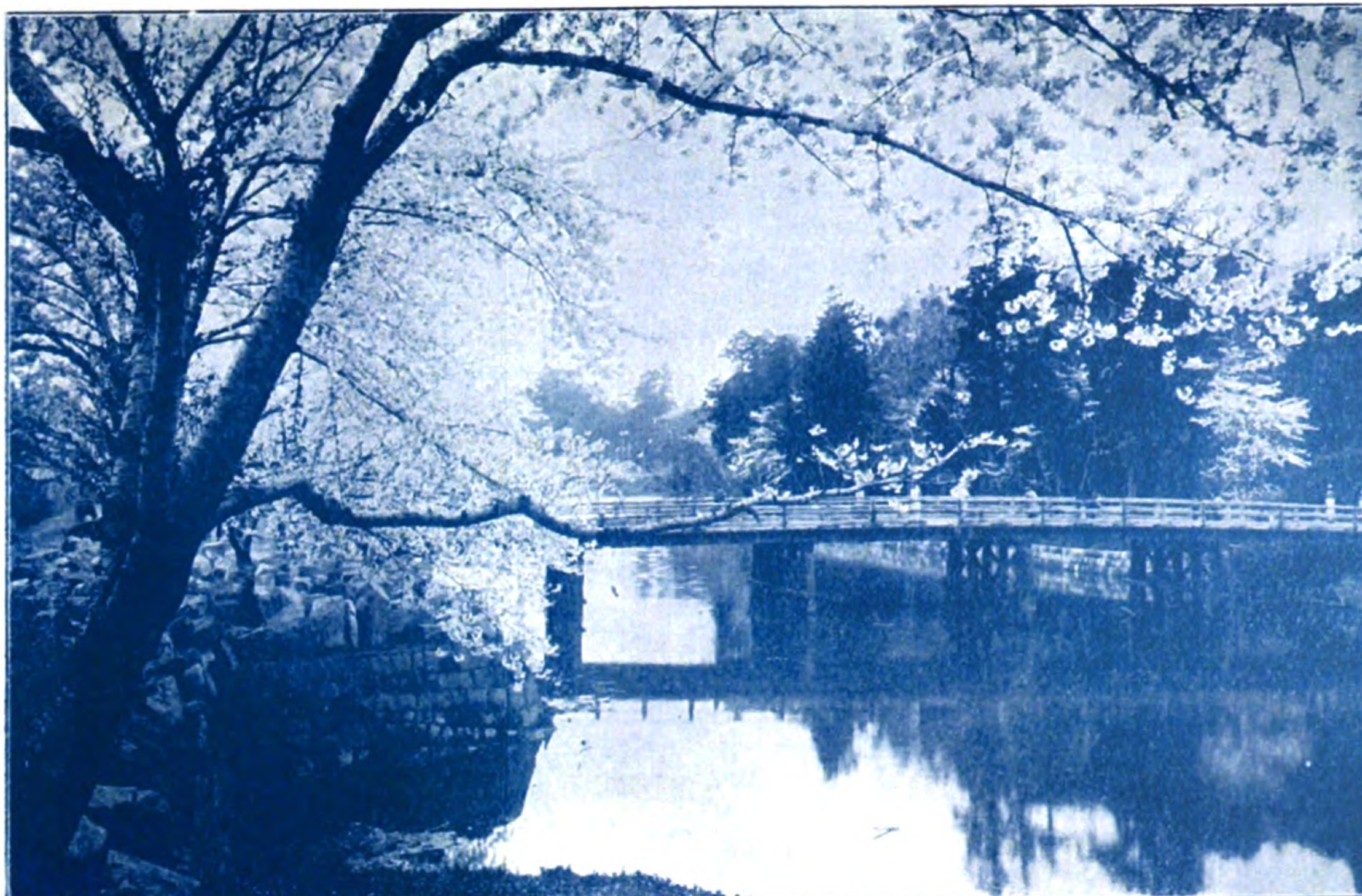
妾娩をてより七年此方子宮病ちの道の難病をわづらひ色々と藥療を盡せしも更に効なく一家悲歎の折柄ふと試みたる療法にて忽ち全快妊娠の身となり今や安すくと健兒を擧げゝれば嬉しさの餘りこれを弘く傳へたし望む人は返信料三錢と容躰書を添へ遠慮なく問合せあれ

奈良縣宇陀郡榛原町 笹岡りん

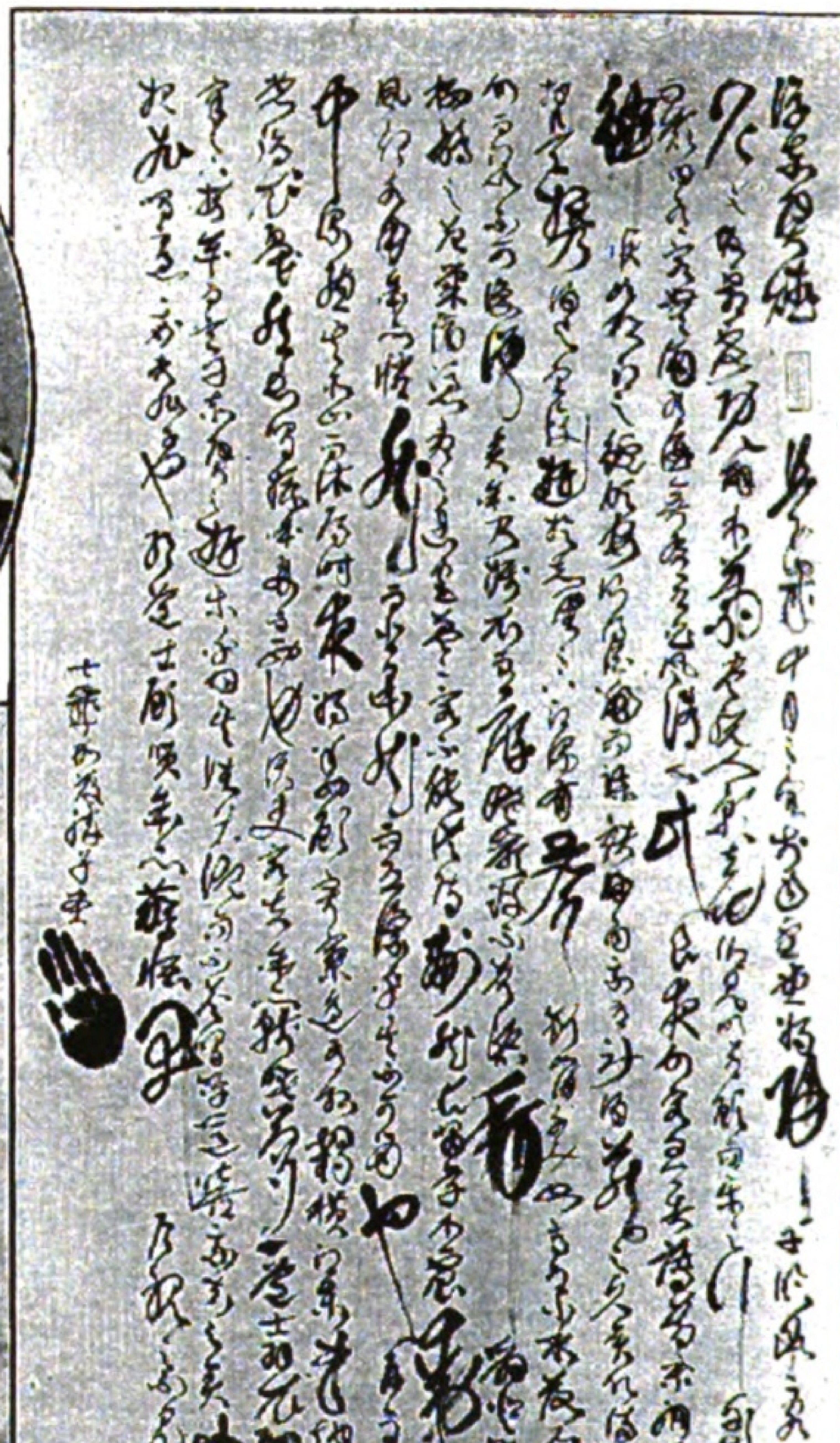
(乙の三)

櫻花爛熳

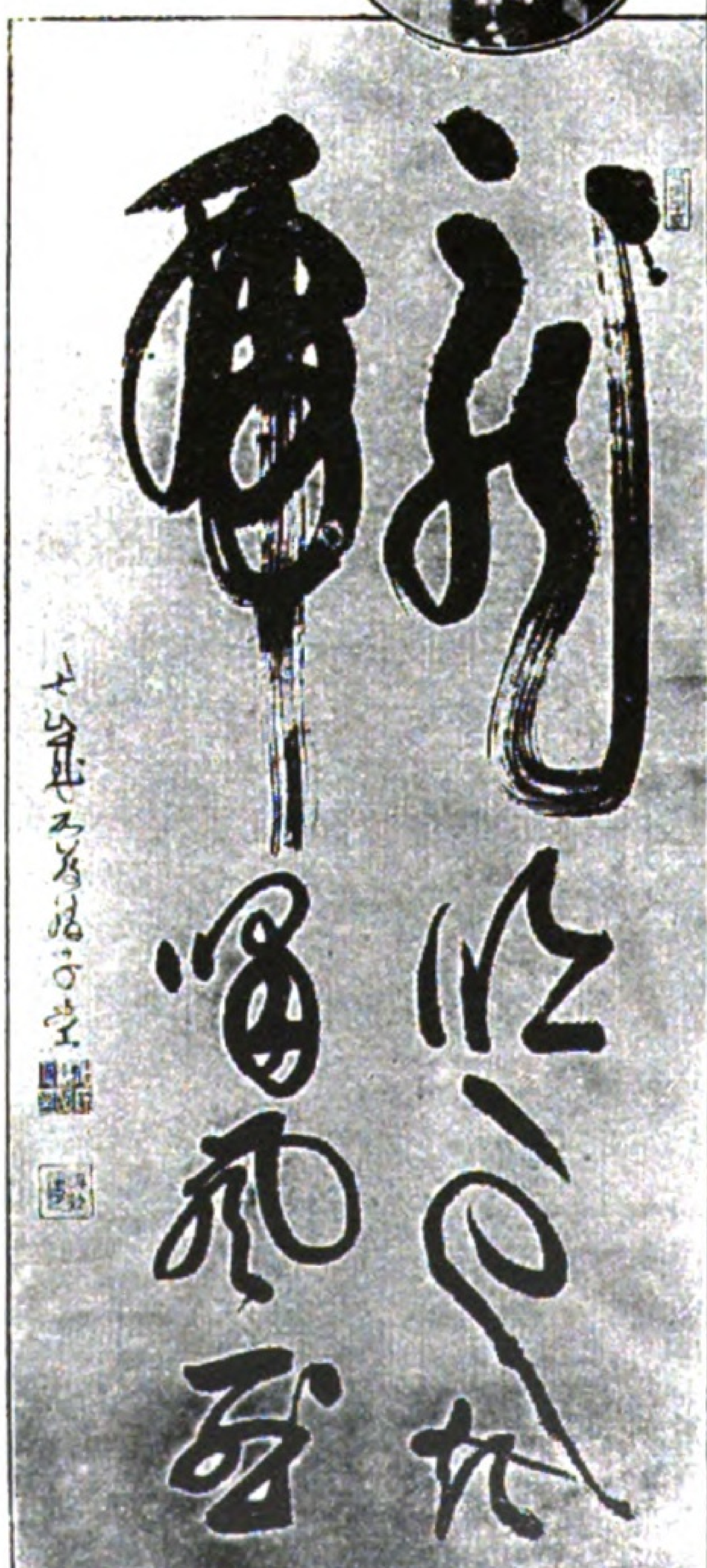
紀尾井阪下辨慶橋



七歳童女の筆蹟







七歳童女加藤綾子は廣島縣の産當時大阪親に住す、父彌吉米國に渡航不在中祖母に養はる、一昨年冬始めて同地の輪林學舍岡阪鐵山に就きて書を學ぶ、技忽ちにして熟し筆を執つて紙に臨めば墨痕淋漓として飛龍昇天の勢あり、誠に神童といふべしされば紳商、官吏の招聘に應じて時々揮毫しその書大に珍賞さる、綾子は當時親尋常小學の二年生なり童にしてこの技あり後世恐るべし、されど克く戒めずんば神童の名を汚す事あり。

●女學校庖厨科の新書●

割烹大家赤堀峯翁・日本女子大學教授赤堀峰吉共著●挿畫數十種入

(壹卷)正價金五拾錢
(貳卷)正價金五拾錢
(參卷)正價金四拾錢
●郵税一、二卷各六錢三卷四錢

新著

日本料理教科書

洋装 美製 全三冊

世未だ教科書としての料理書なし蓋し料理法は實科なり經驗を要し熟練を必し更に教授上に於ける生徒の理解力如何を悉知して教材程度の難易を次第し得る者に非ざれば容易に筆を執る能はざればなり本著者は自家の設備に係る料理教場の外日本女子大學、東京女學館その他數多の學校に多年教授の任に當れるものその説明の丁寧親切にして叙述宜きに適ひ原料編に始りて簡易なる日用惣菜料理より進んで儀式的料理編に終る分類配材の整然たる眞に料理界唯一の良教科書なり既に本書出版に先ち二三女學校の教科書として御採用の榮を得たり

赤堀峯翁 赤堀峰吉 赤堀菊子 共著 ○家庭十二ヶ月料理法 和装 美製 全二冊
上卷 春夏 正價金五十錢
下卷 秋冬 正價金五十錢
●郵税一冊金八錢

三輪田女學校主 三輪田眞佐子著 ○女訓之栞 和装 美製 全一冊 正價金四十五錢 ●郵税金六錢

華族女學校教授 小野鷲堂編著 ○增訂女子手紙文 和装 美製 全一冊 正價金四十錢 ●郵税金四錢

●目錄郵券二錢御送附あれば呈す

發行所 東京日本橋區通一 電話本局四一四番 大倉書店 賣捌各書店

(丙の一)

文學博士 井上哲次郎君
文學士 有馬祐政君共編

武士道叢書

上中下三册

洋裝大判
紙數一册約五百頁
上卷三月出版

(其の二)

上卷豫目

卷頭
▲御製の歌……男爵高崎正風君書
▲軍人勅諭
▲大伴家持長歌

武士道は我邦の精髓なり、武士道の盛衰は直ちに我が國運の隆替に關す、古人曰く、武は矛戟にあらず勉めて忠孝節義の膽を練ると、忠孝節義の四字、即ち武士道の要訣にして、今回征露の役、亦我が武士道の狂ぐべからざるが爲に起り、開戰以來の連勝、亦將士の武士道を重んずるが爲に之を得たり將來平和克復の後に至るも、愈よ益々武士道に待つ所多きは知者を待たずして之を知るべし、古來武士道を重んずるの書、世に少からずと雖も、斷篇零册にして、未だ集めて大成せるものなきは、一大缺點と謂はざるべからず、井上有馬兩先生茲に見るあり、幽を闡き秘を搜りて良書數十篇を得、校訂して三卷と爲し、以て世に問ふ所あらんとす、國家に志あるの諸士、必らず一讀せざるべからざるの寶册なり。

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

三月廿日發行

寫眞畫報臨時增刊

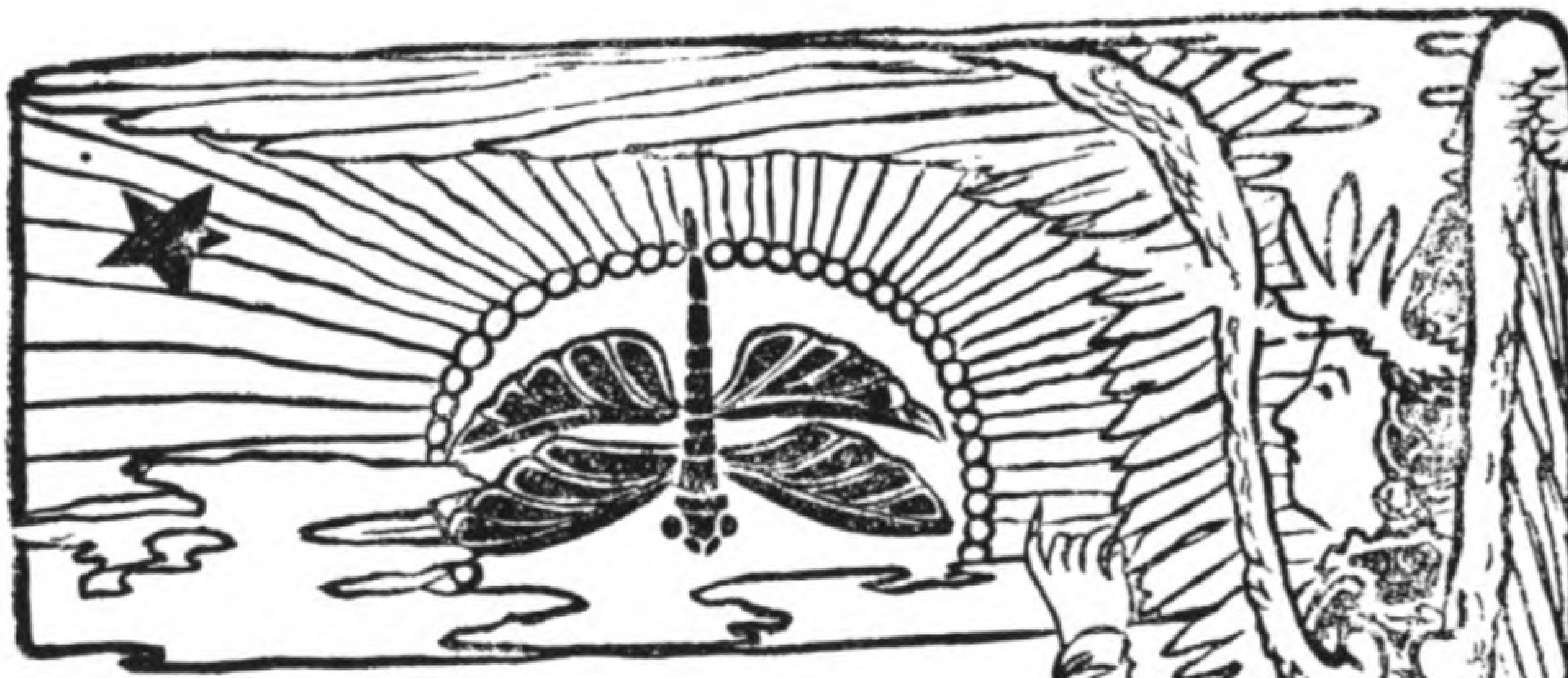
陸海敵軍寫眞帖

征露戰役起りて以來未だ敵軍の寫眞にして、我國に傳はれるものなし。陸に海に、滿洲に、沿海洲に、我が軍に對して頑强に抵抗し、時としては彼我兩軍其陣頭に會見し、手を握り杯を擧げて數時間の談笑を續くるが如き、或は數十萬の大軍を放ちて數晝夜の激戰を續くるが如き、流石に敵も我が軍の相手として不足なき勇氣を示すもの多し。此等敵軍の寫眞は最も珍とすべし。蓋し我が同胞は、日夕之を目擊するも、敵は容易に之を視る機會無ればなり。我館近來此等の敵に屬する寫眞數百枚を得たり。

全一冊洋裝　大判美本　正價卅錢　郵稅貳錢

乃ち其の粹を拔きて特に此編を爲す。旅順、ダルニー、營口、遼陽、奉天、鐵嶺、浦潮須德、ハヾロフカ、ハルピン、バイガル湖邊の敵軍と、目今擾亂中なる露本國の首都彼得堡の光景より、陸海軍の將官、士卒、土民の風俗に至るまで、一百餘種五十頁の寫眞版と爲し、本文には、露軍の內情、本國の動亂、宮廷內の奇現象、國民風俗の暗黑面など彼等が連戰連敗する原因は、詳委曲盡して、而かも之を叙するに婉麗なる筆を以てす。眞に天下無類の絕好寫眞帖たり。

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館





第五卷第四號

二千年前の日露戰爭

北風捲地白草折。胡天八月即飛雪。
忽如一夜春風來。千樹萬樹梨花開。
散入珠簾濕羅幕。狐裘不煖錦衾薄。
將軍角弓不得控。都護鐵衣冷猶着。
澣海闌于百丈水。愁雲慘憺萬里凝。
中軍置酒飲歸客。胡琴琵琶與羌笛。
紛々暮雪下轅門。風掣紅旗凍不翻。
輪臺東門送君去。去時雪滿天山路。
山廻路轉不見君。雪上空留馬行處。

二千年前の日露戰爭

第一頁の詩は盛唐の名家岑參の作である。支那文學史上で詩の最も精華を發いたのは唐の代であるが、唐朝の詩で最も雄大沈痛にして千古の絶唱と言はるゝのは多く征戰、從軍、並に戰爭に關する家庭の慘狀を寫した者である。抑も支那帝國歷朝五千年間國家の大患を爲したものは實に北胡である、北胡は大古に於ては熏鬻、中古に於て匈奴、近代に於ては蒙古、其の名稱及び人種に於ては多少の變遷相違はあるが、兎に角此の胡人種が支那帝國の患害であつた事は非常なもので、殊に漢代及び唐朝に於て其患害最も甚だしくこれが爲めに國家民人の膏血の糜了した事幾百千萬なるを知らず、今の甘肅、青海、内外蒙古の地方、天山南路、長城の附近に白骨の狼藉たる今猶毛髮の竦然たるものあり。漢及び唐朝が國家の全力を擧げて征戰に從事した事實は歷史の證明する處ろであるが、これが爲めに將軍の功名千載に傳はるあれば幾多無名の英雄をして恨を呑んで空しく地下に瞑せしめたのもある。支那四百餘州の家庭はこれが爲めに著るしく悲慘を見たのである。そこで今日、日露の戰爭は宛も二千年前の漢と胡の對抗を現實にしたもので、露は即ち匈奴、日本は即ち漢、二千年前の漢と匈奴との事實は二千年後の今日日本と露西亞になつたのである、曾て中國の患ひをなした匈奴は今日東洋の患を爲スラブと變遷したのである。二千年前の長城附近の煙塵は二千年後の今日沙河附近に現實して居るのである嗚呼！

時論

日本婦人之位置

戸板關子

女子と小人とは養ひがたしとは、我等女子を侮辱したる唐人の囈語なるが、女子は果して手の附けられざる程の厄介物なるか、餘りと云へば情なき評言ならずや、乍去之は女子を賤み翫びたる東洋人、而かも古き昔の人の言にして、開化したる近代の人の口より出でたるものにあらず、況んや今日は彼の風に吹かるゝ葦の如き、未開なる鷄林半島にも、玄氏の妻女の如き、臆面なき女豪傑を出す世柄となりたれば。敢て神經を起して賢人にもあらざる古への唐人を相手取り彼是と此の問題を詮議するの必要なし。唯々我等は才女と愚夫と果して同等なるか、懦夫と烈女と果して一樣なるか、幾ら教育しても女子は物にならざるか、如何に鍛煉しても女子は飽くまで鈍きか、を事實に於て知らしむるより外に詮術なかるべし。

支那、朝鮮、暹羅、西藏の家庭は未だ見聞せしことなけれども、我國の家庭に於ては男女懸隔の今猶ほ著しきものあるを見る。封建時代に在つては、其妻女が女兒を產みたりとて機嫌を害ねて其の妻を叱り飛したる武夫もありたりとか。女兒を產みたりとて敢て其妻女の罪にもあらざるべきに、此男も亦一種奇妙なる氣立ならずや、乍去其頃の武士の風は往昔のスパルタと同じく概ね皆な斯くの如くなりしならん、子無ければ去る七去の刑に處

せらるべき婦人は若し女兒をのみ產みたらんには輕く見ても確かに違警罪に問はるべき筈なりしなり。今日にても其の妻が男子を產めりとて非常に嬉しがり、女子を產めりとて格別に愁傷の態を爲す御發明な方もあるなり、日本五千萬の人口其の半を占むる者は女子ならざるを得ず。殊に自然に授かりたる恩賜に對し兎や斯く苦情を並ぶるは實以て勿躰なきことならずや、良しや產み落したるは男の兒にあらずとも、其を大切に育て上ぐるが、祖先への忠義、國家への義務ぞかし、抑々斯る氣風の存在するは、國の外聞に拘はること、亦我等女子の榮辱に關することなれば、此の惡風を除去することに努めて勉めざるべからず。

又夫婦の間に於ても甚だ面白からざる風儀の存するを見る、夫と云ひ妻と云ふ固と之れ同等の者なり、如何で尊卑の分あらんや、然るに其の夫婦の往々主從の如くなるを見るは最も慨はしきことなり。農商等にして中以上の產ある家に於ては、妻は其の夫を呼ぶに旦那號を以てし、之に對する言語の如きも、最も丁寧にして「旦那はお目覺めになりました」若しくは「召食れ」とか「お歸りなさいません」等の尊敬辭を用ゆるあり、又役人の家庭に到りて見るに、其の細君は敢て旦那等の尊稱こそ用ゐざれ、其の夫に仕ふる狀の一入遜りて慇懃なる、其の主人公の應揚？尊大にして應揚なる樣、芝居じみて可笑きものなきにあらず、其夫の出入には妻子眷屬は必ず兩手を疊に着けて送迎す、夫居室に通れば、細君は夫の衣服着換に忙がしく、下婢はお出端の持運びに忩遽しく、而して后細君は側に侍して其日の寒暄風雨の狀を述べて愛嬌を溢ぼし、聊かたりとも夫の容色に稍々異狀ありと見て取りたる時は、努めてお世辭を言ひ、其の鼻息を窺ひ其の鬚髯を拂ひ、戰々競々として只其の喜怒に觸れざらんことを之れ惶るゝが如し、中以下の官吏等にても、客ある時は其の妻に命令すること恰も婢僕に對するが如く、曰く「茶を持て來い」曰く「酒を出さんか」其の調子丸で鹿兒島出身の巡査が無鑑札の車夫を窘めるが如し、何と馬鹿々々しきことならずや、若し果して夫は斯くあるべき者、婦は斯くせねばならぬといふ

自然の約束なれば、世に女子と生るゝ程憫れなる割の悪ろきものはあらず、古人が人生れて婦人の身となるなかれ、百年の苦樂他人に依る、と言はれたるも稍々道理あるものゝ如く聞ゆるに至れり往昔希臘の哲人にして女子を賤める者あり、中古佛國の哲學者にして女子を崇拝せし者あり、其主張時代とによりて異なる所ありと雖も、二十世紀の今日に於て女子を賤むが如きことは決して道理の許さゞる所なり、如何に時務に明かに學識に富める人にても若し其の妻女を輕蔑し虐遇するあれば之れ正しく開化したる野蠻人なり、トテモ磨き上げたる紳士とは云ふべからず、たとへ第一着に支那を僵し今又露國を凹まして、世界第一等の強國と仰がれても、女子を賤むの風存する限りは、まだ〳〵世界の優等國とは稱すべからず、男子にして婦人の位置を高むるを欲せざれば、我等婦人自ら奮て旅順包圍軍の二〇三高地を占領するの勢を以て其位置を乘取るべし。何の遠慮も躊躇もあるべけんや。

抑々人に男女の兩性あるは造化自然の配合にして、男は女となる能はず、女も男となるを得ず、男子は剛にして女子は柔、女子は密にして男子は疎、此の陰陽二性相合躰して始めて社會組織の要素が成立つを得るなり、此の世に男子の尊まるゝと同じく女子も亦重せらるべき道理なり、男子重きを負ふ、故に貴しといふべからず女子輕きを擔ふ、故に賤しといふを得ず、男子は政權を有するが故に貴しといふか、女子が政權を有せざるは有する能はざるにあらず、男子の威力を以て之を與へざるなり。看よ我國の如きも、神功皇后は英邁にして國光を海外に輝かし、持統、孝謙兩帝は身自ら萬機を總攬し玉へり。唐の則天武后は英明の資を懐て天下を經營し、露國のカザリン二世は其德性に於て間然する所無きにあらざるも、兎に角賢明勇敢能くピーター大帝の遺業を紹述したり。英國の先帝ビクトリヤ女皇は天資聰明國家多事に處して能く國威を宣揚し、其治世五十年間に於ける大英國の著しき進歩發達は洽く世人の知る所、玆に更めて瑣々するを要せざるなり、若し女子にして

被選擧權あらば、米國のウィラード孃は衆望を負ふてルーズベルト以前に大頭領となりしならん、女子必ずしも意氣地なきにあらず、女子決して氣の利きたることをなす能はざるにあらず、只々無慈悲なる多數男子の爲めに其の勢力範圍を縮められ、其事業行動を掣肘せらるゝがためなり。

然れども世界の氣運は日を追ふて女權擴張に向つて進み來るが如く、中にも比較的女子の自由を有する米國の如きは女子にして官吏たる者其數幾んど一萬に近かるべく、其月俸の如きも六十弗より二百弗なりといふ、其普通敎育は、大概女子の手に委ねられ、殊に宗敎上矯風上の事業の如きは、女子の力却て男子に勝る所あるに似たり、印度の異敎徒は聖書よりも、敎會よりも、宣敎師よりも、女宣敎師と女醫者とを恐れたりといふことも嘗て聞きたることあり、都鄙に在る宗敎學校所謂ミッション、スクールも女子の手に成れる方、寧ろ盛大なるを見る。我國の如きも、近年に至りては、女子養ひ易しと悟つてか、以前に在りては狂者に刃物、女子に學問と嫌ひに嫌ひたる天保生れの舊弊人も、政府の奬勵と時勢の進運に抗する能はず、其子女に多少の敎育を授けざるもの殆んど無きに至れり、是に於て乎高等女學校の數全國を通じて殆んど一百に垂んとす。其の他實業學校の數も亦尠からず。朝夕海老茶袴の往復織るが如きを見るは國家進歩のため實に祝すべきことなり。

今や我國は世界環視の中に在りて、陸に海に連戰連捷、久しく世界に雄視したる强露の鼻梁を摧ぎ、世界國民喝采の中に榮冠を戴きたれば、今日の日本は最早昨年の日本にあらず。極東の日本にあらずして、世界の日本なり、軍事に於ては寧ろ世界の一等强國となれるなり。斯くの如き仕合せとなりたる上は男子の奮發すべきは言ふまでもなく我等女子たる者も、狹き小さき女々しき心を有せず、銀行、會社、印刷局、電話交換局、停車場に採用せらるゝを以て滿足せず、より多く大膽に、より多く活潑に、更らに抱負を濶大にすべし、一層品位を高尙にすべし、萬國の人と交るには外國語も知らざるべからず、智者學者と交るには歷史、美術の知識をも

貯へざるべからず。我等は三輪田、矢島、奧村、棚橋の刀自等あるを以て安心すべからず。悲ひ哉是等の人は二十世紀の中葉まで其の手腕を振ふ能はずして早く此世を辭せざるを得ず。我等は又下田歌子、津田梅子、安井哲子、井口あぐり、跡見花蹊、野口小蘋等の名媛女史あるを以て滿足すべからず、是等の人は千萬中の數人に過ぎず、如何に叫びても、如何に躍りても、其の影響する所甚だ遠からず。去れば多數の女子たるもの、事ある毎に手を束ねて是等女子の指導を待つべきか、抑も々々嘆かはしき次第ならずや、次の時代を作るべき女學生諸君よ、我等は學問識見共に乏しく、只僅かに絲と針とを以て手尖きの業を心得たるに過ぎず、而して年歯將さに初老に近からんとす、謂ふ所碌々人に依て事を爲すに止るのみ、諸君は猶ほ春秋に富む、譬へば芳香を含める蕾の如く、未來の繁榮期して待つべし。諸君の前途實に多望なり、諸君勉め奮へ。俊才とは凡人の奮發したる者なり、諸君學べば識者と成り得べし、働かば富者と成り得べし、數十百人の下田歌子女史を出すも跡見花蹊女史を出すも一に諸君の心掛によるべし、王侯相將種子あるにあらずんば、名媛女史も決して種子あるにあらざるなり、神は石をもアブラハムの子とならしめ玉ふ、誰か學んで聖とならざるものあらんや、諸君若し此目的に向つて進まば必ず好果を得ん、女子の本分は子を產で育つれば足れりといふにあらず、女子は男子の頤使に應ずべき奴隷にあらず、諸君は自ら其位置を高むべし、其權利を擴張すべし、男子若し之を拒まば諸君は步武を揃へて突貫して之を奪取すべし、斯くして初めて交際場裏の女王とも成り得べく、社會を飾る花とも成り得べし、諸君乞ふ勵め、凡に於て熱心なれ、去らば諸君の大成は我等の信じて疑はざる所なり。

女子の獨立問題

伯爵　松平直亮

近時女子敎育の隆盛に赴き、其程度愈々進みたるは國家の爲め之を賀せざるべからず。然るに何故か敎育を受けたる婦人中、特に女學生に往々女子の獨立を主張する事の流行を來せるが如し。女子の獨立とは如何なる意義かと云ふに、畢竟女子が婚嫁を爲さず、一種の職業を求め、獨立の生活を營みて社會に活動するを目的となすものなり。如此論は恐らく女子が自已の天職の何たるを辨せざるより起れる僻見にて、誠に歎息に堪へず。又獨身生活と云へることは、單に女性のみと限らず。往々男子にも見る事なれども、玆には特に女子に關して立論せんと欲す。而して女子の獨立てふ事は次の三點よりして之を否認せざるべからず。

第一　天則に反し生理上より否認せざるべからず

第二　女子の性能發展及び天職より否認せざるべからず

第三　國家の組織上より否認せざるべからず

此他にも尙否定すべき點なきにあらずと雖も予は此三點より考究して明かに之を否認するものなり。蓋し女子が婚嫁を要するは天則にして、人類の踏むべき常道とす。然れども或場合には此常道天則のみに率由し難く、變法として獨立自活を是認せざるべからざる場合あり。即ち次の如し。

第一　不具廢疾の者　之は世の所謂片輪なり。惡疾に罹れるもの、怪我を爲せるもの、若くは先天的の不具者即ち完全の身體を備へざるものは、右の除外例として止むを得ず婚嫁せざるも可なり。而も女子が實際婚嫁に堪

へざる病弱の躰軀を有する不幸の域にあるものなり。

第二遺傳及び傳染病を有する者　遺傳又は傳染すべき性質の病毒を有する人は、婚嫁の結果として病毒を其夫或は子孫にまでも及ぼす事あるを以て、單に一家の休戚問題たるに止まらず、公德上社會の利害、國家の得失をも考へて之を禁止するを可とす。

第三結婚する爲め重大の目的を遂ぐる能はざる場合　此に重大と云へるは、世俗の所謂重大てふ意味にあらずして、餘程重要なる場合に限る。女子が國家又は人類に對して至重至大なる任務を帶び、而も其の任務たる他者を以て代ゆべからざる場合を指す、若しその女子が獨立從事せざる時は、其事業爲めに廢絶し、國家人類の上に非常なる影響を與ふる如き、已むを得ざる時機に臨んでは、大を採りて小を捨て、國家の爲め將た人類の幸福の爲め婚嫁を之が犧牲に供することをも是認せざるべからず。唯だ此事たる容易に許すべきにあらず、特殊の目的を達せんが爲め人生の常道を破るの所爲たれば十分考慮を加ふべきものなり。

第四止むを得ざる事情ありて婚期を失へる者　女子の婚期を失ふ者の中には、生計上の狀態に依り之を捉へ得ざる者多かるべし。即ち自己の父母兄弟等を扶養するが爲め或る業務に從事し、その結果婚期を失ひ遂に配偶を求むる能はざる如き場合是なり。又體軀の强弱如何に依り結婚を妨げらるゝ者も尠なからざるべし。即ちある疾病に罹り、治療數年に及び、終に身神虛弱に陷りて適當の婚期を失へるものゝ如き是れなり。其他錯綜せる人生の生活界に於ては、種々なる事情に制せられて、快よく結婚の目的を達する能はず、故意に之を拒まざるも、周圍の事情に依り取外すこと多からん。如此女子は婚嫁せざるも亦た恕すべきものに屬す。

第五一度婚嫁せし者　一旦結婚を爲したるも意外なる災禍に罹り、又は不得已事情の爲め配偶を失ひ獨身者となりしものは、兎に角一度び婦女の盡すべき天職を盡したるものなり。此の如き女子は、獨身再醮共に任意の

行動を取りて不可なかるべく必ずしも再び婚嫁を强ゆることを要せざるべし。

抑も女子が婚嫁を要せざるも可なる場合は、以上五項に畧述したるが如し。之を國家の組織上より考ふるに、若し女子が男子と婚姻せず、個々獨立して此の世を送るといふ事とならば國家は何を以て組織せられ、如何にして永久に存立し發展すべきか、極端に言へば、人類は遂に亡滅に歸せざるべからず。女子の婚嫁は國家を搆成するに於て、殊に女性の天職を盡すに於て必須不可缺の要訣にして、畢竟婦人の常道として守らざる可らざる所ろなり。第一に人の妻となり家政を執り、良人をして後顧の憂なからしめ、又人の母となりては、子女の敎養に力を盡し、將來此國家を繼續すべき良國民を作ることは、是れ良妻たる賢母たる者の盡すべき責務にして、之を十分に實行することを得ば、女子としての天職全しと認めらるべく、國家に對しても十分貢献したる者と稱して不可なかるべし。然るに世間には良妻となり賢母となる事の女子の天職たる所以を解せず、唯だ獨立を以て生活するを光榮視して誇るものあるは、誤れるの太甚しきものにあらずや。社會の法則、女子の責務果して前述の如しとせば、所謂婦人の天職を行ふに方りて、何をか心に銘すべき規範と爲すべきか。予を以て之を見れば

第一　女子の天賦性能を發展し天地の化育を助くる事。

第二　日本帝國的賢母良妻たる事。

第三　國家の分子たるを自覺する事。

此の三要點に在り（他は省略す）と信ず、乃ち人類として各自の天性を發展し、其の性能を全うし、天地の化育を助成するの決心を存すると共に、一方には國民として日本國的賢母良妻たるの資格を備ふることを要す。且同時に其身が國家を組織する一要素たりとの自覺、即ち自己の一擧一動は國家社會と至大なる關係を有せり

との自覺を失ふべからず、女子は家政を整理し、子女の教養に任じて十分なる効果を奏することを得ば、國家に貢献する所偉大なりと云ふも不可なかるべく、國運の消長と密接の干繫を有つことは敢て多言を要せざるべし、要するに女子も身は常に國家の一員たり、國家を構成し居る一分子たることを以て自任し、崇高雄大なる抱負を存することを遺るべからず。

終りに臨で予は滿天下の女性諸君に對ひ、重ねて、一家の中に於ては、家政及び子女の教養に努力するを以て責務と爲さんことを望み、又社會に出でゝは、人類の爲め國家の爲め鋭意女子の天職を盡すと共に、其一擧一動が國家民衆と至大の關係を有することを確認し、剛毅堅忍以て其職分を完うせんことを望む。　（完）

龍城中の家庭

こは少しく舊聞に屬すれども旅順が未だ包圍中に在りし時代、米國の從軍記者エメルソン氏がステッセル氏に面會したる時の光景なり、曰く、私が旅順龍城中のステッセルに面會したのは十一月下旬で、佛蘭西の或通信員と一緒に往たのです、ステッセルは豫て承知して居つたものか、外界の消息を聞きたい樣子で副官を從へて待受けて居ました、が露語の外は使はず、一切ライス大佐が通辯しました、劈頭第一何か新聞は無いかといふからどういふ種類の新聞かと反問すると何でも好い此の六ケ月間は消息絕えて何も聞かないから新しいことを聞かせろといふことである、そこで露國皇太子の生れたことをいふと、それは最う知つて居るといふ、次ぎにクロパトキンは今何處に居るかと尋ねた、奉天に居るといふと、なに遼陽だらう、遼陽に居たが敗けて奉天へ退却したのだといふと、暫く小首を傾けて居つた、夫れからバルチック艦隊は何したと問ふた、レバーに還つたといふと又暫くして自分は此處で死ぬるか、さもなければ日本軍に擒になつた方が遙に優しだといふた、奉天はどうかと問ふから、まだ戰爭はないが何れ遠からず陷るかも知れぬといふと、何故芝罘から戰報が來ないであらうか、故意で音信せぬのではないかと自ら語つた、それで露兵は壁壕の裡に在つてクロパトキンの來援を信じて居るのであるから此の話は他所でしてくれるなと賴んだ、ステッセルは隔てのない飾り氣のない人で、金モールの帽子を被り、金ボタンの軍服を着け、勳章を列べハクシャの付いた靴を穿いて居た、豫て旅順には穴を鑿て其中に這入て彈丸を避けて居ると聞いて居たから事實かと尋ねたら成程事實で其穴も見せてくれた、併しそれも最初の事で東郷艦隊の大砲が飛んで來る頃には皆慣れて誰一人も這入るものもなく病院内に日本の負傷軍人が五六人居るが、此穴の中で養生せよといふても一人も這入らぬ、ステッセルの家で晩方に窓を締めカーテンを下ろせば家中は平和なホームで遙にドン、ドンと響く砲聲を聞きながらピアノなぞを彈いて家鄕の曲を謠ふて居た。

人事曆

三月

休日　日曜日――五日、十二日、十九日、廿六日。
　　　祭　日――廿一日　春季皇靈祭。

▲一日（舊曆一月廿六日つちのとゐ）、▲三日――上巳の節句、此日女兒ある家々にては雛祭をなす、雛壇には赤毛布を敷き、繪屏風を廻らし、之に內裏雛、親王雛、隨身、官女、五人囃子等の雛人形を飾り、供物には菱餅、煎豆、白酒、粽等を供ふ、親しき人々又は小供の友達などを招きて赤飯を饗し、白酒をすゝめなどしてもてなすを例とす、▲十八日――彼岸入、▲廿一日――彼岸の中日、宮中にては春季皇靈祭を行はせられ、民間にては佛事を營み、寺詣をなし、萩の餅、團子、精進揚などを造りて佛前に供へ、或は親戚知巳に贈る、又た此日六阿彌陀詣などする者多し、今年は今宵滿月に當る、▲廿二日――庚申、▲廿六日――甲子。

季節――六日「啓蟄」、廿一日「春分」。氣溫漸く輕暖を覺え、春風は氷を解きて梅花爛熳、彼岸櫻は下旬に於て朱唇を開き、又た各所の桃林は梢をいろどりて遠く眺むれば紅霞の如く、百草は新芽をふきて郊外の摘草に適す。

農事――春暖を催すにつれ農事次第に繁忙となる、玉蔥、煙草、茉莉、茄子、南瓜、薑、漆、三種等の床蒔、柿、葡萄、李、苹果の移植、百合、菊類、馬鈴薯、薑、甘蔗の植付、牛蒡、菠薐草、麻の播種、桑、茶等の施肥。

遊覽――郊外に滿開の梅を探りて屋外の清香に浴すべく、下旬よりは彼岸櫻、枝垂櫻、一重櫻の咲き始むるあたりに、遊覽を試むる最もよしなり、其の場所は都下は上野、日暮里、向島、京都は圓山、嵐峽を尤とす、又た摘草には東京の廣尾、道灌山、京都の嵯峨野、紫野をよしとす、釣は鯉、鮒、若鮎、水邊の清遊亦興あり。

食品――鯉こく、鯛の鹽燒、鯖の昆布卷、榮螺のつぼやき、赤貝の酢漬、鯰汁、蛤汁、若鮎、かれひ、かながしら、三葉、等皆當月の好饌なり。

THE "JOGAKU SEKAI" ENGLISH COLUMNS

CONDUCTED BY ISOH YAMAGATA.

THE JAPANESE WOMAN

An American gentleman, an old resident in Japan, whom I know, once remarked to me: "*Otoko America Yoroshii; Onna, Nihon Yoroshii.*" His Japanese is somewhat curious, but what he meant to say is that the American man is the best type of men and the Japanese woman of women. I do not know whether his opinion with regard to the stronger sex is right or not; but he is certainly right in his estimation of the Japanese wonan.

CHARACTER OF THE JAPANESE WOMAN

The American woman, I hear, is intelligent, well-educated and independent; the English woman virtuous, dignified and really lady-like; the French woman charming and sociable; while the German woman is industrious and frugal. But has any of them all the sterling qualities that make a true woman,

女學世界英文欄

山縣五十雄

日本婦人

私の知つて居る日本に永く在留せる或米國の紳士が嘗て私に申しました"男,アメリカ宜しい; 女,日本よろしい"此人の日本語は少し可笑しくはありますが,其言はふと思つた所は,米國の男子は男の最良なるもので,又日本の婦人は女の最良なるものであるといふにあるのであります.私は男性についての此人の說は正しきや否やは知りませぬが,確に其日本婦人の評は正しくあります.

註 An old resident 永く在留せる人—Japanese 日本語—somewhat curious 少し可笑しい—what he meant to say 言はうと思つた事—the best type 最上の標本—with regard to 關する—stronger sex より強き性(女に對していふ)即ち男性—estimation 評價

日本婦人の性質

私の聞く所では,米國の婦人は怜悧で,敎育があつて且つ獨立であり,英國の婦人は品行善く,品位があつて眞に貴婦人らしく,佛國の婦人は愛嬌があつて交際に長け,又獨逸の婦人は勤勉で儉約であります.然し此等諸國の婦人の何れが日本婦人の供へて居るやうな眞誠の婦人を作り成す所の美質

such as are possessed by the Japanese woman?

Woman is loving gentle; patient and brave. Nothing gives her more happiness than to see others made happy by her self-sacrificing efforts. She will welt into tears at the sight of misery, and is ever ready to give whatever help she can. She will patiently and silently suffer her own pain, but she can not overlook that in others, without trying to relieve it. She is gentle to a degree and yet when occasion demands, she shows herself as brave and heroic as the Spartan woman of old.

を悉く供へて居りませうか．我國の婦人は愛深く，温柔で，辛抱强く且つ勇氣があつて自巳を捨てゝ他の爲めに盡くし，因て他が幸福になるを見るのを何よりの樂みとします．不幸なる事を見れば涙を流し，いつでも出來るだけの助けを與ふるを辭せず，自巳の苦痛は辛抱强く默つて耐へ忍びますれど，他の者は之を救はんことを試みずして看過すことを能くしませぬ．日本婦人は非常に温柔でありますけれど，いざといふ塲合には昔しのスパルタの婦人の如く勇ましく雄々しくなります．

註 Intelligent 敏慧，怜悧—well-educated 教育ある—dignified 威厳ある—sociable 社交に長けたる—sterling qualities 眞に價値ある性質—to see others made happy 他の人が幸福にされたのを見る—self-sacrificing 自巳を捨てゝ他の爲めに盡くすこと—welt into tears 泣く—at the sight of misery 不幸なることを見て—relieve 救ふ—to a degree 非常に—when occasion demands 必要の塲合には—of old 古代の

• • •

A CHANGE OF WESTERN OPINION

The war with Russia has served to disclose to the wondering and admiring world several hither to unknown traits of the true Japanese character. Among others, it is gratifying to note that the westerners have learned to admire our sisters, whom they had formerly regarded with anything but respect. As a matter of fact, western writers on Japan and her people now adopt quite a different

西洋人の變說

露國との戰爭は日本人の眞の性質のうちでこれ迄知られなかつた諸點を示して世界をして驚嘆せしめました．中に就きて滿足なることは，西洋人が以前にはあまり尊敬しなかつた我姉妹に敬服するやうになつた事で，實際日本及び日本人の事を書く西洋の文士は日本婦人の事を記述するに當り，これ迄のとは全く異なる調子を用ゆるやうになりました．

註 Has served 役に立つた—disclose 表す—wondering and admiring world 驚き且つ感賞する世界の人々—several hither to unknown traits これ迄知られなかつた諸點—

tone from that they used to when they refer to the Japanese woman.

among others 中に就きて—gratifying 滿足なる—Westerners 西洋人—regarded with anything but respect 尊敬を加へざりし—as a matter of fact 實際の事なるが — that they used to これ迄用ひ來りしそれ(即ち調子)

JAPANESE WOMEN AS SICK-NURSES

As a sick-nurse, the Japanese woman is ideal. This has well been demonstrated to the world by our nurses at the Matsuyama military Hospital. A Russian war-correspondent, Kanptchinsky by name, who had been taken prisoner while escaping from Port Arthur and brought to Matsuyama some months ago, was recently released and went on his way home. He passed through Kobe, where he was interviewed by a newspaper man, and in the course of an interesting narrative of his experiences at Matsuyama, he spoke in the highest possible terms of the nurses. He said: "The devotion of the nurses to their duty is such as can not be excelled. I intend to emphasise in the Russian press the indebtedness of the prisoners to these heroic women, so that all Russia may know the facts. Discouraged and downhearted, many of the sick and wounded prisoners have arrived at Matsuyama longing to die, but have been cheered and helped on to recovery by the untiring efforts of the nurses—'sisters, they are called by the men—in a manner that is nothing short of marvellous. Many of the

看護婦としての日本婦人

看護婦として日本婦人は理想的であります．此事は松山の陸軍病院に於ける我看護婦によりて世界に證明されました．カウプチンスキーといふ名の露國の軍事通信員が數月前旅順から逃げ出す途中捕へられ松山へ送られましたが，此頃解放されて歸國の途に上りました．其神戸を通過する時或新聞記者に會見を求められ，松山に於ける自已の經驗につきて面白き談話をなすに當り，口を極めて看護婦を賞讃しました．其談話に曰く"看護婦の其職務に忠實なることはこれに越すことが出來ぬ程であります．私は露國の新聞に俘虜が此等の勇ましき婦人に負ふ所大なる事を書き立てゝ，總ての露國人に知らしたいと思ひます．病にかゝれる又は負傷せる俘虜の多くは意氣沮喪して死を願ひつゝ松山に到着しましたが，看護婦—俘虜は姉妹と言つて居りますが—其看護婦の少しも倦む所なき盡力により慰められ助けられて快復しました事は殆ど不思議ともいふべきであります．看護婦の多くは露國語を自由に話すことが出來るやうになつて，實際或場合には所謂通譯の多くよりも露國語を遙に巧に使ふやうになりました．

"川口，長野，高橋及び住友の四看護婦は私が自分の身を捨てゝ貴き任務を爲した人として記臆する人々であります．殊に哀れなる一

nurses have become quite fluent speakers of Russian, and indeed are in some cases far more proficient in the language than many of the interpreters so-called."

"Nurses Kawaguchi, Nagano, Takahashi, and Sumitomo are four whom I remember as having rendered self-denying and noble services. To mention a particularly pathetic incident, in which Nurse Kawaguchi was the heroine. A young fellow—he could not have been more than twenty-three or twenty-four—was so terribly wounded by shrapnel that his arms and legs had to be amputated. There he lay in an absolutely helpless condition for eight long months. Nurse Kawaguchi administering to his wants by day and night. He became so attached to her that he would allow nobody else to feed him, and if he awoke from sleep to find that she was not kneeling beside him as usual, he would weep like a child and call for her to return. People told him that she would break down altogether, but she insisted that they should not say that, and remained by the poor fellow practically during the whole of the eight months that he existed, and she was tending him when the hand of Death finally released him and he passed peacefully away.

つの出來事を御話し致しませうが，其話しの女主人公は川口看護婦でやつと二十三か二十四になつたばかりの一人の若者が榴彈の爲めに悍ろしき傷を負ひ，手も足も切斷しなければならぬことゝなりました．それで此若者は全く自分で自分の事が出來ぬ有樣で八ケ月の長き間寢た儘で居りましたが，其間川口看護婦が日夜附添ふて其要する所を辨じてやりました．かくて若者は川口看護婦を慕ふこと強く，他の人に食物を食べさして貰ふことを嫌ふやうになつて，もし眠りから覺めた時に傍にいつもの如く川口看護婦が跪いて居らぬと子供のやうに泣いて歸つて下さいと呼び求めました．人々は川口看護婦が疲勞して病氣にかゝるであらうと若者に言ひましたが，川口看護婦はそんな事を言つてはいけぬと言ひ張つて，其若者が生きて居た八ケ月の間全く其傍に附添ひ，遂に死の手が彼れの苦みを救ふた時にも介抱して居りましたが，彼れは平和に逝きました．"

註　Ideal 理想的—demonstrated 證明さる—military Hospital 陸軍病院—war correspondent 軍事通信者—taken prisoner 俘虜にさる—Port Arthur 旅順口—interviewed 會見する—highest possible terms 賞讚を極めたる言葉—emphasise 語氣を强めていふ—Russian Press 露國の新聞—indebtedness 貢ふ所—discouraged and downhearted 意氣沮喪して—helped on to recovery 助けられて快復した—nothing short of marvellous 不思議といふべき fluent speakers of Russian 露國語を巧に話す人—self-denying 自己を捨てゝ—a particularly pathetic incident 殊に哀れな出來事—shrapnel 榴彈—amputated 切斷する—absolutely helpless condition 絕對に自分で自分の事をすることが出來ぬ有樣—administering 辨ずる—attached 慕ふ—break down(病にかゝりて)倒れる—tending 介抱する．

東京皮膚病院發明山崎製

毛生液（モウセイエキ）



禿脱毛、薄毛、生際悪き人試み

本劑は第一毛をはやし、ぬけ毛を止め、髮の毛はへぎは眉毛髮等の薄きをこく生じ皮膚病てき物ヤケド跡はげ其他あるべき所に毛なきに用て毛はへる事請合

○藥價三十錢五十錢●特製一圓二圓●送料六錢

本舖 東京市日本橋區蠣𣘺町二丁目 山崎愛國堂

五大軍醫合議製劑

藥價 五週分壹円、三週分六十五戔、二週分四十五戔、一週分二十五戔、二日半分十戔



本舖 東京銀座壹丁目 大阪南久寳寺町堺筋東 山田安民

全國各藥店にて取次販賣す

石橋思案外史序文

征露紀念 續福引種本

石橋思案外史序文加野孤雁君著（七版）

笑門來福 新案福引種本

中判長形美本 正價金拾八錢 郵税金四錢

加野孤雁君
有田鐵笛君 共編
在佛國中村不折君……意匠表紙
口繪 秀方女史……極彩色畫

東西〳〵罷り出ました新版新案此福引の種本は日露の時局を當込みに智惠の有り丈け捻り出したる何れも嶄新奇抜の趣向に兼て四方の雅君に徹し寄せ集めたる珍種を撰り取り見取りに取り添えて又附錄にはデン通を唸らせ申す義太福引には絵歌留多の稚ない趣向の福引と眼先を變へた御景物買つた門には福來る去辰年の此貽みもの巳年の春の賣出しに一番花を咲かして見度い澤山お買ひ下さらば編者の鼻も高砂野々宮サア評判蛇〳〵

▲中判長形美本 約百六十餘頁 正價金拾八錢 郵税五錢▼

（丁の一）

金子薫園君著

小詩國

新派歌集

三月十日發行

著者は新派歌壇の重鎮也、其作詩彩高麗、秀艶花の如し。人皆諷誦して萬斛の奇香に酔ふ。『小詩國』は其得意の作數百首を集めたるものにして、添ふるに令妹英子女史の『小紅集』を以てす。體裁装釘亦美を極む。文藝の趣味を樂しむ人は、春風窓下一本を繙かざる可からず

▲和田英作君、岡田三郎助君畫

定價貳拾五錢、郵稅貳錢▼

萬朝報記者 田口掬汀君著（再版）

幻影

全一冊

價四十錢 郵稅六錢

掬汀子得意の短篇小説を始め論文、美文、寫生文を輯めたる一大文集也

『幻影』一部、新時代の文範として、年少文事に志すに薦む。好評嘖々、今回第二版印刷出來せり

文學士 尾上柴舟君著（再版）

銀鈴

新彩美本

價廿五錢 郵稅二錢

柴舟子の新派歌集也、添ふるに獨創の四行詩と優麗なる新體詩を以てす

有力なる新聞及び文學雜誌は、筆を揃へて銀鈴の詩の、聲調流麗にして詩想の清新なるを激稱せり

發行所 東京牛込新小川町 新潮社

博文館編輯局編纂

徵兵規則大全

全一冊洋装袖珍

紙數約四百頁

三月中旬發兌

我が帝國が强敵露西亞に對して、干戈を執りてより茲に一週年、海に、陸に、戰へば勝ち、攻むれば必ず取り、未だ甞て敗衂の辱を受けたることあらざるも、戰局は僅かに其初期を過せるに過ぎず、今や第二期の作戰は計畫せられ、滿洲に、韓國に、浦鹽斯德に、將た〇〇〇に、堂々陣を對して互に隙を窺ひつゝあり、平和の曙光を見るは尙ほ遼遠たりと云ふべし、而して之が爲めに徵集せられし貔貅は數十萬と稱せらる、知らず此等の貔貅は如何にして徵集せられ、如何なる義務を有し、如何なる保護を受くる乎、其死亡傷病には如何なる取扱を受け、其宗族若くば遺族は如何なる恩典に浴することを得る乎。本書は乃ち此等須知の事務に關して顧問たらんことを期する者なり、徵兵令を始めとして之に附屬の法規は悉皆蒐めて漏さず、其他恩給令、一時賜金請求の手續よりして、軍事郵便、恤兵品寄贈手續に至るまで、凡そ時局に關係あるものは、其書式と共に餘す所なし、人倘し此書を座右に備へば、別に顧問を要せず其總てに通曉する事を得る也、請ふ購求を賜へ。

發兌元 東京 博文館

（丁の二）

大隈伯爵口述　武井宗十郎君筆記

大隈伯時局談

正價金參拾錢―郵稅八錢　全一冊　洋裝　大判

寫眞銅版口繪　大隈伯爵肖像　仝伯爵家の庭園

伯爵序文……………………………

(一)世界に於る帝國の地位(二)去來一世紀間の露禍(三)戰爭の利害と日露の關係(四)無意義の黃人禍(五)戰爭と列國の嚮背(六)戰時外交の本義(七)眞の擧國一致(八)戰時の財政計畫(九)韓國經營の指針(一〇)清國に對る希望(一一)日露戰爭の結局　附　媾和條件

大政黨の首領大隈伯刻下の時局に對して豈一大識見なくして可ならんや、夫れ伯爵一たび演說すれば倫敦市塲忽ち公債の騰落を見るにあらずや、其一言一行の社會に大勢力あることと以て見るべきなり、今や伯爵時局に對して滿腔の熱血を吐き帝國戰後の大經營と對露對清對韓の政策に於て縱論橫說餘す所なく以て天下の輿論を斷ず言々剴切句々烈實、讀者をして思はず拍案快躍せしむ看よ刻下國民の必讀すべきもの本書にあらずして抑も何ぞ

發兌元　東京本町　博文館

戰勝の國　才媛淑女　絕好の伴侶

◀第三號より每號津田梅子河井道子女史の英文を掲載す▶

每號名家擔任選評

▲第三號▼ 三月一日發兌

名家玉稿益豐富、懸賞詞文滿載

三宅の水彩畫寫眞口繪挿入

▲本誌は號を重ぬる每に內容刷新、價格亦無類の廉價

▲好評▼

女子文壇

▲定價▼

壹冊拾錢〇六冊前金五拾七錢〇十二冊前金壹圓八錢〇郵送料壹冊壹錢郵劵壹割增

▲第壹號四版賣切〇第二號殘本僅少

▲每月一回一日發行▼

發行所

東京市京橋區大鋸町十一番地

賣捌所全國到處にあり　女子文壇社　最寄無くば本社へ申込

電話本局六〇七番

(丁の三)

東風西風

家庭と客

大町桂月

家庭に客あるは、經濟上、大に損也。されど、家庭の事は、經濟のみを以て判斷すべきに非ず。もとより、そのために職業をさまたげられてもこまれど、家計の許す限りは、喜んで客を迎ふべし。

もし大に御馳走して、それで客をもてなしたりと思ふものあらば、そは、とんでもなき間ちがひ也。馳走は、身分相應を主とすべし。客とても、馳走のみを喜ぶものに非ず。馳走はなくとも、主人の好意があれば、それで十分也。客によりて、馳走を異にすることも、或程度までは止むを得ざることもあるべけれども、成るべく均一にするを可とす。又、はじめには非常に馳走をよくし、度かさなるに從ひて、馳走を惡くするは、大に不可也。腹のいたまぬ程度にて、いつも相かはらぬやうにすれば、客も氣持がよかるべし。金のなきくせに、馳走を張りすぎては、客は氣の毒に思ひて、折角の馳走も、うまくは食へざるべし。

社會に出でざる家婦にとりては、客は、その家婦をして社會に觸接せしむるもの也。臺所にのみくすぶり居りては、氣がくしや〳〵するものなるが、客あれば、氣がかはりて、よしや、芝居は見ずとも、その日が面白くおくらるゝ也。客なき家は、陰氣也。冬の空の如し。客ある家は、陽氣也。春の野の如し。客は、實に家庭の慰藉者也。

客は、また家庭の敎育者也。子女の敎育上、客の益する所、頗る多し。子女は、出でゝ學校にゆき、朋友に交はれど、それにては、社會上の知識は得られず、家に客あるによりて、人情もわかり、禮儀作法もわかり、談話、態度も、社交的になるを得る也。客なき家に育ちたる子は、內氣にて、野暮にて、不愛嬌にて、塲なれがせず、恰も壷の梟の如し。嫁をもらふに、家

庭のしつけといふことも、大事なれど、客ある家なるか、否かと云ふことも、亦注意すべきこと也。

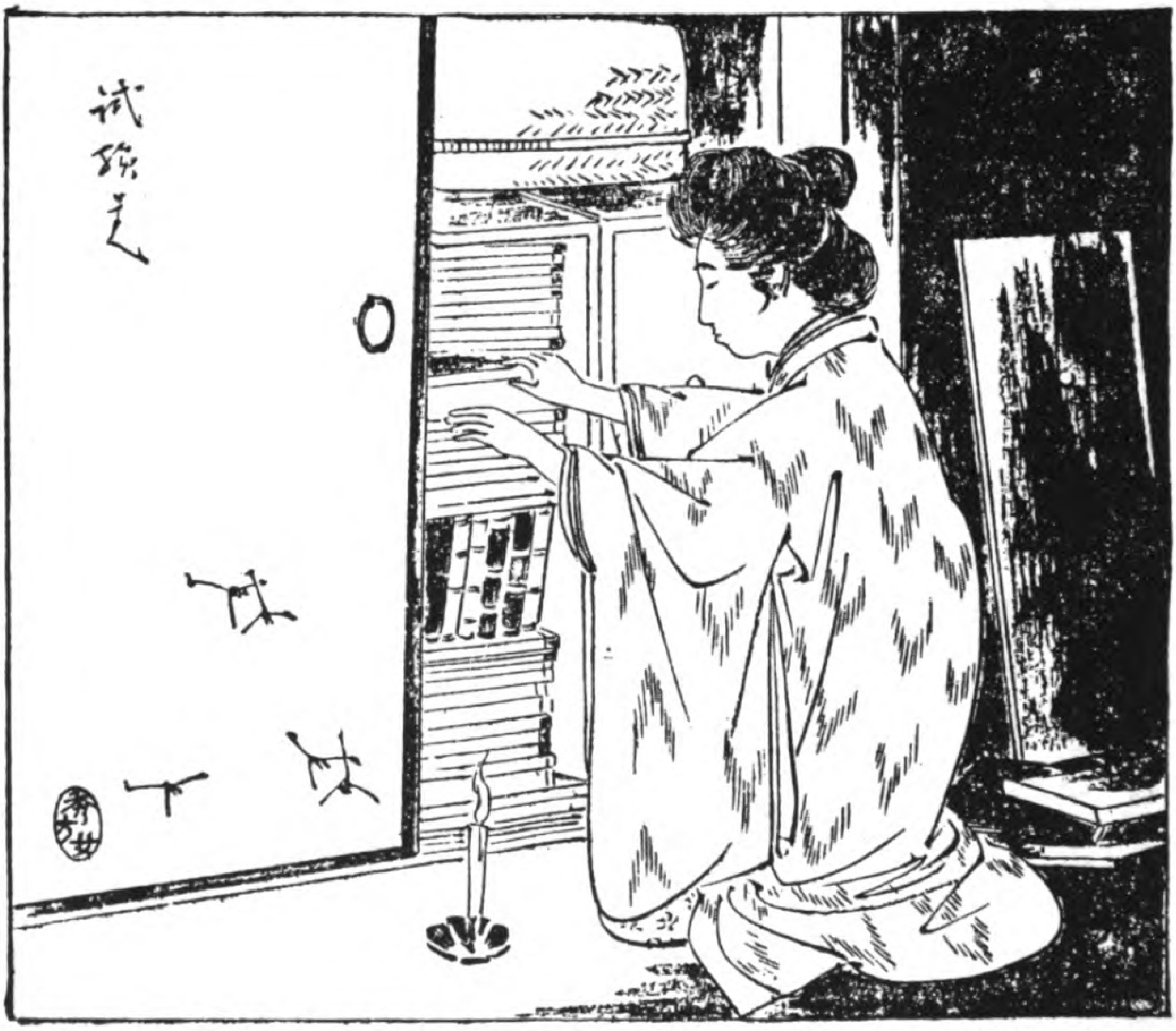
大人の玩具

紙鳶、こま、まりなどを、小兒の玩具とすれば、額、掛物、花いけ、置物、骨董物などは、大人の玩具也。美を解する人の性情より云ふも、家の体裁より云ふも、社會の上より云ふも、家には、粧飾なかるべからず。即ち大人の玩具なかるべからず。されど、凝れば偏し易し。要するに、品性の修養と子女の教育とを妨げざる程度に於て、之を弄ぶべき也。

　大人の玩具と品性との關係は、如何にぞといふに、氣の利いたる掛物をかけ、器用に花をいけ、身のまはりの道具器物に至るまで凝つたものを備へおけば、いかにも、その人が優美に見ゆるもの也。否、かゝる玩具が、自づと人の品性を優美にするもの也。されど、貴き物を用ゐ居れば、之を愛するの餘、物惜みする情、自から生ず。がちやんと音すれば、さては、あの大事の皿をこはしはせぬかと、客の前をも顧みず、驚いて、ふりむき、いよ〳〵破損したりと見れば、客の前をも顧みず、青筋立てゝ、怒鳴りつけ、怒り狂ふ。優美な人やと感歎せしも、この樣を見ては、忽ち興をさまさざるを得ず。折角、玩具が品性を養ひしも、一轉して、こゝに、その人の品性をうちこはす。これ物の爲めに累せらるゝもの也。物を玩ばずして、物に玩ばるゝ也。物の爲めに、小人根性をさらけ出す也。されば、大事の物が多ければ、多きほど、家庭に、聞くに忍びざる小人的小言多し、妻君叱られ、下女叱られ、小兒叱られ、玩具の爲めに、家庭の平和破れ、品格墮つ。かゝる家庭に教育せられたる子女は、圓滿にのびやかならず、よろづ、こせつく。かくて、玩具の爲めに、重ねて、子女の教育をもうちこはす也。

　勸工塲物を買はずとは、氣取る人の意氣がる所なれど、これは、なほ凡俗の域也。はきだめに置きても、鶴は、鶴也。金の籠に入れても、烏は、烏也。家の大小、器具の良否にて、主人のよしあしが定まるべき筈

のものに非ず。玩具を弄ぶもよけれど、身分に應じて、破損しても惜しくなきものにすべし。數百萬圓の身代ある人にては、百圓や二百圓の品物をこはされても、いつでも買ひかふることを得べければ、惜くは思はざるべき筈也。されど、普通の身代の人にては、さうは行かず。むかし、ある家にて、下女が、大事の皿一枚をこはしけるに、主人怒りて、之を殺さむとす、米つきの男、之をきゝて、



その餘の皿をのこらずこはしたり。人々驚いて、之をなじりけるに、皿一枚にて、人が一人づゝ殺される事なれば、この皿の數だけは、人が殺さるるわけ也。われは、その人々に代はらむ爲めに、一人にて悉くこはしけるなりと答へけりとかや。げに、痛快なる事にて、世俗をして反省せしむるに足れり。これに限らず、世には、區々たる器物の爲めに、夫婦相爭ひ、親子の仲たがひするためし、頗る多し。こはされても怒らぬまでに雅懐む

る人は、妄りに物を弄ばず、物を弄ぶ人は、一朝その物の爲めに小人の根性をさらけ出すもの也。余は是に於て、世人に向つて、物質上の快美よりも、精神上の快美を喜ぶに至らむことを勸告せざるを得ず。さは云へ、古き家には、必ず父祖傳來の寶器あるもの也。かかるもの丶出入、洗ひ、ふき清めなど、一切、主人自から爲すべし。下女などに任せざるを可とす。

小兒の賢愚

非常に愚鈍な子をもちても、親は、心配なれど、あまりかしこすぎるも、亦うれしからざるべし。かしこすぎるあれば、世俗、親もよろこび、人もほむるが常なれど、何ぞ知らむ、十歳の神童、二十歳の才子となり、三十歳の凡人となることを。

幼時かしこすぎる子は、大抵小才子に終るもの也。稀には、大賢となるものもあり。愚鈍なるものが、案外、えらくなる事あり。一寸見たる外面の賢愚にては、容易に後日の成り立ちを判じ難し。たゞ敏捷なるも可也、ぼんやりなるも可也。どこかに落ちつき居る所ありて、がさつかず、考事するが好きにて、負けじ魂あるものは、必ず才子以上の域に超脱すべし。落ち付きたる性質が、最も大事也。落付くことなくして、元氣あるものは、長じて、匹夫の勇はあるべし。されど、沈勇は得べからず。子をそだつるもの、最もこの邊に注意するを要す。

家庭と小言

家庭の敎育上、小言は云はざるべからず。されど、妄りに云ふべからず。常に小言を云ひ居れば、子女は慣れて、何とも思はざるやうになるべく、その小言がはげしければ、ひがむやうにもなり、すねるやうにもなるべし。

生れたま丶ならば、人は、決して醇化するものに非ず。之をよくするに、あまり撓めすぐるは不可なれども、ほめたり、叱つたりして、しつけをするとは、必要也。常にほむれば、甘つたれになり、叱りすぐれば、

執拗になる。人を教育するも、亦難い哉。

要は、小兒の爲めに叱るべし。わが爲めに叱るべからず。誰でも思ひがけざる過失はあるもの也。注意ぶかき人とても、亦之を免れず平生注意ぶかくするやうに教訓すべし。過失ありたる時に、妄りに叱るべからず。着物をかぎざきにしたからとて叱り、下駄をよごしたからとて叱るやうにては、とても教育が出來るものに非ず。折角、たんせいして新にぬいてやりたる着物をかぎざきにしては、親の腹は立つべし。されど、子の身より云へば、わざわざ裂かむとて、裂きたるに非ず、元氣よくはねまはるの餘、つい、樹の枝にひつかけたるか、角力など取る際に、ひきさかるゝかなどしたるものにて、むしろ、ほめるべきこと也。決して罪あるに非ず。されど、己れの迷惑より打算して、腹立ちまぎれに、あたまごなしに叱りつくるが、世俗の母親の常也。家計のゆた



かならぬ故なれど、そこが即ち教育といふもの也。こんな事まで叱るを以て、大事の叱らざるべからざる塲合に叱りたればとて、例の小言と思はれて、毫も小言の甲斐なき也。

己れの喜怒をよそにして、冷靜に、常識を以て判じて、子女の教育を主眼として、叱るべきを叱り、而かも度々せずして、叱るなら、大に叱るべし。かくて、はじめて、小言の効能がある也。

女子の着物につきて

余は、今の女子の服制を美とするもの也。帶の前後よく、ふりもよく、裾が風に少しまくれて、雪の脚がほの見ゆるなど、殊に美也。唯、注意したきは、しやつ、づぼんしたの類は、一切用ゐぬやうにしたきもの也。男もさうしたきものなれど、男は、出勤する際は、洋服をきるが常なれば、洋服と共に、しやつとづぼんしたとをはづせば、忽ち風をひくことあるべし。女が、しやつづぼんしたを用ゐるは、常に美を缺ぐのみならず、衛生上にもよろしからず、腕や、脚や、胸のあたりやは、風が通るやうにしておけば、寒さに堪ふる習慣をつくるもの也。女は兒に乳をのますものにて、たび〳〵胸をあけるものなれば、胸の皮膚よわきものは、風をひき易し。而して、平生しやつを着居れば、乳をのます際に、風をひくの恐あり、又平生胸をつゝまずに置けば、皮膚つよくなりて、風に當るも、容易に風をひかざるべし。

捕虜の妻物語

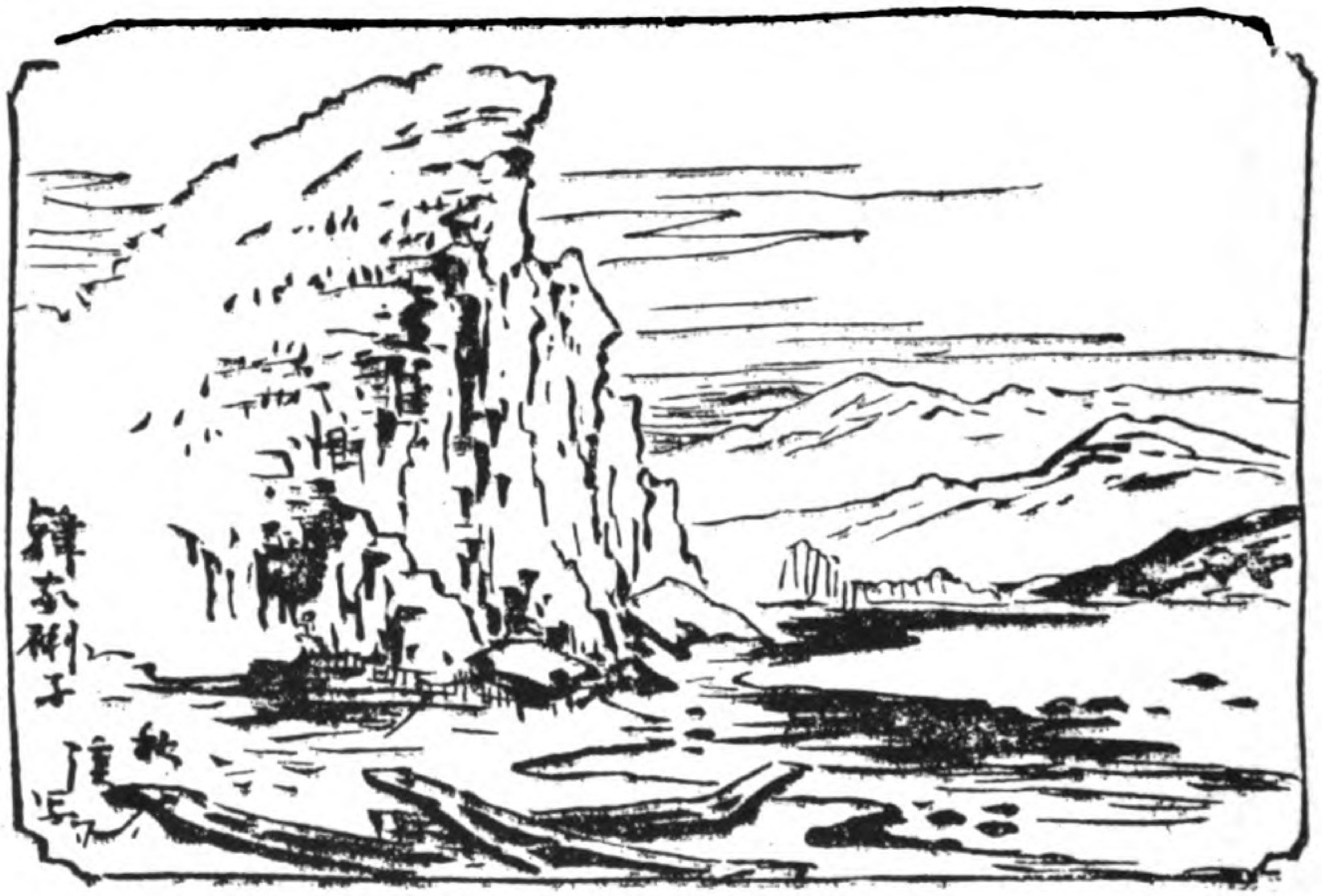
松山の捕虜にて目下バラックに収容され居る、關東工兵一等大尉ゲンメルマンの妻アラビナヤは、娘アビナリヤを伴ひ遙々松山に來りたるが先月四日、二人は最愛の夫最愛の父に面會すべく、バラックを訪づれたるにぞ、係員は斯くと大尉に通じたる上、委員通譯立會の上應接所にて面會させたるに、大尉は思ひもよらぬ家族の訪問に心嬉しくてや、係員に挨拶もそこ〳〵となし、つと妻子の傍に近寄ると見る間に、妻の手を握り互に顔を見合はせて一語を發せず、娘アビナリヤも亦父が外套の裾を捉へ片手になつかしき父の片手を握り、三人は暫時無限の感慨に撃たれ涙を流し居たるが終に相携へて廊下に出で、約一時間程かたみ代りに其後の談をなし居たり、他の將校も兵卒も露國婦人を見たるは久し振りの事とて、四方より集り來り三人を取圍み、左も羨ましげなる樣子なりき。

城ヶ島の遊覽

女子英學塾　辻村椒花女

一學年間苦學の功を積みたる諸嬢は、やがて光榮ある進級をなして、最も愉快なる春季休業を迎へんとす此の喜ばしき時に當り何處に遊ばんかとは諸嬢の胸中に往來する問題なるべし、歸省して學業の成蹟を誇るの嬉しさは言はずもがな、近縣に旅行して浩然の氣を養ひ玉ふの快は亦た一層なり、されば是より妾は休業中のよき遊び塲所の一として、三浦半島の奇勝を紹介すべし。

三浦半島は相模國の最南端に位置し、其の海中に突出する所



黒木軍從軍畫報

に三崎の港あり、こゝは朝に夕に往來の船舶輻輳し、漁業また盛にして、戸數萬を越え、旅人宿あり、料理店あり、雜貨店あり、人家櫛比して相應に繁昌せる所なり、古蹟には櫻の御所、椿の御所、小弓の御所などあり弦齋居士の小說を見たる人は御存知なるべし、港の東八丁許の所に松輪といふ地あり、こゝに松輪館と呼ぶ旅館あり、こゝらは海面廣く眼前に展開されて見晴し頗る佳し、又た海上五丁許を隔てたる所に松樹の蓊欝たる小島あり、恰も東海にありと云なる蓬萊島の景色さながらにて眺望仲々面白し。

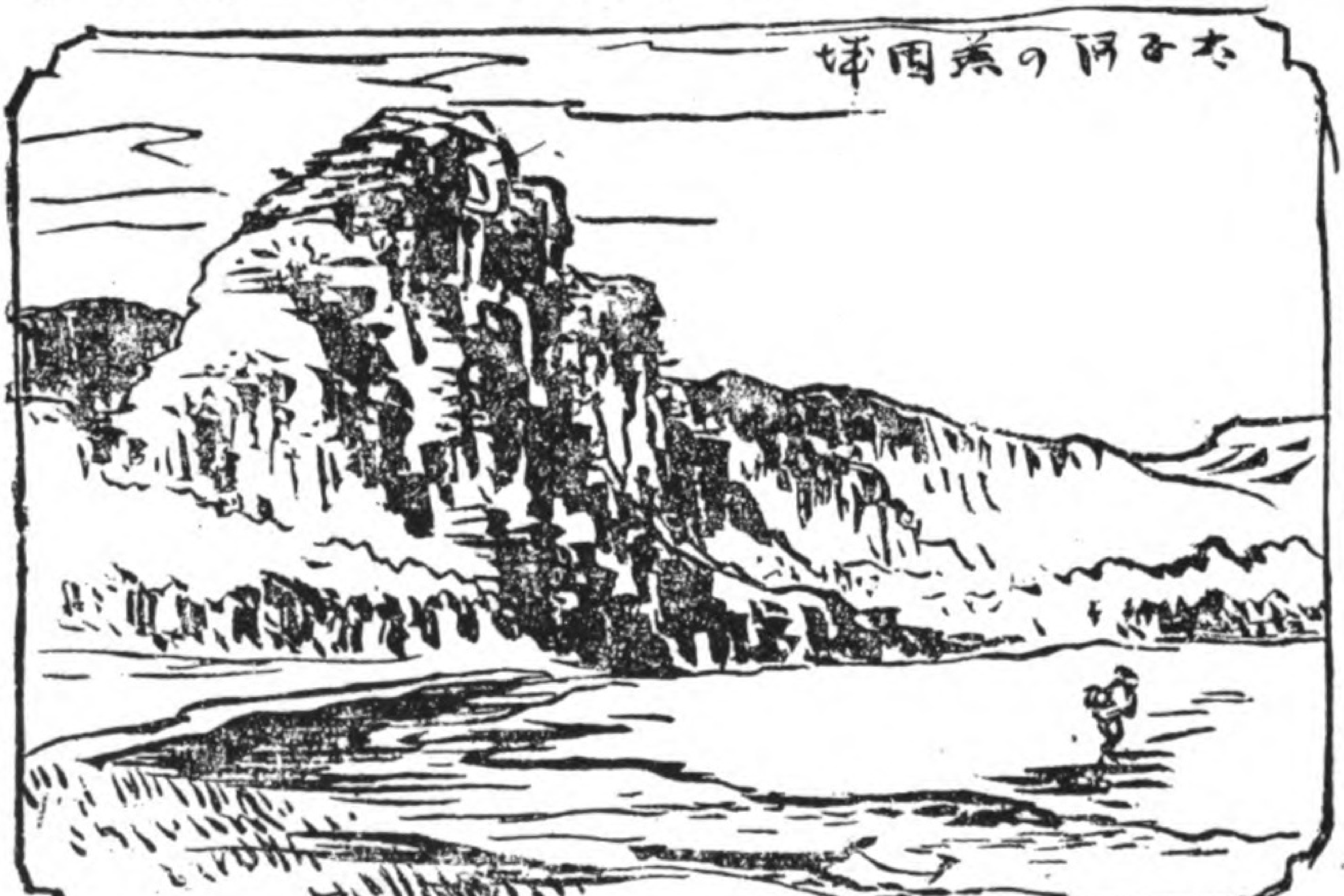
嶋の名を尉ヶ島、今書き改め

て城ヶ島と云ふ、周圍一里、南北凡そ十三丁、東西僅に八九丁の小さき島なれば戸口も二百に滿たず、其の住民は總て漁網を業とす、島内には松、椿を初め、綠の常磐木叢生して、翠影を銀波に浸せり、山上の平地には蕃藷、甘藷、小松菜等を栽培したる畑ありて、漁夫が片手間に鍬取りたる跡の見ゆるは、いと嬉し、島内稍見るべき建物とては、一宇の古刹と一つの別莊と一構の小學校とあるのみにて、其他は沙上に離々たる漁家の苫屋を海松ばかり、一葦水を隔てたる三崎町とは全然別天地の觀あり、斯樣の所なれば島民の氣風は親切淳樸にして、殆ど大古の民の面影あり、一村は宛も一家の如く睦び、數戸の家は一個の井戸を共同ひて飲み、一艘の和布苅船は數戸に食糧を分配すると云ふ有樣にて、其の親密なる事想像の外なり、されば島に遠來の客あるも島民は其の機嫌取る術も知らず、さりとて冷遇するでもなく、其狀恰も彼等の隣人を見ると敢て變なきが如し。彼等は獨り世上の匆忙を外にして暢氣に生活すれば花が咲いて春と知り、木葉が落ちて秋を思ふの民ともいふべく誠に質樸極る風俗なり。

　氣候はあたゝかく、空氣亦た輕ければ、人の體には最も快き所なり加ふるに魚貝の潑溂たるあり、野菜の新鮮なるありて、仲々に住みよし、郵便は東京より二日にて屆き、電報は三十分にて達す可ければ、永逗留にも差して事は缺かじ、朝夕耳に訪るものとては網引く海人の聲と松吹く風の音より外に無ければ、閑靜なる事は言はん方なけれど、其の割に寂寥を感ぜず、いつまで居ても飽の來ぬは此の島の景色なり、思ふにこは外洋に面して陽氣なるが爲なる可し、殊に芙蓉峯頭靄棚引くの時、臙脂を解きて流したらん如き海水に、山影の反射する景色などは、願はくは此の儘に額にして楣間に揭げたしと思ふ程にて、壯絕、佳絕、譬ふるに物なし。

　島は誠に最爾たる一小島嶼なれど、所によりて怒濤岸を嚙むの荒磯あり、又た平波渚を洗ふの和磯もありて硬軟二種の波濤を見るは最も妙なり、即ち東南は渺茫たる外洋に面して風あたり強く、巨石怪巖羅列して

打寄する激浪すさまじく潮を跳らするの壮観ありて干潮の時は此等岩石の間に名物の鹿角菜、和布などを採る漁夫の群を見るべし、又た西北の方は松輪の鼻と尉ヶ島の陰とにて取圍れて一大盃池をなせば、浪平かにして魚驚かず風立たず、而も其上には鷗の浮びたらん如き島嶼點在して、翠色瀲漣の景言ひ知らず美し、そこは遠淺に成りて、水は僅に腰を浸すに過ぎず、裳を褰ぐれば渉り得る程なれば、三つ兒を手放して遊ばせ置いても危氣更に無し、汀を獵れば梅の花貝、櫻貝、子安貝、法螺の貝などの面白きが、美しき小石まじりに夥しく散在すれば、貝や



黒木軍從軍畫報

拾はむ玉や拾はむの境に彷徨せしむるぞかし、眼を海上に放てば漁船三四隻優々と漕ぎ廻るあり、而して船上の漁夫は長き銛もて一生懸命に水中の魚を突き試み居れるが、其の樣誠に異樣なり、其は兎に角、此の島の眺望の佳さと貝拾の面白さとには遲々たる春日も猶ほ暮るゝを惜まるゝぞかし。

　此の島は江の島と違ひ海陸の通路全く杜絕し居たる爲め、七百年來世間に忘れられ居たるが昔鎌倉幕府盛の頃は右幕下賴朝公を初め尼御臺も右大臣實朝も鎌倉からは行程六里の此の蓬萊島を唯一の遊散場として時々來遊あり、歡笑の聲、管絃の聲浪

に響いて沖の鷗を驚かしたる事も古書に見え、又た小田原北條氏康時代にも君は船より臣は陸路より尉ヶ島に遊びて三日逗留などゝ云ふ事あれば、昔は相應に繁昌したる所なるべし。

島内に奇妙なるは水仙花の多き事と犬猫を更に見掛けぬ事なり、又た不便なるは島内に一も宿泊する家の無き事なり、されば此の島に永く遊ばんとする者は立戻つて三崎に宿を求めざる可からず、三崎には紀の國屋、松輪には松輪館と云ふ旅籠あれば、此處まで行けば足手を展ばして十分に一日の草疲を休め得べし。

東京より行く者、陸路を取れば新橋より横須賀迄の切符を買ひ、大船にて乘換へ、横須賀より三浦郡永井と云ふ立場まで馬車便を利用し（此間二里馬車賃廿五錢）其より三崎まで徒歩にて行く可し、俥はあれど宛にせぬ方間違なし、三崎と尉島の間は何時にても、便船ありて五分とかゝらず、島に渡り得べし。

又た海路を選ぶ人は靈岸島を午前八時に出帆する東京灣汽船會社の汽船に便乘すべし、遲くも午后二時には三崎に着く可し（此船賃並等廿錢中等四十錢）品川灣を遊泳して本牧岬に出で、房總の山々の呼べば應へんとするを左に眺め、遙に足柄、天城を仰ぎながら行くも愉快なり、歸途は三崎を午后十時に出帆　海上の夜旅は好まぬ人もあらんが、暗雲に吟じ明月に嘯く程の人なれば是も一興なるべし、浪の音を枕頭にして一睡の夢を貪る間もなく、午前六時といふに靈岸島に着す由なれば、其日の登校にも間に合ふ可し。

流行の色

オリーブ色は今や流行の極度に達したるものと云ふべく、婦人の丸帶に、片側帶に、將た友禪縮緬に、半襟に、此染色を用ひたるものゝ頗る多し、されど東京にては帶なり、半襟なり、襦袢なりにのみ此色のものを用ゆるも、服裝の全部に之を用ゆるは殆ど皆無の姿なり男子に至りては帶若くは襦袢の袖などに此色を着くる位に止まり、それさへ獨り好事者流に過ぎざる有樣なるが、京阪地方に於ては之に反して、男女共にオリーブ色を非常に歡迎し常に流行を趁ふと云ふ側の婦人には、半襟や襦袢の如きは無論、羽織も、其紐も、帶も將た下駄の鼻緒に至るまで悉くオリーブづくめの打扮を爲せる者尠らしからず、男子にも羽織の裏に同じく紐に帶に、此色のものを着くるが最と多し、是れ即ち東西各其嗜好を多少異にする處にして、又以てオリーブ色流行の程度に如何を知るに足るべし、尙ほ東京にては或る一の流行物と稱せらるゝものも、一般の流行とは云ひ難きもの多く、山の手邊の人々の好みと、下町連の好みとは常に相異なるものあり、然るに京阪地方に於ては何か流行物と云へば、先づ一躰に行はるゝものゝ如し、是は東京の如くにお屋敷とか何とか云ふ階級を有する者なきが一つの原因ならんと。

女子大學に警告す

日本に於ける高等女子教育を代表せる我が女子大學校が、隆々の盛運に向ふと共に、漸やく朝野の人士の注意を惹き、世界列國人の賞讃を博するに至りしは寔に慶すべきの至なり、然るに近時笈を負ふて東都に遊學せる女生徒、殊に女子大學生の間に德操上容易ならざる惡風聞あるを耳にするに至りしは、吾人の遺憾とする所なり、先般來生徒の家庭より若くは其の友人より、或は緣故の人々より吾人に警告するもの一再ならず、而も大學生の面を被れる賣春婦、蝦茶袴を穿てる妖婦など口善惡なき京童の惡評を立つるに至りては甚はだ以て遺憾至極、坊間に散在する理想卑き女學校の生徒ならいざ知らず、苟くも女子高等の學府を以て世間より囑望され、進歩の理想と向上の精神を標榜したる櫻楓の徽章を胸に翳せる女子大學生にして此事あると聞いては、吾人何の辭を以てか之を辯護せん、實に教育界の汚點にして、拭ふ可からざるの不名譽と云ふ可し、元より多數の生徒中若干の例を以て學校全体の責任を問ふべきにあらずと雖も、今に於て少しく戒心する所なくんば折角進歩の途に上れる女子教育の將來に、恢復すべからざるの大蹉跌を來さん、彼の經濟上の維持法に就てのみ汲々とし、學校の評判を賣らん事にのみ是努むる輩、内に省みて、少しく生徒の品行に注意する所あるべし。

皇國魂

水原翠香

傳へ聞くステッセル將軍、旅順開城の際捕虜にならむと云ひつるを、夫人の諫に依りて宣誓歸國する事になれりとかや、是即ち魯西亞魂なれば也、若大和魂ならば無論高松城に於ける淸水宗晴が如くなるべく、然迄立派ならずとも、せめて毒藥にても仰ぎて丁汝昌にならはゞ、申分はなからむを、嗚呼西洋の魂は東洋に及ばず、然迄夫人の言を重んずる將軍ならば、予もしも夫人ならむには歸國どころか自殺を勸めむ、而して若も聽かれずは一思ひに刺殺して反す刀に自己も死せむ斯して部下一般の解放歸國を乞はゞ近き丁汝昌の先例あるに奚か許されぬ事の有るべき、然有てこそ大將たる者の責任を全うするなるべけれ、屬僚の甘んじて士卒と運命を共に爲むとて態々捕虜となるさへ見捨てて、宣誓迄させられて、ドノ面さげてノコ／＼と歸國するにや、是を彼七世生れ替りてもと誓へる楠公又それを慕ひて口號とせる廣瀨中佐の心事に比較せば、天地雲泥月鼈もたゞならず、大將軍たる價値もなければ女丈夫でも何でもなしと、サア數千年來大和魂の染込たる我等などには、ドノ方面から考へても然より外は思はれねど、ソコが東洋と西洋の流儀の違ふ所、自殺を以て罪惡とするは卑怯者には甚勝手のよき口實なる哉、此魂の相違こそ現在の戰爭に勝敗の岐るゝ處なれア、壯なる哉、東洋の武士氣質、ア、貴き哉我日本の大和魂、啻に武士許が然るに非ず、昨日迄算盤はじきし商家の番丁、野良仕事にのみ從事せし田舍の壯者、或は職工でも、荷擔賣でも、又は俳優藝人でも、一朝動員の令下りて今日軍隊に入る時は、恰も生れ替りし如く、忽ち大和魂を發起して生還を期せずと誓ひ、勇ましく出陣し、幾日か將校の訓練の下に立派なる勇士と成て一度戰線に出る時は先を爭ひ、身命を拋ちて報國盡忠の誠を顯し、名譽の戰死又たは負傷をなす者多し、然に上流社會は父兄の資產裕なる儘に、少壯よ

り洋行して長く外國に留學する者、學術は進むと雖知らず〳〵其國風に化せられて、大和魂は薄らぎつゝ、潔くちる皇國櫻の薫しきを思はず、彼自殺罪惡なる口實のもとに態々捕虜となるを恥とせぬ西洋流を擬ぶ人も稀にはなきにしも非ず。去とては歎はし、假令何國に留學するとも大和魂だに確乎ならば、彼が長を採、短を捨る事廣瀬中佐の如く美人に慕はれても振切て歸朝するを得べし、軍人に限



らず文學者、官員、紳商、何人に拘はらず、餘り少年より洋行せし人は動すれば其表面の浮華に眩惑せられて、田舍漢の始て都會に出たる如く、見る物聞く物に驚き、其内容の是非善惡を識別する能はず、一も二も西洋流に非ざれば人間世界に住む甲斐なき心地して歸朝ののちも西洋感化と成て我國體に拘はる事をさへ敢てして憚らぬに至るあり、然れば外國留學といふ事は思慮分別の定まらぬ少壯者にはよしあし也、先克く土臺の

皇國魂を堅固に築固めて物に動せず、惑はす取捨の認識つきて後に洋行する共決して遲からず、維新以來萬事萬端西洋文明を學べる中に、醫術と軍隊程都合克發達爲たる物は非ず、手先の器用なるは日本人の特質なれば外療手術の如きは洋醫を凌駕する人在り、軍隊も又其式器械は彼の長所を採用して其精神は純粹の大和魂、祖先傳來の武士氣質也、若精神迄も西洋化するならば、いかで今日の連戰連勝あるべきや、目前是を見聞ても大和魂の尊き事知る可き也、法律といはす政事といはす、世上有らゆる一切合際すべて此軍隊の如く、式器械は其便なるを採る可きも精神は皇國魂を失はす、國體に適せぬ事は却下て何處迄も國粹保存せざるべからず、今回の戰爭に依て平和の後には諸外國も今迄の島國ならす、世界の日本と認て交際すべければ國民上下今より其準備に怠らす、何事の上にも退色を取らじと勉勵すべき也、然るに軍隊と醫術の進歩に引替て、商業の幼稚にして振はざるは如何なる故ぞ、顧に德川幕府の民は依らしむべし知らしむべからずを金科玉條として鎖國を專として適加賀の錢屋の如きあれば、慘酷の刑に處し、士民を論せず外國に關係する者を罰し、諸大名を疲弊せしめ、只顧民を愚にして自家の權威を保つに勤めしかば、素町人土百姓と劣しめらるゝ民間の者は唯蟄く虫の如く、內國に自巳の同業者在るをのみ知りて、外國との競爭等は夢にも見ざる事となりぬ、斯て二百五十年來染附たる町人根生は子孫に傳へて、明治文明の今日と雖も猶脫がたく、眼前の小利をのみ爭ひて遠大の大利を思はす、同業相欺きて信用を重んせず、見本を善して組惡の劣品を荷造りし始には價を廉して顧客となれば、漸々高直にす、人各各眼あり識あり、誰か物品の優劣を認ざらむ、日本商人の外國市場に信用を失ふは皆是也、或は同業者を妬みて拔がけて、我同胞を讒誣して國力を弱むるを念はざるが如き皆舊幕時代鎖國の餘弊にて同業相疾視するもの也、聞旅順に在し露の海陸軍人確執甚かりしと是愛國心なき露亞魂なる故のみ、日本とても平日には海陸軍人及び官途にも互ひに軋轢なきに非ざれど、出

國家の一大事とある秋には私の不平など誰かは思はむ悉皆忘れ果てゝ全國一致事にあたるは是ぞ大和魂の然らしむる處、期せずして皆然也、商人の子弟も軍隊に入れば大和魂發起するからには平和の日とて大和魂のなき理由は有べからず、今より後は外國を敵手の商戰也、一時軍隊に在し時の心を體して商業に竭すに愛國赤誠を以して、舊弊なる禿頭が素町人根生を諌さとして明治の商人たる大和魂を發起し信用を重んじ、約定を變せず、同業相謀り相援助け、共同一致し機先を制する事二月八日に海軍の旅順を突し如く、敏捷ならむには精神一到何事か成らざ



らむ商戰にも連戰連勝疑ひなし、何事にも一致する程強きはなし、時には失敗の戰死負傷も有らむ克看護し救助して再び戰場へ出らるゝ樣に爲すは同胞の義務也、愨して一人にても味方を失はず、目前の小損に掛念せず、遠大の利益を計り、我日本をして富國强兵ならしめ以て其の實力を世界に輝かすべし、果して然らば徴兵に當りて軍隊に入る程身の爲によき事は有べからず、規律の嚴なるが爲に身體は壯健となり、大和魂は鞏固となりて除隊のゝち實業界に打て出ても世の信用を博すべく、兵役は處世の學校といはむも可也男兒もてる父母は怡て出すべし、決していとふべき事

に非ず。
婦女子も又大和魂を堅固にすべし從來は唯穩順、貞淑克く家を整へ子を育て常に家內にのみ在て漫に外出せず裁縫、炊燒の業に熟すれば女子の能事終るとし、上流に在てはそれすら老女專女等いふ役員ありて、家政の總てを採るが故に夫人は唯萬事此輩の爲に任せて我家の家事を知らず、幸にして此輩が忠實なれば、恰も逗留客の如く食膳は其薦るに任せ子女を生ても夫々に乳人抱傅を附けて養育せしむれば其身は唯歌を詠じ琴を調べ十種香茶の湯の遊藝も侍女のみを敵手として春日秋夜の長きを消すのみ、若岩藤の如き意地歹に罹れば、恰も幽囚罪人に類する虐待をも耐忍せざるべからず、今や大に然らず、文明日進の今日は女子も又外交を專とし世間多數の人に交際して退色をとらず、夫を助けて直接には其家の隆盛を計り間接には國家の富を謀る可き也是を上流婦人の大和魂といはむ、中以下に在ては自ら家政を司るにも理化學を應用して無益の費を省き廢物を利用し衣服、食物、衛生に適ふ樣に注意を怠らず、人體の病因大概を心得て、急病怪我等の出來事にも周章狼狽する事なく、速に應急の手當を施して、靜に醫の來るを俟べし。又身の粧ひ家の裝飾にも美術の眞理を解して猥に世上の流行に走らず、我好む處に僻せず、物色の配合其宜を得る等、總て學識によらずして克く爲し得べけんや、家內にのみ在りて世間知らずの舊時代と豈同日の論ならむや。故に女子は又大に學ばざるべからず、今や女學校盛に開かれて師範學校、大學校迄も設られたれば、女兒の時代は一意專心に課業に從事し、餘裕あらば學校外にも夫々專門の師に附て其業を研究すべき也。
又女子には兒を產みて此を立派に育て上るの義務を有す、恰も男子に徵兵の義務あるに等しく、貴賤上下身分の何たるに拘はらず、女子たる者の大役也。此大役體育、智育共に發達したる女子に非ざれば善良の結果を得べからず、虛弱病的なる女子の生める子は多くは夭折し、又不具者或は多病にて其子はいよ〳〵劣等の人種となり、國家の爲に有害無益の喰潰しといはざる

を得ず、されば身體を強健にし、其子女を大丈夫に育つるも愛國心の一也、此故に近頃は體育奬勵の聲頻に聞ゆるに至れり、掛卷も畏けれども、皇太子妃殿下は御生立より至極の御健壯にて、一度も御病臥あらせられし事なしとぞ此御壯健の故を以て多くの華族中より撰拔の榮を得させ給へりと承る、尤也其御降誕在らせらるゝ皇孫殿下の悉く御健勝に生たゝせ賜ふ御事、竹の園生の御榮幾千代かけて言祝奉ると共に、此御主意を奉戴して民間の我々も大和魂ある者は、妻を娶るに國家の爲に何よりも先、其婦の病氣なく、身體壯健なるを第一に撰ぶ可也。既に世間此傾きを生したれば女兒もてる父母は幼少より注意して無病に發育せしめざるべからず、昔の如く軟々として綺羅にも堪ぬ細腰は文明の美人に非ず、又は彼掌上に舞しとかいふ趙飛燕に類して、身體の特別に矮少なる、いつ迄も兒粧りにて若くみゆるを悦ぶ勿れ、十九廿に成迄も一人前に發達せざるは是病的に非ずして何ぞ、營養の不十分とか、何か故障のなくてやは、速に醫に相談して身體を發達せしむる方法をとるべき也。

明治の美人とは如何をいふか、先體格よく發達して脊高く、程克く肥て顔色は白き黒きに拘はらず光澤ありて活々とし、音聲高からぬも爽やかに舌疾ならず、猥りに人に怯恥ず、いふべき言は明瞭にいひてしかも挿嘴をきかず、其擧動は常に靜肅穩雅なれども、事にあたれば活潑敏捷にして物の埒明早く、常に嫣然に愛敬ありて他をそらさず、學識有て傲慢ならず、謙遜れども野卑ならず、假令身分は何にもあれ、いかなる晴の席へ押出されても怯ず臆せぬ度胸なかるべからず、此度胸は學問して物の理を知り、且多くの人に交際して世故に慣れば、自然と得らるゝ也。然るに父母が舐犢の愛に迷ひて家庭の訓嚴ならず、我儘氣隨に成長せしめ、お孃様と常に頭を下て來る屬僚の女兒や、侍婢を相手に威張ちらして意地惡き言をいへど、其親に憚りて御無理御尤と諍はねば、馴て他は皆如慝ものと思ひ、學校に出ても同級生に驕り、身勝手をのみいひて他に勤る事を知らず、故に始は無二の友と睦びし者も

忽にして相反目し、又他を友とすれど是又久しからずして軋轢す、終には校中の憎まれ者と成て面白からねば、罪を友に歸し、教師を譏りて父母に告、他校に轉しなどすれど、自己の心得の直らぬ限りは何方とても同樣也、かやうの女兒の癖として一面識の人に物いひ掛けらるゝ事あれば、何も恥べき事柄ならぬに言澁り赤面して他の脊後に退怯し又迯れ難くて答るも唯口中にて訥々して何といふか明瞭せず、反問すれば笑ひて終に要領を得ず、畢竟世なれぬ少女也と見て許し社すれ、其人に對して失敬極る事也、常疎き人には物も言得ぬ程內氣なるかと思へば、此女兒郤の於轉婆にて其友同士戲るゝには大聲を發して喋々と囀り、咄多撥と跳梁、何故人に物いはれて答得ぬかと問へば、只何だか極惡しといふ、他人に向ひて臆面なるは氣隨女兒の常弊にて、決して內氣なるに非ず、交際法を知らざる也、古流の人は女兒は世慣ぬを尊き事に思へるも有しかど、眞は然らず、そは所謂阿婆擢をこそ厭へ、儒敎にも小學に應待の事を說たり、女大學中にも問事あらば正敷答ふべし、其返答おろそかなるは不禮也とさへいひて人に物いひ掛られて臆面がりて退怯せよとは敎ざるをや、況や今日は外交は男子よりも女子に重きを置かるゝ世也、母たる者克注意して女兒は五六歲、無邪氣の頃より家に來客ある每に其挨拶應接振を克をしへて座作、進退、行儀正しく、物の請答を明晰といひ習はし、能爲たる時は褒賞をとらせて奬勵すれば、二三年の中には新參の下婢に增りて玄關の取次、茶菓の給仕等、一廉の交際上手となるべし、十歲以上に及びてから生半熟と成て臆面がりて爲能はぬもの也、抑極り惡しとは奈何事ぞ、失策を詰問られて白狀する時、一端約束したる事を變替爲る時、借たる物を返されず、謝罪する時吾身を他の過賞する時、是等の外は有べからず、女兒輩の極歹がる處一向に極歹からぬ事多し、夫よりは友同士にもせよ、戀愛小說を高聲に朗讀し、男子の月旦を得意に成て喋々するこそ極歹き限りなれ、韓國や支那よりも留學生の男女共續々渡來する今日に、文明國のしかも帝都の眞中に然る女兒の

猶あるは外人に對して眞に極万き極點といふべき也。昔より才女といへば紫式部清少納言を例にひけども、彼人々は唯歌を達者によみ文章をよくし傍ら音樂に精かりしのみ其世に在ては學者才女に相違なきも、今より顧へば易々たる業のみ、



●長岡參謀次長夫人芳子女史は常に育兒の方法に就て深き注意を拂つて居る人であるが、同女史は其愛兒に秩序の觀念を持たせる事を第一として、四人の子に各一室を與へて、其室は人手を假らず自分にて之を整理させる事に定め、一週一回づゝ見廻つて不整理の處は必ず之を直させる樣にし、又毎日子供と食卓を共にする制を定め、毎夕四人の子のうち一人づゝ順番に、父と晝部を共にして其日の出來事、又は面白く且つ有益と認めた事を父に話すやうに仕付けてあるとの事である、何れの家も家庭の事は兎角怠り易いものであるから、能く注意して愛兒を正しく敎育する方法を取らねばならぬ。

當時は日本紀萬葉を知り、三史五經を讀み、白氏文集樂府等を暗誦すれば、男女共に學和漢に通ずと稱贊せられたれど、明治の閨秀と稱せられむには遙に紫清を凌駕して、啻に和漢のみならず、昔人の夢想だも爲さりし外國語、洋書も學はざるべからず、理化學も應用爲ざるべから

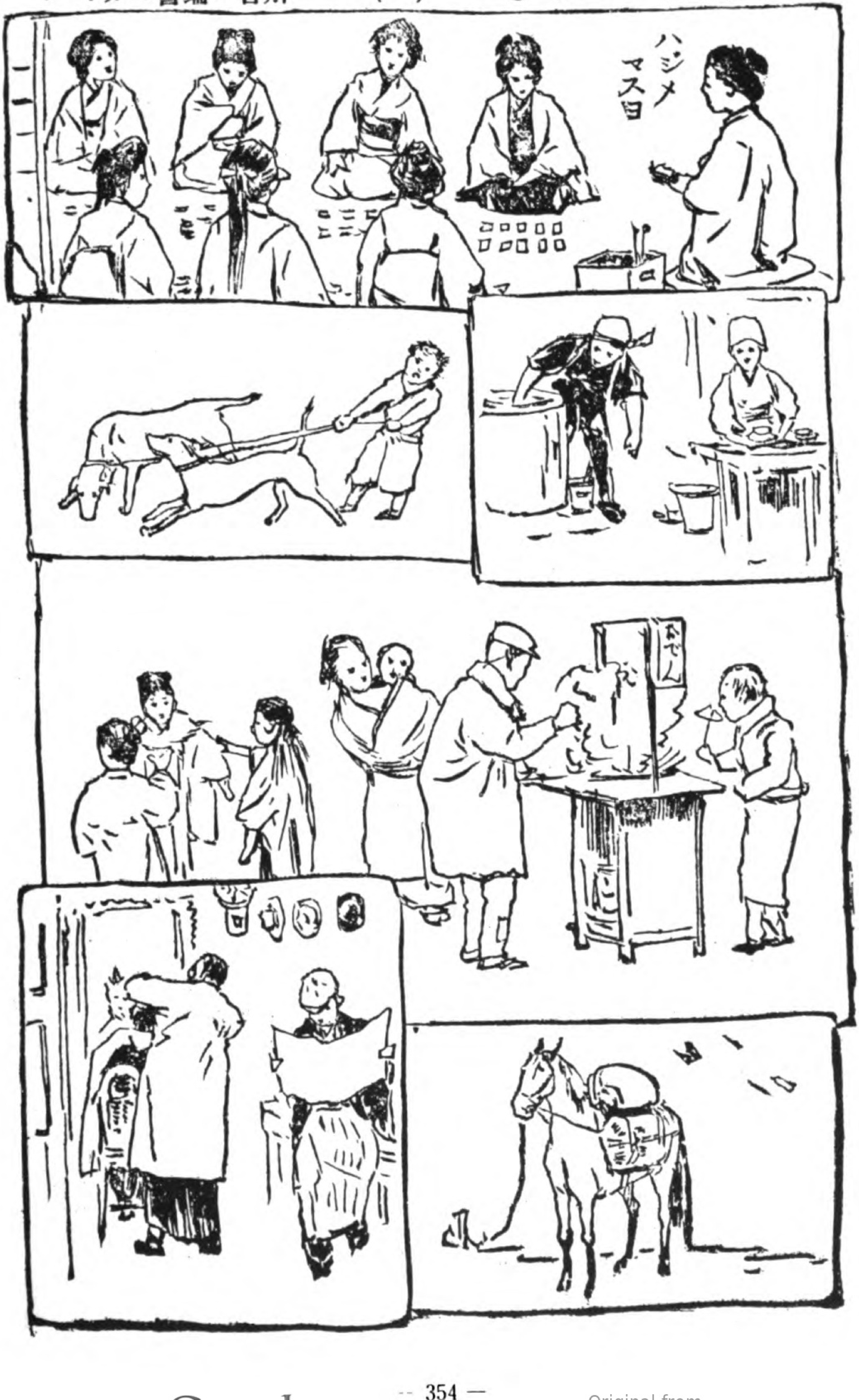
ず、地理といひ、歴史といひ、文學の外にも裁縫あり編物あり、曰何、曰某、と其課業の夥多き、大概を窺ふ許にても容易ならず、況や一々通曉する事は、假令紫清をして今の世に再生せしむるとも、恐らく難事と爲なるべし、況や凡庸人に於てや、人の腦漿は限り有り、限ある腦髓を以て限なき諸學科を悉く皆學び得らるゝ物ならんや、餘りに多く學ばむとすれば是も彼も得られずして虻蜂不捕と成畢る、此故に普通學の外は撰科と爲たるなれば、先自己に尤適すべきを撰び、就中性質の好む處に打込で專門に學べば、其技成就するもの也、然るに少壯の時は男女に拘らず意志浮動して定まらず、少しく試驗等に困難すれば忽厭氣生じて他の花はよく看ゆる諺に洩れず、友の成蹟よきを羨み折角是迄學び掛たる科を差置て、甲と同科に移り、始は珍敷に面白くて勉强すれど、何幾ならず又六ケ敷なりて乙の業に轉しなどする中に、年月は空しく過去り、是も彼も嚙り散らしの鼠藝にて一も得る處なく成畢る自己何を好むともなくば父兄の差圖に依て方向を定むべし、既に定めたる以上はたとひいか成困難に遭とも又誰が何といふとも、誘惑さるゝ事なく、一意專心に其業を勵むべし、いかなる秀才にても浮薄にては一藝に達し得べからず、扨一藝に達せむと願はゞ學校のみにては何藝にても一人前とは成難し、必それ〳〵の專門家に附て研究爲べき也、地方人など動すれば學校をだに卒業すれば天晴なるが如く思ふが多けれど、學校は多數の生徒を一時に教授するなれば、極めて凡庸の者を標準として學科を立たれば、唯其大要を知らしむるのみ、專門に非されば精細なし、されど學校は資格を附る處也、世には學校に入らずして卒業生よりも遙に學力優等の人もあれど其技を以て世に立たむとするに及びては、肩書なき爲に聘する人なし、稀に有ても吾より遙に劣れりとみる肩書附の卒業生の半額位ならでは賣口なし、此故に資格を造る爲に必有名の學校を卒業せざるべからず、男女を問はず皆然也、特に女子は男子よりも身の費用多く、俸給は少額なれば一藝を以て身を立てむは頗る難事也、父母より受る處の財產

有て俸給は小遣ひとするか、又は斯道に天稟の才ありて、少年にして頭角を顕す程の俊者ならば兎も角も、凡庸の輩は吾身を省て及ばぬ虛榮心を斷念して、温柔に父母の計らひに從ひ、それ相應の家に嫁して一生を誤つ事勿れ、少しく學問爲たる女兒、動は小才を頼て他に嫁して屈せんよりは、獨立して自由なるに不如などいふ者多し、愛國心乏しく人たるの義務を知らざる者也、奈何となれば男子は獨立すれば必妻を娶り、子孫を生ずべしと雖、女子の獨立といへば夫をもたぬ事となる夫をもたねば子もなし、子孫なきは不孝也と儒經にもいひて、子なき女は去る可と七去の一にもかぞへたり、盲跛子の不具者にても、求むればそれ相應の配偶者あるに、况や身體異狀もなく、殊に學びて知識を磨きたる者が、故意に生れも附かぬ石女たらむとするは是天理人道に背き、女子たるの義務を竭さゞるに非ずして何ぞ、兵役を忌嫌ひて佯病、腰掛養子等の詐計を爲す卑怯男子と奚ぞ撰ばむ、淫奔野合して自由結婚などいふこそ悪からめ、正當の手續を以て結婚し、然て子女を擧け是を丈夫に育て上げ克敎育して、天晴國家の爲となる人物を、一人にても多く造るこそ女子の大和魂なるべけれ、文學を好まば文學博士の妻たれ、音樂好は音樂士に繪畫好は畫工にと樣に各々其學び得たる同業同臭味の夫に嫁して共に其技を琢磨せば又樂しからずや、何の不可なる事かある。

一度嫁するも不幸にして孀婦となれる者未兒あらずば再嫁する方宜けれど、既に子女在之が爲に空閨を守るも母としての情也、且女の操なれば他より彼是いふ可に非ねども、生計に窮せぬ程の財產有て當人の意志も餘程堅固ならざるべからず、殊に生活困難となれば强に色情ならざるも、兒の爲を思ふの餘り又は差逼る苦しさに男子の乘ずる處となりて、折角の志操を誤つ事世間往々見聞する處生計だに苦まざれば、多情の淫婦に非ざるよりは後家も立べし獨立も爲べし、國民たる者男女共に戰時の心を心として、平和の後も共同一致以て國家の富を謀り、歐米の如く女子と雖も巨萬の財產を有するの域に至らむ事を勸めて止ざるべし。（完）

新案繪さがし（一）

解答ハ端書ニカギル



新案繪さがし（二）

〆切三月十五日



繪さがし當選披露（第貳號 小天地分）

△正確なる解、下圖の如し

其一＝＝六十五名、其二＝＝二十九名

▲投解者數二千四百三十四人

内正解者　十五名

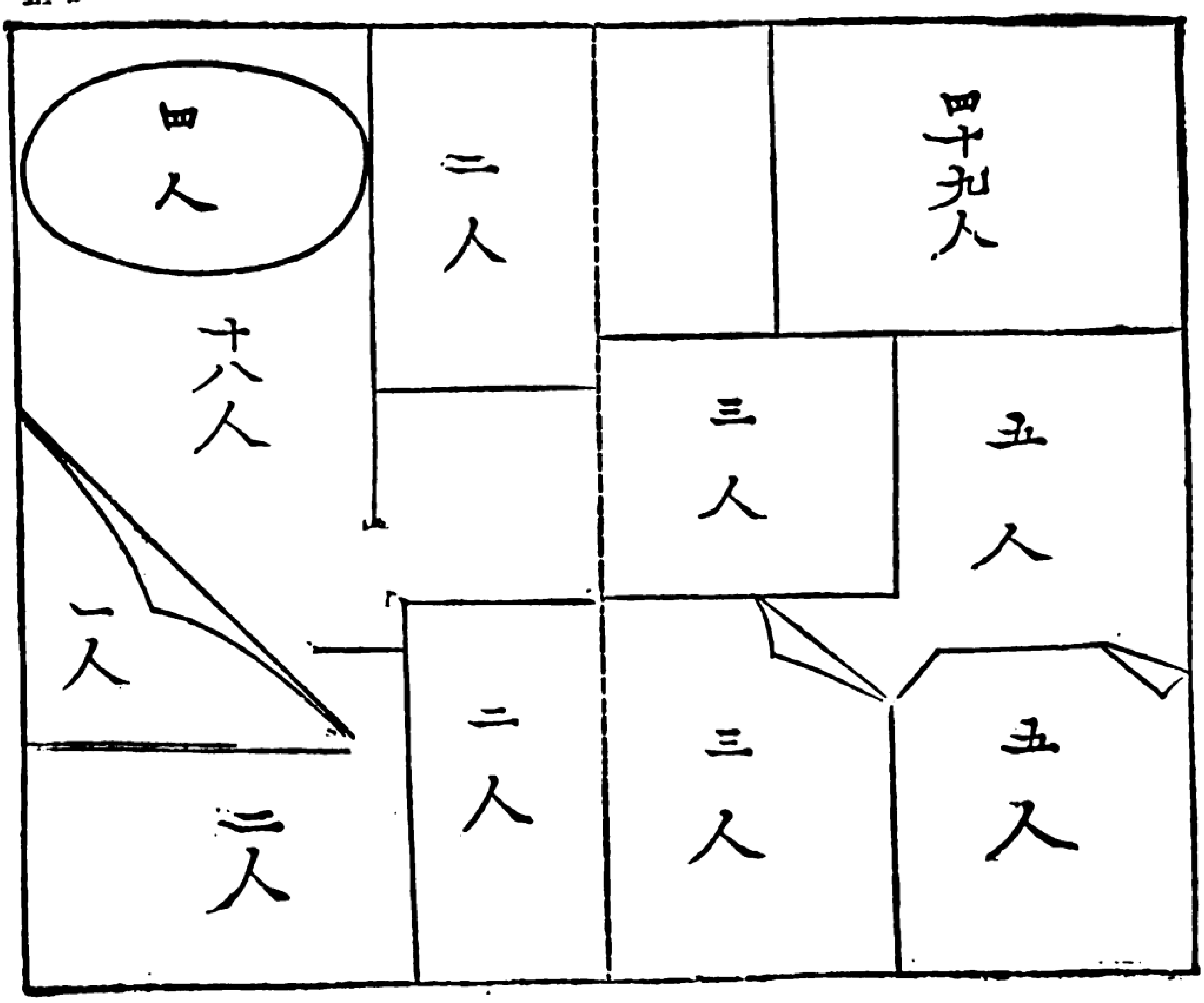
一點の相違ありし分二百三十七名

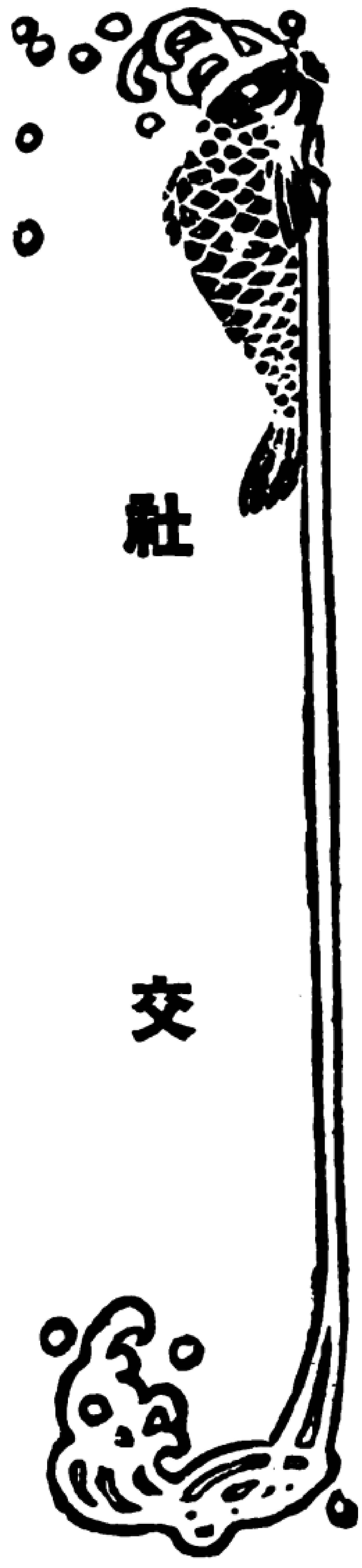
落選　二千四百十九通

正解當選者……十五名……先着順

麻布區芝森本町三ノ九山根方	岡本すが子
京橋區築地小田原町三丁目十	村上たか子
新潟市學校町通貳番町	藤原徹一
牛込區市谷八幡町四番地	林すて子
深川區佐賀町二ノ三九神田内	栗原せん子
麻布區廣尾町七九鈴木内	土岐靜子
麹町區富士見町五ノ二〇塚越方	下平修子
本所區外手町廿五番地天沼方	松下露子
芝公園十號地ノ一	藤井うた子
本郷區東片町一〇六	中村すみれ子
芝區白金丹波町二一樹谷方	長崎らく子
下谷區仲徒町二丁目六十一	小島てる子
牛込區赤城下町二十九	矢部きよ子
神田區皆川町二十黑川方	佐藤梅子
芝區芝口二丁目十四森熊洋服店方	神戸憲治

右一二點の誤算は圖中格子内に下駄のあるを客と誤解したる人多かりし爲め歟、又た地方の人の電車の定員を知らざりしが爲めか、正解を與へ得ざりしは頗る遺憾とす。





社交

時局談

松平男爵夫人

婦人記者

我忠實勇武なる陸海將卒が出征してより、貴紳の婦人方は何れも長袖を棄てゝ起ち、或は赤十字社に繃帶を巻き、或は愛國婦人會、報國婦人會其他各處に戎衣を縫ひ、或は豫備病院其他に傷病兵を慰め、或は出征軍人の留守宅、戰死者の遺族を訪ふて物を贈り且つ同情の涙を灑がれ、實に痒い所に手の届く周到懇切なる斡旋と存じます。松平男爵夫人は最も熱心に奔走せらるゝので、殆んど寸暇なき御身上であるが、記者の伺つた日は珍らしく御在邸で、北白川宮様から御電話にて召され、唯今支度中なれば一寸御目に懸るとの御取次に、御二階なる十二疊二室推開いた清雅な御座敷へ導かれました。

▲御座敷の飾付

正面の御床の間には、浪に鳳凰の古畫を掛け、銅製花瓶に川柳と寒菊を見事に活けられた側に香爐を据ゑてあり、北側に立てられた二雙の屏風は、壺碑、宮城などを咏じた鴨涯の絶句で、紫檀の小卓上に聖路易博覧會の寫眞許多を積まれてありました、執事は桐胴の火鉢と茶菓を運ばれ、尚ほ右の寫眞に眼鏡を添えて出されたので、暫く拝見しつゝある所へ夫人は出で來られ「今日は終日在宅致す積りのところ、宮様よりの御召で支度中、御待たせ申し上げ、失禮致しました」と慇

勲に述べられましたが、質實な風通御召に小豆色の下着を重ね、黒縮緬五所紋の羽織を召され、濃栗色縮緬の菊花二つ三つ小さく散らせし襦袢の御襟と云ふ極くくすんだ中に色合の調和うつり好く、御格服はデップリとして艶々しく、厚い鬢髪に富士額の水際彌立ちて、束髪の小堅き風に關らず、御年より餘程御若く見受けられました。夫人は最心易げに語り出でられ、先づ博覧會寫眞より御話の端緒を開かれました。

▲米國婦人の感歎

此度の博覧會出品には、米國婦人も大層感心しましたさうで、日本の工藝が未だ是程までに進歩しては居まいと思つて居つたので、佛蘭西に於ける博覧會の時より我國出品の總てが大層進んださうで御坐いますネ丁度露西亞と出品室が列んで居るのに、露西亞では内亂の爲に出品が出來なくなつたので、尚更我國に感服した次第で御坐いませう。

▲御主人の撮影

彼地に梶原と申す上手な寫眞師が居りまして、普通の撮方と違つて、何時寫すか知れぬ間に寫して了ふのださうで、實に平常の儘の顔が撮れるので御坐います。直段は隨分高う御坐いまして、小形のが一組百弗とか申しました。彼地でも餘程評判が高いさうで、正直も寫したのを持つて歸りました。チヨツト御覧に入れませう。

夫人は手を鳴して、御主人の御寫眞を取り寄せられましたが、セピヤ色の高尚なもので御坐いました。

▲米人の歡迎

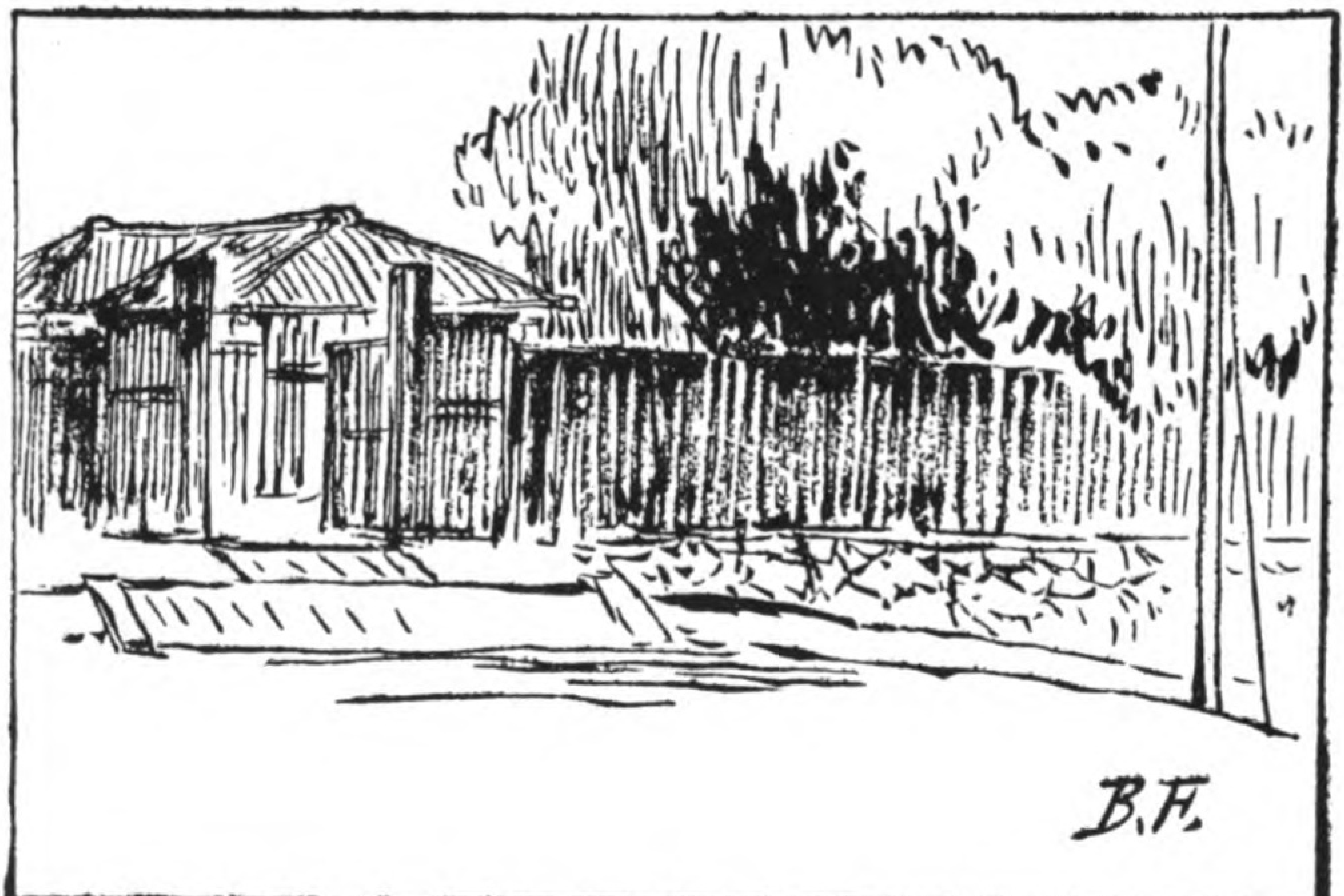
亞米利加人は露西亞人と大分緣組を致して居るさうですが、畢竟露國で求めて關係を深くする故でせう。それで露國に親のある米人もあり、亞米利加に孫のある露人もあり、日本贔負は亞米利加全部と云ふ次第にも參りませぬが、七分通り日本贔負で、今度なども日本人の招待を受けぬ者は耻だと申して、大層日本人との交際を名譽と致したさうで、正直も皆樣の御蔭樣で面目を施し、盲目の川渡りながら、都合好く見物致して參つたと喜んで居ります。

▲米人の戰爭談

彼地の人達は、今度の日露戰爭に就て、頻りに斯う話して居るさうで御坐います。『日本の價値は此博覽會の出品でも判るが、日本文明の進步は驚かるゝばかりであるから、戰爭にも負ける筈は無い』と。

▲御息所の御勵精

君樣方（各宮妃殿下）が赤十字社で御勵精遊ばさるゝ事は實に恐れ入る次第で御坐いまして、梨本宮の君樣は、御辨當御持參で私共と一つ處で召上つて居らつしやいます、一昨日も終日御製造を御勤めになりました。小包繃帶の消毒は實に嚴重でして、チヨツト顏をいぢつても、直に指を消毒致さなければなりません此小包繃帶は談話を嚴に禁じて御坐います、イヱ退屈は致しません、皆一生懸命に製造に掛つて居りますから……。



東鄉大將の邸前　(麴町區上六番町)

▲傷病兵出迎

傷病兵出迎ひには、君樣を始め會長及び幹事方（これは順番に）が參り、十五銀行を借り受けて繃帶卷換へを致します。先づ最初にフランネルの帽子を一個づゝ與へますが、是れは粗末な帽子ながら、貴婦人方が諸士を勞ふ爲めに、手づから作られた品であると云ふ事を說明致すので、兵士も大層喜びます。日淸役の時に

は、傷口を度々洗ひましたが、唯今では其儘に致して置きますので、結果が餘程宜しいやうで御坐います。日清役の時に較ぶれば、今度東京の傷兵は、輕いのばかりが參る故でもありませうが、矢張り傷口を度々洗はぬ方が宜いと見えます。十五銀行は實に感心なもので、傷兵を大切に取り扱ひ、且つ手拭一筋に慰勞狀一通を添へて、傷病兵に送つて居ります、流石に華族銀行だけ御坐いますネ。

▲篤志看護婦の修業

別に稽古と申すほどの事もないので、唯だ御醫者の講義を聽きに出席した度數によつて、修業證を渡されるので御坐います。ハイ日清役の際には、黒木の奥樣や片山佐和子樣などゝ御一所(停車場)に實地を致しました

▲宮城熊本兩縣の風俗

私共は少しばかり方々へ參つて居りましたが、子供を育てるには熊本ぐらゐ好い處はないと存じますネ。宮城あたりの者は、英語の勉强をしたい爲めに僞つて敎會へ入つたりなど致しますが、熊本では其樣な風はありません。爾うして宮城では、中流以下の婦人達が朝から寄り合つて御茶を飲む風習が御坐いまして、其談話は嫁が姑の讒訴を言ふとか、姑が嫁の惡口を申すとか、何かしら下らぬ話をして貴い時間を潰して居ります。正直が知事を致して居りました頃、これが氣になりまして、何樣かして此惡習を止めさせたいと存じ警察の手を借りてもとまで心配致した事が御坐いました、其代り生活は實に樂なもので、何樣な下等社會でも、朝から御魚を御膳に付ける位で、私共の居りました頃は、小鯛が十尾三錢位で御坐いました。

▲熊本の造花流行

熊本人は多く活花の心得がありまして、子守でもチヨツト位は致すので御坐いますが、宮城ではサツパリ其風がありません、其證據に熊本には立派な花屋が御坐いますが、宮城には一軒も花屋が無いのです。ハイ活花には、花屋から求めましたのでなければ、野生の儘ぢや巧く活けられぬので御坐います。

御話は是より佳境に入る所でしたが、北白川宮へ御

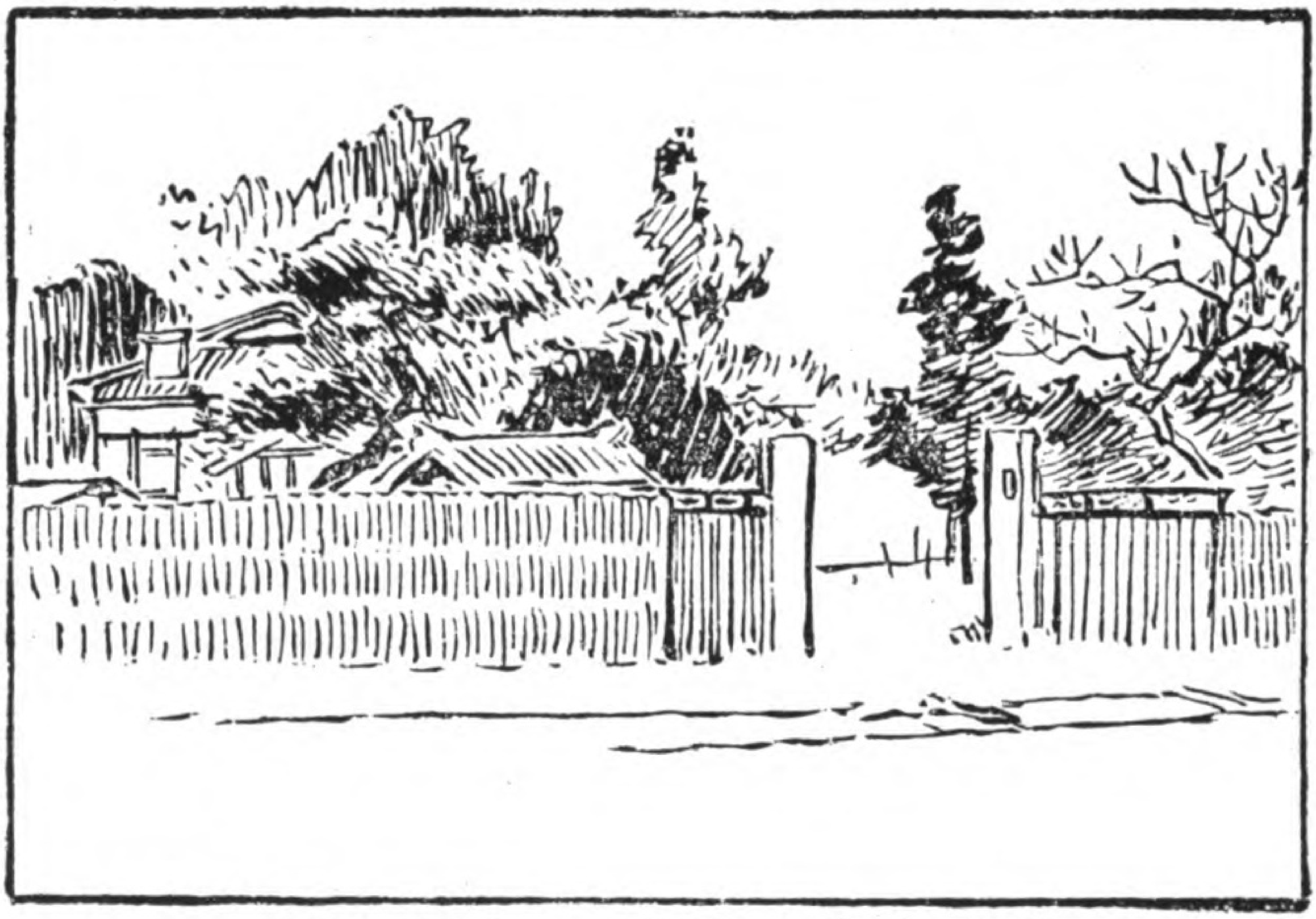
參殿なさるゝ時刻が迫りましたので惜しき御別れを致しました。

夫人須磨子は舊福井藩士小笠原幹氏の長女なり嘉永四年を以て生れ明治元年を以て今の男爵松平正直氏に嫁す人と爲り快活にして報國の精神に饒み亦十字社篤志看護婦會の如きは率先奬勵したりと云ふ。

某會社長夫人　生活談

婦人記者

少壯にして横濱富豪の殖產會社に重く用ゐられ名古屋支店長たると七年機織界貿易界に雄飛し今は某毛織會社長たる某氏の邸は荏原郡大井村に在り記者一日同氏



乃木大將の邸前　（赤坂檜町）

の夫人を訪ひ其少しも修飾なき生活談を聽き紳士社會生活の參考に資すべきもの多きを認め玆に其大要を紹介す。

昨年名古屋から出たばかりで取敢へず或人の別莊を借り受けたのですが、地面は千五百坪で家は八室、品川沖の眺望は却々よろしう御座います。屋賃は三十五圓、持主が良人の性質を好いて、非常に廉く貸したのですが、庭木の手入れは一切良人が受持つて居るので御座います。

▲家　族

ハイ家族は私共夫婦と雙方の母親、十八歲に十五歲に十一

歳と九歳の男兒、それから八歳の娘、外に親類からの預り娘が一人御座いますので都合十人、而して書生四人、下女三人居りますから、悉皆で十七人御座います、元來私共では夫婦とも書生を世話するのが好きで、特に良人はそれを重な道樂と致し、平生家に置いて通學させるとか、寄宿させて賄費を支辨して遣るとか、我子同樣に致して居ります。

▲生活費

私は毎月生活費として良人から百五十圓づゝ預りますが、家賃、米代、魚、牛肉、野菜、醤油、茶、砂糖、炭薪、石油、新聞雜誌、被服、醫藥、長男次男の學費寄宿費、冠婚葬祭其他大なる交際費、母親二人の小遣私の小遣、子供の小遣など總て此百五十圓の中に含んで居るので、良人の小遣だけは別で御座います。此に至つて生活費の内譯を伺ひました。

▲米と麪包

米は毎月凡そ二十七圓ほど買りますが、毎日二升五合位づゝ二度炊きます。眺望の好い上に客好きですから泊り客が可なり多く、毎日如何程と判然定まつては居りませんが、一個月の米代は先づ二十六圓乃至二十八圓で御座います。麪包は一日二斤以上買りますので、一個月六圓近くなりますが、これは此頃良人が脚氣で米食を取らぬ爲めに多くなつて居る事と御承知下さいませ。

▲肉類と牛乳

牛乳と肉類を儉約しては一家の健康を保つヿが出來ません、私共では毎日幾許かの牛肉を煮て野菜に附け合せ、日曜日は洋食に二斤の肉を用ゐます、良人は食物に階級を置くのが嫌ひで、書生も下女も皆同じ副食物ですが、牛肉は八圓、牛乳は四圓乃至五圓で御座います。

▲野菜、魚類、鷄卵

野菜は割合に少い方ですが、朝は味噌汁の身、晝は一體が總菜、晩は牛肉や魚を附け添へますので、大抵毎月六圓ぐらゐです。魚類も隔日に四十錢ぐらゐ買りますから、矢張り六圓位で御座います、鷄卵も大抵毎日用

ゐて居りますが、これは病人などある節に必要が増すので、チョット平均が取り難う御座います。

▲炭と薪

炭は申す迄もなく冬は多く夏は少く用ゐますが、夏冬を平均して一個月五圓ぐらゐ、薪は三圓五十錢位、風呂だけは石炭を用ゐます。炭薪の經濟は一々私が注意致す次第に參りませんが、私は毎朝裾を端折りまして廣い庭から枯枝や落葉を拾ひ取り炭俵へ結め『是れだけの焚物を無益に捨てるのは勿體ないから少しづゝ薪の助にしては如何だと下女に敎へ置き、月末の勘定を致す時、下女を呼んで『今月は來客も多かつたのに先月に較べると炭薪の拂ひの少いのは全く汝達の遣方が巧いのだ』と申し褒美として三十錢程も與へますが下女は己の働きが主婦の眼に留つたのを喜んで尚ほ〳〵節約と云ふ事に熱心に爲り無益に薪を焚くとか焜爐に冗火をカン〳〵させて置く事がなくなり、一個月には大層な相違が出來ますから僅かの褒美には換へられないのです



上村中將の邸前（三田綱町）

▲茶と石油

茶と云ふものは夏冬とも一切用ゐませんで、麥湯を用ゐて居ります。これは衛生上からも定めたのですが、其麥は一個月僅か五十錢位です。石油は夏冬平均して

一個月二圓位、二罐のが少し餘ります、平生は五個所に點燈致し、來客の時はランプの數を增すとか、明りの度を強くするとか致しますから……。

▲醬油、味噌、鹽

先月は此三種を合算して三圓七十九錢五厘でした。

▲下女の給料と貯蓄

三圓のが一人、二圓五十錢のが二人、親類の娘には一圓五十錢ですが、四人とも髮結錢を與つて居ります。私は下女に貯蓄を勸め、四人とも五十錢づゝ貯蓄させて居るのですが、各自十圓溜つたとか二十圓溜つたとか申して喜んで居るやうです。

▲洗濯

洗濯料は平均一圓五十錢程、種類はホワイトシヤツ、カラ、カフス、シーツ、毛布、フラネル等で、毛織類は洗つたばかりでは毛がよれて醜しう御坐いますからチーゼルと云ふ薊のやうな木で擦ると毛並がチヤンと立つて美しくなるさうです。

▲新聞雜誌

新聞は時事、朝日、報知を始め地方のも種々買つて居るので二圓五十錢ぐらゐ拂ひます。雜誌は子供の爲めのが多く、戰時畫報、少年世界、御伽噺其他私の購讀して居るのも御坐いまして先三圓內外で御坐います。

▲郵税、車代

私は名古屋に居りました時分、愛國婦人會の幹事を致したり、赤十字社の篤志看護婦を致したり、其他婦人社會の事業に少し盡しましたので、地方有志婦人との交際がありますから、書信の發送だの小荷物の贈遺だのが可なり多い方で、月々の郵便料が隨分かゝります。車代もチヨツト十圓ばかり拂ひますが、良人の出勤先が近いので、大層儉約になります。

▲客の饗應費

これは平均を取るとが六ケしう御座いますが、客の小い時は積んで置いて、客の多い時に流用します。それで如何程客膳のあつた月でも、一切私の手から支出するに差支えることは御坐いません。宅では一同親睦して始終愉快な生活をして居るので、知己親族は保養が

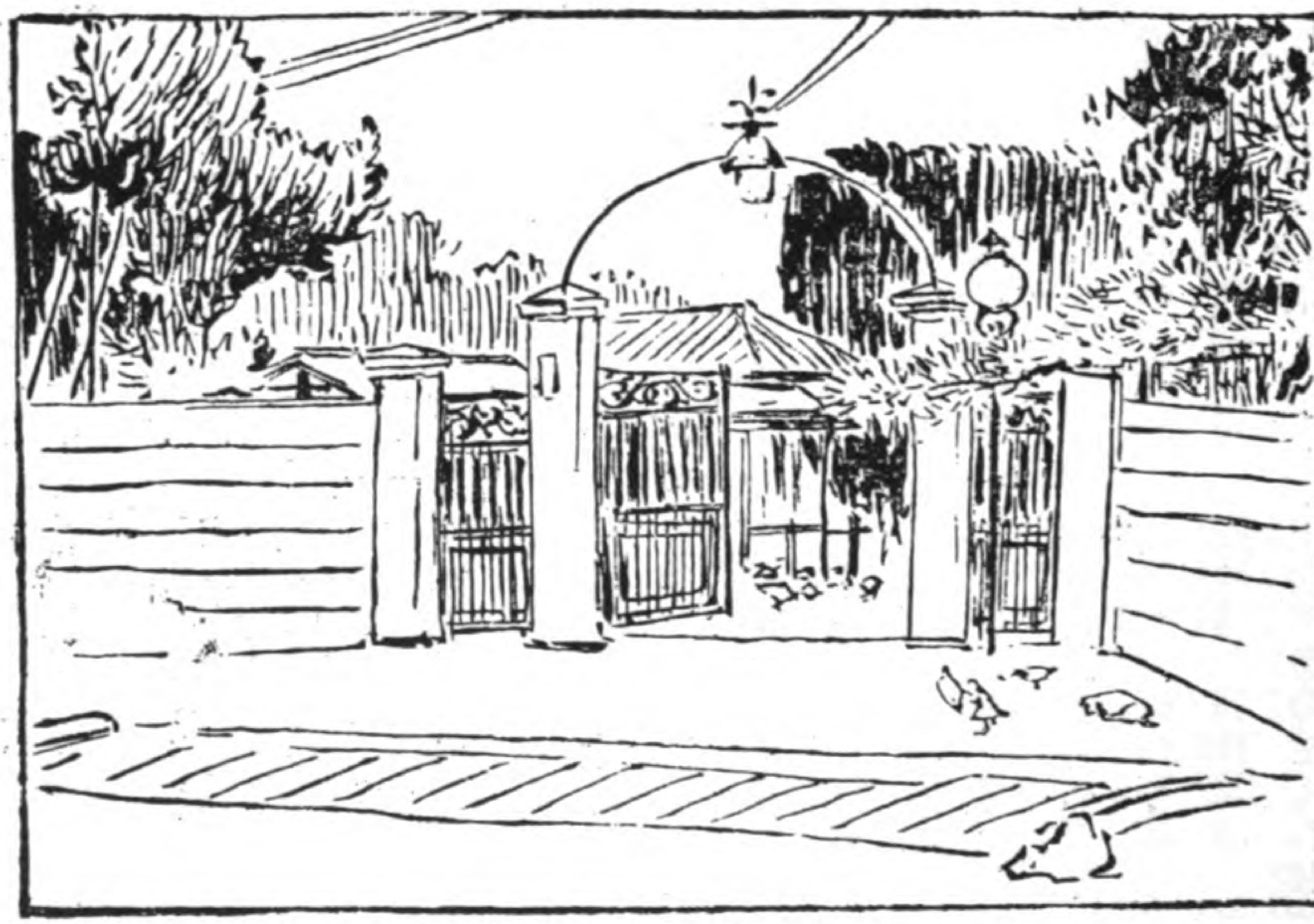
てら緩りと來訪する者が多いので御坐います。

▲子供の菓子と小遣

子供には朝と午後と夜分と三度時間を定めて、菓子や果物を與へ、側に居る者にも分け與へるのです。良人は公平主義なので自分が他で貰ふて來た物は、假令僅かづゝでも二人の老母を始めとして一同に分けますから、子供達も決して自分獨りで食べるとは御坐いません。小遣は長男に二圓、次男に一圓、あとは五十錢づつと定めてありますが、皆其中から貯金して居ります。

▲生活膨脹の歷史

夫人は家庭歷史に深く趣味を有つて居らるゝので、花嫁時代から今日までの生活、變化を記された文章が御坐いますチョット拜借して左に、



野津大將の邸前　(赤坂新坂町)

今より二十年前初めて日本橋區龜島町に六疊に二疊に一疊で一ヶ月二圓五十錢の家を持ち主人は〇〇〇會社に通勤す時に月俸十五圓家族二人に給金五十錢の小女一人を使ふ一日肥大の來客あり主人は玄關に御通し申せと云ふ僅か一疊の玄關、客大にして横に坐りぬ又或時來客あり主婦出るに道なく臺所の板の間に居ると三時間水瓶より水をすくひて食事せり主人上等着は木綿

雙子主婦は未だ割烹に慣れずして日々辨當の菜に玉子燒を用ゆると一年間主人一度も小言を云はず旣にして長男亮生れ家狹くして同町に轉宅す家賃三圓五十錢茅場町の出火にて類燒す生れて百日目なる亮を風呂敷に包み人に賴む此時の下女は安き給金にて七十歲の老婆なりしが近火に驚き腰を拔かし漸く免れしめたる内雨霰と降る火の粉燒け落ちる音の凄じく逃るに道なく或人の壘の下より逃げ拔け風呂敷に包みし儘の兒を引き取り見ればニコ〳〵と笑むもをかし、又々築地に轉宅す家賃四圓特に主人の弟〇〇〇氏十八歲なるが初めて上京し家族四人下女一人となる主人月俸十七圓より十八圓となる其後轉宅すると一年間に六度其内可笑しかりしは下谷三筋町の家賃五圓の宅にて是れは元與力の屋敷跡門番の部屋と玄關あり正面には白と淺黃鞘形模樣の唐紙、昔の白洲も斯くやとばかり座敷は十疊三間と五疊一室、家廣くして飾る道具のなければ冬の寒さ骨に徹るに耐え難く又も西三筋町へ轉宅荷物は僅かに荷車一臺なりき、此時主人月俸二十五圓より三十圓、國元より第一の弟〇〇〇氏上京滯在すると一年國元の父上大病にて歸國す、後ち鳥越に移り半年にして下谷竹町に昔の屋敷跡を百五十圓にて買受け初めて我家に住む、時に月俸四十圓より五十圓まで、博、剛、美の三男兒も出生し居りしが長男亮八歲にして此家に病死す後ち四男美も三歲にて死す燒野の雉子夜の鶴子を思はぬ者は無し嗚呼悲しき哉、此後國元より伯父上京滯在すると三年主人姉の子上京し乳母一人下女一人家族七人なり、竹町に住むと七年にして筑後國三池郡に轉任す、母上は國元へ行き剛は乳母の里へ行き次男博と長女みき代のみ三池へ同道す此地の炭山に住むと一年、重役の推薦にて三池の紡績會社へ入社し商務支配人となる月俸五十圓に手當二十圓、後休職と爲りて七十圓の三分の一を受く時に日淸事件にて各紡績會社は未曾有の衰頽を來したるに關らず著しき利益を上げ傍ら礦山事業を助けたれば功を以て社長より金百圓紋付の羽織及び二等賞を受く既にして〇〇本店より上京を命ぜられ故舊忘れ難く遂に紡績會社を辭して

歸る會社の重役を始め有志の方々停車塲に充ち久留米或は門司まで見送られ嬉しさ餘りて哀しき別を告ぐ、三池にて五男潔生れ歸京の際も懷姙五個月にして下谷西町の家に六男康を生み其後次女ふじ子を生む明治三十年十一月五日名古屋へ轉任し在勤中專ら會社の隆盛を期し牛莊上海より棉花を直輸入し木綿改良を圖り織物會社を組織する等國の爲め市の爲め會社の爲めに心を勞すると七年妾不肖にして夫を助くるの道を知らず今も昔も變らぬ月俸十五圓時代の糟糠の妻、耻しながら爰に三十六年の新しき年を迎ふになん、名古屋前津の里にて　○○

實に眞情の流露した文章で、飾らぬ處に無限の趣味があります、

▲各兒に書付を與へ置く

夫人は各兒出生前後の事と各兒自身の履歴書を認めて各兒に渡し置かれるので一例を擧ぐれば、

明治二十九年丙申閏年八月十三日午前三時半出產、神武天皇即位紀元二千五百五十六年、泰西千八百九十六年、○○○六男康、木曜日、戊戌日、雨又曇冷氣、前夜雷鳴、筑後國三池に於て姙娠、兎角不健康にて本年二月下旬歸京するに望み海陸共に病體にて旅行したり、大切に保養し月滿ち分娩す

東京市下谷區西町三番地八月十九日康と命名

▲各兒履歴書の例

幾男誰と記せし紙へ出生の年月より種痘の回數と其年月日、轉居の年月日、其他の雜件を簡明に箇條書にして與へ置き、常に記憶に留まるやうに仕込まれてある趣味深き教育と感じました。

（完）

神道式の婚禮

麴町區有樂町なる神宮奉祭會にては先年　東宮殿下の御慶事の御擧ありし以來有志者に對して輕便なる婚禮式斡旋の勞を執り居りしが一昨三十六年十一月高木醫學博士令孃寬子女とドクトル樋口繁次氏と創めて此會に合衾の式を擧げたるを最初に其の後引きつゞき志望者多く一ヶ月間十二三組に達せし事もあり日曜日の外毎日午後三時より約一時間にて式を卒ふべしと若し望みの人ありて同會に就き其次第を糺せば婿、嫁、媒介者等の身分其他結婚期日などを記す可き用紙を與ふるに付き是れに詳記して申込めば式に要す可き萬事萬端の器具外一式は同會にて辦し而して其費用僅に十圓、十三圓、十五圓の三種別あるのみにて最も莊嚴にして神聖なる式を擧げ得べしとなり

家事談

阿部泰藏氏夫人

中村鈴子

銀行業の池田謙三氏は他に匹儔あるべし、保險業の阿部泰藏氏は新日本に獨歩すと噂さるゝ迄に信用高き阿部氏の家庭を窺ふべく、三田松坂町の御邸に同夫人を訪問致したのは、雪解路漸く乾きて朔風面を掠むる二月六日の午後でありました。白木の冠木門に標札を認め、扇骨木の植込ある御玄關に伺ひますと、白髮の莞爾な取次人出で『奥様は先刻軍人の見送りに品川停車塲まで御出掛けになりましたが、最早程なく御歸りと存じますから、お待ち下すつては如何』との言葉ゆゑ案内さるゝまゝ遠慮もなく廊下傳ひに洋風應接室へ通されました。取次の翁は濃紅色天鵞絨の椅子をストーブの前に据ゑ『さア此處へ御掛け下さい』と云ひつゝ石炭を頻りに投げ入れ『へヱ却々御忙しいので……それに善く行き屆く方で召使にも目を掛けます、先達て泊つて居つた軍人方が今日立ちましたので、それを見送りに……それは〳〵何事にでも善く氣のつく人で御坐います』と話し、軈て時事新報と日々新聞を持ち來り、小間使は茶を運び、待たせる詫を述べて立去りました。

▲應接室の飾

日當り好き窓に絞れる窓掛は白茶地に栗色唐草の模樣美しく、室隅の金屛風は法眼榮川の筆に成れる墨繪の若松、極めて瀟洒の花臺に載れる白花瓶には天然を矯めぬ白梅數枝、暗香を室に滿たせる上に、ストーブ盛に燃えて坐ろに春の心地が致しました。ストーブの棚には結婚當時の令孃御夫婦（安川氏夫婦）の寫眞を飾り、ピアノを据えた壁上に滿面笑の溢るゝ令孫の寫眞を掲げてあり、其他愛國婦人會に於ける夫人の寫眞、令息方の寫眞など此處彼處に飾られてありました。記者は卓上の繪葉書帖を拜見しましたが、令息令孃の御友人より送られた趣味ある手簡が數々挿まれた中には和歌のみを記せるもあつて興味深き御趣向と感じ入つて居ましたところ、轍の音御玄關に聞え、間もなくド

アを開いて、

▲どうも御待せ申し上げましたと言はれながら、入り來られし夫人は、御見送りの儘の御服裝で一樂の二枚揃に栗色縮緬のフキ、黒縮緬に九曜の星の紋ある御羽織、黒繻珍の帶に利久色の襦袢襟など、さして目立たぬ上品な御拵へ、取繕はぬ束髮も水際立つて艶かな御血色は御年より三つ四つお若う見受けられ、ゆつたりとして遠山の眉、愛嬌溢るゝ芙蓉の眦、御話振の快活で眞率で情の籠れるは客をして何時までも去り難い感を起させるのであります。夫人は先づ今日見送りに行かれし御談より宿泊軍人の談に移られ、

▲宿泊軍人

見送りに參りますと、何ですか壯なやうな悲しいやうな感じが致して、何時も胸が迫ります。イエ妻子のない方でも、生きて再び此土へ歸らぬ心を想ひ遣りますとネ。ハイ暫く御宿を致した時には、此應接間とあちらの座敷二間とを御貸し申しましたが、感心な事には五十日も泊られた間、障子に孔一つ明けませんでした。私は下女に『汝達や私が唯だ掃除をするだけでも、孔ぐらゐ明けるのに、荒くれた多勢の人達が、よくマア注意したものだ』と申したのです。此頃軍人の宿をするのに、大層な御馳走を成さる處もあるさうで、結搆な事のやうですが、餘り虚飾的に流れては、却てこれから出征して粗食する方の身體に害があるかと存じて私の處では決して御馳走は致しませんでした。併し私共が御飯の度々如何しても心に濟まぬので、切て溫かい物でも上げたいと存じて、私の手料理のお汁でも上げますと、隊長が平に斷つて『我々斯うして雨露を凌げるを辱いと思つて居るのに、御饗應にまで預つては本分に戻る次第、屍を戰場に棄てる身に美食は何の必要がありませう、何卒こればかりは御無用に願たい』と嚴しく言はれたのですが、宅の子供は皆軍人好きで唯今慶應義塾へ通學して居る悴などは、御飯の時に『この副食は軍人に上げたのですか』と問ひまして、イ、エと申すと『それでは僕も食べません、何でも軍人に

上げない内は決して食べません』と申して御漬物ばかりで食べますから、私も板挾みになつて實に困り切りました、後で聞けば隊長は禪學に熱心の人ださうでしたが、出立の際紀念の爲に是非一緒にと望まれて、家内中の者と庭で寫眞を撮りました。

▲戰地へ送物

清岡夫人や平尾熊藏氏の御發議で私共の子供達も懷爐を送りましたが、大層喜んだ禮手紙が參りました。私も行軍將棊を十五組送りましたが、休戰中の徒然を慰めるのに何よりの品だと、皆さんが大喜びで大層流行したさうで、私も存外の幸と喜んで居ります。何某すか、此將棋の爲めに思ひ掛けない手柄をした斥候があつたとか申すとですよ。

此時夫人は手筐を取り寄せられ、左の手紙を示されました。

舊臘御差出之御芳墨恭く拜見時下御揃倍々御健勝後援業務に御盡瘁之段奉二大賀一候不二一方一御配慮を以て好物御發送被レ下候趣誠に謝するに辭無レ之明日を知らぬ我身乍らも樂み待るゝは此惠品の早く到達して部下と其厚情を分つの一事に御座候又例之御咏いづれも感服々々特に行軍將棊の一首確に秀逸と評點致候其理由は該戲は冬營來消閑之一好侶として隨分猛將勇士の間に持はやされ其技倆を進め奥義を極め候もの不レ少就レ中部下一下士の如き一日敵情偵察として斥候に出候處巧に此棋の奥手を應用し能く其任務を全し一時隊中の譽れ者として面目を施せる實際之事蹟抔思合せ一同大に快興相催候次第是我等戰士の推して秀逸となす處戰理一乎戰法一乎よく咏まれたり　○○○令息に對する御一章是亦抱腹絶倒旅順之頑城彌々開城君國之大慶不レ過レ之御同慶至極奉存候今度こそは當方面一方と相成候事に御座候得ば戰機一旦熟し候はんか目覺敷○○○○○○之大活劇演出せらるべく將卒一般ココ懸命之場合と相覺申候

三十八年從軍日記一月一日

旅順開城の通告云々の後に

待ちつゝもこの慶報を今こゝに記すべしとは思はざり鳧

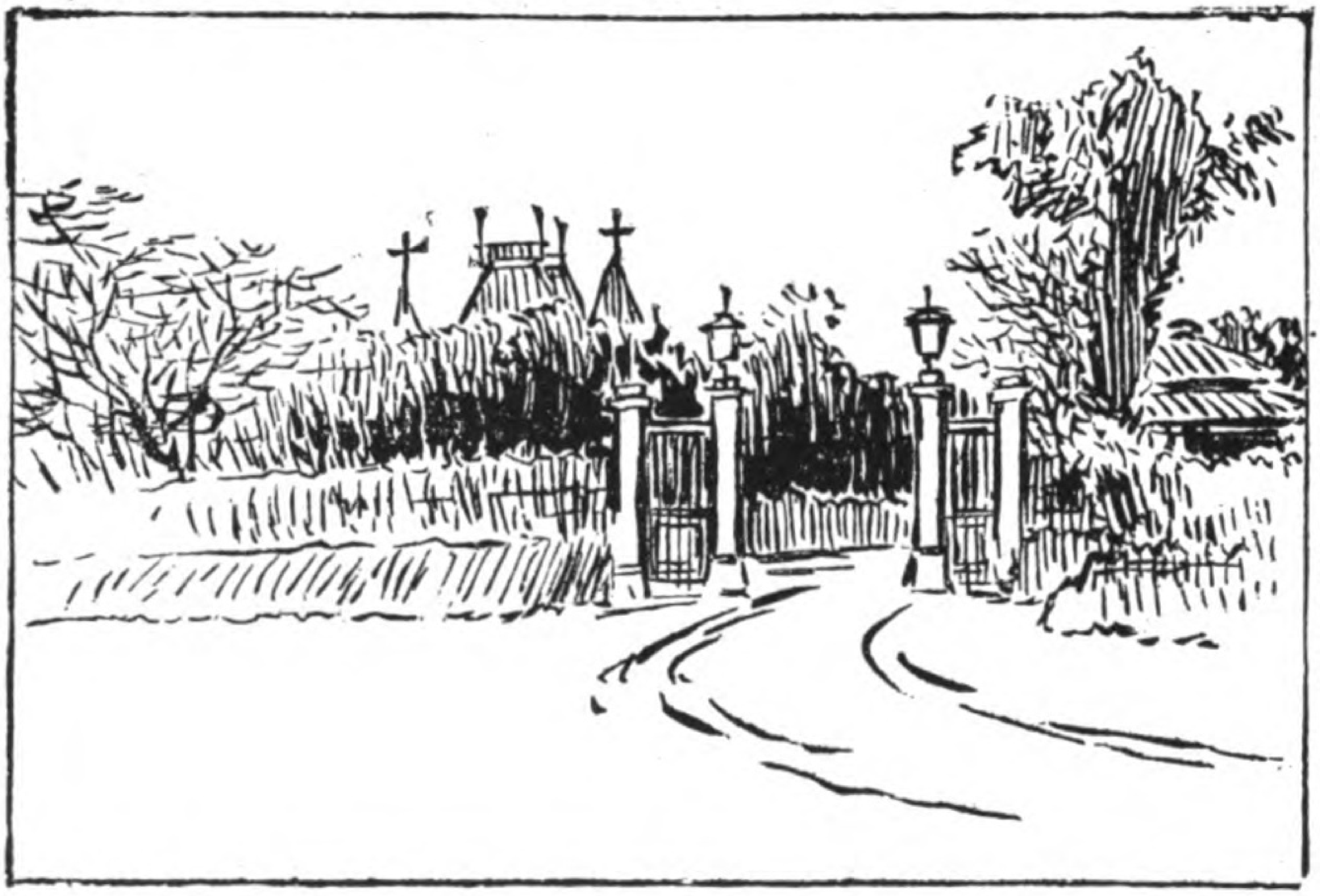
歌になります乎

元旦述懐

思ひきや生きながらへてこの春を戰の庭に迎ふべしとは

是亦如何に候や

旅順陥落の公報は一日夜十二時稍々前に相達し一同之狂喜譬ふるに物なく萬歳の歡聲暗を破りて一度は各兵舍に起り其勢天地を震動するばかり殊に愉快なりしは土人等が翌二日早朝其國風の最敬禮を以て祝賀に罷出候者有之候事に御座候壯絶乎快絶乎これだから戰は止められぬ者と俣野お婆樣思召被下度候　右御禮旁々



大山元帥邸（千駄ヶ谷）

如斯に御座候　倘時節柄折角御いとひ專要奉存候敬具

一月十五日

〇〇〇〇

俣野お婆樣

阿部優子樣

御令息陸軍御出身嘸御安堵なされ候半御よろこび申上候

俣野お婆樣

手筐の中に小菊花と螢を紙片に貼り寫眞挾に挿めるがあり是れは戰地の一將校より送れる物との事で其裏に夫人の咏に係る一首を美しき筆にて記されて御座いました。

征露紀念として磯部少尉より贈られたる菊の一枝

さゝやかながら色もかはらで匂へるを嬉しくも悲しくもながめ侍りて　　優子

ほまれあるかばねふす野の菊の花
千代のかたみと見てやしのはむ

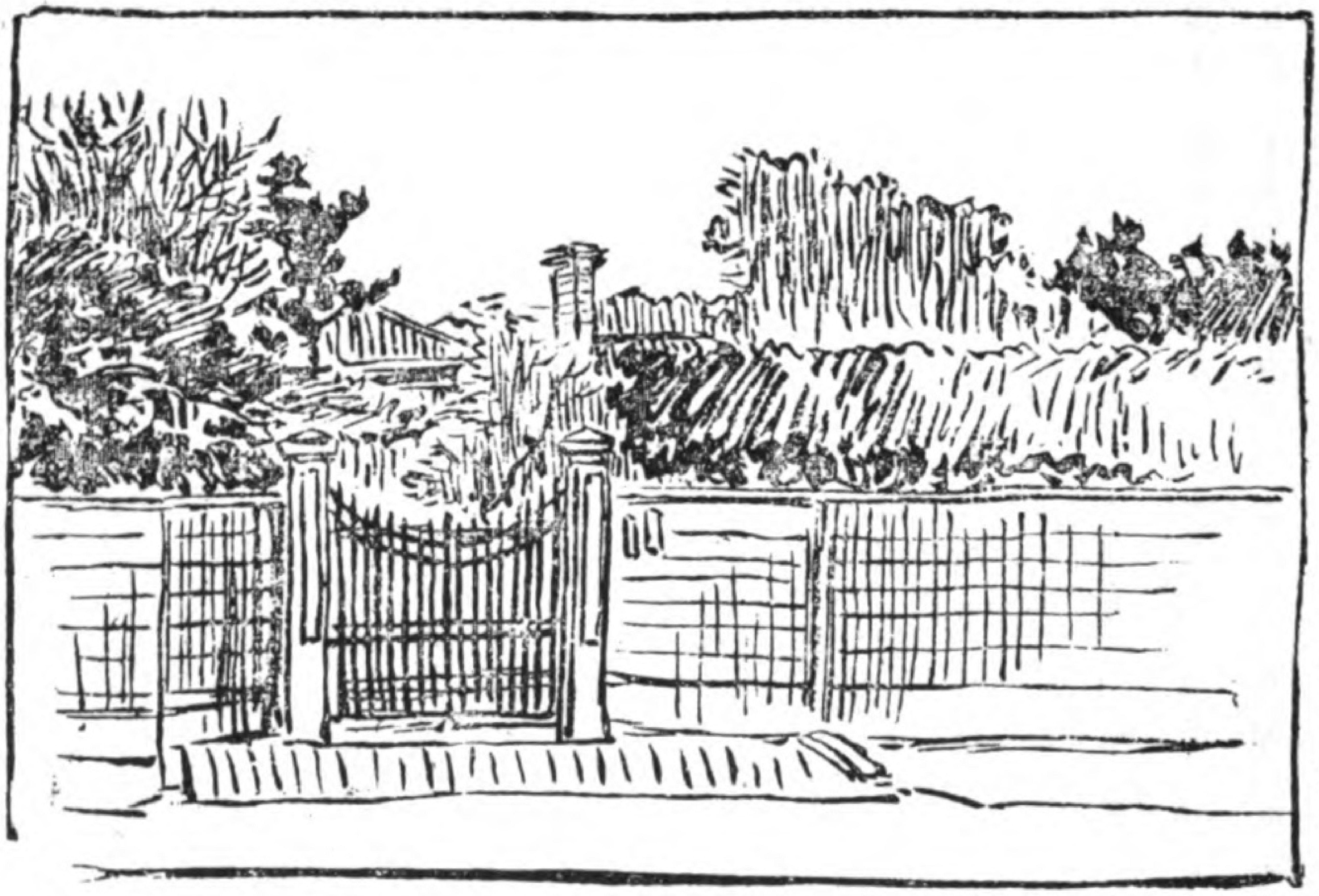
▲家庭に於ける和歌の贈答

イヽエ私のは出たらめで歌にはなつて居りません。何で御座いますか、伜や娘も皆下手の横好きで、家の内でくだらぬ贈答を致して樂んで居ります、和歌と申せば税所さんの御歌を貼交に致した屏風があちらに御座いますから、御あとで御覧下さいまし。ハイ税所さんとは、昔から御懇意に願つて居りましたが、彼のくらゐ感心な德の高い御方は珍らしいと存じますネ。御良人御不幸の後、私の上げた腰折に對し『忘れにし昔を更に思ふかな心あひたる君にとはれて』と返されました。如何な人から和歌を頼まれても厭な顔をなすつた事はありませんでした。それで良人も汝達の和歌はチヨツトも見たくない、税所さんの和歌なら何を見ても面白い、畢竟三十一文字の中に普通の人と異つた點が一つ宛あると申して居ます。私も産を致した時など、此和歌の屏風を見て居ますと、大層心を慰めるので、緣付けた娘の方へも一枚遣はしました。

▲産　博士

私の初産は十九歳の時で、それから十一人も持ちましたが、産後の經過も極よろしく、一週間目にはチャンと坐つて、皆さんに赤の御飯を差上げる位で、一度も障りのあつた事は御坐いません。それで産婆が『貴女は御産博士だ』と申して居ります。乳は皆私のと牛乳と兩方なので、乳母は置きません。如何も乳母の性質によつて子供の性質が變りますから……。唯だ當年六歳になる男子二人は雙胎兒でしたから、少しの間乳母を雇ひました。ハイ兩兒とも至つて健かで、鎌倉の祖母（泰藏氏養母）の方に遣して置きますが、祖母は之を手離して仕舞ふと樂みが無いから、小學校だけは鎌倉で間に合せたいと申して居ります。私も東京の學校よりは却て良いと存じて、左樣致す積りで御坐います如何も兄弟中の善いこと不思議のやうで御坐いますよ

▲令嬢の結婚長女は一昨年十九歳で筑前の安川（敬一郎氏長男）へ縁付ました此縁談に就いて私は種々と考へ、未だ華族女學校も卒業致さず早過ると存じましたが、宅では私と意見が異つて、どうせ縁付けるなら人様が達てと望んで下さる際定めた方が宜いと申すので遣はせました。最早小兒も出來、至つて幸福に生活して居りますが、次の娘は尚少し永く學校を踐ませたい考で御坐います是れから追々と世間が進んで參りますから、女子も相應の教育が必要なのは勿論の事、又一方から考へれば何時何樣な不幸に遭遇するかも知れず、其時本人



奥大將邸（小石川水道町）

の覺悟が違ふだらうと存じまして……。イヱ私は財產だの何だの一つも當にならぬ物と思ふので、何卒出來るだけ教育を受けさせたいと望んで居ります。而して結婚も難かしいもので如何して定めたら宜いのか判りませんネ。ハイ長女は全然知らぬ同志でもあり、私所の子供は皆オクですから、初めて申し聞かせた時に、娘は兄に向つて『私は未だ結婚の事は解りませんから兄樣よいやうになすつて下さい』と申した位で、何だか可哀相になりました。それから安川は暫くの間時々宅へ參つて娘と少し交際致しましたが、娘も其うちに『彼の方はそんなにハイ

カラぢやアありませんネ」と申したことがありました。其様な鹽梅で嫁したのですが、幸に極温和な夫で夫婦中も睦じく、誠に仕合で御坐います。

▲御主人の嗜好

良人の嗜好で御坐いますか、以前は詩を作るのが好きで御坐いました。近頃は將棋に凝りまして、小野五平が月に二度ほど參ります。イエ私など此頃は相手にならぬと申して居るのです。晩食後十時まで將棋を致して、それから御酒を頂くのでが、下女共は十時に臥せられますから、私は御酒の世話を致したり手紙を認めたりなど致し、臥りますのは大抵十一時過ぎになります。良人は圓朝の話が好きで彼のかゝる寄席へは能く參りましたが、今は寄席へ參るとは御坐いません。

▲健康が何より幸福

ハイ朝は五時に目が覺めまして、乳呑子の爲めに二度は必ず起きますから、眠る時間は少う御坐いますが、少しも身體に障つたとはありません。イエ滋養品も定めては頂きませんが、下女が少い上に多勢の子供の世話で一日よく運動致すから丈夫なので御坐いませう。私はよく皆様と申しますが、一家の奥さんの御弱いのほど御氣の毒なことはありません、奥さんが弱いと其代りの者が必要になり、爾うすると終には紛紜が起つて、御主人の信用にも關すると云ふ具合に爲り、斯様な不幸はないだらうと存じます。

▲下　女

御飯焚と仲働が二人と子供の守が二人、都合五人で御坐います、小さい子供が多勢の割に下女が少う御坐いますから、役割を定めると云ふ次第にも參りませんので、互に何でも致すとにしてあります。併し夜分だけは、自分の仕事を許して置きますので、裁縫の好きな仲働は子供の物位はさせて呉れろと申します。一人の仲働は軍人の妻で、夫は唯今出征して居り、誠に田舎出の武骨ではありますが、夫思ひの正直者で給料も大分私に預けて居ます。唯だ讀み書が出來ませんから、夜分は此方を少しづゝ敎えて居るので御坐います。

▲清岡子爵母堂との交情

ヘエー清岡さんの御話を御書きになりましたか、拜見致したう御坐います。彼の方は武士氣質の教育を受けられた上に趣味深く和歌の才は却々御優れで、御手蹟も見事なもの、先達て五明さんの戰死の當時は、幾度も和歌を御送り下すつて、私も腰折を御返し致しましたが、御心中を御察し申すと實に御氣の毒で……。母堂は私に向つて、阿部さん私は泣いても宜でせうか』と仰しやるから、私は『エー〳〵御泣き遊ばせ、親として子の死を歎かぬのは慈愛のない者です、無理に涙を隱して男優りと言はれたとて何になりませう、情は何處までも正直に表すのが宜いと存じます』と申上げたところ、『阿部さん如何も難有う御坐います』つて大層喜んで御泣きなさいました。私は總て躰裁の爲めに情を無理に包み藏すヿを好きません。

▲記者の罪

私は貴女方の御話を伺つて、種々自分の足らぬ點を顧みるのが大好きですから、記者の肩書を外して御出で下されば何時でも悦んで御咄し致しますけれど、改まつて何か話せと仰しやると誠に困りまして……。私共の話を御書きになつたとて、皆樣の御爲になるとも御座いません。棚橋さんとか三輪田さんとかは最早御思想が定まつて動きやうはありませんが、私などは未だ纏付かぬ子供もあり、實際自分の考へ通り行かぬ事もありませうから、今日のところでは考へを立派に申し上げる次第にも參りませぬので御座います。イエ私共の家庭など下らぬ事ばかりで、御耻かしいので御座いますよ。或方が近頃は何處へ行つても貞女賢婦が多い事だつて、無暗に新聞や雜誌に書き立てるのを御笑ひでしたが、本當に妻として貞女でなければ、それこそ大變で、貞女は當然の事で御座いますネ。餘り尋常一樣の事を褒めて書れると、如何したら褒られるかと自然虚飾の風が起つて困ります。之は畢竟貴女方の罪と申さねばなりません、少し御注意遊ばせホヽヽ、あべこべに御諭し申し上げて失禮で御座いました。本當に私は有りの儘の御話が好きですから、何卒肩書を御捨てになつて、度々入らしつて下さいまし……。

女學世界定期增刊

閨秀文壇

四月十五日發行

懸賞文募集

小說　短篇（十行二十字詰二十枚限）

和歌　（落花、閨、風）一人一首端書に限る

新體詩　題隨意　三十句限

俳句　春季雜題　投稿は端書に限る

狂歌　題隨意　投稿は端書に限る

川柳　題隨意　投稿は端書に限る

美文　文體隨意

消息文　文體隨意

短文　文體隨意　端書に限る

謎々　「裸體畫」とかけて　解答は端書に限る

〆切三月二十日

賞品

小說
- 一等　金參拾圓
- 二等　金貳拾圓
- 三等　金拾圓

和歌　俳句　狂歌　川柳　謎々　短文
- 天　參圓
- 地　貳圓
- 人　壹圓

（圖書切符）

以下秀逸各種に付十人づゝ有賞

美文　韻文　消息文
- 天　五圓
- 地　貳圓
- 人　壹圓

（圖書切符）

以下秀逸各文に付十人づゝ有賞

投稿は封書端書共文種を記し「閨秀文壇」と朱書にすること

露國の皇室（口繪參照）

温恭篤實の容貌、一見すれば英國の現皇太子ウエールス公に似たるは露國の皇帝ニコラス二世陛下なり。唇に堅固の意志を示し、眉目にやゝ憂愁の色ある尊き女性は露國の皇后アレキサンドラ、フエオドロウナ陛下なり。

現皇統をロマノフ、ホルスタイン系といふ。そも同國の高祖は、リユーリツク（西暦紀元八百六十二年即位）にして、其の子孫代々帝位にありき。これをリユーリツク系と稱す。然るに千五百九十八年フエオドール一世の暗殺せらるゝや、此の系統絶えてミハイロ、ロマノフ帝位に推選せられき。これをロマノフ系の祖とす。

彼得大帝崩じて、皇后カザリン一世位に即き（千七百二十五年）カザリン一世の崩ずるや、彼得大帝の孫なる彼得二世ツアー位に上りぬ。此の帝を以つてロマノフ男系の最後とす。彼得二世崩じて、彼得大帝の姪アン即位し、次いで其の子イバン六世を經て彼得大帝の女エリサベスに至りぬ。此の女帝を以つてロマノフ女系の最後とす。

エリザベス女帝崩ずるや、皇嗣なかりしかば、彼得大帝の女にして、獨逸のホルスタイン公に嫁ぎしアンの子を迎へて帝と仰ぎぬ。彼得三世これにして、今のロマノフ、ホルスタイン系の祖なり。彼得三世暗殺せられて、皇后位を襲げり。これ史上異彩を放てる女帝カザリン二世なり。カザリンの子保羅一世、その子歷山一世、その弟ニコラス一世、その子歷山二世その子歷山三世を經て現帝に至る。

現皇室と他國との血統上の關係は、複雜なるが故に左に表示せむ。但し（＋）印は結婚を示す。

露帝故歷山三世
＋
マリア皇太后（現丁抹國クリスチアン九世の女）
　→ 現露帝

英國皇后（現丁抹國クリスチアン九世の女）
＋
英國皇帝（故ヴイクトリアの子）
　→ 英皇太子

第二皇女アリース（故ヴイクトリアの女）
＋
獨逸ヘツセ大公故ルードヰヒ四世
　→ 第四王女アリツクス（現露皇后）

現露帝 ― 第四王女アリツクス（現露皇后）
　→ オルガ皇女（一八九五年生）
　→ タチアナ皇女（一八九七年生）
　→ マリー皇女（一八九九年生）
　→ アナスタシア（一九〇一年生）
　→ アレキシス皇子（一九〇四年生）

現皇帝ニコラス二世陛下は、千八百六十八年五月十八日を以つて生れき。母后は丁抹王クリスチアン第九

世の第四皇女マリー、ダグマール（今はマリア、フエオドロウナと稱す）なり。されば現英國皇后アレキサンドラは、正しく露帝の伯母に當らせらる。先帝歷山三世に嗣いでツアー位に上りしは、千八百九十四年十一月一日にして、同月二十六日、獨逸ヘッセ大公故ルードキヒ四世の王女アリックスを迎へて皇后とす。今の露皇后アレキサンドラ、フエオドロウナ陛下之なり皇后は英國故女皇ヴイクトリアの孫にして、即ち英國現皇エドワード七世の姪なり。斯くの如く血脈上の關係を尋ね來れば、英露の兩皇室ほど、親密なるは稀ならむ。本誌口繪に揭げたる皇族の集合、いかに和氣靄々たるかを看よ。圖中に中央白衣の貴婦人の後に立るは露國皇太后、隣りで高帽子を戴ける貴人は丁抹王、王の腕を取たるは英國皇后にして、其の後方に立てるは希臘王（丁抹の王子）なり。白衣婦人の右は露皇后、之に隣れるは露國皇帝、之に隣りて階段の右端に立る肥大の貴人は、之ぞ英國皇帝なり。列強の皇室より父君、祖父の君として尊敬せらるゝ丁抹王こそ、世にも幸多き人なれ。（寫眞は丁抹宮殿にて撮影せる者なり）

世に露國皇室ほど不明なるは莫し。此の專制國の皇帝は如何なる人物なりや。その日常の生活はいかなる皇

か。これ世界の等しく知らむと欲する所なれど、皇室を蔽ふ雲深うして、得て知るべからず。露の下民は、皇帝と神とは親族なりと教へられ、皇帝は世上の人とは姿までも異れりと信ず。

世上に傳へられたる談片を蒐集して、皇室内を窺ふに、ニコラス陛下の幼時は、莫斯科のアニチンコフ宮殿にて送られき。善美を盡したる此の室殿は、今は皇太后陛下の住はせらるゝ處。皇帝幼時の折は、母后常に傍を去らで撫育せられき。

幼時のニコラス陛下は虛弱なりき。今日と雖も、その體格上にては、ロマノフ家の偉風を認め難く、むしろ丁抹王國の體質を受けたり。彼得大帝、ニコラス一世、歷山三世、共に長軀の巨人なりしが、現皇帝は普通の丈にて、皇后陛下よりも低しと傳へらる。之に反して皇弟ミハイル親王殿下は、ロマノフ系を代表すと。

母后の用意周到なる養育法は、皇帝をして却つて神經質たらしめき。殊に歷山二世の暗殺せられたる悲報は、ます〱母后の監督を嚴ならしめ、今や荒き風のみならで、恐るべき虛無黨といふ敵ありとて、皇子ニコラスの行啓は、殆ど全く禁せられぬ。虛無黨の暴行を懼れて、先帝と現皇帝との行幸啓に、絶えず心を

勞せし皇太后こそ憐なれ。

皇帝は幼時より希臘、拉典の古文學を修め、傍ら近世語と、科學とを學び、二十歳前後には、英、佛、獨の三國語は、自由に談ずるまで進歩せり。此の頃體力衰へて、病勝なりければ、先帝は慮らく、これ餘りに嚴格なる監視の果ならんと。これよりニコラス陛下はやゝ自由を得て、交際社會にも出で、快活なる生活を送り、やがて體質增大の目的もて、東洋漫遊の途に上りぬ。然るに日本に於ける遭難は、その感激し易き神經に、一大打擊を加へたり。

皇帝は常識に富み、同情深し。その侍臣に對する態度の如き、懇切を極めて毫も專制國の君主たる俤なし。法令は專制政治の特色を現はし、そゞろに皇帝の殘忍酷薄の性を想はしむと雖も、これ蓋し皮相の觀のみ。若しも皇帝の意志そのものが、法令となりて表はれなば、これ慈悲博愛の美華ならむ。

先帝は、皇太子の妃としては、露西亞的敎育を受けたる美姫を選ばむと欲し、殊に其の親交國なるモンチネグロ公國より、然るべき姫をもがなと思へり。然るにニコラス陛下の胸中には、日夜消ざる美姫の姿ありき。之ヘッセ大公國の公女アリックスなり。公女は千八百七十二年五月二十五日を以て生れき。母君は恒に誇りて曰はく『此の愛らしく、面白き兒は、たえず深き靨を現して笑ふ』と。然るに其六歳の折、ヂフテリアに犯され、纔に死を免るゝや、母君は長き眠に就きぬ。

故英國女皇は、孤兒となれるアリックス公女を、いとも不愍の者と思ひて、愛撫極めて厚かりき。今日露皇后の習慣に、英國風あるは、全くヴイクトリア女皇の薫陶に基くが如し。公女の姉君は、露の太公セルヂに嫁しぬ。公女は姉君を訪はむとて、露國に遊べり。此の時、未來の露帝と露皇后とは、一堂の内に相見て互の胸中に深き印象を遺しぬ。

ニコラス陛下は、ヘッセ公女ならではと誓ひぬ。然れども先帝は反對せり。曰はく、公女は虛弱の質なりまた新敎徒なり、此の緣いかでか圓滿に結ばるべきと。而して英國女皇も亦反對せり。虛弱の者二人結婚するは子孫の不利なり、また危險多き露國に、いかで最愛の孫を與へ得べきかとは、ヴイクトリア女皇の意なりき。ニコラス陛下は四方より反對を受け、憤懣やらむ方なく、われとても健全なる體質を持ち得ざるの理あらむやとて、斷然意を決して、東洋漫遊の途に上りぬ漫遊の効空しからず、皇太子は逞ましき姿して歸國

せり。ニコラス陛下は先づ近親を說きて、吾が後援たらしめ、それより英女皇と先帝とを說きて、漸く快諾を得たり。されど茲に一の問題は殘りぬ。公女にして露皇后たらむには、先づ改宗して希臘敎を奉せざるべからざりき。これ公女が最も苦悶せし問題にて、獨逸皇帝の說諭も、その効なく、爲に、かくまで進行せし結婚談も、未だ公にせられざりき。時しも先帝病に犯され、死の免れ難きを悟るや、息氣ある中に、我が子の妃を見むと願ひ、其の趣をヘッセ公國に通じぬ。報に接したる公女は、遂に意を決して、露宮に急行して歷山三世が最後の病床に、娘としての愛を捧げきかくて喪中にも拘らず、千八百九十四年十一月廿六日冬の宮殿に莊麗なる儀典擧げられたり。

皇后は快活なる性なり。騎馬、漕遊、游泳、テニス等は、最も好まるゝ遊戲にて、また最も得意の藝術は戲畫なり。其諷刺畫は、滑稽の妙を極め、列國公使をはじめ、大臣以下の官吏にして、その畫題たらざる者殆ど稀なり。殊に皇帝其人を畫題としたる物あり。其一は、有髯の赤兒(皇帝)あり、其傍には數人の親族ありて、各手に種々の營養物を持ち、これを赤兒に與へむとする畫なり。げに皇后の畫にして、若も臣民の手にならば、必ず西比利亞追放の刑に遇ふ者ありとか。

皇女のみの降誕は、ツアーと皇后とが、いたく心を惱めたる所なり。世に傳ふらく、皇儲の誕生なきは、皇后が新敎より改宗せし罪の刑罰なりと。然るに昨年八月十五日、旅順港外に於ける露艦大敗北の報傳ると共に、皇儲降誕の報も傳へられき。現存の皇弟妹には、クセニア大公女(アレキサンドル、ミハイロキッチ大公妃)ミハイル大公、オルガ大公女(オルデンベルヒ侯の妃)の三殿下あり。

皇帝、皇后共に、社會學の研究を好み、また實際に社會の秕弊を艾除せむとする心願ありと聞く。軍隊は滿洲の野に敗れ、帝都には革命黨の怒號するあり。これ兩陛下の罪過に非ずして、頑迷なる官吏の招きし所なり。今要する所は、皇帝の意志のみ。

露國の宮殿中、尤も有名なるを、冬の宮殿及びクレムリン宮殿の二とす。『冬の宮殿』は聖彼得堡のネバ河畔に在りて、千七百五十四年より千七百六十九年、即ちアン及びカザリン兩女帝の世に建築せらる。クレムリン宮殿はモスコウに在り。千八百十二年兵燹のために燒失し、同三十八年再建し、同四十九年落成す。共に壯嚴美麗を極めたる宮殿なり。(長谷川天溪)



家事經濟（下）

棚橋絢子

△諸道具の飾付及配置　座敷及び客間は成べく雜品を置かぬ樣にすべし、分けて床の間は掛物置物或は花瓶位、違棚には料紙硯箱杯の物を除き他に雜物を置かぬ樣にしたし、茶の心得ある人は格別、其他には別段極りなしとするも、床間は床間相應の物、違棚は違棚、角棚は角棚と夫相應の品を配置せざれば折角の道具も見所なくなるものなり、道具嗜の家は勿論、道具を好まざる家にても床間に餘り澤山雜品を載せ置くは實に殺風景なり、一寸した掛物にても氣の利たるは奧床しく、餘り不風流は淺墓にて見苦しければ能々注意すべきなり、且又飾物にしろ什器にしろ、物を置付る時には眞直に位置のくるはぬ樣にすべし、特に客間の道具などはから拭を掛け、塵を拂ひ置くをよしとす、床間近傍に塵の積り居るは家内の者の不取締も見えてみつともなき極みなれば是亦能く能く氣を付くべし。

△納場所　納戸居間等に物を置くにも成丈け便利を考へて部分をなし、日用の品は手近に、大事の品にして非常の折持出すべき物は用心堅固にして且つ取出易き所に置くべし、其他簞笥の斗抽手簞笥等も夫々部分して入れ置くべし、譬へば紋付は紋付、縞物は縞物、帶は帶、襦袢は襦袢、紐類は紐類と部分をなし、數ある人は殊に仕舞場所を定めて、何時も其處を替へざる樣

にすること肝要なり、又押入等へ物を入るゝにも日々使はぬ物は奥の方、不斷入用の物は手近に置くべし、尤手近に置くとしても餘り入口に置くは惡し、奥より順に片付、可成手前の方を明け置くべし、急ぐ時とか物の重る時甚だ便利なり、斯くすれば入るゝ時は少し面倒なる樣なれど出す時、彼是と探す手間に較ぶれば勝る事萬々なり、急に外出の時などには平生の心懸次第にて靜に不都合なく取揃へ得れど、心懸惡しければ彼是と手間取り時間をつぶして爲に間に合ざる樣の事も出來し自分も心配し、人にも迷惑を與ふるとあるものなれば片付る節に必ず念を入れ出す時の覺悟を兼てよりなし置く可し。

又座敷道具と勝手道具とは其區別を正しくし、置場所を混せぬ樣にすべし、總て良き品は損じ易く、雜具は丈夫にして損せず、假令損ずるも左のみ惜むに足らざれば、能く其間に區別を立て置くべし、此くすれば萬一不調法をなしたりとするも其損害少なく、多くは不調法の起るとなきが故に小言をいふ世話も入らず、眞に都合よきとなるに兎角に之を混ずるが爲め、下女抔の手にかゝりて良き品の損ずる事あり、隨つて小言も申さねばならぬ事になるなり、注意すべし。

△修繕と整頓　物品の損じたる時、其損じ場所の繕ひは捨置く可らず、捨置けば長く不便を感じ、且損所も甚しくなりて終には大破となり、なほす手間も餘計に掛り、費も増し、不經濟の極なるのみならず、長く捨て置く内には其かげ等も紛失し、繕ひも出來ぬ樣になりて全體を廢物とせざるを得ざるに至り、所謂天物を暴殄するとになるなり、必らず氣を付くべし又た屋根漏りより、湯殿勝手流しの邊、物置抔の事に迄、主婦たる者自ら氣を付け、若し損所あらば早速職人に命じて修復すべし、怠れば怠る丈損所大きくなり、終には大袈裟に普請をせねばならぬとゝなりなん、特に物置は炭の穢れなく、薪の下積の朽ちることなき樣折々見廻り、片付、焚付抔は平生用意して濕らぬ樣手當し置く可し、左なくば急用の節容易に燃へ付かず、爲めに大困難を來す事あるべし、湯殿流し下水抔は能々掃

除せざれば水垢にて早く朽ち、且夏向は衞生にも害を及ぼすとあるべければ、能く能く注意して見分に怠るべからず。

之を要するに一家の主婦としては自ら諸道具類品物などを整頓し置くの必用あるのみならず、子供召使などにも能く注意して物の置き場所を一定せしめ、猥りに我が始末し置きたる模樣を變化せしめざる樣にすべし、物を仕舞ふにも先づ入物より整頓し、手當り方題に積み重ね、下よりも上に大なる物を置き、或は筋違ひになり、或は中より物の食み出し居る等も構はざる



等、見苦しき樣を現はし、出し入れの節崩れ落ちて爲に毀損する樣の事出來し、或は箪笥の抽斗抔も物の大小を混合し、中秤の物を引拔きて跡をも構はぬ等の不始末は自ら固く之を愼み、子供召使等にも固く之を禁せざるべからず。

△交際　交際は親密を旨とし、可成事を手輕になし、祝義無祝義の外は何時迄も變らざる樣にすべし、往來の節も互に到來品又は珍らしき品にても有合せあれば多少に關らず持參して慇懃の情意を表するも宜しけれど、別に整へなどせんには手數も懸り費も立ち、其れ

が爲につい三度尋ぬべきも二度となり、詰り追々數くなるが故に、是は西洋流の簡易に致し度ものなり、又時分來らば手輕に打とけて食事を出すが宜し、叮嚀にするも宜しけれど第一召使の者の迷惑多くして客たる者も氣が置け食事時を避けざるべからざる心配あり、近所の者はよけれど遠來の客にありては隨分困難の場合もありなん、西洋は招きし時ならでは出さゞる由なれど、日本の慣習としては時來らば心置なく手輕に振舞ふ樣致す方然るべし、尤客により見計を肝要とす、男子ならば數少くとも十分に盛付け、女子ならば小盛にして手の付らるゝ樣にすべし、餘り立派に口取とか燒物とか刺身とか澤山に付れば到底喰べ盡す能はざるを以て中には好める物も手を付け兼、折角の料理の味をも試みずして去るに至らん、然すれば主人の志も無になる譯なれば能々客の種類に注意せざるべからず、又來客に酒を出すも宜しき事なれど婦人として之が相手をなし、頰を赤らめなどするは頗る見苦しゝ、且茶菓子にては不調法なきも酒は兎角不調法を起す狂水なれば其邊能く注意せざるべからず。

△子女の敎育　又子女の敎育に就きては胎敎より始むべきとにて先づ妊娠中の身の愼みを第一とす、惡き食物を食せず、自分の嗜き好める物とても身體に害ありと認むる物を猥りに食ふべからず、又惡しき事、道理に違へる事、人の惡口、猥褻なる言語等は十分に注意して聞かざる樣にし、孝子貞女忠臣義士の話其他古人の善言嘉行は勉めて之を聞き、平生其道理の有る所に追隨し、其心持を裕かならしむる時は、生るゝ子自然に親の心に感じ、才智も人に勝れ善人となるべし。凡そ天より享くる人の性には一點の惡しき事は無けれど、其宿れる母の心得に由りて變化するものなれば母親たる者は心持を正しくし、苟も曲れる心を發すべからず、妊娠中の愼みは雙方幸福の種なれば尤も勤むべき事なりと知るべし。斯くて子女を產みたる後、之を養育するには第一に虛言を聞かしめざる樣注意せざるべからず、何程怜悧なりとも見ず聞かざる事は知らぬものなるが故に可成く下女下男の手に渡さず、親の手

にて養育する様にすべし、又た遊び朋友をも撰み、虚言は勿論悪き事をば一切知らしめざる様にすべし、斯くすれば習自から性となりて善良の結果を得べし、之に反し一時の勢を厭ふより下女下男などに渡して悪しき事を見聞かしめ、泣ば虚言いふて之をすかし、むづかれば之をなだめんとて衛生に害ある食物抔を與ふるが如き往々見る所なるが、之が爲に治すべからざる病根を養ひ、後には取返の付かぬ事になりて、其子の不仕合は勿論親たる者も心配の絶間なく、又何程心配するも其甲斐なきに至らむ。



△下女の使方　下女を使ふには分業制度を用ゐ、夫々受持を定めて、其職分を怠らしめざる様に注意を加ふべし、故に折々之を觀査して其任に耐るや否や、又た完全に業務を執り居たるや否やを察し、彼此を見計ひ、過不及なき様に分擔せしむ可く、殊に子供の守には優しく〳〵して影日向の無き者を撰み、中働などには座敷廻りの道具の扱と客の取扱を叮寧になし、裁縫の出來得るものを撰び、下働には活潑にして力のある者を撰び、各其任に當らしむべし、其中守の擧動には注意の上にも注意を加へざる可らず、總じて子供は可成親の手にて育つる事肝要にて假令已の仕事を人に讓るも子女

の教育には自から當る可きなれども場合に由り然するを能はず子守に托するときには此一點に注意すべし

以上述べし所は女子の職分の大略に過ぎずと雖も一家の主婦たるもの常に心を茲に置きて萬事に氣を付け一家經濟より育兒交際に至る迄、何事も能く行屆きたらんには夫たる人の心配もなく干渉もなくして一家團欒の樂も之を得るに難らざるべく從ひて國家の富强にも少なからざる援助を與るを得べし、女子の家庭經濟に於る其責任効果や實に大且偉なりと謂ふべし。（完）

家庭科學

理化應用 家政廿四時

河西璞

▲家具の手入

食後の休息、跡方付けが濟んで傳手に勝手で暫らく零砕い時間の入用があるかも知れぬ。

●●●●●●●漆器の臭氣拔き　重箱辨當箱椀など、すべて漆器類の新しい物の臭氣の拔けないのに食物を盛られたら、大抵は必ず主婦の顏を見詰むるであらう。新しい漆器の臭氣を拔くには何の面倒もない、一二日米の中へ埋めて置く丈の手數で十分だ。米の粉糠は漆の臭氣を吸ひ取つてしまふ。夫から塗りの生の漆器はかぶれる虞がある。買つて來た漆器の塗りが生だなと思つたら、當分空氣の流通のよい水氣の多い暖い日蔭へ露して置く。すると生漆は此暖氣と水分の媒介で直ぐ空氣中の酸素ガスと抱き合つてかぶれる心配の無い乾漆になつてしまふ。因に漆器の產地と言へば、何れも濕氣の多い暖い風の吹く地方である。

●●●●●●●鐵器の鐵氣拔き　鐵瓶鍋釜など鐵器の鐵氣を拔くには中へ藷の切端、麥、藁、此一種又は數種を入れて煮、出して入れ替へて煮、二三度した上を灰で磨き、よく乾せば、見事に拔ける。同じ鐵でも錫滅金した鐵力鍋湯沸しは、使ふ前に湯を沸し、中へ炭酸曹達を入れ、暫く煮立てゝ棄て、其上を石鹼でよく洗へば臭氣が拔

ける。

●●●●●●●新調七りんの手入　土焼七りんを買ふたならば豫め土を練つて内部塗りをするが宜しい。僅かの手數で破れる心配が少い。

●●●●●桶類の漏止め　手桶、檜杓、水桶、盥、澤庵桶などの漏りは、乾き過ぎたものなら水に浸けて置くか、輪を懸け換えれば止るが、さもないものは、漏り穴の種類により、丸穴なら杉箸か何かを先尖りに削つて打込み切り取り、長穴なら錐で眞綿を詰め、用ひによつて差支ないならば、玻璃窓の玻璃を留めるパテ、又は蠟、蠟が堅いならば貝殼で夫を融解し、水油を半滴許り入れ、煮れば柔かになる、その蠟糊を摩り込み、澤庵桶ならば一



層簡便に粘土をなすり込む。

●●●●●鐵器の漏止め　一寸した漏りに鑄掛けも面倒といふ場合に、子供を藥屋へ遣つて、硇砂粉八匁硫黄華四五匁、鐵粉七八十匁、以上三品を此割合に混せて貰つて來る。此混せ物を酢で練り、先づ鍋釜鐵瓶などの漏穴をよく磨いて置いてそれへ埋め、火に懸けて熱すれば容易に素人鑄掛けが出來る、此練り物は桶の漏にも使へる。尤も使ひ殘りは、其まゝ置くと變るから、共口の瓶へ入れて置いて、入用丈づゝ小出しして遣ふが宜しい。傳手に言ふが、共口の瓶は栓をする時、あまり推し付ければ抜け惡くなるから、緩くして置くが宜

しい。と言つて、あまり緩くして隙から空氣が入れば共口の詮は無いから、一番よい法は、栓へ少し梳油を塗り付けて置くのです。コルクの栓はいくら堅くして置いても大抵は空氣が出入りします。之を氣密にするには周圍へ一面蠟を塗る。蠟を塗るには、蠟の削り屑を栓の上へ載せて置いて、燒いた火箸で扱ふが宜しい。

●●●●●共口栓の拔き方　玻璃の共口瓶の栓の澁くて拔けないのを拔く法は色々ある。瓶の頸を熱くすれば膨らんで太くなつて、緩んで拔ける。頸を熱くするには、ランプの火屋の上へかざして手早く廻すもよし、頸へ麻繩か何か一卷卷き付けて、兩端を持つて引いて、頸を摩るもよし。湯へ一寸浸けるもよし。此法で拔けぬならば、木槌で注意してコン／＼と打つ。多くは拔ける。大抵のは指頭で一端を壓せば緩んで拔けるもの、以上の方法を盡して拔けぬならば湯の中で煮て御覽なさい瓶の中の空氣が膨らんでスポンと栓を彈き出すでせう尤も最後の法は中の藥を棄てる覺悟でなければならぬ

●●●●●●玻璃壺などの漏止め　先づ膠を少し上等の酢に浸けて置き、軟かになつたのを不具茶瓶か何かで煮、生麩を少し入れて攪きませ、濃くなつたのを紙にのし、冷えない中に漏處に貼れば甘く止る。

●●●●●玻璃瓶切斷法　玻璃瓶の胼の入つたのを切ることが出來たら重寶だらうと思つたことはないか。何でも無いことです。色々するが、一番手輕なのは、火箸を燒いて、其端で胼を逐つて御覽なさい。ピン／＼と思ふ通りに割れて行つて、思ふ通りのものが出來ます。其切り口が尖つて居て危險いと思ふなら、鑢で磨る丈の手數。

●●●●●●●ランプの口金を接ぐ法　普通の方法は、燒石膏を五厘も買つて來て水で練り、手早く接ぐ。大抵これで着いて離れないが、水で練る代りに卵の白味を用へば猶よし、又の法に、石灰をドロ／＼に練つたのに松脂を半分程加へ、火に懸けて溶し、火から卸し、冷まし、水を少しさし、石膏の粉を松脂より少し多い程入れ、混ぜ合せて使ふ。これは只石膏丈よりはよく接着ます。

活花十二ヶ月

銀柳に白玉

梅月園主人

柳は總て木質が和らかなるゆえ、其の木振りを撓め直すにも最と易く、初心の人の手にも適ひ易し。

それゆえ、活け法とて別に變化はなし、只例の如く枝の十文字にならぬ様注意して活けらるれば宜し、最も



柳は十文字になり易きものにはあらず、其の他は体よく他の花に考へて活けらるれば大差なし。

『注意』此の銀柳には限らねど、殊に此の銀柳は体よく活やうとのみ思ふときは、殊更らに配列したる様に見えて自然を失ふものなれば、注意して活けらるべし。

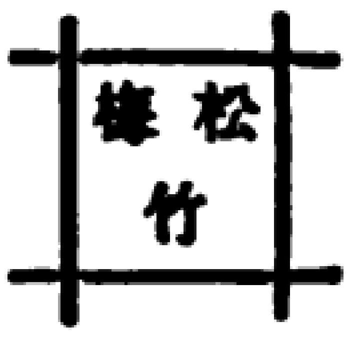
白玉は胴の下半を躰に見立て、形よく活けらるべし、但し花の數は三輪五輪等なるべし。

松竹梅（祝儀の花）

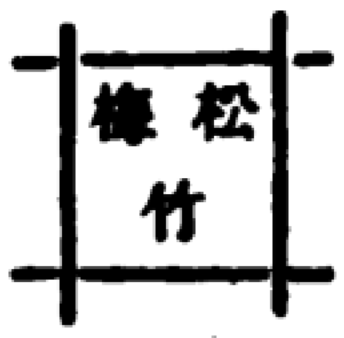
松竹梅は五ヶ條の一ツなれば正月の床の間に生けらる

ものならんと、此に出しぬ。

松竹梅は何れを眞副躰に見立るも、其れは皆株方の御考へなり、されど此の生け方は他の花と違いて、何花を眞に致しても、足元は必らず竹を前に見せる事なり、而して梅と松は其の後ろに、何れを右とも左とも差支はなし、されども次の如くするをよしとす、其の花配りは井筒を用ふる事なり、其れから竹は水際一寸と申



して、必らず水際より一寸位の處に節を置くなり、又先きは節より一寸位の所を平ら



に切り、決して「ソグ」事はすべ



からず、而して節の數は三、五、等の數ならざるべからず、只二節ばかりは許されてあり、其の他の事は他の花と異りたる所はなければ、其の心にて活けらるべし、此の松竹梅を活けしならば、他の花と同席は出來ざるなり。

圖にして御示し申さん。

松と竹は春夏秋冬何時にてもあれども、梅は常に用ゆる事は出來ざる故、此時は他の花を代用するなり、代用の花は必ず躰に用ひ決して眞又は副となすべからず。



竹には水揚げを爲さゞれば、直ちに葉を卷くものゆえ、先づ水揚げを爲すべし、水揚げは下の節一ッを殘し、他は悉く拔き取り水或は酒を充分に入れ置くべし。

松竹梅は申す迄もなく、祝儀の花なれば、二三の例を

▲衛生顧問▼

癩病の治療法（問）レプラ（結節癩？）にて種々治療を行ひ候へども功無し、これが爲め一家大いに嘆き居り候間その療法御教示奉願候（開度生外十七名）

（答）嘆かるゝは左もあらんと推せられ候、されどこれには如何なる大醫も甚だ閉口する所である、故に私の經驗した幾人の患者も餘り善い成蹟は無かつたが、中に僅一人比較的治つたのがあるから、その治療法を紹介しておきませう、先づ草津温泉場に一生を送る決心を、イヤ實行をなさしめ、内服藥としては、大楓子油（六、〇）右丸藥として一日三回に分服外用藥としては、

撒里矢爾酸軟膏（三十％）

右一日數回浴後塗擦

入浴は一日四五回、食物は通常で可いと命じておいたれど、其人は一日に六七回も入浴したとのことである或は藥は左程の功は無いけれど、草津の温泉が非常に助けたのではあるまいかと思はる、何となれば右の藥は如何なる醫者も能く用ゐるけれど餘り功が無いからである。

血の道に就いて（問）私事十八歳の春頃より今に十年の間血の道にて、左程苦しくて堪らぬといふ譯ではありませぬが、心は常に鬱々として、物事に倦み易くてなりませぬ、多くの御醫者にも診て頂きましたが十人十色、病名は種々に變るけれど、兎に角功はありませぬ、先生何卒御救下さるれば一家の幸福これに過ぎたることはありませぬ。（下野の鬱々妻外百數十名）

（答）前號にも述べた通り血の道といふ病名は醫書にはありませぬが、私は之を假りに子宮内膜炎、歇私的里及び月經の欠乏を總稱したるものと定めます、それは措置、この三病と胃病程多くある病はありませぬから何とか良き藥もがなと、種々研究しました末、漸く一法を得たれば、順天堂主（本郷區森川町一番地）に製藥を命じ、去る二月一日内務省の許可を受けたるは、有觸の陳腐藥、

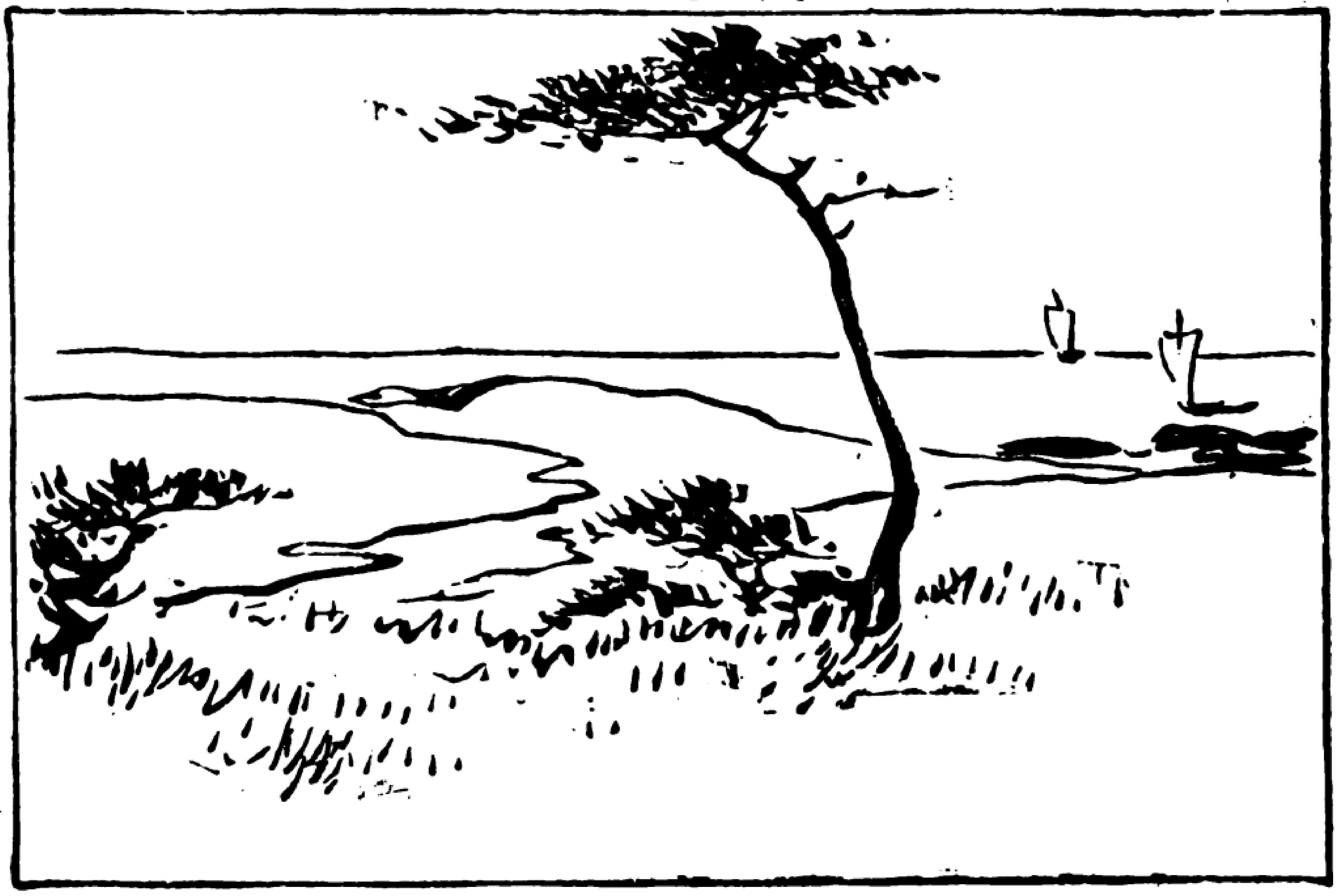
即ち草根木皮的で無いと自ら信じてゐるのであります、それは

血の道新藥　クキーン
右數日分乃至數十日分服用

するのである。されど藥舗は之を何と廣告しましても、右三病の外何等の功無きことを豫じめ申しておきます。

（小兒痲痺の療法）（問）三十五年六月生れの女兒その翌年の六月「小兒脊髓痲痺」にかゝりて今に治りませぬ、何卒女學世界紙上に先生の御意見を伺ひ度、合掌して御願申上ます。（心配女）

（答）問者の文章中には事詳しく書いてあるのを余は略したのであるが、兎に角電氣療法と沃度劑とを用ゐてゐる云々。されど余は思ふに電氣は賛成するが内服藥は一切止めて、之を海濱の温泉場に轉地せしめ、入浴しては按摩矯正法を施し、淡泊な消化のし易い滋養食物を與へ、可成精神を樂ますやうに導き、專ら強壯法をのみ計れば、漸次功あらんかと見ぬ診斷をするのである。今一應その御醫者と御相談ありたし。



春の海

（痔の療法に就いて）（問）痔の養生法及びその素人療法を敎へ賜はりたし。（播磨の困痔女外十三名）

（答）痔には内痔核外痔核など種々あるが、何れにしても、酒類

茶、咖啡、脂肪の多い食物及び辛い物の飲食は一切嚴禁し、勉めて運動し、或は鐵鑛泉に浴ずるが宜し、內服藥として下劑殊に

硫黃華　三、〇　重酒石酸加留謨　二、〇
白糖　適宜　右三包に分ち一日三回に服すべし

疼痛の劇しい時は肛門に水蛭を貼けはり、或は氷で冷すが可し、それにても尙痛む時は勿論醫者の手術を乞はねばならぬ。

（肋膜炎に就いて）（問）肋膜炎は肺結核の初朝でありませうか。（杞憂女）

（答）さうでは有りませぬ。

（問）肋膜炎は重病であつて御醫者すらも仲々その治療法に御困難なさるゝとの事、然るに夫は過日より該病に罹りました、さりとて薄給の〇〇敎員なれば醫療の資無し、何卒先生之を癒す素人療治はありますまいか三月の女學世界を千秋の思で待つて居ります。（淺草の困待生）

（答）本病に罹つたら、可成身體を靜かにし、愼んで蓐の中に臥し、痛い部に芥子泥を塗り、或は溫め、滋養食品としては牛乳鷄卵などを取り、內服藥としては、初期に

(1)水楊酸曹達　四、〇　薄荷油　一滴
白糖　適宜　水一〇〇、〇（半合程）
右一日三回に分服すべし。

又少し時日が經てば、左の藥に換へねばならぬ。

(2)醋酸加里　四、〇　苦丁　一、〇　白糖　適宜
水　百瓦　右一日三回に分服

これより尙時が進めば

(3)沃度曹達　一、五　苦丁　一、〇　白糖　適宜
水　百瓦　右一日三回に分服

即ち(1)は一週間位、(2)は五日間程(3)は沃度曹達の量〇、一宛、四日間目毎に增して、連續するのである。但し時々休息せねと沃度中毒がある。

（便秘の療法）（問）私は常に便秘しますから、下劑を用ゐますと、其時のみ通じますが、又三四日も經つと元の通りになります、何とか善い藥はありますまいか。（岩手の欲健婦外十六名）

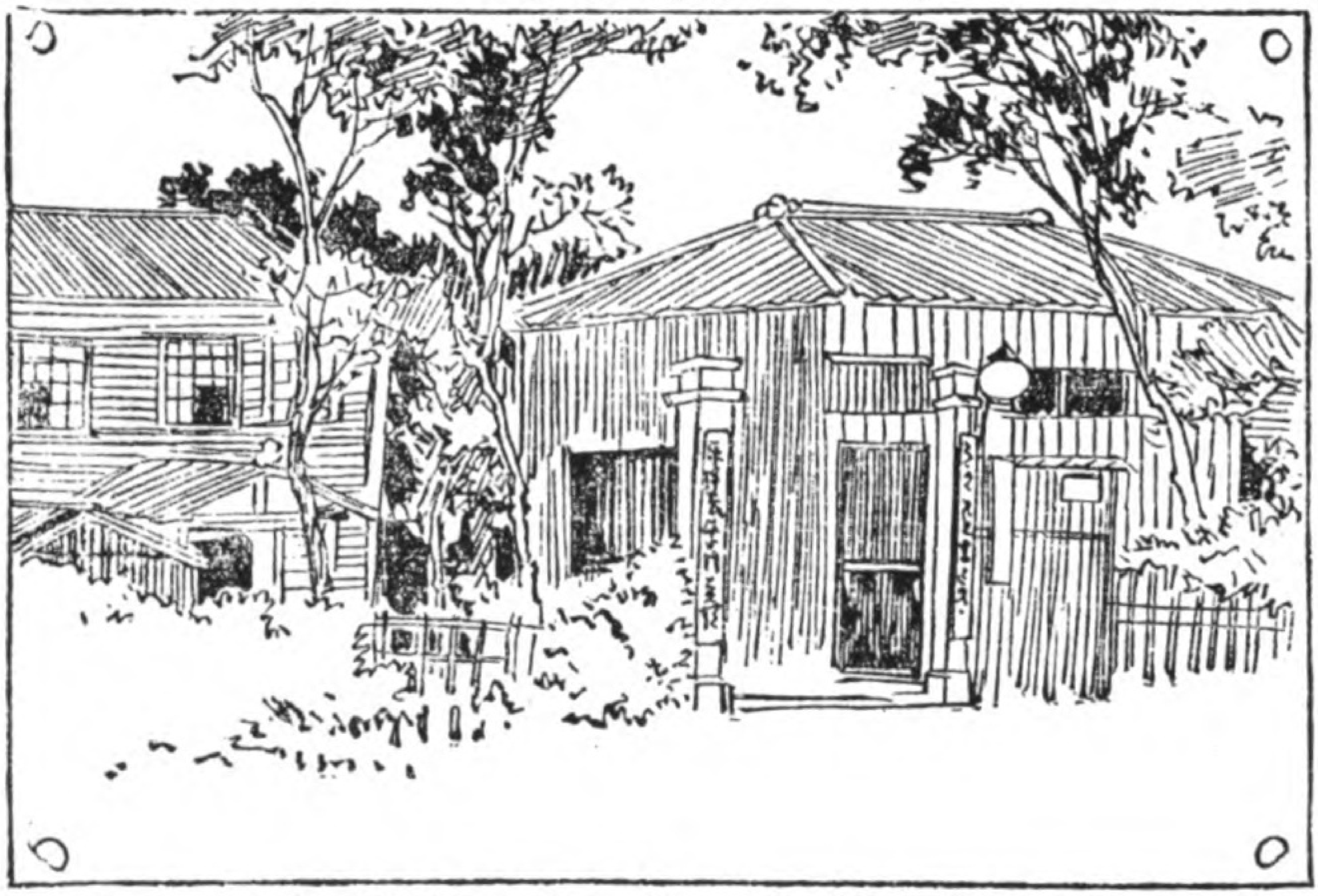
(答)蘆薈丁幾 二、〇 苦丁一、〇 白糖 適宜 水百瓦 右一日三回に分服 連服差支なし

(問)私は便秘性で困りますが藥や灌腸を用ゐずに治す方法を問ふ。(東京の神田子)

(答)毎日空服時に果實の汁を飲み、下腹按摩を行うて御覽なさい。但し原因にも依るから病狀を今少し詳しく書き玉へ。

陰門瘙癢の療法

(問)私大陰唇の處が非常に痒くて起つても坐つても居れぬやうなことが一日中に二三度宛あります、されど御醫者に診て貰ふのも愧かしく、玆に衞



東京女醫學校(四谷仲町)

生顧問のあるを幸として、これで三度伺ふのであります、下の病とて矢張病氣でありませぬが誇るのではありませぬ困るから白狀するので御座いますが私は華族の娘であります、先生何卒御察しの上御教示を請ふ。(東京の爵孃)

(答)貴女の外にも、この問は幾つもありましたけれどこゝに掲ぐるのも、何と無く變な氣がしますから、其儘にしておいたのです、然れど今は已むを得ず答へませう、即はち原因にも依るが、兎に角百五十倍の石炭酸水を以て能く洗ひ、左の膏藥を貼くるが宜し。

鹽酸古加乙涅 〇、一

緩和軟膏 二〇、〇

右二品能く練り混せて用ふべし。

但し吉功乙涅は劇薬であつて、薬屋は賣らぬから、御懇意な醫師に、歯痛に用ゐるのであると口實を設けて御買あれ、虚言を敎へ申すやうなれど已むを得ませぬ。

%に就いて（問）%とは如何なる事に候や。（不審女外三名）

（答）百に對する比例である、例へば2%の硼酸水とは硼酸二瓦を水百瓦に溶かすが如し。

肺結核を確むる法（問）御醫者に尋ねても曖昧な返事をなされますが、肺病で無いかと疑はれてなりませぬ、之を確める方法ありますまいか。（京橋の疑女外三名）

（答）早朝に啖を咯き、之を東京市神田區駿河臺なる顯微鏡院にて檢査を受けなさるれば、遠山醫學博士は確實なる答をなされます、檢査料は僅かに五拾錢である例ひ遠隔の地にても其の啖の洩ないやうな器に入れ、檢査料を添へて該院に依頼せらるゝが宜し、良き顯微鏡を持たぬ醫者が結核であるなど申しても落膽なさらぬが可い、病氣が重るばかりであります、又醫者とても顯微鏡無くて初期の結核を判斷出來るもので無いから疑はしいのは矢張該院に依頼すべし、疑つてゐる中に病は益々進む、醫師たる者も亦大いに注意すべきことである。

（問）私は昨年十月頃より肺結核になりまして、タウコキ草を用ゐてゐますけれど、何等の効ありませぬ到底治らぬものでせうか。（心配女）

（答）肺結核は難症ではあるが、治らぬと斷言すべき病ではありませぬ、されど其樣な藥を用ゐてゐなされば治らぬことと受合であります、嘗て某新聞にも該藥の眞相を暴露したではありませぬか。

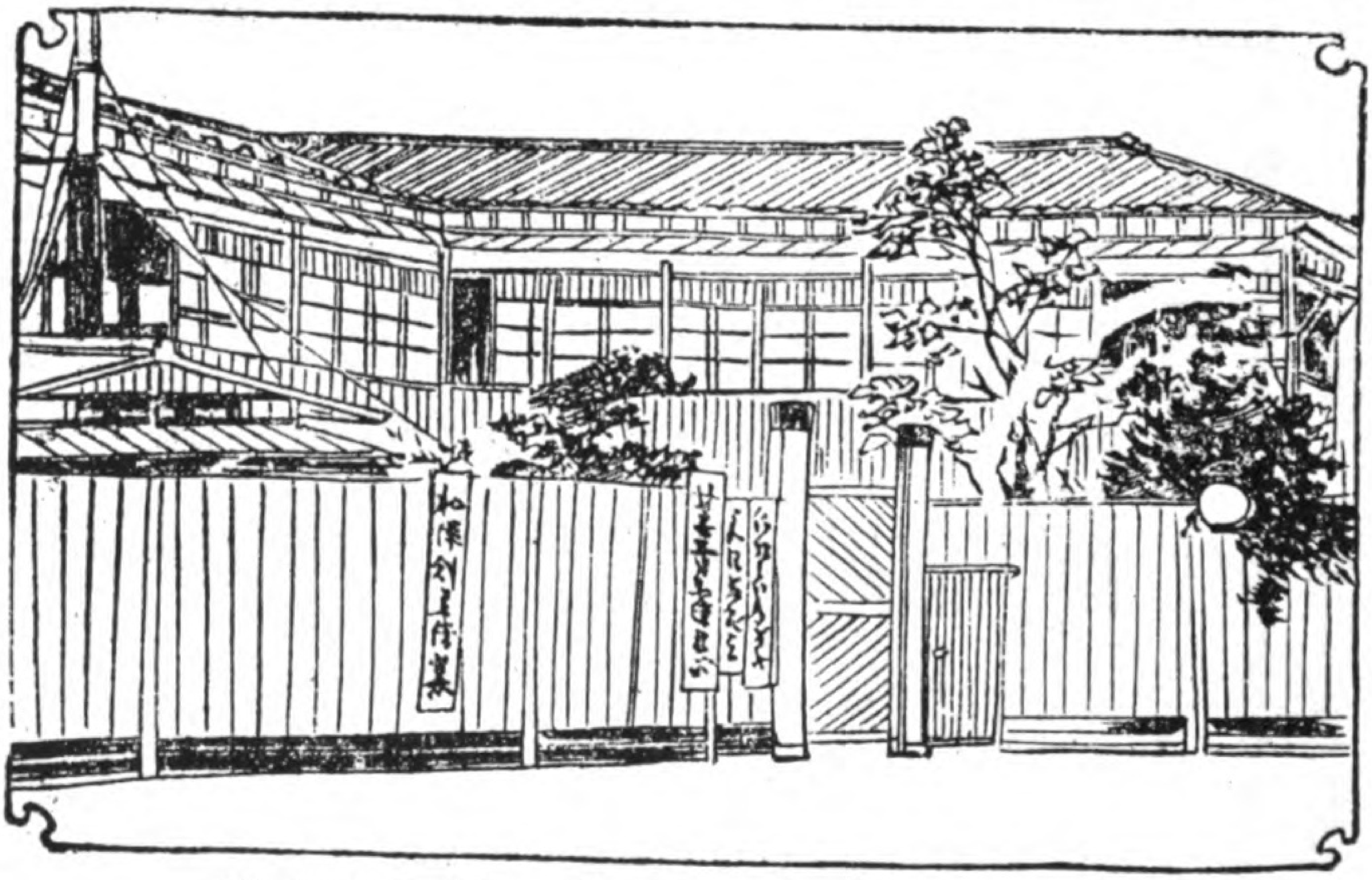
醫者になる法（問）女醫者になりたくありますが、何うしたら宜いでせうか、若し先生の門人にして下さるならば如何なる艱苦も忍んで勉强いたします、若し御聞屆が叶ふならば直樣出京せんと思ひます、但し學資金は不十分ながら續く積りであります。（遠州の熱心女外七名）

（答）私は開業もしてゐませず、又女の方では困るのみならず修業中の身なれば其任に當られまいかと思ひます、それよりは神田區鷲山女醫學校長に依頼せられて

該學校に入學せられよ、但し高等女學校を卒業の上といふことを御注意申しておきます

耳漏の療法　(問)私の長男十三歳は耳の中から膿汁の如きものが出て村の醫師は「耳だれ」と御診斷の上色々藥も飲みますが治りませぬ何卒其の治療法を敎へ賜はりたし
(丹波の愛讀女)

(答)「耳だれ」に何程藥を飲んだとて治りませぬ、或は「飲み」或は「用ひ」の書き誤りでありませう。それは偖置果して耳漏ならば、石鹼水を、スポイトといふ器械を用ひて耳内に注ぎ、然る後綿を以て能く拭ひとるが宜し。但し水の



和洋裁縫女學校　(九段中阪上)

溫度が肝要である、若し冷たければ腦貧血を發し、熱ければ腦充血になり、何れも眩暈するものでなる、故に其の溫度は水氣を放れてゐるといふ位なのが可い。

發汗を少くする法　(問)嘗て女學世界誌上に御敎になつた藥も實行いたしましたが失禮ながら左程効ありませぬ、他にも良き藥はありますまいか。(多汗女外二人)

(答)3%の單寧水を發汗多き部に屢々塗つて御覽なさい、該藥は腋臭などにも効あります。但し何れにしても用ゐれば直ちに効あるものではありませぬ。

月經不順の療法等　(問)十五歲の女月經は三月目位に五日程

宛あつて、時々子宮より白い粘液出づ良き療法御教授の程御願申上候。(久松生)

(答)前の鬱々妻の答に申したる「クキーン」を毎月十日分程宛服み、さうして百五十倍の石炭酸水を以て子宮を洗ひなさい。

(藥の事に就いて)(問)私は腸加太兒にて困り居り候矢先に先生の療法を見まして硝蒼一瓦を求め來り、一日三度三日の間に服みましたれば、美事に治りました、されど村の御醫者はその樣な大量を服ます法は天下に無いと笑ひました、其後三日程の間は便は固くなつて常の樣なれども眞黑でありました、身體に害を與へたのではありますまいか。(北海の昆布女)

(答)硝蒼を服めば少量と雖も黑便になることがあります、中毒ではありませぬ、笑ふ人は知らぬのです。

(問)アセチールの效用を敎へ賜はりたし。(越後の困離女)

(答)其樣な藥は知りませぬ、或は「汗散る」を外國語的に名づけた賣藥ではありませぬか、何れにしても知らず。

(問)姬丁幾、別嬪散の效用を問ふ。(まゐづる女)

(答)アセチールと言ひこれと言ひ、實に滑稽な名であります、大方色が白くなるといふ嘘藥ではありますまいか、これも矢張知りませぬ。

(問)ゼムの效用を問ふ。(京都の閑度生外一人)

(答)口中に含みをれば、口の臭氣を混らす藥であります。

(問)何日かの女學世界紙上に酒精五、〇と記しありますが假名間違ではありませぬか。(靜女外一人)

(答)一五、〇の一を私の書落か或は活字の誤脱でせう

(問)サリシルサン・サリチルサン・サリチルサンソーダ皆同一の藥に候乎。(用度女)

(答)「シル」「チル」同じことなれどもサリチルサンソーダは別物であります、必ず間違へてはなりませぬ。

(雜問一束)(問)○○を行ひ、○味を得る方法を知りたし、面白半分ではありませぬ何卒御敎示を乞ふ。(讃岐の愛讀女外數人)

(答)この樣な問は、此頃往々來るが、假令ひ眞面目で有

つても必ず答へませぬ、女學世界は高尚にして優雅なる賢母淑女を希ふのであります、若し夫れ面白半分に問ふに至つては不埒千萬言語同斷之を西比利亞の中原に逐遣たいのである。

(問)毎晩夢を見ますが何か治る方法無之候や。(恍惚女外二人)

(答)今年一月の定期增刊に初夢と題したる小說の中にその療法を述べてあれば御一讀を乞ふ。

(問)私の夫は非常なる大酒家で醉ひますと亂暴をいたします、何とか之を本人に知らさずして治す名藥を敎へて下さい。(被打女外一人)

(答)「酒不可飲」など申す藥もあれど、私はこれを信ぜられませぬ、要するに藥では到底治らぬものと思ひます、故に貴女は滿腔の誠を籠めて徐々に諫むるが何よりの良い療法でありませう。



日本女子美術學校(芝山內)

(問)内服藥を用ゐて夫婦互に親愛の情を增すことの出來るものに候や、若しあらば早速御敎示を御願ひ致します。(相爭婦)

(答)藥など申す物質的では斷然不可能であります、これは私に尋ねらるゝよりは大町桂月先生の敎へを請はれよ。

(問)晨起の時刻は何時が最も適當に候や。(眠度女外一人)

(答)四季に拘らず太陽の地平線上に昇るを標準といたされたし

(問)私の娘は爪を嚙む癖あつて困ります、何か療法ありますまいか。(直し度母)

(答)毎日二三度宛鹽酸規尼涅といふ藥を水に溶して爪尖へ塗つて上げなさい、嘗れば一時間以上も舌上の苦味去りませぬから遂に懲りてそ

れが習慣となります、該藥は毒にはなりませぬゆゑ最も適當な良法であらうと思ひます。

(問)夜分何れの方角を枕にして寢れば衛生上宜いものでせうか。(紀伊の何度好)

(答)昔の人は東難南病西壽北福だとか言ふけれど、取るにも足らぬ説であります、附會説でも述べたら、申されぬこともありますまいが、畢竟何れの方角を枕としても何等の害無きものと思ひます。

(讀者の希望)(問)「一日醫者」は御止めになつたのでせうか私は一年前から女學世界を愛讀するやうになつたのでありますが、何卒續きを揭げて下さいませぬか。(知度姉)

(答)六月の誌上より又述ぶる豫定であります、それまでは消化器の話の中に種々の病氣がありますから「一日醫者」と同じ道理です、御熟讀を請ふ。

(問)藥の目方を悉く日本ので書いて下さることは出來ますまいか。(我儘女外數人)

(答)敢て出來ぬといふ譯ではありませぬが、洋藥は漢藥とは違ひ、其の量が少いから、何厘何毛など申せば目方やら長さやら分らぬやうな不都合がありますゆゑ矢張瓦量が完全であります。

(問)劇藥で無い藥でばかり敎へ下さりませぬか。(不破貫女)

(答)固よりその積りでありますが、劇藥で無くては何の効も無い病氣には已むを得ず書くのであります、例へば不毛症に芫菁丁幾を除けば塗けぬが可い位であるやうなものであります。

今回は顧問欄甚だ少くありますが、その代り來月は埋合を致します。

▲女子裁縫夜學の開始　(芝三田四國町)

女子に裁縫の業の大切なることは、言ふまでもなきことなれども、其人の境遇事情によりては、晝間之を習覺ゆるの暇無きもの、蓋し尠からざるべし然る時は嫁入りしても、姑の手前肩身も狹かるべく、先づ第一不經濟此上も無きことなりとの趣意にて、戸板裁縫學校戸板關子氏には今回新に裁縫夜學部を同校内に設け、左の規定により敎授すると云ふ

一授業時間　毎日午後五時より八時まで三時間とす
一束脩　金三十錢　入學の際納むると
一月謝　金五十錢　毎月十日迄に納むると

此外隨意科として洋服裁縫及び編物をも敎授すべし

尚同校は來る四月新學期に入るに付本月生徒の募集をなす由

季節料理

治庖會本部教場主事　安西こま子

精進　五もく壽し

煎りどうふ　木乾椎茸
五分切り乾瓢　花蓮根甘酢
さくら慈姑　根三つ葉
おぼろゆば　乾海苔　獨活　生姜

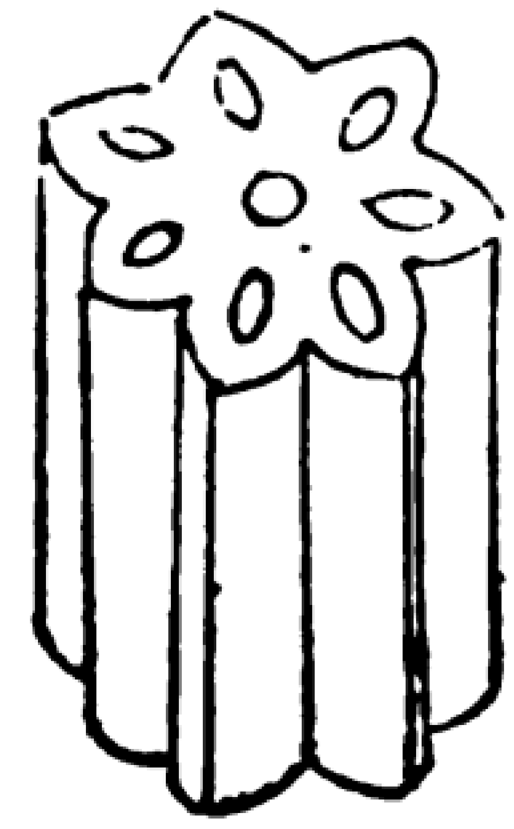
一、煎りどうふ　は、豆腐を摑みつぶして鍋に入れ、豆腐が浮く程に澤山の水を加へ、鍋を火に掛け、煮立ちはじめんとするときを度とし、別に目笊の中へ布巾を敷きおける處へ移し、直ちに冷水を澤山に注ぎかけ豆腐の濁りを除き、布巾を四方よりたゝみかけ、鍋蓋の如き輕きおしをおき、水氣の切しとき、鍋にもどし入れ、火に掛け、生鶏卵（豆腐壹丁につき小なる鶏卵壹個を加へる）を毀し入れ、絶えず金杓子にて攪交せながら空煎と爲し、之に濃き煮出汁と三盆砂糖とを加へ（煮出汁は多く用ゆるをよしとす又砂糖は少しく甘味をつける心持して用ゆべし）バラバラになるまで煎付け、生醤油を加へ（生醤油が少しく不足する程の加減になすべし）一寸と攪交せ、之を平皿の如き器に移し、薄く擴げて扇ぎ冷すべし

一、木乾椎茸　は、ザット水にて洗ひ、暫らく水に放ちおきて後ち取出し、莖を切り捨て、小なる骰子形に庖丁をなして之を沸騰湯の中へ投し茹で、水にて洗ひ水を搾りて鍋に入れ、之に煮出汁と三盆砂糖と生醤油とを加へ、甘辛き加減に味を付けおくべし

一、五分切り乾瓢　は、竹の皮にて輕く括り、之を沸騰湯の中へ投じ、柔らかになるを待ちて直ちに冷水に放ち、兩三回水を取換へて能くさらし、水を搾り、之を鹽酢（鹽酢とは酢に少しく食鹽を加へしものなり）に浸し、程好く酢を搾り、五分程の長さに切りおくべし。

一、花蓮根　は、中位の太さの蓮根を撰び、凡そ二寸程の長さに切り、圖の如く花形に庖丁をなし又木口より一分程の長さに切り、之を五合の水に並盃壹杯の生酢を加へし水の中へ暫らく放ちおきて後ち、沸騰湯

の中へ投し、ザット茹で〻、冷水に放ち二三回水を取



換へて能く冷し、水を切り、鹽酢の中へ暫らく浸しおき、酢を切り平皿の如き器に移し、三盆砂糖を振り掛けおくべし

一、さくら慈姑　は、前號（本年二月五日發行女學世界）季節料理欄內甘煮の條に於ける花慈姑と全く同じきを以て其說明を省畧す

一、根みつ葉　は、三つ葉の芥と枯葉を除き、水にて洗ひ、根元の處を揃へ、適宜の小束となし、根を切り落し、前號季節料理欄內磯燒榮螺の條に於ける三つ葉と同樣に茹で、冷水の中に放ち、能く冷し、程能く水を搾り、生醤油にて洗ひ、輕く醤油を搾り、七八分の長さに庖丁をなしおくべし

一、おぼろ豆腐皮　は、卷ゆばを濡れ布巾にて暫らく包みおき、（あげ豆腐皮ならば濡れ布巾にて包むに及ばず）之を布巾より取出し、木口より薄く打ちて鍋に入れ之に三盆砂糖と食鹽と少量の水とを加へ、文火に掛げ、鷄卵煎をつくるが如くして煎り、手早く布巾の上に移し直ちに扇ぎ冷すべし

一、乾海苔　は、灸りて細かく揉みおくべし

一、獨活　は、水にて洗ひ、一寸四五分の長さに切り皮をむき、幅四分程の短册形に打ち、暫らく水の中へ放ちおきて後ち、水を切りおくべし

一、生姜　は、木の葉狀又は適宜の形狀に庖丁をなして、暫らく水の中へ放ちおき、水を切り、鹽酢に漬けておくべし

一、飯の炊方　は、並飯よりは、强き加减に仕掛け、又蒸し方も並飯より短かくなして手早く木盆に移し、直ちに飯杓子を以て受けながら酢（此酢は、生酢壹合に並盃一杯の食鹽を加へしものなり又此酢の量は白米一升につきての分量と知るべし）を斑なく一樣に振り掛け、一寸と其まゝにおき、團扇にて扇ぎながら攪き交せ、全く冷めたるとき、前に準備をなしおきし具の一部を混せて、之を皿に盛り、其上に體裁よく具を盛りて、侑むべし又彼岸の配り物になさんとするときは

重箱へ飯を結め、平らにならし、其上へ前の具を以て色取りよく且つ上品の山水の景狀を畫き以ておくるべし。

信田すし

油揚
黒胡麻
乾瓢

一、油揚 は、其三方の端を少しく切り落し、其切口の處の裏表の皮を兩手に持ち、徐々と引きて剝し之を擴げ、鍋蓋の裏又は目笊の裏にならべおき、其上より熱湯を注ぎ掛けて油ぬきを爲し、別に鍋の中へ敷笊を敷き（敷笊なきときは竹の皮を代用するも可なり）其上へ前の油揚を入れ、之に煮出汁と生醬油と三盃砂糖とを加へ、火に掛け、甘辛く味をつけ、之を鍋の儘又は目笊の裏へ掛け、汁を切りおくべし

一、黒胡麻 は、先づ胡麻を水にて洗ひ、之を布巾に包みて水を搾り、篩の裏へ乾きたる布巾を展べたる上に移し、薄く擴げおきて水氣を切り、炮烙を文火に掛け、少しく炮烙が熱するを待ちて前の胡麻を入れ、絕ず、飯杓子を以て攪交せおれば胡麻が脹れて丸くなるべし之を度とし、手早く皿又は盆の如き器に移しおくべし

一、乾瓢 は、前頁五もく壽しの條に於ける乾瓢と同樣になしてザット茹で、直ちに冷水に取りて二三回水を取換へ、水を搾り、之を鹽酢に取り、酢をしぼり、二筋づゝ合せて細に撚りおくべし

一、すし飯 は、前頁五もくすしと同樣に酢をあはせる飯をつくり、之に前の煎り胡麻を斑なく混合せおくべし而して海苔卷ずしと同樣に油揚を以て前のすし飯を卷き、卷目を下にして暫らくおき、兩端を少しく切り落し、同じ長さの五片に庖丁をなし、其各片の中央を撚乾瓢を以て括るべし若し彼岸の配り物になさんとするときは、重箱又は大なる平皿に限笹又は檜葉の葉を敷き、其上へ盛り、酢どり生姜を添へておくるべし

▲椀

二色鰈
笹打茗荷

一、二色かれい は、鰈の鱗をふき、鰓を取り、腹を

開き腸を除き、腹の中を水にて能く洗ひ〻三枚におろし、薄肉を取り、上肉と下肉とを（魚の頭を左りとし腹を前へむけておき下になる方を下肉と云ひ上なる方を上肉といふ）適宜の同じ大さに切り、食鹽をあて暫らくおきて水にて鹽を洗ひおとし、別に鍋へ魚肉を浸す程の水を入れ、煮立つを待ちて、前の切肉を入れ、肉に火の通りしとき、火より鍋をおろし、網杓子にて掬ひ、上肉と下肉とを一個づゝ椀へ岡盛をなしおくべし（二色鰈とは鰈の皮が一面は白く、一面は黒きゆゑかくいふなり）

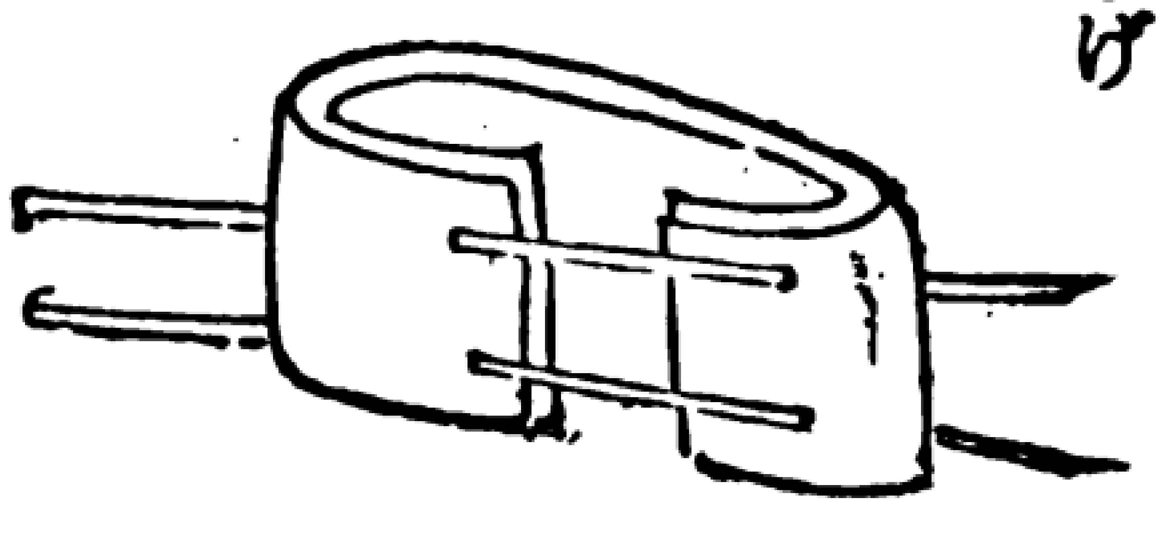
一、笹打茗荷　は、めうがたけを、水にて洗ひ、其柔らかき處のみを撰び、斜に薄く打ち、之を水に放ち暫らくおき水を搾りて椀に岡盛をなしおくべし

一、汁　は、鰹節の心の處を削り以てつくりし煮出汁を鍋に入れ、火に掛け、煮立つを待ちて少しく食鹽を加へ、鹽味をつけ、其味を試み、適度なれば之に少しく生醤油を注し、直ちに鍋を火よりおろし、前に岡盛をなせる椀へ此汁を注ぎて侑むべし

▲鉢肴

細魚妻折燒
御所かん
鰕黄味燒

一、細魚つま折燒　は、細魚の鱗を取り、頭を落し、腸を取出し、腹の中を水にて能く洗ひ、三枚におろし（小なれば脊開きになして中骨を除くべし）薄肉を取り、皮の方を下になして俎板の上におき、兩端より折りまげ



上圖の如く末廣形にして尖端が五分程出る樣に金串二本を打ち生醤油を注ぎ、鐵架に掛けわたして皮の方より燒き、片肉に火の通りしとき裏返し（此時金串を靜に廻はしおくべし）他の片肉を燒き、火の通りしとき、又二回程生醤油を注ぎかけ、一寸と炙りて醤油の臭味を消し而して金串をぬき、折りまげたる方を下にして、鉢に盛るべし

一、御所かん　は、先づ同じ大さの蜜柑數個を撰び、

其皮をむき、之を湯の中へ一寸と浸しおきて取出し、筋を除き、上下を薄く切り落し、各を二個の輪切となしおくべし、次に寒天を暫らく水に浸しおきて取出し之を斷りて鍋に入れ、水を加へ、火に掛け、凡そ三分の二程の量に煮詰め、之に三盃砂糖を加へ(、寒天一本に付き水三合、砂糖五十目を用ゆる割合となすべし)砂糖の溶けるを待ちて篩にて漉し、之を鍋へもどし入れ、文火に掛けて凡そ十五分間程煮詰めて流し箱(重箱を代用するも可なり)(三分程の厚さに流し入れ(殘る處の寒天液は湯煎に爲しおく)寒天液の上面に薄皮を張りかけんとするときを待ち、其上へ手早く、輪切に庖丁をなしおける蜜柑を俯せて一重に列べおき而して湯煎になしおける寒天液を徐々に、一寸程の高さに流し込み、冷めて凝りたるとき、方形狀又は短形狀に庖丁をなして鉢に盛り合すべし

一、鰕黄味やき は、車ゑびの頭をとり、水にて能く洗ひ、皮をむき、背開きになして背膓を除き、食鹽をあて、暫らくおきて後ち、水にて洗ひ、横に金串二本を打ち、鐵架にかけわたして兩面を燒き、火の通りしとき、肉の方へのみ鷄卵の黄味を溶しものを塗り、一寸と炙り、金串を去り而して鉢に盛合すべし

▲小丼　獨活からしあへ

一、獨活 は、長きまゝにて皮をむき、根元の硬き處を切り捨て、之を亂切りに庖丁なして水の中へ放ち、暫らくおき、沸騰湯の中へ投じ、ザット茹でゝ目笊へあげ湯を切りおき、別に鍋へ煮出汁と少量の味淋とを入れ煮立つを待ちて前の獨活を入れ、暫らく煮て之に生醤油を加へ、一寸と煮て淡味を付け、之を網杓子にて掬ひ出し、而して生醤油に少しく煮出汁も加へたる汁を以てあくぬき芥子を溶きしものにて前の獨活をあへるなり

▲刺肉　めじ骰子形わさびあへ　山かけ

一、めじ骰子形山葵あへ は、めじ鮪の肉を厚さ七分

程の骰子形に庖丁をなし、而して山葵醤油にてあへ之を皿に盛り、其上へ卸しいもをかけしものなり

又山葵醤油の製方は、山葵を能にてこすり、水にて能く洗ひ、疣をこそげとり、葉付の方より卸金にておろし之に生醤油を加へゆるめしものなり

又おろし藷は、自然薯又は佛掌薯を撰ひ、其どろを水にて洗ひ落し、皮をむき、卸金にておろし、擂鉢に入れザット擂りしものなり

火魚おろし肉
胡麻あげ

▲皿　つくね蓮根
つけあげ

おろし羅蔔

小皿割り醤油

一、火魚おろし肉ごまあげ　は、火魚を三枚におろし薄肉を取り、小骨をぬき、之へ胡麻油にて揚げしものなり

一、つくね蓮根　は、蓮根の皮をむき、卸金にておろし、篩の裏へおき、手にて軽くおさへて汁を搾り、之を適宜の大さに摘み分け、之に衣をつけ、胡麻油にてあげしものなり而して皿の中へ半紙を敷き、其上へ前の火魚と共につくね蓮根を盛り、之におろし羅蔔を添へ、つけ汁と共に侑むべし又衣の製方及びおろし羅蔔の製方は次の如し

衣は、温飩粉を篩に掛け、之に鶏卵を割り込み、（温飩粉五合につき鶏卵二三個を用ゆ、猶ほ之に少しく水を加へ、菜箸を以て二三回掻交せしものなり

おろし羅蔔　は、羅蔔の皮をむき、山葵と反對に尻尾の方よりおろし、軽く汁を搾りたるものなり

一、割り醤油即ち付汁　は、二番煮出汁（削りたる鰹節より一回煮出汁を取りし滓に水を加へ以て二回目に取りし煮出汁なり）五杯に味淋少しく加へ、一寸と煮て之に生醤油一杯を加へ直ちに火よりおろせしもの也

日本淑女學校の慰問袋　本郷千駄木なる同校生徒一同は冬期休課以來各自十錢宛を醵出して慰問袋の製作に從ひ居りしが同校大學部一年級生徒馬島たまえ子は殊に熱心して之に從事し一人にて七十三袋を蒐め寄贈したりと、

簡易西洋料理（並に菓子の製造）

▲ミート、スチウ

（原料）牛肉百目　麦粉（から焙にせしもの）大匙二杯。
熱湯五合　塩

（製法）鍋にバタを引きて、肉を丸の儘、色のつくまでよくいり、之に熱湯を注ぎ、文火にて三時間程ゆで、其肉を取出し薄く切り、汁には麦粉と塩とを交ぜ、又肉を鳥渡煮上ぐ、肉は魚肉の如く柔かになり、老人小供の食品に尤も適す、

▲フイレ、マデール

（原料）牛肉百目　ラカン五六切
松茸　葡萄酒（肉を浸す丈）

（製法）油を肉に塗り、塩胡椒及香ある野菜類を小許入れ、葡萄酒に十二時間漬けて後、水氣を拭き取り、バタにていため、其中に松茸を入れ、よく鍋の蓋をなし三十分間煮る牛、豚、鹿などの肉を大なる切身の儘にて、椿又はチレプ油を塗りて、色々の香よき野菜を入れて酒に漬け、空氣のもれぬ様、壷などに入れ置き煮付、フライ、又はロースにすれば、悪しき香もなく、味も美なり、又不意の客などある時便利なり、

▲ビーフ、ローフ

（原料）牛肉百目　豚肉五十目
玉子一ツ　パン屑（湯又は牛乳にて溶す）
セージ　玉葱　塩　胡椒

（製法）肉及野菜を細かに刻みて、パン屑及び塩などを入れ程よく丸めて、バタ又は牛脂にて揚ぐるか、又は蒸焼にす、

▲パーテ、ドウキアンド

（原料）肉類（牛肉豚肉又は鳩などを交ぜろ）二百目
麦粉百五十目　玉子二ツ　バタ三十匁
乳　塩　胡椒

（製法）麦粉を先づ板の上に置き、眞中に穴をあけて、玉子及他の品々を入れ、能く掻き交ぜ、一時間の後、厚さ六分程にのべ、之にて牛類を包み、上に小さき穴をあけ、二時間程蒸焼にす、冬なれば一週間も貯へらろ、肉の間には、麦粉を振り掛け置くべし、肉はよくたゝきて、入れろもよし、食卓に供する時、穴は白紙を花形に切りて飾る、

▲ポテト、ボールス

（原料）馬鈴薯二百目　玉子
パースレー　塩　胡椒　パン屑

(製法)芋をゆで、柔かになりたる時、裏漉にかけ、他の品々を入れて丸め、パン屑にまぶして、色のつくまで、バタ又は牛脂にてあげる、
此芋の中に細かに、刻みたる味付肉又は鹽鮭を入るゝもよし、

▲ベークド、ビーンス

(原料)十六寸豆五合　牛肉五十目
鹽　胡椒　バタ
(製法)十六寸豆を柔かにゆで置き、二時間餘煮上げたる牛肉の汁ある中へ入れて味をつけ、ストーブにて色のよくつくまで燒く、

▲林檎のフライ

(原料)林檎百目　麥粉半斤　玉子二ッ(白味泡立てる)
バタ(湯にて溶す)　牛乳
(製法)林檎の皮をむき、心を取り、一時間ブランデーに漬け置き麥粉に玉子バタ及乳を入れて、ころもをつくり、之につゝみて、ヘットにて揚げる、其上に砂糖を振りかけ、金物を火の如くに燒きて、色をつける、バナ、なども揚げてよし

▲栗のソース

(原料)栗をゆで、澁皮を去り、熱き内に擂りつぶし、是に牛乳を入れて、裏漉にかけ、砂糖を入れて、弱き火に暫時煮る、南瓜及芋類を用ひるもよし、バタを入るれば味美なり

▲スープレ、ヲ、カーへ

(原料)玉子四ッ　牛乳二合　コーヒー五勺
バタ　片栗粉大匙五ッ　砂糖
(製法)玉子の白味を能く泡立たせ、他の品々を入れて交せ合せ、菊花形の入物に入れて蒸燒にす、

▲タート

(原料)メリケン粉一斤　玉子三ッ
バタ十五匁　ジヤム
(製法)メリケン粉の中に、玉子及バタを入れて、よく捏れ、餅の搗きたて位の加減になりたる時、棒にてのべ、菓子燒板にバタを引きて、其上に薄くのべ、中にジヤムを入れ、其上をおふて蒸燒にす、

▲アプ、ルジンジヤ

(原料)林檎二ポント　砂糖二ポント
水四合　薑の粉七匁五分
(製法)砂糖と水とを煮立たせて薑を入れ、蜜の如くなるまで煮詰め、林檎の皮を剝き、心を取り、薄く切りて、水につけ置きたるを入れて、鼈甲色になるまで煮上ぐ、林檎の碎

けぬ様注意すべし、
永く保存せんとするには、瓶に入れてよく目張をなし、乾きたる場所に貯ふ、
蜜を作るには七八分間、林檎を煮るには三十分間を要す、

▲アプル、ジエリ

（原料）林檎六ポンド　水八合
砂糖三ポンド　レモンの汁

（製法）林檎の皮を剥き、心を去り、薄く切り、水を入れて、一時間程も煮て、柔かになりたる時、裏漉に掛けて、其汁のみを量り、前の割合の砂糖を入れて、焦げつかぬやう、攪き交ぜながら、三十分間煮る、泡の浮ひたるをすくひ去る、レモンの皮と共に煮て宜し、レモンの汁は最後に入れる、出来上りたる時はよき形の入物に移し置く、

▲グレープ、シヤム

（原料）葡萄一ポンド　砂糖半ポンド

（製法）熟せざる葡萄を能く洗ひ、水をよく切り、砂糖のみにて一時間程煮、よく冷し壺に貯へ置く、

▲チプセイ、ケーキ

（原料）カステイラ（日数を經たるがよし）
葡萄酒　アルモンド
カスメード

（製法）カステイラを深き硝子器に入れて、眞中に穴をあけ、其上より葡萄酒を掛け、一時間程經て後、アルモンドを細長く切りたるを以て、上を奇麗に飾り、其上にカスメードを注ぐ、

▲リーチ、カスタード

（原料）牛乳二合五勺　玉子八ツ　レモンの皮
砂糖二百目　ブランデー大匙一ツ

（製法）牛乳と砂糖を入れて煮立たせ、玉子をよく攪き交ぜ、乳の少し冷へたる時に入れて、湯煎にす、注意……沸騰點まで煮上げぬやうにし、又一方にのみ交すべし、終に香味と、ブランデーを入れる、
家鴨の玉子はカスメードを製するに最もよし、

春の茶席料理

廣田星橋

茶席の料理は總て粗品を避けないで、只料理法に注意し、安排の宜しきを得て、品味已上の風味を能く造り出すを有効とするものである、されば獻立に就

ても普通の料理とは違ひ、縦令品數不足なりとも、配味に於ては特殊の庖丁を顯はす所が斯道の特色とするのであるそこで其の最も撰擇を要するは風味を資くる爲め第一の材料とする味噌、酢、醤油はいふに及ばず、酒鹽等は最上の物を用ひねばならぬ、但しアルコール、味淋は欠くべからざるものとする、畢竟此等の材料の安排法に就て、普通法とは異なる所が價値である。

茲に春の料理を御紹介する前に其の料理法の一班を不順序ながらお話し致しませう。

○鱠　は常の通り薄くソゲ切りにするは妙ならず、厚く四角に切るか、滅多切りにするがよい。

○酢　は甘味を帶びた强ひものを用ひ度い。

○燒付　は餅か、鯔なりとも用ふるがよい。

○鯉の子付　は平作にして子を付ける。

○青和　は早春は菜を加へて靑みを見せ、山椒を擂入れる。

○白身和　は玉子の蛋白ばかり曲物に入れて蒸す、又は茹玉子にして、直に蛋白を取り、少さく切れば齒切がして好味なものである。

○鴨　の上肉を繊に切り、酒、醤油でザット煮てから和へる。

○雉子　の肉も同様にしてよい。

○數の子　は能く水に漬けたるを洗ひ、終日酒に浸し黒胡麻で和へる。

○煮鳥、は鴨が好い、之れは生肉のまゝ、湯煮にしてから、油皮を剝ぎ、適宜に醤油加減をなし、菜を入れて、共に能く煮出す、尤も其の前に肉も入れ、好き程に取出すを好しとす。

○小鳥　は能く肉をたゝき、酒、醤油でサット煎上げ之れを散し置き、後に盛る。

○貝燒　を製するには、玉子を碎き、蛋黄と蛋白を能く攪交せ、其の半分を薄鍋に入れ、鮑、慈姑、木茸等を能く煮置き、其の中へ加へ、前の玉子半分を上より注けて煮る、で上の玉子半熟の時に之れを毀すと、下の蒸發氣にて、能く玉子は熟する。

○薄雪玉子　は玉子の蛋白を丸す六分程の杓子で掬ひて茹る、但し寒天を加へねばならぬ。

○黄身玉子　は玉子の蛋黄ばかり如上の方法にする。

○焼浸し、は玉子を昆布に包み半日間程煮る。

○纖玉子　は玉子の蛋黄、蛋白共に箱に入れて蒸し、之れを纖に打ち、後に茹抜きたるを數回水にて洗ふ。

○摘入れ　は鮮魚ばかりの身を擂り、金屬杓子で大き目に掬ひ、茹て小口から切るがよい。

○榮螺の青和　は榮螺をゆで、小口より切て菜を擂込し味噌にて和へる、尤も山椒を共に加へるのである。

○鯛の子汁　は鯛の子を先づ薄き味噌汁にて煮上げ、小口切りにして、材料とする。

○乾肉　は總て水に浸し置くこと、半日間程が適度で肉は程好く和らかになる、

○干鱈　は適宜に切り、一夜水に浸し、能く鹽を出し酒に鰹魚節の削りしを加へ、二時間程煮る、醤油加減に注意すべきである。

○干鮑　は蕎麥粉に包み、終日水に浸して、用ふれば肉和らかになりて好し。

○鯛の白煮　は其の肉を骨切りにするか、おろし身にしてもよい、で孰れも先づ水にて數回洗ひ置き、偖水七合に、潮水三合を合せて煮立せたるに身を入れ、二回煮立ちておろし、暫時にして、右の湯を澄ませて用ふ、醤油を入れるは宜しくない。

○焼鮒　は水六合、酒四合を合せたるに入れ、半夜程煮て、醤油加減をして煮る。

○鹽鮭の仙波煮　は朝より鹽出しを爲し、偖煮汁と酒鹽を合せて煮立せ、之れにて能く煮る。

○戸川作りの鯉　は其の身を三枚か、又は何枚にもおろし、鯉の子を身の裏表へくるみ、巻て小口から薄く切り、渦巻の様にする、之れは他の品と取合せるに好ひ。

○淡雪肉餅　は魚肉の擂り肉へ玉子の蛋黄を多く入れ酒鹽少分と水にて緩め、能く擂合せて、其の上を茶釜にて泡立せ、其の泡立た時に銅杓子で好き程に掬ひ、直に煮る。

○團子豆腐　は豆腐をザット火取り、薄醤油にて味を付け、黒胡麻と味噌を少し加へ、能く擂りて、毛篩嚢にて漉し、醤油少し加へ、砂糖を合せて緩め、豆腐の砕けぬやうに和へる。

○細肉餅　は魚の擂り肉を刺身庖丁へ程好く附け、巾七八分位の薄き杉板へ移して塗附け、一寸焼目を見せる、(火に焙れば忽ち焼ける故注意すべし)、後に適宜に切り、取肴、置肴等に附合せて甚だ宜しい。

○青酢　は最上製の酢を撰みて仕立てねばならぬ、青みを加へるには菜を、辛子菜なりとも、季節の青き物を用ひて差支ひはない、之れを遣ふ季節は三月頃より八九月の間とする(青酢は原來夏時の物とす)。

○青味噌　は味噌に青身を擂り交せ、酢のみ加へては酢氣薄くして不味である、故に之れに飯糊を少分に入れ、ドロリと濃くして用ひると味も美になりて好い。

○辛子味噌　は味噌を能く擂り篩嚢にて漉し、辛子を解いて入れ、酢は漉したるものを用ふ、ヌタを製するには之れに限る。

○烏賊の青和へ　は烏賊を半熟に煮る、全く煮れば身強くなり、老人杯には不適當になる、青和は山椒の芽を味噌に擂込むは勿論なれど、其の芽無くば干山椒に他の青味を加へてよい。

○琥珀玉子　は少き猪口へ玉子蛋黄一ツ宛入れ、一寸鹽を加へ、二日間程經れば固まりて、琥珀の如くなる總て取合せによいものである。

○鮑の青和へ　は鮑を適宜に切り、其のまゝ和へる、で可成は一夜鹽出しを仕た海膽を酒にて解き和へるもよい、或は上等の粕を加へて味宜しきものである。

○獨活の纎　を取合せにするには、別に煮るがよい。

○煮返し酢　は酢一升、酒四合、鹽一合を共煮返し、能冷して用ふ、何の魚を漬るにも右の方にて適する。

○蠟師汁　は赤味噌を擂り、鮟鱇の膽を擂り交せたるものをいふ、最も美味にて宜し。

○煎り焼　といふは、譬へば重に鳥類を材料となし、之れを生醤油に古酒を少しく加へ、先づ鍋を煎り付け置、脂皮のみを煎り、脂出づれば、皮は退け、其の脂

にて肉を煎る、煎り加減は肉の裏表を返し、サット煎るを可とす、で之れを平皿の、茶椀に盛り、吸口に山椒又山葵を添へる。

○鳥類は、薄く、大き目に切り、温湯にて洗ひ、其のまゝザット煮る（尤も洗ふ節は脂を竹箆で扱くがよし）

○菜菁　は米汁で能く煮置、濃き汁にてサット煮れば味宜し。

○鯉の汁　は骨、肉共に筒切にする方風味がよい、で前に古酒にて下煮をなし、汁へ移す。

○常盤汁（俗に鯨もどきと云）　は赤魚の類を材料とするがよい、で先づ皮を去り、稍濃き汁を製りて入れる取合は岩茸及び掬ひ豆腐（豆腐を金杓子で掬ひ取るを云）を少分に入れる抔、其の他作意を出すも面白ひ、吸口は擂り山椒の柚子を適當とする。

▲女子美術學校の製作部　本郷弓町の同校にては此度製作部を新設し技術に優れたる婦人若干名を募集し同校卒業生之が監督となり世人の需に應じて造花、刺繡、繪畫、織縫、彫刻等の製作に從事せしむべき筈。

煎茶の心得

準繩子

抹茶の話は度々見受けますが、煎茶の方は少ない様です、ナニ煎茶などは造作もない茶を急須に入れて湯を注いで出せばよいのだ、と云はる方があるかも知れぬが、決してそんな譯ではない、煎茶も矢張抹茶と仝様に色々格式のあるもので、中々面白いから、ザット大概を御話致しませう。

○茶の効能

茶は御承知の通り支那から傳來したもので茶の効能に付いては支那では隨分面白い事を言ふて居る、併し昔は醫藥も十分でないゆゑ、或は主治藥として用ひたかも知れない、唯今でも是丈の効能があるものとすれば、寶丹　清心丹などは入らぬ譯です、即ち本草拾遺には、人眞茶を飲めばよく渇を止め食を消し、痰を除き睡け少くして、尿を利し、目を明かにし、意思を益す、とあり、又た本草には神農百草を甞め一日にして

七十毒に遇ふ茶を得て之れを解すなどゝ書いてある、又た蘇東坡は人固に一日も茶なかるべからず、毎食後濃茶にて口を漱げば煩膩既に去て脾胃自から消し、肉の齒間にあるものは茶を得てこと〴〵く消縮し、齒は茶に依て益々堅密にして蠹毒自ら止む、などゝ賞めて居りますから、畢竟食後に茶を喫するのは多分是等から起つた習慣だらうと思ひます、我國でも葉上僧正將軍家へ御腦の治藥として茶を進められた事東鑑に兎に角昔は貴重な藥品として取扱はれたものらしい。

○茶の貯へ方

茶は濕氣と移り香を非常に忌むから成るべく外氣に觸れてならぬと云ふ注意より錫の瓶か磁壺に入れて口を固く封じて置く、上等の茶になると支那では壺に入れて其の壺の周圍を笹の葉の能く乾いたので包んでそれを又た外箱に入れて冷濕を防ぐと申します。

○茶器

煎茶には茶器を擇ぶ事が肝要ですが、併し要は清潔で茶を甘く飲ませるのにあるから、決して無暗に高價な物や、履歴付の古物を購ふには及びませぬ、普通茶瓶は薩摩燒を最上とし、之に次では京都長崎伊萬里燒などですが、之れも成るべく小形の物を選びます、二三人の客に丁度一杯になる位の大さが宜いのださうです、又た茶碗は上等なれば支那燒を用ひますが、併し支那と申しても一概に上等斗りと申す譯ではありません、中には隨分粗造な如何しいものもありますから、よく〳〵良否を鑑定しなければなりませぬ、和出來では龜山平戸唐津伊萬里などの燒きが宜しい、兎に角成可厚手で内面の白色のものが一番好いのであります。

○水の擇び方

是は眞の茶人のする事で廿世紀の忙しい今日其んな眞似は出來ぬと言はれる方もありませうが、一通り昔の仕方を知るも一興でせうから、一寸御話致して置きます、茶に用いますには山水が第一、江水が第二、井水は第三と申してある、其れで山水は溪間の瀧、江水は成るべく人家に遠いもの、井水は成るべく多く汲む井の水を用ひます、要するに清淨なものを好しとする

より起つた選び方だらうと存じます、其故井水は何程良質のものでも二三回砂漉にして用ひよと言つてあります、尤も物數奇の人になると雪を融かして用ひたり、又は雨水を貯へて置いて用ひたり致します、猶ほ其雨水も梅雨のが一番宜いといふが、衛生上から申したら第一に排斥せねばなりますまい。

○煎茶と淹茶

煎茶とは讀んで字の如く茶を沸騰した湯の中へ入れて煎ますもの、淹茶とは茶を急須へ入れて置いて能い加減に湯を注ぎ茶碗へ注ぎますものですから、此の區別を知て居て戴きたい、唯今では煎じるものは十匁か十五匁の番茶に限られ、其れも一家内の食卓に供へます斗りで、決して客へ進めるとなどは致しませぬが、昔は矢張り淹茶も仝じ様に客にもてなしたものです、即ち客の前へ小い火爐を出して土瓶へ水を注ぎ、沸かしながら對話を致して能い時分に茶を入れ、之を客にすゝめたものです。併し煎茶は、つい茶味が出過ぎて苦くなるとか、又た土瓶の口から吹き溢れるとなどがありますが、淹茶には其心配がない所から、淹茶を好むものが漸々殖えて來て今日では煎茶をする者が殆どなくなりました、能く文人畫などで火爐に土瓶を掛け傍に團扇やら茶碗やらを置いて客と對話して居る圖があります、是は即ち眞の煎茶なのであります。

○湯加減

煎茶でも淹茶でも本式に致しますと、誠に湯加減の六ケ敷ものです、茶の三沸と言つて、初、中、過の三に分けてあります、沸き過ぎても沸き前でも不可ぬ、其中庸がよいので、東坡の詩に

蟹眼已過魚眼生、早々欲ㇾ作松風聲。

とありますが、即ち罐の湯が沸き始めると始は蟹の眼の様な珠が底の方から弗々と上り、暫くして其れが魚の眼位の珠になつて上り、其れから松風の聲の樣になります、此處が一番よろしい湯加減です。

煎茶なれば此湯加減を見計つて直ぐに土瓶へ茶を入れますし、又た淹茶なれば之を適宜に冷やして急須へ注ぎます。どちらも仲々旨い味のあるものです。

料理法雜感

水產講習所長　松原新之助

一　式料理と和料理

何處の國でも同じだが、料理には二大主義があつて、總ての料理は此主義の外に出でないといつてもよい。即ち一は儀式を主とした者で、一は風味を主としたる者である。儀式を主とするといつても、風味の惡いのをも妨げずといふのではなく、風味を主とするといふにも、少しも體裁を顧みないといふのではない。而して我國に於て、今日まで盛に研究せられたるは、寧ろ前者にあるので、五魚（鯛、鯉、乾魚、鱒、王餘魚）三鳥（鶴、雁、雉子）を使ふので婚禮の時には魚卵を使用するなどは即ち式料理にあつて、我國特有の料理法である。而して、後者、即ち和料理は實用的なると同時に、其應用の範圍が廣くして且つ適切なるにも拘はらず、此方面に向つては餘り研究する事がなかつた。料理法指南といはゞ、式料理の講義に定つて居つた樣な者であつた、之は吾人の賛成し能はざる所である。

二　料理は實用的なるべし

今更改めていふまでもないが、將來の良妻賢母たらんとするものは、實用的に料理を研究せねばならぬ。式料理も一通り知る事が出來たら結構であらうが、式料理なるものは、其應用する場合が極めて稀であるから、其必要ある際には、これを其の道の專門家に任せても敢て差支ない。實用的研究を度外視してまでも、式料理を覺えなければならぬといふ馬鹿氣たる事はない。而して其實用的料理には、

第一、味を良くすること。材料を精選し、加味品を吟味し、夫々特有の味を發揮さすること、

第二、經濟的なること。比較的廉い原料を用ゐて、比較的甘く食はすは料理の神髓である。

此二つの目的を達せんには、如何にして調理すべき也といふが、實用的料理研究の眼目である。

三　獨逸料理協會

吾人は獨逸の料理協會——人民の臺所といふ義——の

組織及其主義を發する者である。料理協會は廉くして甘い者を公衆に食はすといふ慈善主義と、如何にせば、最も廉い原料を以て最も甘く調理し得べきかといふ研究主義を表示して居るから、同會に行けば他の料理店よりは廉價にて食慾を充し得べく、又た同會で研究したる調理法の書類を購め得るのである。嘗て同會が研究の結果發表せる淡菜の調理法は、從來世人の度外視し來りし廢物同樣の淡菜を原料としての料理なるが、其味極めて良しとの事で、時の皇帝が親しく臨んで其料理を召させられ、これに「人民の牡蠣」なる名を賜はりし事さへある。其研究方法に付いては我國の如き故實などを喋々する料理通なる者の思ひも及ばぬ事をやつて居る。今日は餘程其主義を變じ、重に慈善的に走つて研究を等閑に付するの傾きあるは惜むべき事であるが。しかも、其研究の態度を我國に移したいと思つて居る位である。

四　料理法の進歩

社會の進歩するに從つて、料理法の進歩するは固より其處である。露西亞のザクスカなども料理としては進歩した者であるし。即ち佛國には、食前、ザクスカと稱して、鰛油漬、鰊酢漬、燻製鮭などの極めて味の輕き者十品二十品若くは三十品を供し、以て食慾を增進せしめ、然る後食卓に着くの習慣あり、却つて本食の美を壓するの傾きあるなり、食事の贅澤に赴きたるにはよるべけれど、亦以て如何にせば、最も甘く食事を爲し得べきかを研究しオールドーブルと稱したるの結果に外ならないのである。此食前に輕き者を食ふことは北部歐洲には多く行はれ佛國にても食前に鹽味の輕き者二三品を供食するがこれも食慾を增進すると云ふ意味に於ては同樣なれども露國のとは少しく其趣を異にして居る。

五　珍品の賞翫

珍品を賞翫するは東西相同じけれど、亦其異れる點なきにしもあらずで、日本では走り鰹といはゞ、着物を典しても食ふが如き慣習は他國に多くこれを見ず、且つ走り野菜とて、正月に胡瓜などを賞する事あるも、

これ自然に產せるにあらざれば、其味は皆無なり、隨つて珍しいといふ外、何等の趣味だにない。然し佛國などに行くと、珍品とは珍しきが上に其味亦珍重すべき價値あるものでなければならず、珍しいとのみで、風味の劣つて居る者は無論採らない。露國では嚴寒積雪の中で大な胡爪や美事な果物を作つて食卓に供す佛國は有名なる牡蠣の產地で、コレンス牡蠣、アルカシヨンといはゞ世界一の名聲を博して居る者ではあるが、其實佛國の上等料理には、遠くより取寄せたる亞米利加牡蠣などを使つて居る。其特に上等なる料理になると、原料は悉く外國產を以て充つといふ風になつて來た。

六　罐詰品の賞用

珍しき者を食卓に上ずに就いては、罐詰品が最もよい。固有の味を害せずして保存久しきに堪ふる者は罐詰に加く者がない。今日では罐詰業が進步せるより、世界各國至る所の佳味珍羞は悉く罐詰としてこれを外國に輸出するとを得べきにより、今もし金を吝まずして蒐めたらんには、世界珍品の粹を口にする事も出來る。されば近年贅澤なる食品は多くは罐詰と爲したる者を用ゆる風に傾き、料理の精を以て誇る露西亞、澳太利などに行つて見ると、必ずや其多分は罐詰品を使つて居るを發見するであらう。罐詰はかくの如く贅澤なる目的を以て使用せらるゝの外、亦美味にして最も低廉なる者を供給するとも出來る。鱒、鮭の罐詰が我國人に賞用せらるゝは此實例であるが、要するに何れの目的に向つても、罐詰品は今後益其需用を增進する傾きがある。

七　料理と水產品

日本の料理の原料に多く魚類を用ゆるは、誰しも知る所であるが、西洋料理の原料に多く肉類を用ゆるも亦誰しも知る所である。されば日本料理は魚料理で、西洋料理は肉料理だなど早合點する者もあるが、それは一概にいふ事が出來ない。西洋料理の原料に肉類を多く使用するは疑なき所なれども、肉類なしとして、西洋料理の出來ぬ事はない。予輩は常に水產物のみを原

料として、極めて高尚なる西洋料理をなし得べしと信じて居るので、現に一昨年冬我水産講習所に朝野貴紳を招待せし際には、本所の製品を原料とせる立食の饗應を爲した。其際の献立を見ると、

綠蠵龜ソップ　牡蠣ソップ　鱈メートルドテー
鰈フイレーグラテン　折立貝殻入蛤　魚リソール
鰈肉アサビソース　魚チールアレ大パテ　鱧ゼリ
紙上の鱚　酢漬鰊　鯨サラダ
桃フラン　桃ゼリ

（右の中、同種のものを二通りづゝ出せるは、料理の原則として、同種のものを併行せしむるの主意より――、即ち客は其何れか好める者を味ふものと知るや）

などある。西洋料理の原料に水産物を利用するは普通の事で、何も珍しい事ではない。

八　交通の便は魚肉の需用を増す

現に倫敦に行くと、いくらも水産物專門の料理店がある。特に牡蠣專門の料理店などに行くと、日本の牡蠣飯の比にあらずして、總てが牡蠣を以て製したる者にして、其料理法も亦中々研究してある。從來凹部の殻に牡蠣を載せたる儘客の前に供したるに、かくては殻に一種の臭氣を存すといふので、近來は扁部の殻に載せて出す樣になつた。又獨逸に於ては、有名なる漁港チーストミユンデに斯種の料理店がある。且つ露西亞の如きは、有名なる魚食人種である、魚スープなど其魚料理の進歩するは驚くの外はない。蓋し從來海岸に遠ざかり居りたる歐洲大陸に於ては、魚を得る事が六ケ敷かりし爲めに、其を食膳に供する所亦隨つて稀なりしと、今や交通の便開け、遠洋漁業の發達を見るが故に、如何なる山間に於ても、魚類を需用する事を得るに至りたれば、隨つて魚類を原料とせる料理も亦更に大に發達しつゝある。

九　新日本の婦人に望む

かくの如く和洋、何れの料理に於ても、其原料の何たるを問はず、要は料理法をさへ研究すれば其目的を達し得らるゝ者であるから、今後親しく料理の局に當る者は、有合せの品を利用してこれを調理するの覺悟なければならぬ。即ち西洋料理を爲すにも、洋栄なくんば出來ぬといふ樣な融通の利かぬ事でなしに、日本の

野菜を用ゐて、甘く調理する方法を研究して貰ひたい。かくの如くんば、庶幾くは、經濟的にして其原料に特有なる味を害することなく、比較的廉價にして比較的美味なる調理を爲し得るであらう。新日本の婦人として、庖厨を司るの任に當らんとする者は、これまでの如く式料理などに拘泥する事なく、實用的に料理法を會得し、泰西の中流婦人が總て料理を擔任し、原料の買出にまでも行くが如き美風に倣ひ、家庭の主人公として愧つる所なき樣にしたい者である。料理研究の方法は實用的なれ、經濟的なれ、これ予輩が新日本の婦人に望む所である。

ほとゝぎす

日本派俳壇の錚將、高濱虚子、河東碧梧桐、内藤鳴雪等の諸氏に依つて俳壇に一ノ旗幟を樹つるものを雜誌ほとゝぎすとす、寫生的美文を以て早く既に文壇の一隅に雄視す俳壇に創刊以来八年の星霜を重ねて今や益々清新の趣を添へ來れるは喜ぶべし、本號載する所漱石の「吾輩は猫である」の寫實文尤も讀むべし、鳴雪の「田舍源氏に付て」の批評あり、東京俳句界の吟咏あり、地方俳句界の投吟ありて、全篇獨特の趣味の流るゝを覺ゆ、文に遊ぶ人俳句を嗜む者には無二の友なる可し。（三月一日八卷五號について）

川柳（家庭文藝）

井上劍花坊撰

題『繪はがき』

○

天

美人葉書小人島では額にする

岩代國郡山町中町十四番地　横田くら子

評云、時計臺を火見櫓、鼠を馬、小人島を滑稽の材とするは珍らしからねど、美人ハガキを掛額とは嶄新の見立なり、且つ寸馬豆人の別世界、オモチヤのやうな家に住み、繪ハガキを楣間に揭げ、嬉々として相好をくづす風流士そこにもあるなど、理想の樓閣中にあらはれて、閨秀の纎巧なる詩才、こぼるゝばかりおかし美くし、

地

繪の上に消印のあるつらい事

小石川戸崎町十八番地　淺井琴

評云、淡如として水を呑むやうな句といへばそれ迄なれど、寫生文中無限の懊惱をほのめかし、月に叢花に風の譬を「繪の上に消印」としたる手際、殊に繪ハガキとあからさまにいふまじとの用意、寸分のスキも無し、他に類句多けれど、此句の右に出づる者を見ず、

人

繪葉書の美人裸體で道中し　能登國輪島町　杉下ふみを

評云、女流の句としてはあまりに覇氣あり、稍し過ぎたりと人や云はん、されど裸體美人の繪葉書を掲げ來り、青天に霹靂を飛ばし、白日に龍蛇を走らせし脇前、嘴に人間の弱點を指摘して、男子の好會を諷刺したる處、香爐掲簾の人の筆にも似たり、

秀逸之部

繪葉書の美人四錢で洋行し　京都　西澤まつ子
雲か山か御手製のはがきの繪　日本橋　鏡子
繪葉書を書いてやらうも凄じい　同　同
消印がちやうど美人の顏のとこ　岩代　横田くら子
田舍者書面一ぱいに書き散らし　同　同
繪葉書に字を書くまでの一苦勞　小石川　淺井琴
一言であとは繪はがき物を云ひ　同　同
繪葉書に餘白が無いと書てやり　麻布　金澤とく子
金釘であたら美人に瑕を付け　同　同
岡燒の消印美人の顏へ押し　函館　佐藤美佐
弦齋著繪葉書道樂なども出來　大和　増井芳枝

○

附錄の繪葉書いつも妹にしてやられ　神田　増田富美
繪葉書の美人をよごす亂れがき　駿河　栗田よし子
繪葉書を判じものかと下女思ひ　麻布　近藤てい
繪葉書は何處へも大手振つて行き　山口　みさ緒
東鄉の繪葉書世界をかけ廻り　千葉　夏月たけ
此美人はなどゝ繪葉書批評なり　小石川　淺井琴
若樣に其書はがきを奉り　同　同
つくゞゝと繪葉書に見惚れて居　同　同
買ふ氣でも無いに繪葉書の値を尋ね　同　同
繪葉書にむつかしい字をにぢり書　同　同
繪葉書を利用名所の案內記　同　同
端書の美人局員見とれて居　岩代　横田くら子
美人葉書ばかり何時でも賣切らし　同　同
繪葉書の交換いつも惡しきが來　同　同
繪葉書に三行半はつらい事　麻布　金澤とく子
是も畵だからと端書にへゝのもへ　同　同
雅俗折衷繪はがきで催促し　同　同
菫なのそむテーストがあるワねエ　静岡　林とせ子
お芋も好そして繪葉書も大好なの　同　同
拙けど兄ちやんがこんなお葉書を　同　同
東鄉ハガキ美人の種は賣れぬなり　越後　坪井わか

紀念繪端書大商利など俗な事　同　同
安否は母君繪はがきは妹へ　深川　小見　美津
大事な繪葉書坊やがワヤにする　同　同
書はがきで先づ心意氣いはせとき　京都　三宮つゆ子
せぬ筈の宿美人に局で貸し　同　同
又美人かと兵士眉を寄せ　同　同
へー是が奥樣でと繪端書を爺ゃ云ひ　門司　宮地　善子
繪端書で酒をのんでるひとり者　同　同
繪葉書に藝者かいたる見ぐるしさ　同　同
繪葉書に不足稅とはあぢきなし　同　同
繪葉書にみとれて目じり下て居る　靜岡　野口きた子
繪葉書の繪で惡筆をまぎらかし　同　同
墓口ありつたけ繪葉書買ふて行き　同　同
繪葉書は美的書牘と通を云ひ　大和　増井　芳枝
繪端書に思ひのたけは書けぬなり　同　同
繪葉書の共進會便利堂が一等賞　同　同
女學世界繪葉書の投書が來　靜岡　増田　富美
美人繪葉書なめられはられ送られる　高田　吉井　やえ
繪葉書に思ひ書くこと更に無し　越中　北川而喜子
敎科書の中に繪ハガキだらし無し　豐後　長野ますみ
妹の注文土産には繪ハガキなり　同　同

繪葉書でお清書よこすなつかしさ　深川　小見　美津
繪葉書の隅へ交換と小さく書き　兵庫　大西　敏子
寄贈はよいが繪葉書廣告なり　青森　鈴木　傳子
繪葉書の隅へ何やら書いてある　越後　竹田きみ子
こんな繪ハガキに不足稅いやな事　上總　り　う　子
エハガキ露助の名ではあるまいし　麻布　吉澤　まさ
繪にかゝらぬやう手紙かく窮屈さ　京都　井上ちか子
繪端書電報程の字やつと入れ　同　同
繪葉書のぬしはうす墨染子孃　桑名　山崎　初子
肖像入繪端書自分出かける樣な物　千葉　夏月　たけ
繪葉書を交換したがおこりなり　同　同
しば／＼キッス繪葉書ワヤになり　同　同
其令孃いつか繪葉書になつて居り　大阪　磯野かほる
繪端書の流行伊勢屋知らんで居　同　同
繪葉書に吶喊されるいゝ男　同　同
筆ぶしやう繪葉書へ無事とかき　雑司谷　伊東　せん
繪葉書の美人はみんな捕虜にされ　函館　佐藤　美佐
繪葉書交換指輪より手輕なり　伊豆　加藤ゆき子
繪葉書に内しよの事は書けぬもの　上總　り　う　子
東鄕夫人の繪葉書が無が不思議也　深川　小見　美津
つゐに政府繪葉書專賣案も出し　京都　井上ちか子

繪ハガキの一ぱいを美人占領し　同　同
繪ハガキに景色をすくは奥床し　静岡　林とせ子
繪葉書の意氣なる野暮な文句なり　駿河　栗田よし子
大きな寫眞だと繪ハガキを赤毛布　大和　増井芳枝
東郷繪葉書レデーが珍重し　千葉　夏月たけ

撰者吟

繪葉書を見ても遍照天津風
昭君の繪ハガキ胡地へ持ち歸り
書があるで伯父の葉書を大事がり
繪端書も面の次なは賣れ殘り

次回の川柳課題

〆切三月十五日

『人形』
『蝶』

賞品は別欄の規定による

謎々

（讀者文藝）

『沙河の對陣』とかけて

▲第一等

奈良縣磯城郡川西村　増井芳枝

仲のわるい嫁姑」と解く
心は「時々衝突する

評云、一讀何等の値なきが如しと雖、婦人にふさはしき嫁姑云々と解き、しかも其心に時々衝突と輕く云ひ去りたる、いふばかりなくめでたし、衝突の二字嫁姑の間をいふに用ひらる丶今様の言葉なりこの嫁恐らくは所謂教育ある女ならんかし、

▲第二等

在函館　行本むつ

ながく育てた孫娘」と解く
心は「早くかたづけて安心がしたい

評云、これも女らしくて面白い、一等ほどに輕くはなけれどなか〳〵考へたものにこそ

▲第三等

京橋區　松本はる子

臆病同士の眞劍勝負」と解く
心は「うたずに睨み合ふ

評云、下手同士とも、上手同士ともなり、所謂動く謎あれど、謎々には採ふまじ、

以下秀逸

▲　麻布新網町一ノ十八　金澤とく子

高架鐵道の工事」と解く
心は「石工(斤候)は始終用が有る

▲　福岡縣杜田炭坑　猶村いち

加藤清正と虎」と解く
心は「退治(對峙)

▲　京都御幸町松原上ル　井上ちか子

國姓爺」と解く
心は「先づ甘輝(寒氣)と戰ふ

▲　大阪堂島　小山登代子

皷」と解く
心は「皮(川)の兩方からうつ

▲　福岡縣北方　渡邊たか子

郵便切手」と解く
心は「はる(貼る、春)を待つ

▲　宇都宮　すみれ

丈夫向の行李」と解く
心は「皮(川)があるで永く持つ

▲　佐世保　渡邊きよえ

上手同士の仕合」と解く
心は「互に油斷が無い

▲　越後深見　中澤のり

段違の碁打」と解く
心は「攻め合になる黒(黒鳩)の負けになる

▲　日本橋　石田友子

七月」と解く
心は「シロ〲秋(厭倦)が來る

▲　羽前　須江のぶ子

大關力士」と解く
心は「相手の立つのを待つ

次回の『謎々』課題

『露國の擾動』とかけて

『晩餐』どかけて

賞品規程は別欄の通

陣中の生活

（修飾なき自然の名文）

在滿洲　友金豊之助

私は兵庫縣武庫郡寶塚出身の者で平素女學世界を愛讀して居ります今度憎き暴露を撃つ重大なる任務を帯び征途に上りました、近頃の寒氣誠に大したもので極く寒ひ時には寒暖計零下二十四五度下り結氷は二尺程に達し地層は三尺位まで以て、兵士が壕をほる作業など殆ど不可能で、誠に困難です、されば内地にある出征者の家族の中には、當地の寒さを傳へ聞き、慕しき夫、親しき父、敬すべき兄、愛すべき弟の身上を思ひ憂ひ給ふ婦女子たちの御心如何ばかりならんと察し、私が現在起居する有樣通りを記して滿洲なる出征軍人冬營生活のあらましを御知らせ致し度く思ひます幸に私の心を諒せられ、女學世界誌上に御記載し給らば幸甚の至りです拙き寫生畫二個參考としてかき添へました。

見渡す限りはて無き廣き野原は白砂をまがう雪を以てをほわれ、地面をはらうて吹き來る寒風は颼々と肌を通し、耳もちぎれるばかり口より出ずる呼吸氣は口の廻りにつらゝとなり下る其寒さ、一通りで有りません、されば此寒地で起居するには充分其寒さに抗して凌ぐ裝束をしなければなりませぬ、我が仁慈なる聖天子を始め奉り注意深き當局者は此れに深く御心を用ひ給ひ、各將士卒には充分なる防寒服を給與されたのでさすがに酷しき寒氣も左のみは感ずる事無く、凌ぐ事が出來て居ります、然し前哨勤務などで歩哨に立つときは足の冷たさなか〳〵こらえきれませぬ、靴下の三四枚もかさね其上にメリヤス製の、つま先きあて、などはき込で居りますれど指先きは、うづき出し終には感覺を失ふてしまわん計りとても兵士用の靴にてはやりきれませぬ、いつもじだんだ踏で交代の時間を待て居りましたが幸ひ土人の用ひて居る手皮製の支那靴が餘り寒を感せぬで

あろうと試みましたところ、好成績で、柔かき藁を入れて穿ちますれば左のみ冷きを感じませず、凌ぐ事が出來ます、それゆへ、只今にては歩哨勤務は、皆支那靴が備へられて有ります、又此頃になり藁製の長靴の樣な物が給與されました未だ用ひませぬが、定めし溫ひ事らうさと思ひます、乘馬の者には長靴の形にして、木綿に、綿を入れて造られたるものが給與されて有ります兎に角指、足先、耳、鼻などは凍傷にかゝり安きもの故大に注意されて有ります、衣食住の中の衣の事は是れ位にして食の事を申上ましやう食糧も日清戰爭の時よりは餘程結構で



チャン鍋を徴發し飯を炊く處薪はチャンの長持ち箱など也

各兵士一人前に給養されるものは左の如くで有ります

白米六合、生肉四十目（隔日二）薪四百目、木炭百目、野菜三十目、エキス四匁、茶一匁、粉味噌五匁、砂糖四匁、鹽二匁、酒は約一合（一週間ニ二回日曜日）菓子（木曜日）捲莨一個（火曜日）乾物二十目、

先づ右の通りですが、飯は時により衛生の爲め六合の内一合五勺は麥を用ひ、各中隊毎で炊事場を設けて炊く事になつて居ります、所によつては、水に困難をして居ります私等が先日まで居りました村落では非常に水が少なく、各隊より炊事時に汲み行くときは、直に缺乏する有樣

ゆへ、一日の内時間を定め、其時間内で無ければ汲ませぬ事として有ります。

其れ故時間頃となれば、我れ一と二十分三十分間も前より井の圍りに集り、すわ時間と云へば一場の大混雜末には口論をする者などが有ります、少し汲み遲れると濁り水、其でも無ければ困る故汲み歸り、煮て用ひます、水の少ない時は米を洗ふに一回より洗われませぬ、然し今居る村落などは水には不自由は有りませぬ、おかずは各分隊毎で炊く事になつて居まして、分隊の内一人づゝ舍內當番と云ふ者があつて毎日交代で其れが三度のさいを炊る事として居ります、



日本兵に舍營に當られ荷物を積み我が家を開け渡す憐むべし支那人の立退く處

其材料は毎日午後三時頃分配される副食物で右に記した通りの品で有ります。

肉は牛肉豚肉で有ります時々魚類を給與されます、魚類は鯉、鮒、白魚等で、鮭の鑵詰もあります。

野菜は支那菜、支那大根で、菜は丁度內地の廣島菜の樣で、肉と煮る時は一寸美味で有ります大根も內地の蕪菁の樣で外皮が赤く此れも柔くてよろしうムいます。

乾物には千切、刻み昆布などで外に黑まめ、薩摩薯の切り干し馬鈴薯の切干等で何れも餘り感心しませぬ。

粉味噌は生味噌に比べて劣りま

すが寒ひ時などに肉汁が一寸出來ます。

エキスも生醤油に劣りますが、携帶に便が有りまして、便利な品です。

茶は壓搾茶で是も餘り感心仕ませぬ。

酒も内地の上等品ですが寒氣の爲め、氷りとなり、樽の内でざく／＼音が發する位ですから、味も自然をちた樣な心持がします、私も始じめて酒の氷をかじりました、しかし私は元來酒を呑みませぬが戰友の話で酒の氷を食ふたのは内地へ歸りての話種と思ひ顏をすかめてやりました。

莨はビーコック、リ、ー、敷島、チエリー、天狗などの莨ですが私は又莨もやりません。戰友に與へますと爭ふて取り勝で有ります、莨好きな人は莨に困難をせられる樣に見受けます、然し、欲しくば酒保に行くと何時でも有りますが、一寸懷中と相談せねば成らん事も有ります、先づざつとこんなことで隨分三度／＼思ふ樣にさいを煮て、温き飯にそへて爐を取り圍みながら車座になりて、食しますと、滿洲の寒さも忘れてしまひますが、一寸菓子の事を言ひ忘れました、菓子は粟おこし、ビスケット、ぼうろの樣な物です、其他時々恤兵部より菓子が戴けます、これで食物の事はおしまひ扨てこん度は住、即ち家のことです家は最上等は支那家、最下等は土穴で有りますが、第一戰線に居るものは皆土窟で有ります、支那家も段々有りまして、先づ旅團本部、聯隊本部、大隊本部中隊本部と下つて來て兵卒の、居る家などは、高粱がらや、煉瓦にて修理しなければはいる事か出來ませぬ、幸な事には冬で雨が降らぬ故、居れますが夏になり、雨でも降る時には内に住で居る事はできませぬ、土穴の方は、兵士の手作にかゝるもので、汗を流して地をほり其上を高粱がらにて、そほひ、土をかぶせて作りたるもので、なか／＼温かいです、疊は無く、支那製のあんぺら(高粱がらにて作りたるもの)を上敷となし其下にはきびがら、糧食の入り來りしかますを敷て居ります、

(次號完結)

海外事情

倫敦側面繁昌記

河西省軒

毒霧中の大都市

横濱から汽船に乗つて瀬戸内を拔け、黒潮を横切つて印度洋に出で、蘇士から地中海に入り、太西洋を北に歐羅巴大陸を右舷に、「ダヴアー」の門をくゞつて、「テームス」河を幾時間か溯ると、其處に世界の都府の王我が同盟國なる大英國の首府、倫敦が立つて居る。河を挾んで東西が五六里、南北が二三里、三千八九百町歩の面積に犇々と列る屋棟は、瓦の浪を打つて、其中に住んで居る人口は五百何十萬、それが馬車を驅り、自轉車自働車を馳せ、若くは親讓りの栗毛に跨つて、飛び交ふ街衢は修羅戰場。道路は昔は花崗石の切石で疊んだそうであるが、今は改めて土瀝靑で固め、木杭を列べたれば、風に塵も立たず、雨に泥濘も現出せず。さて橋には汽車電車の鐵橋の外に、古來有名なるのが十二、其最東にある新倫敦橋といふのが、東京ならば日本橋で、今より六十六年前に千四百五十八萬圓かけたといふのだから、夫は〳〵宏大なもので倫敦へ行く程の人は、何を措いても、之と水晶宮の寫眞丈は土產に持つて歸る。公園は日比谷などよりもずんと大いのがいくらもある。市民散步の地を數へたら百以上あるだらう。倫敦の舊市といふのは、東京なら丸の内とも見るべき目貫も中心點であるから、夫こそ土一升に黃金一升といふ地であるのに、其處にある公園丈でも十もあり「ハイド」公園といふのは、百五十六町步といふ大さのものである。何しろ倫敦の繁昌は大したもので、一年間に大火事が百五十度、小火事が二千、毎日使ふ水の代が四五萬圓、喰べる肉が廿四萬貫、麵包が少くとも五十萬貫、石炭が一日平均三萬二三千噸、冬は五萬噸以上に上るに相違ない。今を距ること六百年前、其頃の倫敦の人口は僅に五萬以下であ

つたが、石炭の流行り始めで、ポツ／＼勝手や坐敷に用はれるやうになりかゝつたところが、忽ち苦情が持上つて來たといふのは、石炭の煙りは如何にも臭い。馴れぬ鼻には、何とも我慢が出來ぬ。苦情はいよ／＼大くなつたが、味を占めたものは容易に使用を廢めない。そこでとう／＼「エドワード」一世王に、石炭使用禁止令發布請願と出懸けた。今から考へると實に馬鹿馬鹿しい話だが、當時は當時、今では無いので、王は請願の趣尤至極せりと仰あり、犯す者は最重刑を以て問ふべしといふ、恐ろしい禁止令が下つた。それで當坐は此石炭といふもの、上等の黒光りに光るのを細工に使つた位のもので、市中に此可厭臭氣を絶つたが、其後、今より三百四十四年前、「ジョン、エヴエリン」といふ男の書いた本の中に、石炭の煙を罵り、「之が爲めに菓物は熟さず、人民の健康は非常に衰えたりと言ふて居るから、「エドワード」一世の禁令も、とうに廢れて了つたものと見える。然し「エヴエリン」先生は、石炭の煙を罵り盡したにも拘らず、此煙が倫敦に名高い濃霧と合同して、非常の害を及ぼすとには言ひ及ばなかつたのを見れば、使用はまだ／＼至つて僅かであつたのである。然るに其後年一年、之の量は增大して、始め半里四方位の天に棚引いた煙は、一里四方となり、二里四方となり、三里四方、四里四方となり、其濃さも段々增して、遂には立騰る濛々たる黒煙りが、天空に充ち曇はつて、之が風の無い時には、五日も一週間も散らずに殖るばかり、日光は全く遮られて、全都一面恐ろしい黒雲の中に包まれ、すさまじいとも、物すごいとも。おまけに、名物の霧でも來やうものなら、それこそ北西伯利の常冬で、街頭には一面ガスを點けても、猶人は馬車に敷かれ、馬車は自轉車と衝突し、何とも形容の出來ぬ樣になつてしまふ。明治十二年の暮から十三年の正月に亘つての濃霧、夫から明治十五年の二月七日から十三日迄の濃霧などは、今だに話草にする程のひどいもので、十五年の時には其間の死人の割合は、いつもの三割も多く、呼吸器病者の數が、平時の四百三十人から九百九十四人、即ち

倍以上にも上つたといふことである。これは全都を包んだ石炭の煙の爲めであること言ふ迄もない。

倫敦の表面の繁昌は此の如きものである以下少しく地の下へ潜つて裏面の繁昌を紹介して見やう。



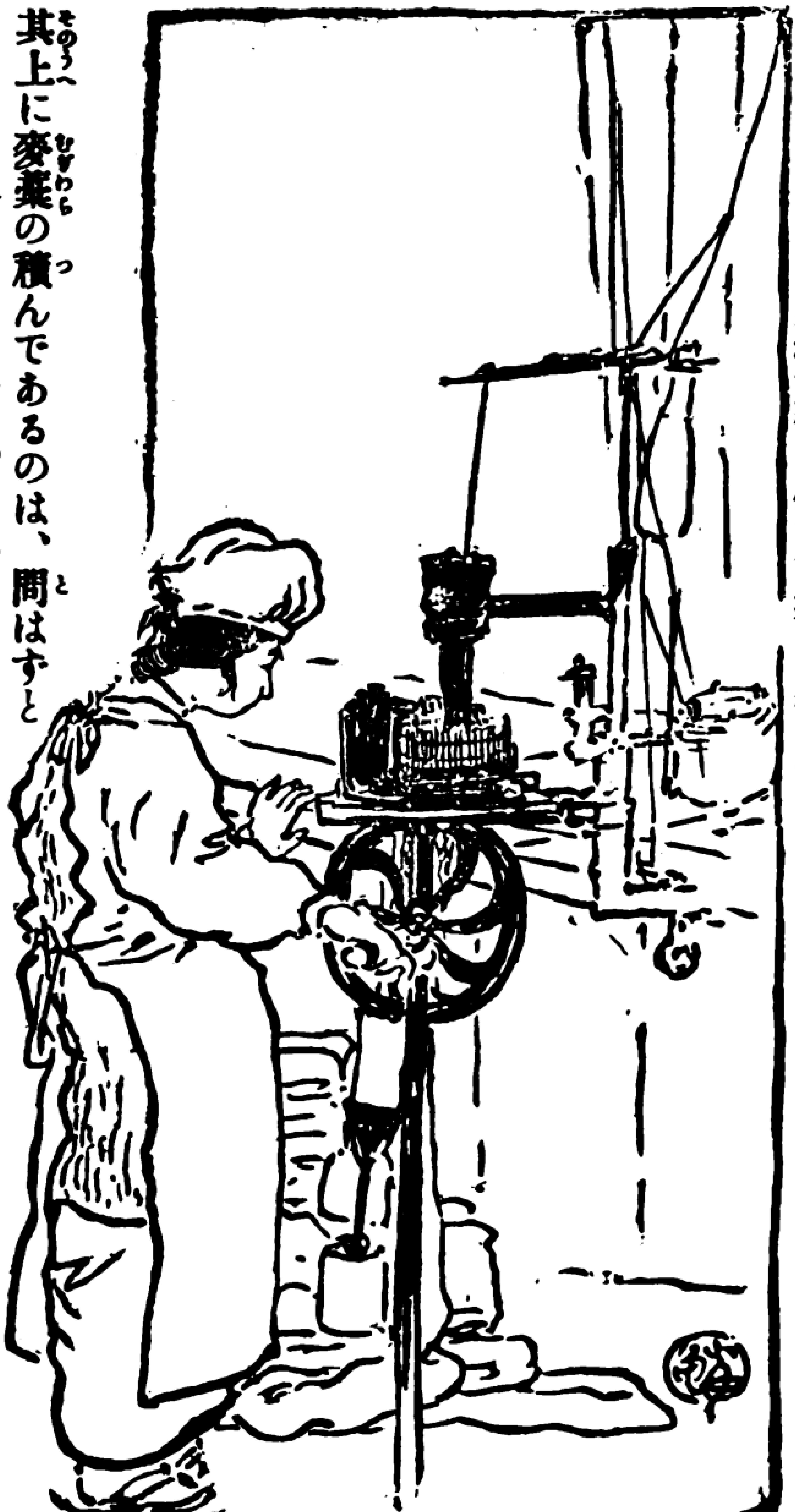
重焼パンの蒸汽罐（軍用品製造圖繪の一）

穴藏の合宿所

倫敦は世界一の而も古い歴史を持つて居る大都府である、古い大都府は舊家の藏と同じである。舊家の藏には金銀珠玉も山の如くあると同時に、天井裏や隅には百年の鼠の糞も、二百三文の瓦落多も堆積して居る。即ち大都府は寶藏で、同時に掃溜である。以下譯載するのは、某米國記者の倫敦紀行の一節で東京ならば萬年町ともいふべき地域の安泊り、しかも掏摸泥坊萬引連中の屯の光景。『自分は（其米國人）警察署長から借りた探偵の案内で、貧民窟へと向つた。月は既に傾いて、瓦

斯燈の影は暗く、夜は更けて、人通りはない。行くこと四五町、横に切れると、いよ／＼これからで、街燈も無ければ、眞闇々の巷路は、何とも言へぬいやな臭氣が鼻を襲ひ、酔漢が一人、二人、五人、六人、漸く多く、突然來て情人の家へはどう行くなどゝ吹懸かるもあれば、德利提げた鼻歌の、立塞つて一杯飲めと突付けるもある。御話にならぬ惡口叩くのもあれば、よろけ懸つてしけ／＼顔をのぞいて行く奴もある。彼方に喧嘩を賣るのがあれば買ふのもある、此方に呻くもあれば泣くのもある。大道に酔倒れてぐう／＼寢て居るのもあれば、之に躓いて轉ぶもある、試に懐中ランプを點けて道路を見れば、腐つた肉やら、魚の骨やら勝手に投げ棄るものと見えて、いやはや實に形容の外である。やがて一軒の家の前へ來ると、案内の探偵は此處だといふので、後へついて横の石段を地の下へ下ると、十五六段で穴藏の戸の前へ出た。戸には一枚の厚硝子が箝めてある。外をのぞく爲めであらう。トントンと叩くと、内では何をして居たものやら、俄かに大騒ぎ、それが靜まると、一人の男がやつて來て、件んの硝子から我々を窺くこと一二分間、今頃何の用で良民の安眠を妨害するのだ。と尋ねる語調で見ると、大分怒つて居るらしい。探偵はそこへ行くと馴れたものだ。イヤ御邪魔して何とも濟まんかつた。實はナ、王陛下が貴様を華族に取立てるから、其旨傳へて來いと言はれるので、眠いのをそこらへてやつて來たのだ。と滑稽けて答へると、機嫌を直して、遊びに來たなら御入りなさい、御用事なら又來て貰ひたい、イヤ遊びに來たんだ。此方は米國の大統領の身内の方で、英國の王陛下は勿論、佛蘭西獨逸の大臣大將、日本の東郷さん、乃木さん、支那の袁世凱、西太后、あらゆる貴顕紳士とは逢つたが、唯一人貴様に逢ふ機會を得ぬのを殘念がつて居られるので御連れ申した。ハヽヽこれは失禮致しました。サアどうぞこちらへ。實は御用の筋を誤解しましてと、戸を開けて先に立ち、粗末な蠟燭を差上げながら、案内して僅か行くと、驚くべき光景入ッた室は、以前酒でも造つたらしい大きな穴藏で、

縦が十五六間、横が十二三間、眞中に大きな爐があつて、其の周圍の乾いた土間に大胡坐かいて居る者が五六十人、爐に大鍋を掛けて何か煮て居る樣子。垢だらけの髮の毛の逆立つた顏に爐の火の映る所、宛然此世からなる一幅餓鬼道の圖である。此一群の後方土の上に、三十五六の粗末な寢臺。其上に麥藁の積んであるのは、問はずと夜具布團で、ガサ〳〵動くのは、寢て居る者があるらしい。寢臺の向ふ、室の奥には、泥の上に木片を置いて、其上に蹲つて居るものも少くない。總人數は百四



メリヤス靴下の器械作業　（軍用品製造圖繪の二）

五十もあらうか。立つて何やら喋つて居るものもあり、居眠りして居るものあり、膝を抱いて話して居るものあり、自分の薄い影を見て涙ぐんでる女があり、けたたましく泣きむつかる赤坊を賺しながら、守り歌を唱つて居るものもあり。泣くもの、笑ふもの、怒るもの、默つて睨んで居るもの、千態萬狀、何とも申上げやうが無い荒涼たる光景。凡そ臭氣といふもの、段々鼻に馴れるものであるのに、此處の怪臭だけは、益々堪へられなくなるのである。

其中へ件んの主人は、二脚の壞れた腰掛を持つて來て自分達にすゝめ、探偵に向つて、今夜は大分冷えるにズッと火の傍へ寄りなされ。今打つたのが二時で、我我仲間の夜食の時間だから、何か御馳走しやうといふ見てさへこみ上げて來るこれが、何で食べられやうかそれに、夜中の二時が夜食の時間だといふ、如何に人間最下等社會の者共とはいへ、驚くべき亂暴と、あきれて、主人に尋ねれば、一日六度つゝ食べて、其上に間食をやるとのこと。兎角の中に彼等の夜食なるものが濟むと、主人は蛇を呑み劍を呑むといふ一人の男を呼び出して引合せた、試に此男に向つて、其來歴を尋ねると、御所望なら隨分話さうが、喉が澁つて酒でもやらねばとの返事。すると、傍に居た片目片足の男が德利を提げて來て渡したのを受取つてグイと一口。其間に、探偵は小聲でいふ、あの片目片足の男は盜人で、喰込んで懲役に十四年、此間やつと出て來た許り、此處に居るこれ丈の中に掏摸盜人でない奴は一人も無い一口飮んで、先生來歷談を始めた。エー、年は卅八、名はピーター、糊口の的も無い時に、これなる女と結婚し、食ふや食はずの身の詰り、夫婦共稼ぎの乞食となつて、妻は聊か覺えた「ヴキオリン」手前は稽古に稽古を積んで、石呑み、火食ひ、火箸呑み、人寄せしては一文二文の合力に、細き世綱を渡る中、聽いて下さい、妻のいふには、石呑み、火食ひは珍しからず、蛇を呑み、劍を呑む藝を手に入れて見世物場を開かうものなら、實入りも嘸多いであらうに、思ひ立つて今日から稽古にかゝれといふ、元より蛇は大嫌ひ。劍は恐ろし。なれどもこれに不承知言はうものなら、山の神の崇りは猶更恐ろし、無理に稽古に取かゝつて、やつとのことで劍は呑めるやうになつたが、蛇はさて何とせう、躊躇して騷いで居れば、さすがは內助の令夫人、劍と蛇と物こそ變れ、呑む一段は同じこと。齒を拔いて、毒を取つて呑むならば、魚を呑むも同じこと早く始めろと、退引ならぬ手詰の催促。何と返事も泣く／＼、夫から修業を重ねて、とう／＼卒業した時のうれしさ。ナニ別に秘傳も何も無いんです。蛇奴を掴

んで頭を口に入れ、尾を摘でかう捻れば、蛇は苦しまぎれに、自づと喉へ下りて行く、見物は、蛇は實に胃腑へ入つたものと思ふが、蛇も賢いもので、餘り深入りすれば、出るに困ると知つて居るから食道の途中に止つて居て、ゴボンと咳拂ひ一つすれば、ズポツと外へ飛び出すので、見物は不思議ぢや、妙ぢやと大評判計畧甘く圖に當り、當分は中々贅澤もやりやしたが、間もなく眞似をする奴が出來て、甘い肉汁も吸へなくなり、今ではそれは止めにして、歌唱ひ、力持ち、手品、手當り次第の行當りばツたり。隨分面白え浮世でさアと、語り終つた時は、もう夜も明け離れたが、例の硝子から薄明りがさして居るので、匇匇に辭して旅館へ歸つた。聞けば惡黨乞食等の此合宿所に、屋根代が一晩二片（我が八錢）で、明くる日の正午迄は居ることを許し、若し前金で此丈の拂ひが出來ねば、猶豫なく逐ひ出されるといふ、此種類の安泊りは、貧民町毎にいくらもあつて、屋根代と食事代と合せて四五片が常であるとか。ある



罐詰の口附作業（軍用品製造圖繪の三）

夜、話の種に泊つて見やうと思つて、行つて見たが、例の臭氣は勿論、五六十人の客が同じ室で、名物の蚤虱を防ぐ爲め、中には十七八の娘盛りも居たが、馴れれば恥かしいも、外聞もないが平氣で垢だらけの赤裸裸になり、麥藁の中へ潜り込む様の凄しさに、堪へ切れず逃げ戻つた。」

下水の泥溝探し

倫敦の用水は、「テームス」と、「リー」と、其の水源地と、井戸と、此四つから各戸に配給する。何せ四百萬餘の人が犇々と住んで居るのであるから、其量は大したもので、其下水はどう始末するかといふに、西洋では日本と違つて、尾籠の話だが、大小便を肥料に汲むといふことはせず、水で流して下水へ落す習慣であるから、此下水は、日本の都市のやうに、地の表面、又は五寸や一尺の淺い地下といふ譯には行かず、されば下水工事は市の大事業の一つで、地下は大小の暗溝が縱横に通じ、煉瓦を以て築き立て、大溝は穴の高さ五尺もあらう、小溝は三尺、二尺、一尺。之を一直線に延せば八百里もあらうといふ、喩へば人體なら、給水道は動脈で、下水溝は靜脈と言ふたやうな形である。

さて、かやうに、町々から集る汚水糞水が、大靜脈を經て落込むところは何處かと言ふに、それは矢張「テームス」河で、上流に於て淸淨なる用水を供給する「テームス」は、下流に於て不潔な糞水を呑み込み、魚族や海草を養ふべく、海をさして流れて行くのである。以上丈では只汚いと思ふ許り、何の面白いことも無いが、さすがは倫敦、上に際限なし、下に際限なし、此糞溝によつて生活して居る一種幾百の人間があるから、話の種になつて來るので。昔は此大溝の口は開放しで、自由に出入りを許したが、不潔の空氣毒蒸氣を呼吸して病氣になるもの、死ぬるもの、又は深い泥に嵌つて出られずに斃れるものが少くない爲めに、法律を以て一切出入を禁止したが、何がさて、僅にさへなるならば、火の中へでもといふ人間の、雲の如くある大都市、泥溝の中を搔き搜せば、銅片なり、鐵片なり、

錢なり、匙なり、ナイフなり、フォークなり、運がよければ、金銀時計や、寶石入りの指環や、鎖、財布など、高價物を拾ひ上げて麺包に有り附けるのだから、禁令も其甲斐がなく、法律の目を潜つて入り込む輩が毎日數百、糞泥の中を縱横溢り廻つて、不潔不健康などいふことは、所罸と共に頓と顧みない。此輩の泥溝へ潜らうとする時は、先づ帆木綿で造へたヅボンと、厚皮の古靴を穿き、襤褸襤褸の上衣を着、背に一つの袋を背負ひ、手に鋤、篩と、長さ七八尺、其先きに熊手を付けた棒と、手洋燈を持つて行く。それで一足刻みに深入りするのであるが、若し足元が劍吞と見れば、此棒で探り、深い糞泥の中へ陷れば、此棒に縋つて足を拔。棒が無くて深みへ陷れば、出ることが中々困難で、あせる程深く沈み、遂に一命を落すことがある。古い泥溝は、煉瓦の頽れた所が多く、又下水が一時に洪水と推して來て、見る〳〵水嵩の二三尺も上ることがあるから油断はならぬ。夫に今一つ閉口することは、



メリヤスシャツの機械作業（軍用品製造図絵の四）

泥溝鼠の多いことで、其數と言つたら實に無數、大いのは兒猫位ある。人が若し其逆鱗に觸るれば、夫こそ大變。同盟して襲ひ懸る其勢の猛烈なること、如何なる勇者といへども、迚も叶ふものでは無い。足に喰付かれ、手に嚙み付かれ、背にかゝり、顔にかゝり、惡くすると嚙み殺される。然らざるも大怪我は免れない。そこで此鼠軍を防ぐには、犬を連れて行つて、嚙み殺させるが一番よいが、困ることには、犬はあつても連れては行けぬ。といふのは、仕事がもと〳〵隱れてやることだから、若し犬に一聲ワンとやられゝば、直ぐに頭の上の巡査の耳に入り、引くゝられて監獄へ打込まれるので、泥溝探しとなる亦難いかなである。

一人の泥溝探しが、始めて此商賣の仲間入りをした折の經驗を語つて曰く『連れられて入るや否や、忽ち怪臭を帶んだ一團の蒸氣に襲はれた。鼻が人並だから何としても堪へ切れず、遂に眼が舞つて倒れて了つた。連れに助け起されたが、總身泥糞だらけ。夫より勇を鼓して、諸處捜し廻り、連は銀の匙二本と環一本を拾つたが、自分は初陣で何も拾へず。歸りに向つて、出口の近くへ來ると、そこの煉瓦の頽れに、何か動いて居るやうだから、手洋燈を上げて見ると、何がさて、重り合つて群れて居る泥溝鼠の大軍、其數二千もあらうか。驚天して逃げやうとした途端に、運惡く脚を取られて、泥水の中へバシヤツと倒れると、鼠軍は其音に驚いて、チユー〳〵バシヤ〳〵逃げ散つたが、中に百疋程の精鋭、踏止つて襲ひかゝり、處嫌はず嚙み付くので、自分も一生懸命、打ち拂ひ拂ひ退ければ、いよ〳〵ます〳〵敵愾心を激するばかり、今はほと〳〵力も盡き、呼吸がはづんで、無念ながら往生することかと、覺悟した此時、連れの男が叫び聲を聞き付けて來て、五六疋棒で撲り殺すと、鼠軍は自分を棄てゝ連れの男に向つた其間に、自分も起き上つて力を協せ棒と燈光でやつと追ひ退けて、逃げ歸つたが、此戰ひで、身體中傷だらけ。其後經驗して見た所では、鼠は決して先にかゝつては來ないもので、あの時のは、自分が水の中へ轉んだのを、攻撃と間違へたものらしい。—

體泥溝鼠はいつも暗い處に居る爲か、ひどく燈火を恐れ、燈光を點けて行けば大抵は逃げるが、かう怒らせたときは、平時程効力も無いやうだ。云々。』此男は、其時を初陣に、一生を泥溝の中で送つたといふ。毎日毎日此商賣をして居る中には、偶には甘い拾ひ物もあつて、ある日の如きは、一つの革袋を拾ひ上げ、開けて見たら、十圓金貨が二百枚と、五十錢銀貨が一枚入つて居た。こんなことは、一生に一度あるか無しだらうが、十圓二十圓の物を拾ふことは、珍らしくないそうで、こんな事があればこそ、こんな商賣に一生を送るのであらう。兎に角此廣い倫敦に一つの遺利も許さないし、此多い人間に仕事の撰り嫌ひを許さないのは、さすがは世界一二の大都府と感服の外は無いのである。

「鼠追ふ物」

いくら遺利を許さぬ倫敦でも、此鼠丈は利用の道は無からう、一本參る方があるかも知れぬが、矢張之にも需要があつて、毎日鼠取りを商買にして居る人が二三百人も有といふから驚かうではあるまいか。と言つても、一疋五錢宛で買上て貰ふのでい無い。皮を何に、肉をどうといふのでも無い。生捕つて、「鼠追ふ物」の家へ賣るのである。「鼠追ふ物」とは假りに「犬追ふ物」に比べて付けた名で、倫敦には生きた鼠を買ひ入れ、之を犬に嚙み殺させて見物させる興行が處々にある。妙な興行だが、人間の性は、太古の野蠻をどこ迄も存して居るのかして、かういふ殘忍な遊戲が古來いくらも例示される。羅馬の有名な鬪戲場、其處に俘虜が猛獸と格鬪を強いられて、肉を裂かれ、骨を碎かれるのを、數萬の男女は、美々しく着飾つて、棧敷でにこにこ見物したといふ話は、知らぬものもない名高い話、西班牙には、今でも牛鬪戲が盛んで、馬に跨り、槍を捻る勇士の面々、怒り狂ふ猛牛を相手に、雌雄を決して、見物の喝采を博するのだといふ。我國でも、近く御維新前までは、磔刑曝し首などもあつて、澤山の人が見物に出たといふし、喧嘩犬殺しといふと、彌治馬

がいつもたかる。さて倫敦の「鼠追ふ物」の中には、隨分知られて居るのもあつて、犬の中にも、一頭數百圓のたいしたのもある。さて其演戲の大体を紹介しやう、場は大抵地下の室で、周圍にすらりと幾十の長腰掛を並べ、眞中に一段低い枡形がある。この枡形が即ち舞臺で、四方は鼠の逃げ出られぬやう、嚴重に板圍ひをし、一面に鋸屑を蒔き散して置く。見物が集ると、いよ〳〵これへ鼠を放し、犬を入れて嚙み殺させるのであるが、其前に興行主は、犬が此鼠を殘らず殺し盡す時間を何分間と言ひ出し、之を原案にして、見物が思ひ〳〵に賭をする。ある人の見物に行つた晩には、放した鼠の數が百五疋であつたが、之に對し、九分間と宣告して犬を入れたところが、此犬は其道の逸物で、チユー〳〵キー〳〵逃げ廻る鼠を、追ひ詰め〳〵、嚙み殺す其早さと言つたら、雷光石火の喩へも啻ならず、中には、窮鼠却つて犬を嚙むつもりで、向つて來るのもあつたが、どうして叶はうや、始より八分四十秒といふに、一疋殘らず殺されて、流るゝ血潮は鋸屑を染め、死體は小山を築いて、二目とは見られぬ樣であるのに、馴れて神經の鈍つて居る見物は、手を拍つて大喝采。ざつとこんな景況であるが、それにしても、そんなに澤山の鼠をよくもこう集めたもので、例の鼠取り共は毎日朝から鼠狩りに出懸け、諸所の物置、掃溜、夫から前に言つた下水の泥溝に入つて、巧に之を捕まへ、持つて來て賣り渡す。此等の鼠共の中、泥溝鼠は一番馬鹿で捕まへ易く、それで犬に向へば家鼠よりは強いので、賣れもよく、價も高いそうで、之が爲め、毎日巡査の目を忍んで、下水の泥溝へ潛り込み、嚙み付かれる危險を冒して、網や「わな」で捕へる者が少くないといふ。猶倫敦の裏面を覗けば、幾萬の蜘蛛を飼つて、之を嚙み合ひさせる有名な蜘蛛先生もあれば、赤坊を買つて來て、恐ろしい不具に作り上げる不具作りの名人もあり、不潔な商賣して贅澤に世を渡る女も、少くとも二三萬はあり、銅貨二枚も「ポケツト」へ入れてやれば、どんな處へでも案内する巡査は、寧ろ普通であるといふ。此等の化物を一々明るみへ摑み出したら、殆ど限りも無いことであらう。(完)



玉輿記

（德川將軍歷世の正室）

考古山人

千代田の城の大奥のヿは幕府これを嚴しく秘めて、世間に漏らさず、奥向に仕ふる婦女初めて城に入る時、秘密の誓約を成しめし程なれば、今の世に傳はれるもの稀なり、我れ德川將軍累代の正室の經歷を知らんと欲し、種々探索する處ありしも容易に眞相を知り難く、こゝには唯その一端を示すのみ。

▲初代家康公の正室

德川家康公の正室は二人ありて、前の正室を清池院殿と云ひ、後の正室を南明院殿と云へり。

清池院殿は駿河の御前と呼ばれし婦人にて、後に三河國築山と云へる處に住まはれしゆゑに、築山殿と呼ばれたり、家康いまだ今川義元の許に養はれたりし頃、年齡十五となりて元服し、その節この人を正室とはなされしなり。

夫人の實父は駿河國瀨名郷の鄕主、關口親永と云ふ、母は今川義元の妹なり、夫人、伯姪の緣によりて義元の養女となり、幼少の頃より義元の許にて育ちたり。夫人家康に嫁ぎてより四年、三河の岡崎城にて嫡子信康を儲けぬ次で義元桶峽に於て戰死す子氏眞暗弱にして、父の仇敵を攻め亡す事を得ざるを以て、家康遂に氏眞を見捨てたり。氏眞これを聞いて怒り、夫人及びその二兒を殺して家康に對する怨恨を報ひんとせしかば、夫人の實父關口は親子の情としてこれを見るに忍びず、一方には氏眞を諭し、一方には家康に說き、二人の間を調停し漸く岡崎城に歸り夫妻同棲をなし得るに至れり。

斯くして今川德川の二家は夫人の實父の仲裁によりて

一度修交をなすに至しも、家康元と氏眞の人となりに慊焉たりしかば迚も舊の如くなる能はず、遂に全たく氏眞と絶ち信長に歸したれば氏眞怒り甚に欺かれたるものとなし、親永を殺して意を慰めたり。

夫人は實父の殺されしを聞き、夫家康の無情を怨むに至れり、夫人は生來嫉妬の心深く、且つ佞奸の質ある人にして、この怨恨を抱き夫に仕ふるにいたりしかば事毎に至りて厭嫌の念を生ずるに至れり。

家康もまた夫人との交情舊の如くならざるより、これを快しとせず自然と他の側室を偏愛するに至りしかば、夫人はます／＼不快の念に堪えず、事に托して岡崎を去り、伊勢に往きしが當時越前の大守朝倉義景は彼女の美しきを聞き、迎へてこれを室となしけり、されど義景との交情又睦ましからざりしかば絶ちてまた岡崎に返り來れり、苟くも家康と夫妻の關係ある身にして、かゝる擧動をなして顧みざるは戰亂の世とはいへ與に言語に絶えし事なりされども又後年築山御殿の醜聞あるに至りしを見れば、當時、深く心に耻ぢざりしなるべく、その家康と同棲せずして晩年に及びたるは、むしろ夫人のために幸福といふべし。

夫人の岡崎に歸るや、家康これを喜ばざりしも當時未だ幼童たりし信康の母を慕ふ事甚だしかりしかば築山に別邸を建築してこゝに居らしめたり、築山殿と呼ぶ乃ち是なりこの處置ありて以來、彼女は夫に對する實父の怨恨少しく解けしものゝ如く、されど生來の嫉妬心と悍佞の質とはこれを如何ともするなし夫人の侍女に●●●●おまんの方（小督の局）と云ふがありし、尾張池鯉鮒の士永見志摩守の女にて、長く夫人の侍女となりしが、妙齡に及び容貌また美しかりしかば、家康夫人の間を窺ひこれを挑み、密かに寵愛をなし居たりしが、遂に妊娠せしが斯くなりては夫人の嫉妬いよ／＼深く●●●●おまんの方を赤裸にし縄もてこれを縛しめ、折檻し、時しも正月七日の寒氣酷しき夜を幸ひ、呵責に疲れたる侍女を濱松城の曲輪内樹木の繁りたる處に捨てさせたりこれぞ家康に對する面當の擧動なりしなり、さて●●●●おまんの方は恐怖と悲哀とに胸迫り號泣びしが、稍く

宿直の武士に救はれたり。

これより以前夫人の生子信康は信長の女徳姫を岡崎に迎へ婚を結びたり、この新夫婦は何れも九歳なりし夫妻の情交睦まじく後二子を儲けしが、夫人は姑として殊に嫉妬深き婦人なりしかば、小夫婦の長ずるに從がひその睦まじきを見て妬むの心ます〳〵募り、罪なき小夫婦を離間せんとし、種々の手段を盡し信康をして徳姫を疎んせしめんがために讒言をなせしかば賢母の言に迷ひて姫に遠かり、徳姫もまた姑の毒舌に惑はされ、信康を疑ふに至れり。

夫人は斯く一方に嫉妬の心强く加ふるに自身の素行修まらざりしこと言語に絶えたり。さて夫人は信康夫妻の間を割きしも、未だ徳姫を惡むの念去らず、つひに信長を滅ぼして養父義元の仇を報ゆると共に、信康を三河遠江二國の主となさんと企圖、武田勝賴を後援とし、その力を籍りてこの邪佞なる慾望を充たさんため、病氣と披露して甲斐の名醫減慶を召し寄せ、まづこれと私通し、更に減慶を說き惑はして勝賴と密謀を通ずるの策を講じけるが、この密謀いつしか徳姫の侍女のために偸聞せられ、徳姫より書面を以て、信長に告げたれば夫人の罪惡悉く知られ、遂に濱松の小籔邑に於て、家康の使者のために殺され



古城の[illegible]

たり、されど道がに夫妻の情やありけん家康これを聞いて哀みに堪へず、其の使者に向ひて何故に髪を斷ちてこれを遂はざりしか殺す程の事にはあらじと言ひしとなん。

第二の正室は秀吉公の異父妹なり、家康より若きこと一歲、朝日の局と稱し容貌甚だ美し。

夫人はじめ佐治日向守の妻となり、夫妻の交情睦ましかりしが、秀吉小牧山に破ぶれたるより、使を家康に送りて和睦せんことを乞ひしに、家康聞き入れざりしかば、秀吉甚くこれを憂へ淸池院の死後家康の正室なきを思ひ佐治日向守に說きて夫人を家康の第二の正室となし、和議の事を整へんと謀りたり、これがため秀吉は堀尾吉晴、生駒正俊の二人をして日向守に說かしめ、利害を說きて夫人を家康の正室たらしむべきを諭さしめたり、日向守秀吉の命の反くべからざるを曉りたれば、快くこれを承諾し夫人に說きて秀吉の命に從はしめ、愛情の覊絆を絕たんがため腹を割きて死したり、夫人は睦まじき交情を割かるゝさへ悲しきに、この憂愁に遇ひて死ぬべく嘆きしが、さて夫の遺言もあることとなれば是非なく命に從ひて、家康公の正室となりたり。

家康は秀吉の妹を妻せて、兄弟の緣を結び以つて和議を整えんとするの赤心をいれ、ついに秀吉との和議を結ぶにいたりたれば、夫人は淺野長政等に送られて濱松にいたり、婚姻の式を擧げたり。

當時夫人四十四歲にて夫妻の交情暖かなりしも天緣長からず、婚を結びてより三年、京都聚樂城にて靜かに往生を遂げたり遺骸は京都の東福寺に葬られ、南明院殿と謚號す。

二代秀忠公の正室

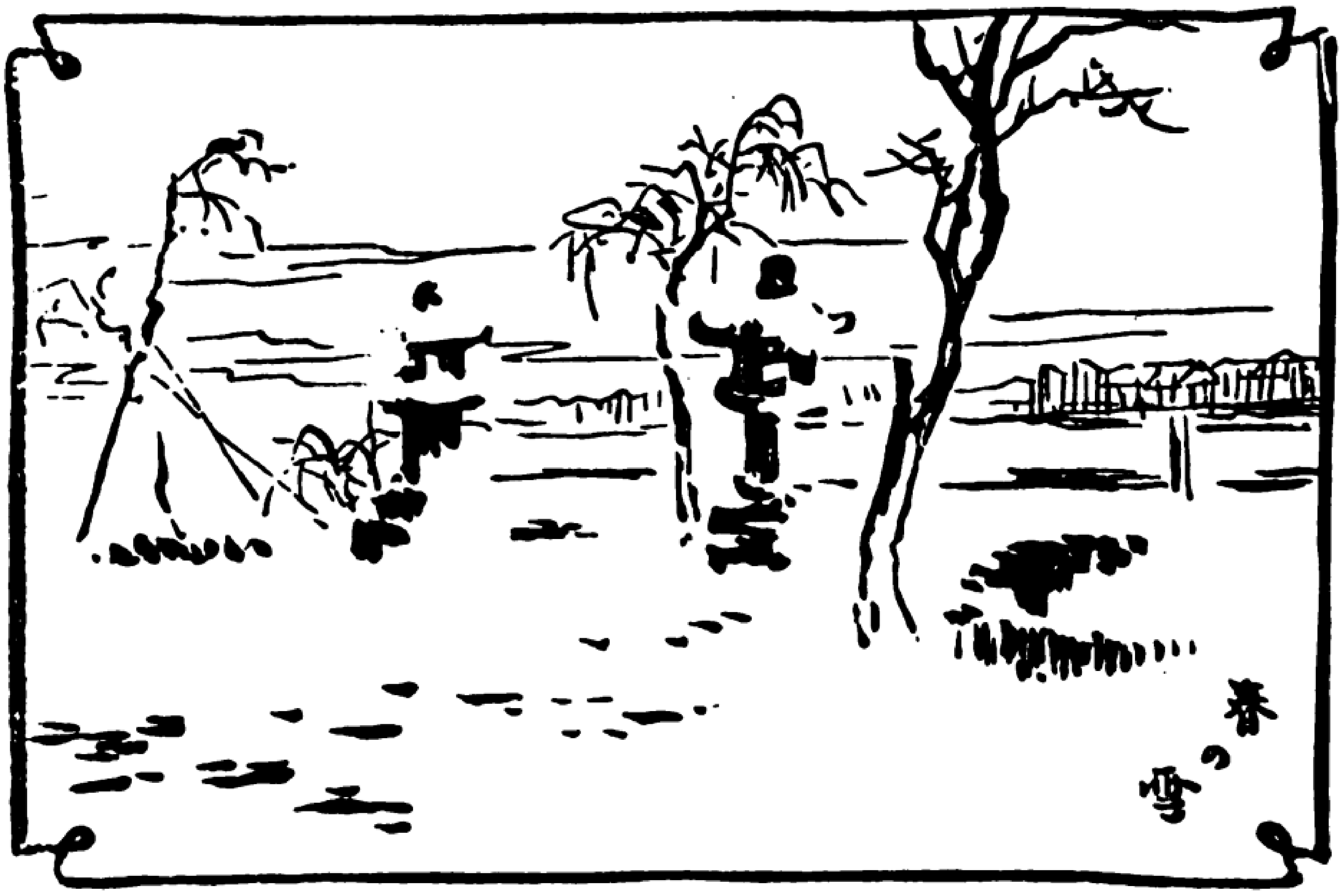
贈中納言淺井長政の女にして實母は信長公の妹なり名をたつ子と云ひ旭姫と呼ばれたり、秀忠將軍となりてより朝日の局と呼ばれ、御臺所と稱へらる、將軍の正室を御臺所と稱へたるは、此人を以つて濫觴とす。

夫人幼き頃實父長政は信長と近江の小谷に戰ひて死したれば、實母と共に信長の許にありしが、實母更らに

柴田勝家の妻となりしかば、夫人また姉妹等と共に連れられて越前北の庄に移りたり、天正十一年勝家賤ヶ岳の戰爭に敗れ北の庄の居城に逃げ入り運命盡ぬその際夫人の實母、夫人等姉妹を一個の輿に乘らしめ、書を持ちて城を出でしめ其身は心徐かに自害して逝けり。

こゝに於て秀吉迎え取りて養ひしが、夫人を尾張國大野の城主佐治信方の長男、與九郎に妻はせ、夫人の姉を自巳の妾とし、妹を京極高次に妻はせたり。

夫人一成の妻となりし翌年、家康小牧の戰爭より濱松に歸るの途次、尾張の佐屋の渡に至りけるが、一成舟を供へてこれを渡



せし故、秀吉の怒るところとなり夫人の姉淀君の病にかこつけ、夫人を秀吉の許に呼戻し一成は夫人の夫たるべきものにあらずとし歸らしめず更らに丹波中納言木下秀勝に妻はせたり。

文祿二年秀勝朝鮮にて病みて死せしかば、夫人はその生女と共に秀吉の許に歸り、後京都の名紳九條道房に嫁ぎしが幾ばくもなく亦秀吉の許に歸りたり。

斯く夫人は三たび人の妻となりしが、ついに文祿四年二十三才にて秀忠の正室となり、慶長十年秀忠將軍となりしより、最初の御臺所として榮華を極むるにいたりぬ。

夫人秀忠の室となりて交情睦まじく、男三人女五人を生みしが、長

男は不幸にて夭死せり、夫人季子忠長を愛すること一方ならず、兄に勝してこれを待遇ひけるに、舅家康公教訓を認めて夫人を戒めたるも、夫人その教訓に從がはず、愛に過ぎて放縱の者となし、罪を得て終りを宜くせざりし。夫人若き頃に屢々浮沈に遇ひ、身の不幸を嘆ちたりしも將軍の御臺所となりてより三十三年の間、榮華の月日を送り、寛永三年九月秀忠公に先だつと六年、五十四歳を以て、千代田の城中にて薨ず。芝增上寺に葬り崇源院殿と諡號せるは是なり。

三代家光公の正室

關白鷹司信房の女なり、夫家光より長ずること二歳慶長七寅年京都にて生れたり、孝子と云ふ。

元和九年家光公と婚姻の約整のひ、江戸に下り直ちに西丸に入輿し、翌年十二月本丸に移り、婚禮の式を擧ぐ。

夫人生來嫉妬深く且つ公貴の家に生れたるに似ず、性質甚く下賤にして、將軍の正室としてあるまじき行狀多かりしかば、夫妻の交情惡しく家光の嫌ふ處となり吹上御苑内の廣芝に夫人の屋館を建て、夫妻別居するに至る、その屋館を中の丸と云ひしを以て、夫人を中丸殿と呼ばしめたり。

斯く婦人は押籠め同樣の身となり、夫妻の歡樂を嗜むことなりがたく、味氣なき世を送りしが五十歳にて髮を剃り、七十三歳の高齢を保ちぬ、遺骸は小石川傳通院に葬る。

四代家綱公の正室

伏見宮貞淸親王の女にして、淺宮顯子と云ふ、家綱公より長ずること一歳。

夫人十八才にして將軍と婚儀の約整ひ江戸に下り、婚禮の式を行はる、當時本丸普請中の故を以て萬事極めて質素なりしと云ふ、夫人は直に御臺所の稱號を受けられたり。

夫人は累代の正室中貞操にして婦德の聞えある婦人なりき、されば夫妻の契り殊に睦まじく、家綱公の寵愛一方ならざりしも、身體孱弱なりし爲め一子をも擧げられざりし。

寛文年中の夏なりし、ある夜夫人の寢室の下に一人の痴漢忍び込みたり、身體肥え太りて尋常人よりは身丈高く、身には疎末なる單衣を着け、縄を帯にして腰に纏ひたるが、夫人の寢室の帳布を褰き上げて、室内の狀況を窺ひ眺きたり、その容貌醜く恐ろしかりしかば、左右にひかえし侍女等は顔色を變へ、周章狼狽逃げ迷ひしを、夫人は徐かにこれを制し、起ち上りて衛士を召し寄せ、痴漢を抑へ縄をかけさしめ、さて掛りの役人に向ひ、城の門々嚴しく固めあれば、容易くは入り難し、多分は物の怪などに逐はれ、恐ろしさのため心を喪ひ、罪を得るとも



知らずして、法禁を破りしなるべければ放ちやるべしと、それより嚴しく穿議したるに、夫人の言ふ處の如くなりしかば、罪を免して放ちやりしと。要するに夫人は寛仁の人と見へたり。夫人家綱公の室となり琴瑟諧ひて二十年の月日を送りしが、延寶四辰年乳癌を疾み、日に日に病重くなり往きしかば、醫師より家綱に乞ふて直接に夫人の脈を診察することゝなりたり、當時將軍の正室病あるときは糸を手首に掛け脈搏の傳はるによりてこれを知りたる程なれば、（恰も今日の朝鮮、支那の宮廷の如し）到底その精確の事を知り得ざりしならん、蓋し將軍の正室たる身にて將軍より他の男子に身體を觸れ

しむるは、婦人の貞操を破ぶるものとなしたるなるべし。事変に至れば舊慣を墨守すべきにあらじと斯くて將軍の許可ありしかば、夫人にその旨を通じたれど夫人はこれを聞き入れず、乳癌は治し難き病と聞くなれば死するは運命なり、いま親しく醫師の手に觸れて萬一生命を維ぐとするも、生命を惜しむために貞節を變ゆるは婦人の道に背くなりと云ひ、病苦を忍びてついに手を觸れしめず三十七歳を以て薨じぬ。遺骸は火葬し、下谷東叡山に葬り、高嚴院殿と謚號せり。

五代綱吉公の正室

關白鷹司房輔の女にして、信子と云ふ、綱吉より若きこと五歳、慶安四年を以て京都に生る。綱吉公いまだ上野國館林の藩主たりし頃、夫人と結婚の約束整ひ、十四歳にて江戸に下り、即日江戸の藩邸にて婚姻の式を行はれたり。後十七年延寶八年綱吉公將軍となり、御臺所と呼ばる[illegible]

えしかば鳳鸞の契、こまやかなりしも子女を儲けざりし。寶永六年綱吉病みて薨ずるの前、夫人憂苦のあまりまた病にかゝり、夫の死を聞くに及びてます〳〵重く、ついに五十九歳を以つて此世を去りたり、公に後るゝこと僅かに一月なりし。遺骸は東叡山に葬られ、淨光院殿と謚號せらる。

六代家宣公の正室

攝政近衞基熙の女にして、熙子と云ふ、寛文二年を以つて京都に生る、家宣より長ずること一歳。家宣公いまだ甲斐の侯たりし時、夫人十八歳にて結婚の約束整ひ江戸に下り、十二月江戸櫻田の藩邸にて婚姻の禮を行ふ、寶永五子年家宣將軍の儲副となり西丸に入りしとき、夫人また伴はれて西丸に移り、六年家宣公將軍職を繼ぎしかば本丸に入り、是より御臺所と呼ばれ從三位に叙せらる。

夫人いまだ櫻田の邸に在しける頃、男女一人づゝの子[illegible]

夫人御臺所となりて僅かに四年正德二年十月家宣公世を去られしかば、髮を剃りて天英院殿と稱したり、翌三年四月家繼公（年五才）七代將軍となられし時、從一位に叙せらる、これより夫人を一位の御方と呼び參らす、家繼幼稚にて室なかりしかば、夫人本丸にありて大奥を支配し榮華を極められしかど、享保元年家繼公八才にて世を去り、吉宗將軍後を襲ひたるよりまた舊の如く權勢を揮ふ能はず、十一月西丸に移り、十六年更らに二の丸に移り住み、寛保元年正月廿八日八十才の高齡を以て、此世を去り玉ひぬ。遺骸は芝の增上寺に葬らる。


大倉山の殘雪

七代家繼公の正室

霊元天皇の皇女八十宮吉子殿の降嫁せられたるなり、正德四年を以て誕生せられたるが、家繼公は五歲程若にていらせられし。皇女二歲の秋、九月父帝の御思召により家繼公に降嫁の事と定まりたれば、正德六年二月江戶より阿部正喬を使者として、種々の祝ひ物を京師に送りたるが、間もなく家繼公病氣に罹りついで四月薨せられしかば、皇女ついに江戶に下らず、其儘京都に留まり在したり、されど一たび家繼公の正室と定まりたる事なれば、江戶より藩事沙汰せられて供御を奉りしとぞ皇女十三才の十一月、内親王の宣下を受け、享保十七年十月、十九

歳の妙齢にて髪を剃り落し玉ひ、淨琳院殿と稱へられ寶暦八年九月、京都にて崩れさせらる、御年四十五歳京都の智恩院に葬り奉る。

八代吉宗公の正室

伏見宮貞致親王の女にて、眞宮と云ひ諱を理子と申し奉る、元祿四年八月を以て京都に生れ玉ふ。夫の君より若きこと七歳なりき。

吉宗公いまだ紀伊侯たりし寶永三年三月、夫人紀伊に下り、九月を以つて結婚の約成り、十一月その大禮を行はせらる、時に御年十六歳なり。

夫人不幸にして夫吉宗公の將軍となる前六年、まだ江戸の藩邸に在しける頃、二十歳の妙齢を以つて此世を去り玉ひしかば、ついに御臺所の稱を受くる能はず、夫妻となつて僅に滿三年餘の短き月日を送り玉ひしに過ぎぬは、いと〱飽かぬ心地こそすれ、御遺骸は池上の本門寺に葬り、寛德院殿と謚號し奉る。

九代家重公の正室

是方は伏見宮邦永親王の女にして、比の宮と云ひ諱を増子と申し奉る、正德五年十月京都に生れ玉ふ、夫の君より若きこと四歳なりき。

夫人十七歳となりし享保十六年五月を以つて江戸に下り、十二月西丸に於て婚禮の式を擧げさせらる。夫人の夫家重の君は常に酒色に耽けられ、後年ために健康を損せられし程なれば、夫人之に仕えて孱弱き身の兎角すぐれざりしが、婚を擧げてより二年を過たる享保十八の年妊娠の身となりたれば、密に侍女をして鬼子母神に詣でしめしなど、只管安産を祈り玉ひしも、其の甲斐なく月滿たずして九月俄かに出産し加之もかたなりにてありしと、それより夫人病氣を得、十月三日年齒僅かに十九歳にてみまかり玉ひぬ、夫人妊娠となりしとき、侍女等の勸誘により隅田川に船を浮べ、一日の淸遊を試み玉ひしが、其の折彼の都鳥の波に浮み漂ふを見て、

思ふことあらぬ身なれど古鄕の
　名もなつかしきみやこ鳥かな

と詠み玉ひしを、侍女等何となく淋しき意を余ふて、

無常の躰なりと評し合ひしが、この事讖となりて遂に世を早ふせられぬ。遺骸は下谷東叡山に葬り、謚號を澄明院殿と申し奉る。

十代家治公の正室

十代將軍の正室は、閑院宮直仁親王の女にして五十宮倫子と稱し奉る、元文三年正月を以て京都に生まる、夫の君より若きこと一歳なりし。

夫人十一歳のとき寛延元年十月を以て、家治公と結婚の約整ひたれば、翌二年三月江戸に下り西丸に入輿し、三年三月婚を結び、翌寶曆元年十二月を以て婚儀を擧げさせらる、同十年家治公將軍職に就かれし折夫人從三位に叙せられ、御臺所と稱へらる、夫人は風流の心ふかく、殊に和歌を好ませられしと。

夫人家治公に仕えて節操正しく、嫉妬の念更らになかりしかば、夫妻の御交情睦まじく、鳳鸞の契りことに深かりしと、されば家治間あれば大奥に入り來りて、常に夫人と對坐し談笑せらるゝを樂しみとし玉ひしかば大奥に仕ふる年寄女中等評議し、將軍の入御かく繁きは却つて御爲に宜しからず、然るべく計らふに如かずとなし、家治入御のとき夫人御病ありと詐りて、對面させず、家治もまた夫人の病りと聞きてこれを疑はず御居室に引返し玉ひしと、かくの如き事度々に及びたれば、將軍の附女中等心を焦ち、よしや夫人に微恙ありて心神を安ませ在すとも、少しく心を勵まして將軍に仕ふるこそ婦女の道なり、さるを年寄女中等の諫めもせずして將軍の入御を拒むは甚だ失禮なりと、より〳〵語らひしを、また夫人の附女中等聞き傳へて怒り、之が爲め遂に密々に爭ふに至りければ、時の御右筆蜷川八右衛門といふものこれを吟味したりと、尋ひで家治公の乳母たりし岩瀬の方と云へるが双方の間に入りて、仲裁を試み無事に治まるを得たりと、かくて幾干もなく妊娠の身となりて着帶せられ、玉の如き女子を儲けられしが不幸にも夭折し玉ひぬ、さて夫人着帶してより家治公に侍するを得ざりしかば、使者を京都に送り公卿の女にして、容貌の美しき者數人を江戸に招き寄せ、夫人親しく之を撰み、容貌の最も秀でた

る廣橋中納言の息女をして、夫に侍せしめんとしたるに、年寄女中等はその餘りに美しきより、或は夫人の寵の奪はれんを憂へ、夫人に說きて西小路右少辨の息女おしうの方を擧げて、家治の側室となさしめたり、之と云ひ彼と云ひ、夫人の性質正しくして夫妻の交情の麗しかりしを知るに足らん。

されど天緣至からずして、家治に先だつ事十五年、明和八年八月御年三十四歲にして、此世を去り玉ひぬ、御遺骸は下谷東叡山に葬り、心觀院殿と謚號せらる。

十一代家齊公の正室

薩摩の國主島津重豪の長女にして寔子と申し、後茂姬と改たむ、安永二年六月を以て、江戶の藩邸に生れさせらる、夫家齊公と同歲なり。

安永五年七月家齊未だ生家一橋にありし時、結婚の約整ふ、時に夫人四歲なりしをもてなほ生家にありしが遂に、天明元年九歲の春一橋の邸に入輿し玉ふ、この歲家齊將軍家治公の養子となり、西丸に移りたれば、夫人また伴はれて西丸に入り、仝六年家治の薨後、職を襲ふて夫妻ともに本丸に入る。

之より先將軍の正室は之を公卿の中より迎ふるの例なりしが故、天明七年家齊公の將軍となるや、京師に奏して夫人を右大臣近衞經熙の養女となし、天明八年四月改めて婚姻の式を擧げさせらる、これによりて夫人始めて御臺所の稱を受け、累進して從二位に敍せらる。

夫人は性頗ぶる温良にして殊に父母を思ふの情ふかし其の初めて西丸に移られしとき、生母町田氏と別るゝに忍びず、これを城中に伴はんとしたるに、生母その身分の賤しき故に城に入りて世の笑ひを招かば、徒らに夫人の德を汚すに過ぎずとなして從はず、別るゝに臨み化粧鏡を出だし之を夫人に與へ、これ妾が朝夕身の鑑となしたるもの、妾を見んと思ふの時は乃ち之を見るべしと諭したれば、夫人其言に從ひ、涙を拭ひて別れしと云ふ母御の情の切なる感ずるに餘あり其后夫家齊公に乞ひ、實父重豪をして吹上御苑拜觀の榮を得しめたるが如き夫人の孝情の深きを見るべし、天保四

年正月實父病篤しと聞くや夫人密かに侍女の輿に乘りて城を出で、病床に臨み親しく看護せられしと、時人これを聞き、その至孝を嘆美せりと云ふ。

夫人また才藻あり、殊に國文をよくせらる、嘗て芝濱の別邸に遊びける歸路清水侯の芝濱の別邸に臨まれしが、後其の清遊を筆にせしが如きまた其の后津山藩主を内宴に召し、紙筆を與へて學事を物語りしが如き共に夫人の學才を知るに足れり夫人は不幸にして實子なかりしかば庶子元姫を寵愛すること一方ならず、長ずるに及び之を遠く離すに忍びず、夫の君に乞ふて和田倉門内に邸宅を有する、會津侯に嫁せしめ玉ひぬ、夫人家齊に後るゝこと三年、弘化元年十一月、御年七十二を以てみまかり玉ふ、御提菩所増上寺に葬り、廣大院殿と謚號せらる。



十二代家慶公の正室

有栖川宮織仁親王の女にして、樂宮喬子と申す、寛政七年六月京都に生れ玉ふ。享和三年夫人九歳のとき御結婚の約整ひ、翌文化元年九月京都を發して江戸に下り、十一月西丸廣敷に入輿あり文化五年從三位に敍せられ、十一月御結婚、時に御年十四才、之より大姫と稱へらる、越えて文化六年十二月西丸に於て華燭の大禮を擧げさせらる。

夫人は竹千代外二子を儲け玉ひしも皆夭死し、遂に子なかりしかば、家慶の弟家祥(十三代家定公)を養ひ之

を寵愛したりと云ふ。

天保八年家慶公將軍となりたれば、夫人始めて御臺所の稱を受け、本丸に移りたり、後三年、天保十一年病を得てみまかる、家慶に先だつ事十三年、淨觀院殿と謚號せられ、上野東叡山に葬らる、年四十六。

十三代家定公の正室

十三代將軍家定公の正室を迎へたるは前後三度にして最初の正室を天親院殿と云ひ、次ぎを澄心院殿と云ひ最後のを天璋院殿と云ふ天璋院殿の外は家定公の未だ將軍家たらざりし以前に何れも世を早ふしたれば、御簾中と呼ばれ、御台所の稱號を受けたるは、獨り天璋院殿のみなり、然れどもこの天璋院殿もまた御運拙なく、御入輿ありてより僅かに三年鸞簫未だ暖かならずして夫家定公に先だゝれ玉ひぬ。

さて第一の正室は關白鷹司政通の女常姫にして、天保十二年五月結婚のこと定まり、十一月江戸に下り西丸に入輿し、十二月結婚の禮を行ふ、家定公生來癇癖頗ぶる强く、從ひて夫妻の交誼和熟せざりしと云ふ、御簾中たりしこと八年、嘉永元年六月、病みて先立たる、芝増上寺に葬り、天親院殿と謚名せらる。

第二の正室は前關白一條實通の女にして、名を有子(?)と云ふ、嘉永二年、西丸に入輿し、婚姻の禮を擧げ御簾中となる、夫妻の天緣殊に短かく、翌三年六月また夫の君に先だちてみまかり玉ふ上野東叡山に葬り澄心院殿と謚名せらる。

第三の正室天璋院殿は、薩摩國主島津齊彬の養女にして、名を敬子と云ひ、天保八年十二月を以つて鹿兒島に生る、家定より若きこと十三歳なり、かねて齊彬その女を將軍家に奉るの内約を結びしが、生憎女子なかりしを以つて藩中より夫人を迎かえて養女となし、また幕府の家格に副はしめんが爲、更に近衞忠熙の養女となしたり、時に夫人年齡十八歳なりき。

越えて安政三年十一月夫人二十歳の冬江戸に下り、直に本丸に入輿あり、翌十二月御婚禮を擧げさせられたり。

夫人は性質嚴格にて、所謂凡帳面の氣質なりしかば、

凡て事を行ふに當り方式に違ひたるを嫌ひたれば、侍女等は常に戰々兢々として夫人の機嫌を損ぜんことを恐しと云ふ夫人酒を好みたるも身分の重きをもつて、深く之を愼しみ、漫りに盃を手にしたることなく、毎夜寢床に就く前密かに少量を嗜みたるのみなれば、侍女の外は夫人の酒を好まれしを知るもの絕てなかりしとぞ。

夫人御台所となりてより三年、安政五年七月七日を以つて夫の君に逝かれたれば、髮を斷ちて隱居し、天璋院殿と呼ばれ玉ふ時に御年齡やうやく二十二歲なりき、三十一歲のとき將軍家太政返上となりしかば千代田城を



去り、後ち千駄谷邸に移り明治十六年十一月中風に罹ゝりてみまかる享年四十七東叡山に葬り奉る。

十四代家茂公の正室

仁孝天皇の御女にして、今上陛下の叔母君に當らせ玉ふ御方なり、御名を和宮親子と稱へらる弘化三年五月十日を以て京都に生れ玉ふ、將軍家茂公と同歲にてあらせらる。

萬延元年十一月十四歲の時、將軍家に御降嫁のこと定まり、文久元年十月京都を發し、陸路中山道を經て十一月江戶に入られ淸水の邸に御滯留、十二月一日本丸に御入輿あり、翌年二月婚儀を擧げらる。

婚儀の禮を擧げ玉ひし翌年二月、家茂公上洛し、十一月本丸二の丸とも火災に罹りて、暫く清水の邸に移らせらる十二月家茂公また上洛、翌元治元年五月江戸に歸へられしも、その翌慶應元年五月長州征伐の爲、再び大阪に上り翌年八月遂に大阪にて薨せらる、かく家茂公の往來繁かりしかば琴瑟諧ひしといへども、鸞鳳の契はまことに淺かりしが如し。

宮は性來虚禮虚儀を嫌ひ玉へば大奧の舊格に泥みて事を行はず、萬事用を便ずるを以て足れりとし、極めて鷹揚の質なりし爲、御姑天璋院殿とは兎角睦まじからざりしも、家茂公との交情は至つて細かなりしと、されば家茂公の西上に當りては、甚くこれを憂ひたまひ殊に最後の上阪の際の如きは親しく語られて夜を深ふし、別れ玉ふに臨み京都西陣織を家產にせんことを乞はれたり、家茂公の死後侍臣より之を送られしも、宮は更に喜び玉はず

空蟬の唐織衣なにかせん
綾も錦も君ありてこそ

と詠まれたりしと。

家茂公の死後髮を剃りて隱居し、靜寬院殿と稱へられ玉ふ、太政返上の後明治二年正月京都に還御あり、暫らく聖護院にあられしが、七年東京麻布市兵衛町の御用邸に移り、十年九月四日御年齡三十二歳にて、かくれさせ玉ふ、御遺骸は例の芝增上寺に葬り奉る。

附記

十五代慶喜將軍は、現時の公爵德川慶喜公なるは人の知る所にて、實に水戸中納言齊昭卿の子なり、一橋家の養子となり慶應二年京都二條城にて將軍職を襲ひ、翌三年在職僅に十ヶ月にして大政を奉還す、夫人は一橋家にありし頃之を迎えられしが、いまは暫らくその傳紀を略したり。

時間　客を招くのにハツキリ時間を定めぬ位迷惑は無い。明日お晝過ぎからお出を願ふと云はれて見よ、お晝過ぎとは何時の事だらう、餘り早く往つてもきまりが悪し、晩れては先方が迷惑だらうなど、餘計な心配をせねばならず、又主人側ではもう來さうなものだ、餘り晩いから來ないのかも知れぬと、諸都などを徐々片付けにかゝる頃、客の方ではもう良からうとやつて來る、ツラお客様だお膳を揃へよ、と騒がねばならず、又一家内が騒立てるのを見る客は時間が早かつたのかと赤面するなど、双方詰らぬことに心配をせねばならぬ、そこで西洋流に、午後何時とハツキリ時間を示し、客の方も其時間には必ず行く様にしたい。

俳人三輪女

芳宜園主人

古今のつれの婦女を見るに、才あれば德なく、德あれば才なし。こは、古今同嘆なりとす。今や世の文化もいよくすゝみゆくにつれて、婦女の文藝もまた從ふて進みぬ。然ばあれど、そが德の全きものを求むれば、百人の中に十人を得ること、いとむづかしかるべし。今はむかし寛政の頃、米澤藩の領に三輪女といへる者ありき。三輪女は才德ともに備はりて、いとめでたく、後の婦女の龜鑑ともなすべき行事いと多し。

さて、三輪女は、羽前國苅賀村農夫安右衛門とよべる者の妻なり。年十六七にて安右衛門がもとに嫁き、妹背の語らひをなすの間もなく、所天と仰く安右衛門は、忽ち癈病にかゝりて、起居も自由ならず、生計の業をとることかなはずなりぬ。三輪女、いと悲しきことに思ひしみて、十八歳の時より、精進して、心は尼法師となり、形は俗体に從ひ、ひたすら所天の病を護りぬ。その家もとより貧しかりければ、村の女小供などをあつめて、筆とる道を敎へ、僅ばかりの謝物をうけて、所天をはぐゝみたりしが、里閭の人ども、いづれもみな三輪女が貞節を愛てゝ、「お三輪樣〳〵」とうやまひきとぞ。うらわかき年をもて幽貞の操を守るさへ、いとめでたきに、まいて、女の纎き手一つにて、所天を養ひたるがごときは、まことに感ずべきにあらずや。

三輪女が德すでにかくの如くなるが上に、よろづみやびたることを好みつれに好みて俳句を作りき。今一二を拾はむ。

身の垢は流れにすめど田にし哉

清閑の書には住めども、やはりおろかなる身なるとの意なるべし。

帷子やうらなきこゝろ夫に見せ

この句は、わかき時、三輪女が麻じたるよし、所天に讀せしに、所天かうけがはず、不義などをする妻にあらずといひて、つゆ疑はず。その時所天が能くおのれの心を知るをよろこびて作りたるものと聞えし。

蕣の花や世の浮き沈み咲て見せ

女弟子どもへをしへの句なり。

實のならぬめうがの花や物忘れ

これも前の句とおなじ。

その句もとより太く巧なりといふにはあらねど、眞情を寫し來りて、少しも雕琢をなさず。これ即ち佳什たるゆゑむなり。

そも〳〵、その時の藩主は、彈正大弼上杉治憲、隱居して、自ら鷹山と號し、細川侯儒臣など〻併せ稱せられたる明君にて、その頃、碩學の譽高き細井平洲を招請し、藩政百般の顧問に具へられたりしかば、その治下、いと穴かに治りたりき。ある時、平洲たま〳〵治下を巡視するの吽三輪女を見て、その貞節に感じて、家人に寄する消息中に、つばらに三輪女が行狀を記しき。いはく、

苅賀村に三輪と申し候者、夫は三輪女十八歳の時より病身に御座候て床につき居申候。今年六十四歳になり候由。十八歳より夫に貞節を立候て、近邊に貞女の名かくれなく候。呼出し逢申候へば、ありがたかり、なき申候。やがて上より御ほうびこれあるべく候はんと存候。十八歳より後家同樣にて、夫を大切にいたし、五十七歳になり申候。誠にめづらしき貞女に御座候。しほらしく俳諧をいたし候。拙者へ發句をくれ申候に、

かへり花咲くや日の恩土地の恩

といたしくれ申候。手もよくかき、此の娘とも〻指南いたし申候。三輪が弟子になり候娘とも〻は、水きわ立ちて行儀正しく候由、此のもの吹聽いたし候。拙者もかんしんの餘り、歌よみつかはし申候。

雪をはらふ嵐の風のさむけさに
　　松のみどりの色も一しほ

とよみつかはし申候。是は三十餘年、夫につかへ、貧苦かんなん致候故、貞女のみさほも、いよ〳〵あらはれ申候と申すこ〻ろにて候。おみほへ御聞せなされたく候。さて御國のありがたさ、か樣の土民の女房まで、道の守りやさしき女も追〳〵あらはれ、誠に〳〵よその國にはなきこと共に候。子供けがさせぬ樣に、かよへよく〳〵御申付けなされべく候。めでたくかしこ。

十月二十二日　　　平　洲

　　おすめどのへ

ことしは大分年もより、氣もくせ〳〵といたし候へども、在鄕へまゐり、人々のよくなりたる樣子を見申候へば、ひたいのしわも大分のび、氣もはる〳〵となり申候、以上。

當時學德ともに高くして、世の師表と仰かれたる平洲の推賞する所となりしを見て、三輪女が世にも稀れなる女子なりしを知るに足べきなり。時樣をきそひて、よき衣を着け、他に劣らざらむことのみを願ひ、はた豐行の書を讀で、さながら竹を破るがごとき才藝あるも、その德備らざる今の世の女子は、この三輪女の事を見て、また少しく愧る所あるやいなや。

繪さがし當選披露（第三號分）

△正確なる解左の如し

獵師	二人	網引	二十人
毬投	二人	影繪	七人
たき火の邊	五人	電話	二人
雪中の通行	十四人	寢間	三人
樂隊と旗持	十四人	お休處	四人

〆七十三名

△解答總數……千四百三十三通

●不合格者……千三百九十一人

○合格者（一點の差を以て正鵠を少しく外れたる者をも含む）卅五人

◎當選者（合格者の内正格に命中したる者）七人

東京牛込區若宮町十	幸田發
東京市赤阪區青山南町五ノ四五	松本みつ
佐賀縣嬉野小學校	太田きみえ
名古屋市實町三ノ十四板倉方	德丸泰子
岩代國阪下町栁下	佐藤つな
京都府南桑田郡篠田村	稻荷增枝
大阪西區靱南通三丁目寄二番邸森脇方	磯野かほる

桃櫻まはるや雛の顔つき



匂て來て泣くこぼす菫かな

科學

鹽と人生

三枝三葉

天より我々に與へらるゝ日常の食糧の中で、何が一番大事であるかと言ふに、其は言ふまでもなく鹽である、古來米鹽の二字を以て食料の總を代表さした所を見ても、鹽が如何に我々の生活に必要の物であるかゞ了解る、砂糖や味醂なら無くても濟まされるが、鹽はそんな譯にゆかぬ、どんなに旨い米でも副ふるに鹽氣が無かつたら、喰べられたものではないのだから、何は無くとも鹽丈は第一に用意すべきである、臺所には鹽を絶すものでないとは、よく昔の人から聞く所であるが、成程家族の生命を預る臺所に鹽を全く絶すやうでは、不用心千萬、疊を叩いて其の主婦の責任を詰るべきである、しかし鹽は是程大切のものであるけれど、價は至極安く、無論米なぞとは比較にならぬが、砂糖に比しても遙かに廉く、有名な赤穗鹽でも壹圓に二俵は買へるのだから、是丈あれば澤庵も漬けられゝは梅干も畜へられ、胡麻鹽も煎られ、其の他いろ／＼の事に使つても、大抵の家内なら一年中の食料には剰つて返るのである、けれど今年からは鹽も煙草同樣官營と成つて、税金が懸る樣に成つたから、フンダンに使つて政府に御奉公するは惡くはないが、所帶持からいふと是からは一握の鹽も粗末には出來ない事に成つた。

▲さて、鹽は何處より得らるゝやといふに、幸ひ四面海を圍らす日本に在ては、到處の海水より十分に採り得るけれど、亞非利加では砂漠の中より採收する處もあるさうだ、又た亞米利加の西部の州では、「鹽甜り」と云ふ大きな土地より鹽を多量に發掘する相である、此處の地層は滿面皚々たる鹽を以て覆はれて居るので、その邊に棲息する獸類が時々之を舐めに來る所から斯ういふ名前が付いたといふ事である、又た歐羅巴大陸は鹽の礦山を以て有名であるが、其の礦山には岩

の如き固形體と成て出るものと鹽水と成て出るものとの二種類がある。

▲グラコーは世界第一の鹽坑で、鹽の出る所廣さ三十里四方に亘り、深さ九百尺に及ぶと云ふことである、而して其の鹽坑を上から覗くと宛で井戸の樣に深く掘下して在つて、所々に入口が設けてある、扨て其の坑内に入つて見んと思へば、先づ坑夫に案内を頼み、手に燭を持つて、一條の繩をたよりに地下六百尺許の底に下るのである、斯くて其の下りきつた所の有樣を見るに、上も下も四圍の壁も一面に眞白な鹽で、或は箭の如き、刀の如き、或は柱の如き、其他種々樣々の形に結晶した鹽の塊が、宛がら水晶宮の如くに輝き渡り、眼も醒むる許り奇麗であるさうな、而して其の間を四頭馬車が幾輛となく東西南北に馳せ廻つて、掘出した鹽を運搬してゐる、それから抗内には鹽を以て造られた禮拜堂あり、坑夫の家族の住ふ家屋等もあつて市街を形造り、地上の人の想像し得られぬ美麗の都を爲してゐる。

▲此のグラコーの鹽坑から取れる鹽は、混和物が多いから、直ちに食用に供す可からず、一度沸騰した鹽水の中に投じて混和物を溶解し、塵や滓を掬ひ去つて、純粹の鹽水のみとし、なほ之を鍋にて煮立たし、よく水分を退き去つて後燒鹽にするのである、又た佛蘭西の海濱に行くと、所々に鹽の溜水がある、其は底が極く淺いから、太陽の熱を受けると忽ち鹽水蒸發して自然に結晶して了ふ、此鹽をラクンと名付け、其の味頗る輕いにより、巴里の割烹界では殊に珍重してゐる。

▲日本では播州の赤穗が古來有名な產地である、之に次では四國の阿波及び讃岐の海濱である、阿波と言つても撫養外十二ケ村で取れるので、之を本齋田と言ひ、又た讃岐の方は坂井田と云ふ所から取れるので、之を新齋田と呼んでゐる、而して單に本齋田とか新齋田とか言へば、其が直ちに鹽の異名である樣に思はるゝ位、一般に名高く成つてゐる。

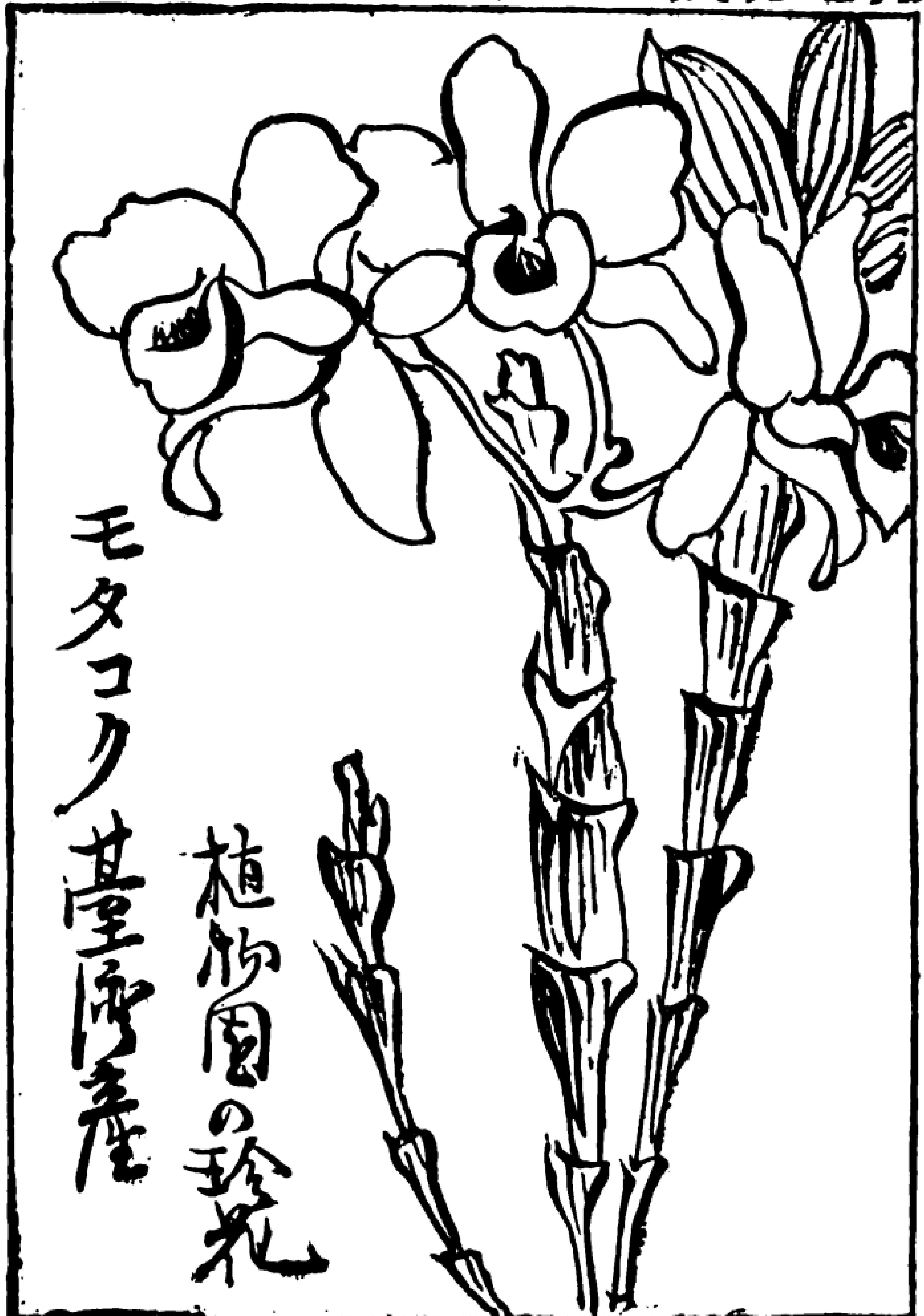
▲斯樣に德島產の鹽を本齋田と云ふ謂に就て調べて見るに、今は昔慶長四年の頃、時の領主蜂須賀家政侯

が撫養の濱へ鹽田を開き、斯業に經驗ある者を播州赤穗より呼び寄せ、土地の無職業者に傳習させたのが抑の始であるが、其の民を濟ふの企や遂に空しからずして、數年の後は同所より多額の鹽を產出し、寶の山ならぬ財の濱を現出したのである、故に同所の人民は之を歡び、撫養の濱は德島の財田だと當時言囃したのを、何時か文字を齋田と書くやうになり、讀聲も字の儘にサイダと言ふ樣に成つた、又た新齋田の方は之よりズツト後に出來、品質も稍々劣つて居る所から、新の字を冠らせたといふ事で、是は仝所の記錄に殘つてゐる話である。

▲是等各地より出る食鹽に就て需用の模樣を言へば、赤穗鹽は最上等として在るので、醬油の原料や漬物類の製造に用ゐられ、之に次で本齋田は魚類の鹽漬等に多く用ゐられ、新齋田は重に田舍に廻つて、味噌、醬油の釀造用に供さるゝのである、それから上總で採れる行德鹽は、却つて赤穗鹽よりも味が輕いといふので、東京の料理屋向では此の方を多く使ふ樣である。行德鹽と云ふのは雪の樣に眞白で、笊の上に富士形にこんもりと積んである鹽で、品質も仲々上等であるが、何しろ其の採れ高が極く少いから、東京附近で需用する位で、地方へは廻らぬらしい。

▲食鹽の貯藏は仲々六ケ敷ものである、鹽は水分を吸收する性質のものだから、濕氣のある所へでも置かうものなら、其こそ直ぐに濕つて、甚しきは溶解して了ふが故、鹽を蓄ふるには可成く高燥の所を撰まねばならぬ、入梅期に於ては殊に注意が肝要である、取分け新齋田などになると、鹵汁が強いから、梅雨期に入れば鹽が融解して枡目が切れ、爲めに非常な損失を招く事がある、其故此の鹵汁を脫く爲め行德の鹽業者へ再製を依賴するさうであるが、其の法は先づ下に小砂利を敷詰め、其上に更に灰を敷き、こゝへ鹽を撒布するのであるが、斯うすると數時間の中に鹵汁は灰と小砂利に吸取られて、パサ〳〵の上等鹽に成つて了ふが故、どんなに長く鹽藏に貯藏して置いても、もう大丈夫、枡目の減る樣な心配は無いといふ事である。

▲鹽に就て歷史の語る所を記せば、昔し、西班牙人がフロタタを征成して勝を得た時、城中に食鹽の欠乏を來した爲めに、多數の兵士病に罹り、怨恨を呑んで空しく死歿したと云ふが如き、又た甲斐の武田信玄が駿河の今川と事を構ふるや、今川方は鹽を戰時禁製品と認めて、駿河よりする鹽の輸送を差止めた、然るに越後の上杉謙信は之を聞いて、信玄の許に、其は定めし御不自由の事であらう、君と我とは多年敵對行動を執るもの乄、其は劍戟の戰ひである、我は米鹽を以て戰爭をしやうとは思はぬ、以來は當方より鹽を輸送しやうから、決して御心配あるなと言送つたと云ふが如き、共に名高い話である。



▲鹽は唯だ食物として必要なる許でなく、又た化學用に欠く可からざるものと成つてゐる、即ちアルカリーの原料となり、石鹸や洗濯曹達の製造にも之を用ひ、藥のコロクも鹽に依つて製され、陶器の製造も亦た鹽の力を借りるのである、彼の臺灣鹽や支那鹽は粗製であるから、之を食料品にするには再製の手間を要するのであるか、化學用には其のまゝ使へるので、寧ろ斯ういふ方に需用されるといふことである。それから、もう一つ面白い需用

は、神聖な場所に用ゐられる事である、即ち鹽は諸々のけがれを淨むる清淨のものであるといふ信念から、神饌として獻げられる、で又た、さう云ふ所から轉化して來て、民間の縁喜を祝ふ商賣の店前に、或は寄席の木戸口に積鹽といふことをするやうに成つた。

猶ほ鹽と人生の關係を研究して見ると、隨分面白い事も多くあるが、今は紙數に限りあるから、此位にして置く。

裝飾用の鳥毛

T、O生

鳥の羽毛が婦人の帽子の上に飾られて、徐ろに風に搖らぐ樣は、文雅とも優美とも言ふべきである、美人の緑髮の美はしいのを翡翠の色に喩へ、天人の纏うて居るのを霓裳羽衣などと言うてあるのを見ても、古くから羽毛の美を稱した事がわかる、殊に歐米の風俗の輸入されつゝある今日、少しく氣の利いた小間物店には必ず西洋風の婦人帽子や簪が並べてあり、飾るに此等の羽毛を以てする時勢ですから此の羽毛に就て其の構造、各部の名稱等を簡略に申して見ませう。

羽毛の中心を通つて居るのは羽軸であつて、之れより左右に並出して居るのを羽絲と名けてある、而して此の羽絲には絹糸の樣に柔いのもあり、薊の果の纖毛の樣に光澤のあるのもあれば鳥の羽の如く、短かくつて剛いのもある、又駝鳥のは長くつて美くしく捲き縮んで居る、羽毛の身體に附着する部分は翮といつて、試に之れを執つて透し見れば、中は空虚で、半透明である。

△羽毛の種類

種類は實に澤山あるが、大抵は皆少年や婦人の帽子の飾りになる、しかし其の中で最も佳良のは先づ駝鳥の羽毛です、實に柔かであるのみならず又華美で、媚ぶるが如く捲縮、羞耻を含むが如く頭を垂れて居る樣等は、類稀れなる其の色と相待つて、羽毛中の最美なるものと成つて居る、又た綠色なる鸚鵡、華美なる極樂

鳥、艶麗なるハムミングバード等澤山あるが、此等のものは皆帽子の上に立て、又は笹縁の下に縫ひ込みて羽絲の部分をハミ出させるのである。

此の他に塘鵝、鷗、アヂサシ、グリーブス等の胸部の羽毛が用ゐられます、而して甲の羽は乙に類し乙の嘴は丙に似て居ると言ふ樣なもので、兎に角種類の多いには、如何して斯樣に澤山に異樣な形が出來たのかと怪しむ位です、又其の鳴く聲も一々異つて居ります、而して此等の鳥が日光の前に、其の美はしい羽を翻へして翔ける所は實に奇麗であります。



△駝鳥

南亞米利加では盛に駝鳥を飼養します、駝鳥の家族は、樂しげな、各人所有の園中に住んで居ります、其の飼養園は面積八反歩位で、其の一隅には鳥舍が設けてあつて、雨天の時などの匿れ場所としてあります。

飼養園の周圍には高さ六尺程の柵がしつらはれて隣地には亦此樣な飼養園が澤山、續いて居るのです、而して其の長大なる體軀、愚鈍らしき顏面、細長い頸、可笑しげな長き脚捲縮して居る柔らかな羽毛等は、僅かに一種の奇觀を呈して居る、頸部には軟かな毬毛があるが、頭は、其

の最頂部を除いては、全く禿げて居る、而して其の輝やく圓らな眼は、五六哩の遠さを望み見ることが出來る、其の嘴は尖端が圓くつて、指も他の禽類とは著るしく異なつて、只二本しかなく、內側の一本は其の長さ外側のものに二倍し、共に非常な力を持つて居ります、ですから怒つた時には、其の強い指の脚で蹴る畢竟此れが此の鳥の敵を防ぐ唯一の道具になつて居る、翼は極めて短かく、迚も他の羽族の如くこれで飛行する譯には往かない、只だ走る時に擴げて、幾分か其の行進を助ける位のもので雪の如く白き其の翼、其の尾を除いては、他は皆漆の如く黑くつて、美くしい光澤がある。

雌駝鳥は雄鳥に比べて其の美はしさが少し劣るが、其の羽緣は長くつて絹糸の如く只だ色が灰白色です羊が其の毛の柔かな爲めに稱せらるゝのは普ねく人の知る所ですが、駝鳥は其の羽毛を以て、他のよりも珍重さるゝのです。

駝鳥の卵は、重量殆んど二磅程あつて、通例鷄卵の二十倍程あります。

雛駝鳥は極めて無作法なものであつて、恰然成育も過ぎた牝鷄の樣です、其の食物には糠、穀類、菜蔬等を與へるのですが、直ぐに食ひ散らして了ふ、六週間ほど經つて其の大きさ七面鳥位になり、三箇月も過ぐれば六歲の兒童よりも丈高く、六七箇月にもなると、美くしい羽毛を着るやうになります。

△駝鳥の羽毛

此の飼養園には所々異樣な籠が置いてあつて、其の一端にある戶口からして、若き駝馬を追ひ込むのですで駝鳥が其の籠の中に入ると戶を鎖めて了ひますから彼れは怒つて躍り廻り、其の短き翼でもつて頻に羽搏きをするのです、其の時、羽毛を採る人は、蝶番仕掛で上下に動く樣に出來てゐる籠の諸壁を翼の上に下ろし、其の間の口から手を差し入れて、羽毛を切り取ります、胸、翼、又は尾に生えた小さき羽毛は、そのまま拔き去りますが、翼及び其の他の大羽毛は、凡て皮膚上に其の翮を殘し、意を用ゐて刈り取るのです、

何故かと云へば、若しかゝる羽毛を拔く時は、鳥をして苦痛を感せしめ衰弱せしむる患ひがあるから、拔かないで刈るのであります、かうすれば數週間の内に羽翮の剛圍の肉は枯死して縮み、鳥の體に何等の苦痛も害も與ふる事なく、自然に羽翮を脫落し去るのです。

一つの翼より得る處の長き羽毛は凡そ二十四五枚です、而して雄鳥の羽毛は、局部の黑を除いては全く純白色であつて雌鳥のは灰白色である。

此等の羽の米國等に輸入さるゝものゝ大部分は、雪



白色又は漆黑色のものであるが、諸鳥の中で最も華美で艶麗で然かも優雅でありますから薔薇、菫又は夏の黃色い草花等と、其の妍を競ふのであります。

△羽冠

又羽毛の中に、細くて光澤が有つて總狀をなして居るものがある其れが日光に輝いて光澤を放つ有樣は實に綺麗なものです此れは即ち羽冠と稱せらるゝのであります、小間物商は此等のものを以て貴婦人の帽子又は其の髮飾りや簪樣のものを作るのでありまするが

然し此等のものも、小間物商の手に入る前は、等しく小鳥の身體の羽毛であつたのです、極く微なる燕雀を

も愛し給ふ神は、其の鳥自身を飾れとてこそ、斯かる美はしき羽冠を授けたれ、決して拔き去られて他人の用となる爲めとて造られたものではなからう。

△雪色蒼鷺

此の鳥の毬毛は其の平滑な背より肩にかけて、尾の邊りまで、優雅に捲縮んで居る、併し此の美くしい羽こそは、實に遠からず其の身の樂しき自由生活を止めしむる結納品とも思はれるのです、此の鳥は、米國に澤山居ります。

雪色蒼鷺は群をなして來り、其の營巣期になると人里離れた荒野を撰んで、そこに充分なる注意と熟練とを以て、雜草の間に鳥の一部落を作るのです、

然るに憫れむべし、此等の鳥が食物を覓めてそれを家に運ばうとして此方より彼方に、翔け廻る時、逸早くも狩人の鋭眼に見つけられるのです。

而して靜かに、跫音を盜んで、一歩又一歩と、此の溫和な鳥に氣付かれぬ樣に、近づいて來て、遂に其の鳥の部落を襲ふのであります。

頭上には餌を啣んで翼忙しく歸り來る親鳥、下には、飢たる雛の之れを見て、喜び叫ぶ熱心なる聲……其の時鳥の行き交ひ打ち擾たれたる空に、轟然たる小銃の響……瞬間の羽搏き……次には此れまで何心なく樂しげなりし白き鳥の落下。

靜けさを破る銃の響は、一發其の度毎に美はしき羽の脫落すると共に、今の今まで樂しく翻飜して居た白き鳥が無殘や、羽搏きしながら落ちて來る。

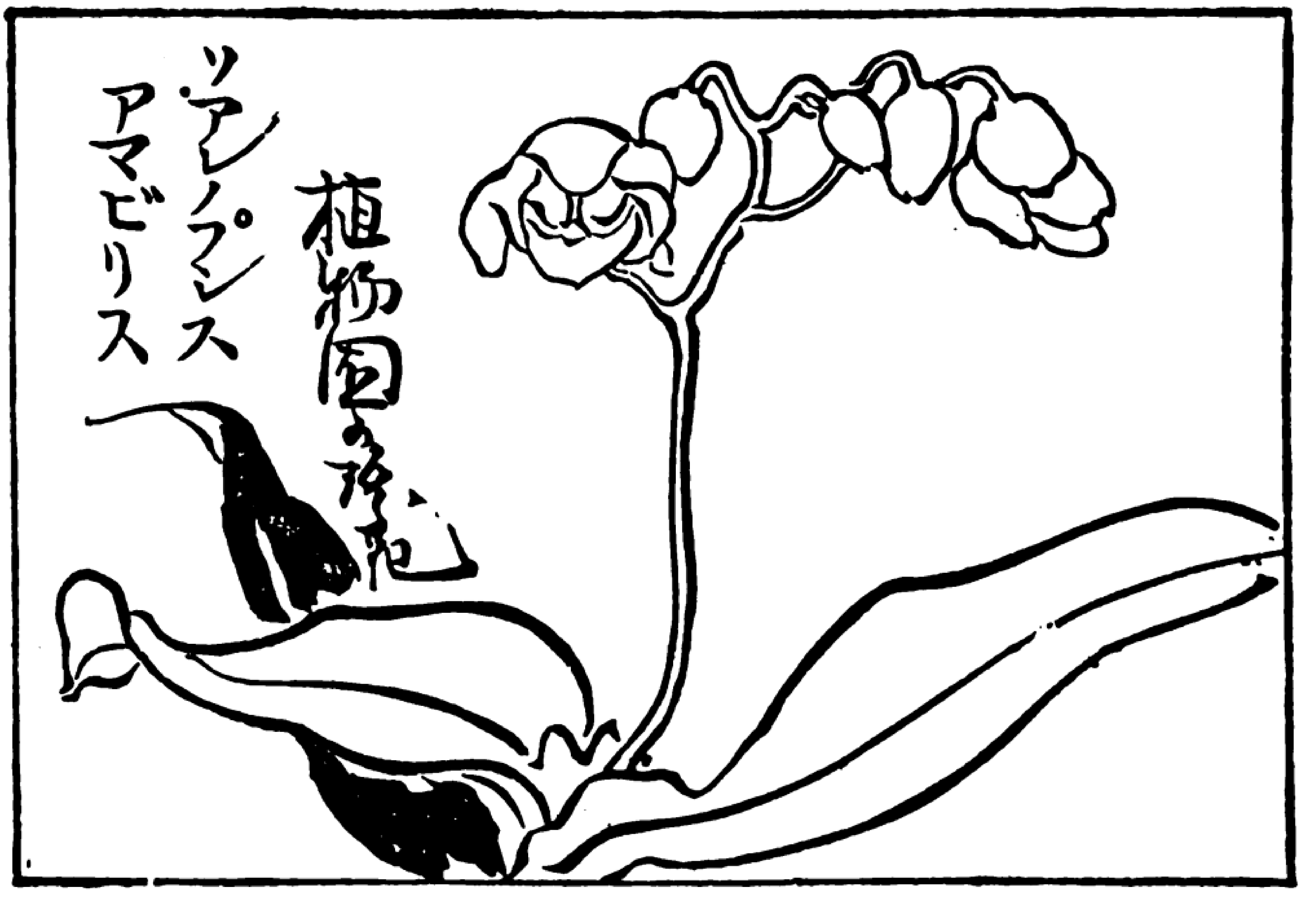
凶變は此に止まらずして、不意の虐殺は此に止まらずして、擊たれ傷けられ、地上に投げ落されるのですそこで獵人は小刀を閃めかして皮其の他を切り、而して肉未だ溫かに戰いで居る體より、結納の飾りにも似たる其の美くしき毬毛を刈り去るのです、而も此の樣に苛い目に逢はされた鳥は、其の儘に打ち棄てられて只だ苦痛の中に藻搔死に死んで終ふのです、其れが時としては、飢に叫びながら餓死し行く己が雛鳥の目の前で、而して斯の樣にして得られたものは、思ひやりなき婦人等の帽上に、只一時の美を添ふるものとして

用ゐらるゝのではありませんか。

△鳥の胸毛

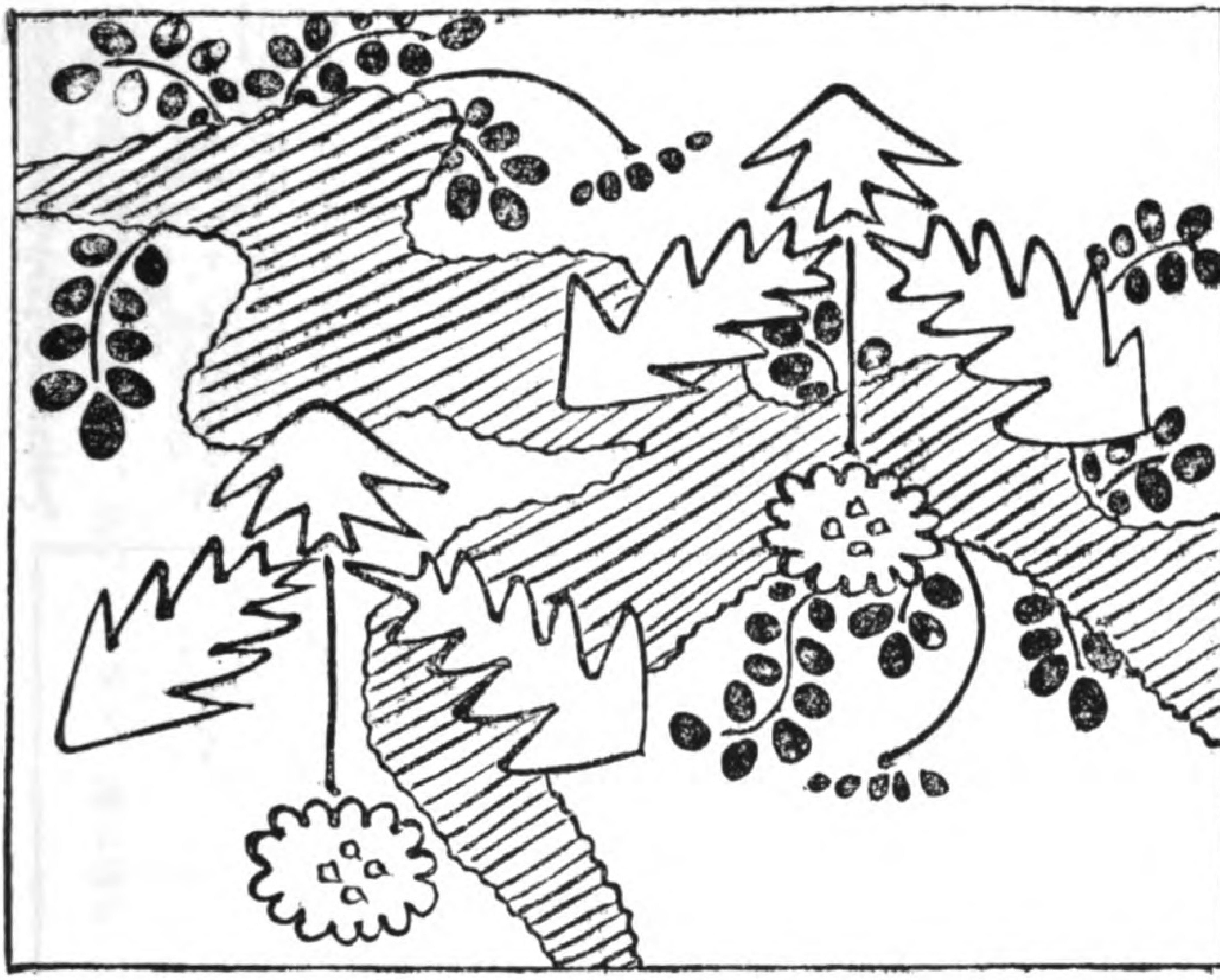
カリホルニヤの荒漠たる湖沼地方には、又た別種の鳥の部落がある此れは皆な水上にあるので、其の卵や雛を養はんが爲めに心を用ゐて織つた巣は、湖面上に漂うて居ります、而して此處にグリーブスは何等の危害も何等の故障もなく至極平和に住んで居ります、此れは美くしい鳥であつて、其の毬毛は雅美なる色彩を有し、莊嚴で而も温和で、恰然、水上の仙人と申した樣なものである。

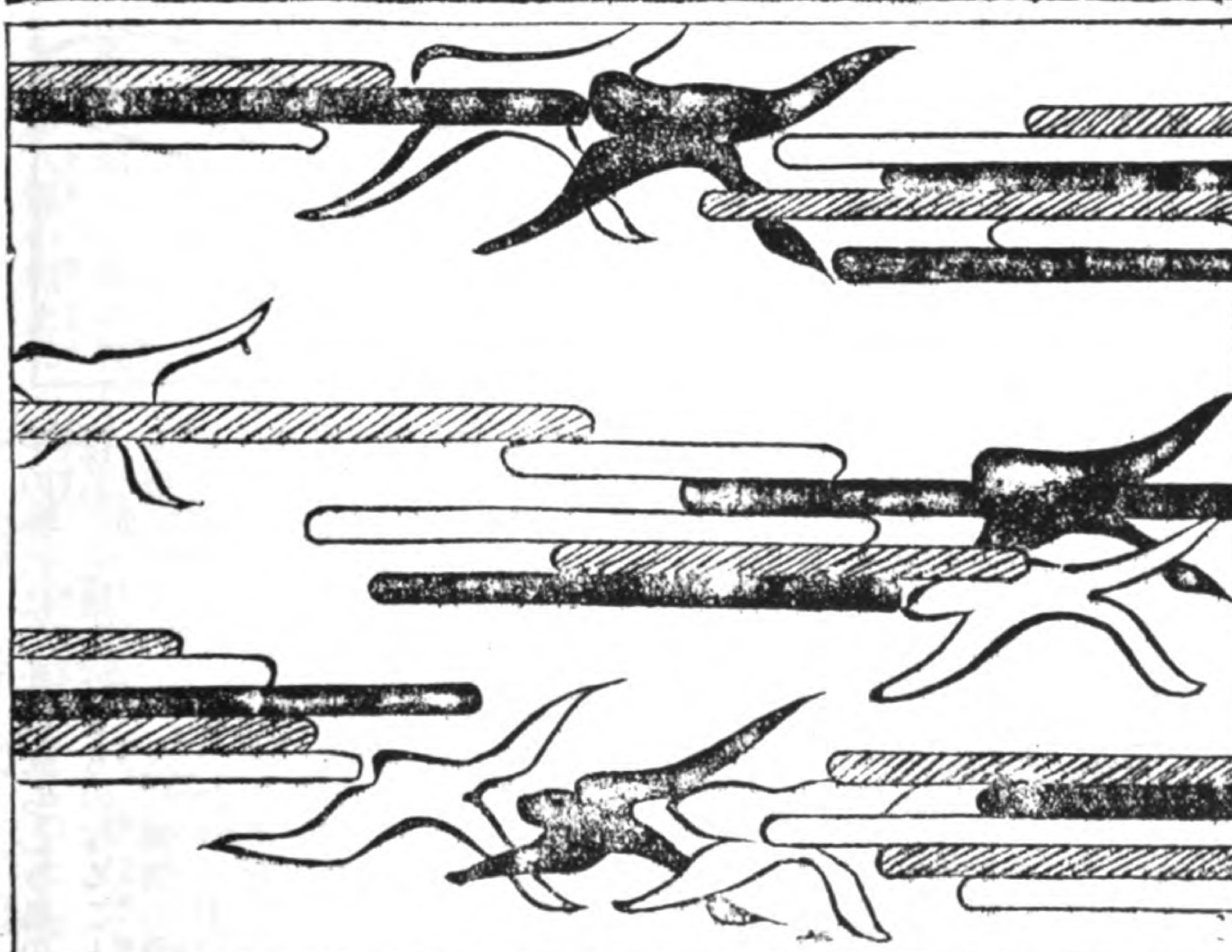
グリーブスは雪色蒼鷺の如く、湖上又は森林の野獸より危害を受くることは曾てなかつたのですが、遂に何人か帽

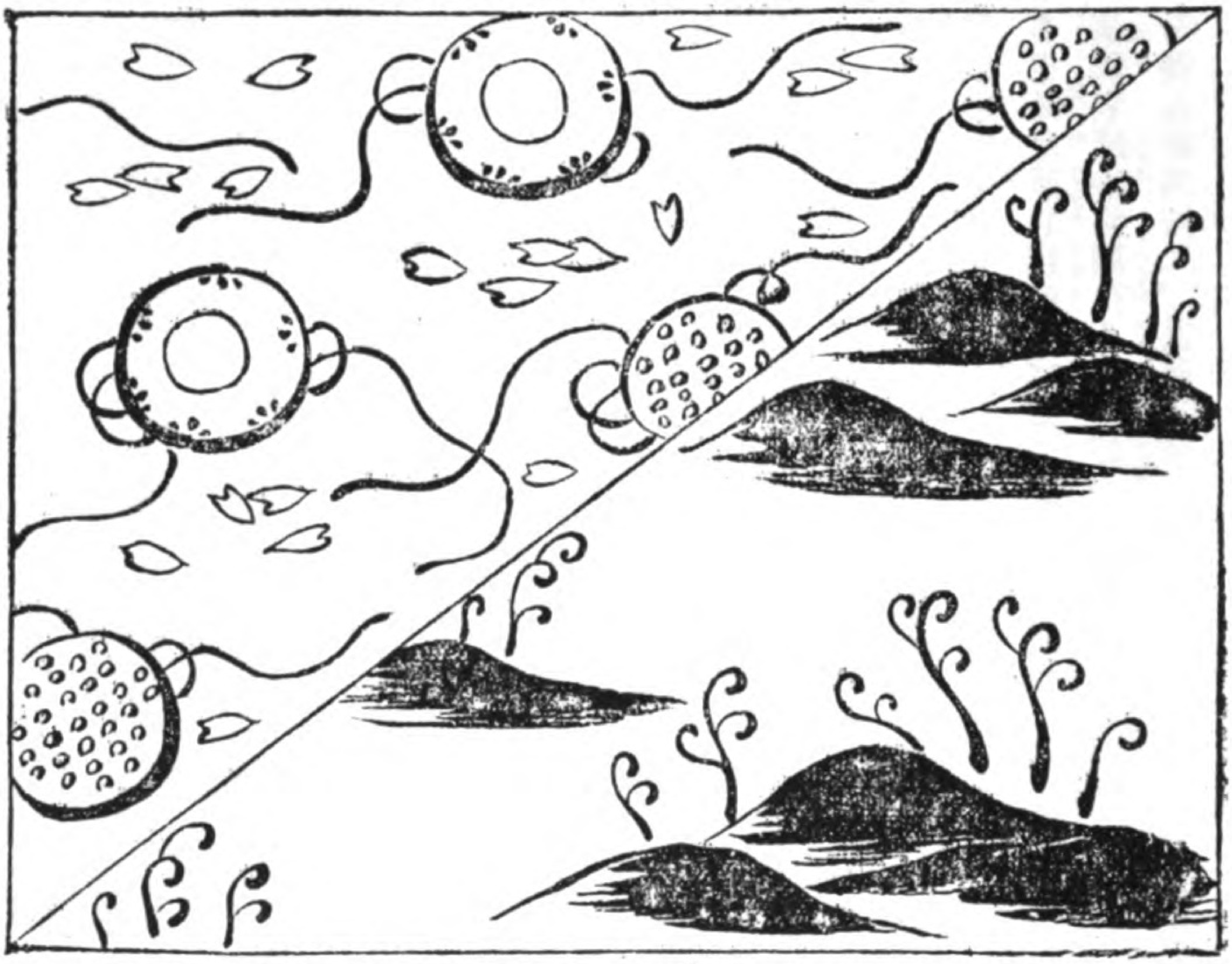


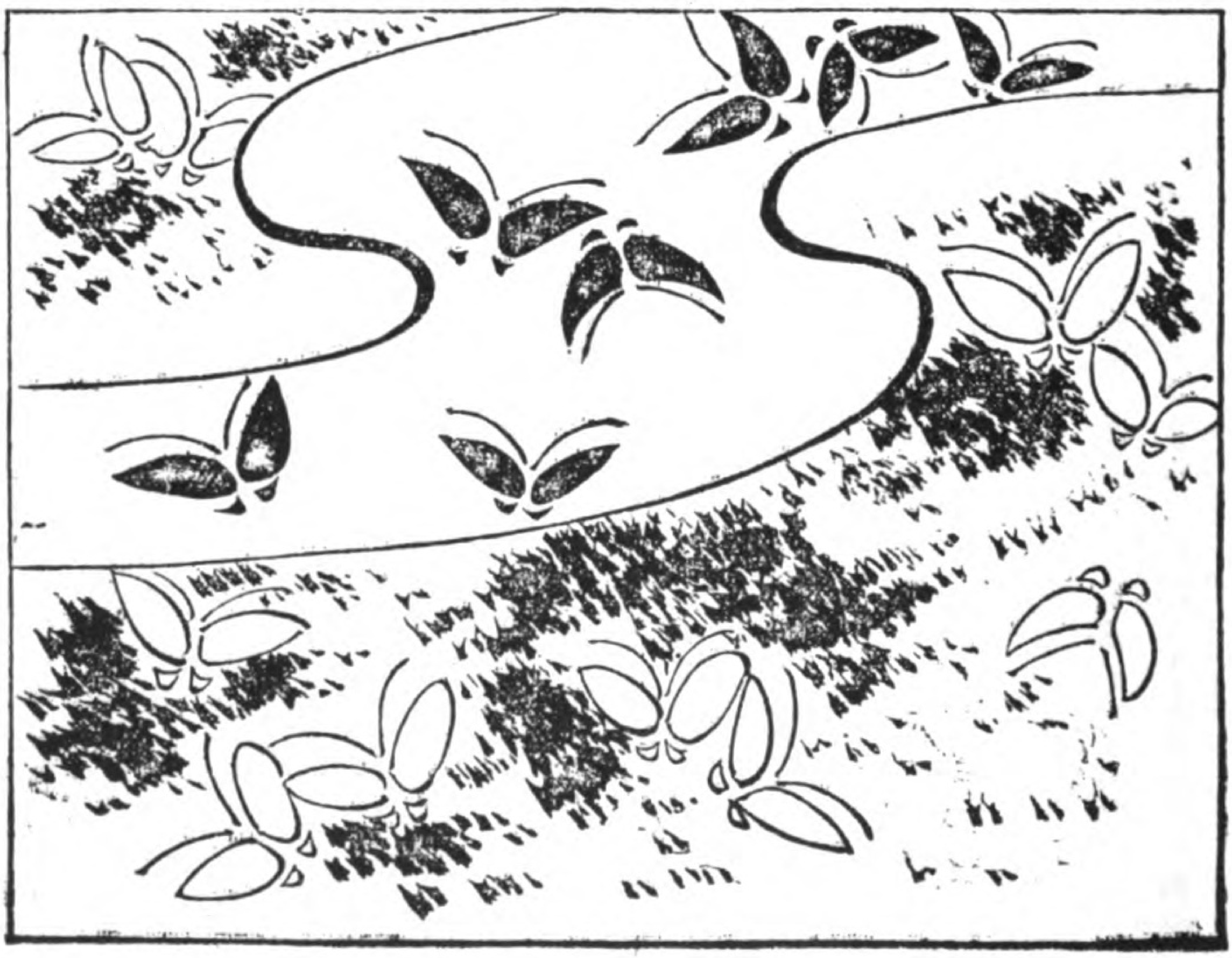
子の飾には、此の愛らしき鳥の毬毛こそ最も好きものなることを發見したので、遂に無情の獵人が附狙ふ樣になつたのです、實に其の羽毛は柔かで、銀の如き羽絲より成立ち處々底色を帯びて居る容態は、何物の美も之れに過ぐるものはないけれど、纎緻の美いのが却て害となつてグリーブスの運命を危くするのであります。

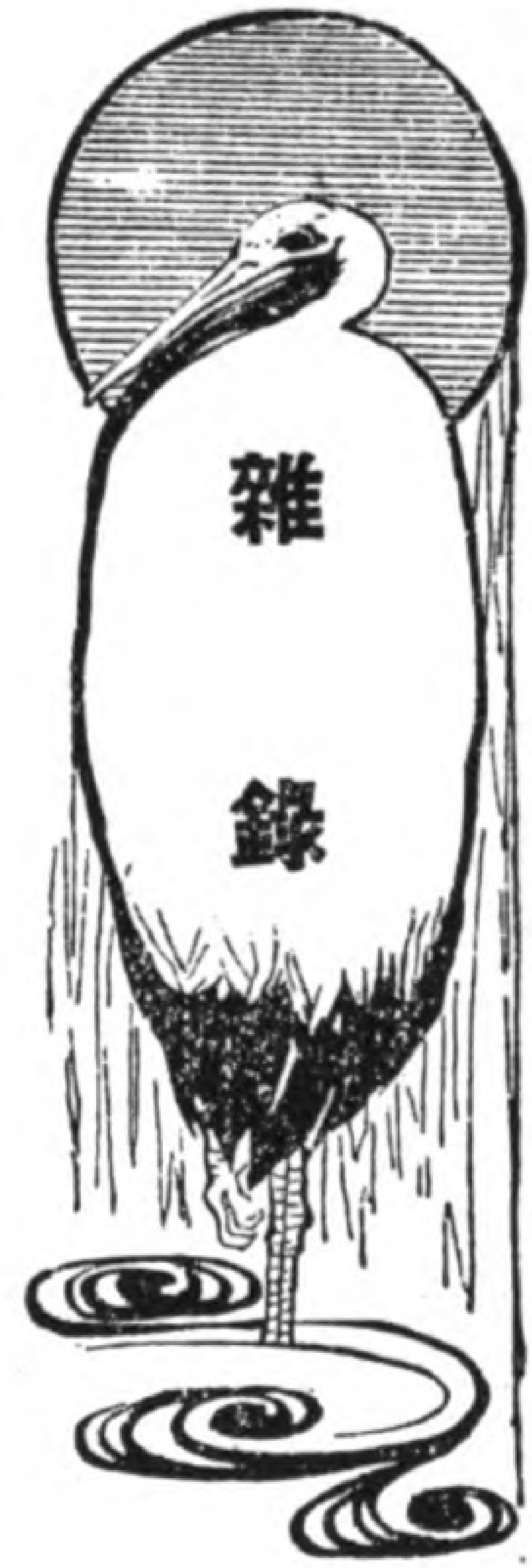
其故營巣に際して、不幸にも彼等の靜けき家庭の夢は、鋭き響きに破られて打ち落さるゝのであります、而して柔かな胸毛は其の失神して居る心臓の上より抜き去られた上鄭寧に乾かされ、荷造りさるゝのです、で再び我等が之れを見る時は、已に流行の帽子の上に飾られて居る時であります。(大澤天仙)











巴里の惡弊

白水生

獨身生活

文明世界に於て、從來行はるゝ喜劇の趣旨題目として居る所を一口に云へば、先づ男子が女を我持物にしようと思つて焦慮ると云ふに歸する。世人を『受け』させようとする演劇は必らず觀客をして、彼の男は結局彼の女を我物になし得るか何うか』と云ふ疑問を起させるやうに出來て居る。第一沙翁の劇をはじめ其他清國名家の喜劇なるものが、大概皆、男子が或一婦人を得んが爲めに、其競爭者と爭うて種々の障碍を切り開くと云ふやうな筋である。これは今日に於ても猶一般の傾向であるが、唯獨り佛國では喜劇の趣旨なるものに大革新が行はれ、右の舊式は廢れてしまつて、茲に全く新らしい傾向を作つて居る。佛國の脚本作者連は、右の如く男が女を手に入れようと焦慮るといふことは、最早世間の實際に合はない事を知り、且つ巴里人は、日々途上に見聞する事、又は家庭間の關係等、今日實地の狀態を劇場で看ることを望むのであるから、脚本作者等は自然其人氣を迎へやうとして、一意今日の巴里生活の實地を其儘活現することに努むるところから、この傾向を生じた譯で、其演劇の筋を見れば巴里生活實地の傾向が知らるゝ道理である。

さて其改まつたは如何なる點かと云ふに、實に大革新佛國の演劇の筋は最早男が女を手に入れようとするのでなく、女が男を手に入れようと焦慮ることになつて居る。問題は最早『彼は彼女を我物になし得べきか』でなく、その反對に『彼女は彼を我物になし得べきか』である。獵師と鹿とがまるで顚倒してしまつて、戀愛

の此武場に於て、目的の獲物は女でなくして男である。此派の演劇は甚だ人氣に適ひ、女の爲めに男が苦勞すると云ふ筋は最早舊劇になつて寧ろ時代物の方へ屬さうとして居る有樣、今日の巴里人は、演劇で男子が結婚と云ふことを意焦慮するのを見たら憫笑する、遠からず田舍でも此舊派の演劇は、丁度歷史で、我々の祖先が、附近の蕃族の帳幕の中から女を奪ひ取つて來て妻にしたことなど讀む時のやうに、單に一種の好奇心のみを以て迎へらるゝことゝなるであらう。

されど佛國の演劇が斯ういふ有樣になつたも、實は順序を經て來たことで、決して突然變つた譯ではない。過ぐる十數年間の巴里の旅行劇を調べて見ると、其中結婚といふ事を筋に立てたのは、至つて稀れで、過半は離緣と云ふことを骨子として居る。獨逸の喜劇は結婚以前の事から始まつて、祝言の式を以て終るに引換へ、佛國のは丁度結婚の濟んだ處から始まつて、法庭の場とか、舞踏室内の假面踏舞の場とか、其他種々の忌はしい場面で局を結ぶことになつて居る。此種の劇を『姦通劇』と呼んで居るが、啻に姦通ばかりでなく、結婚より來るあらゆる害惡を現はして居て、何れも男子が妻なる者を迎へて後の不愉快なる忌はしき境遇を示して居ないのはなく、汎べて女といふものは浮誇で、無氣力で、浮氣で、氣隨であるから、男たる者は之と一緒になつたら早晩其身を毒せられると云ふことを示すに在る。何の事はない、是等の劇の教訓なるものは、汎べての男子に對して結婚を避けるやうに警めて居るのである。猶これよりも更に一歩を進めて、男子が獨身生活に甘んじて、一意結婚なるものゝ苦痛を避けんとすることを骨子とした劇さへも續々として出來て居るのである。

されどこれ等は實地生活上の有樣を寫したもので、實に現時の巴里社會は獨身生活の流行熱が非常の勢を以て蔓延して居て、『家族』なるものは廢れんとし、結婚てふことは昔話のやうにならうとして居る程の勢で、正式結婚といふことは、最早少壯男子の夢想中の主なる部分を占めて居ない。苦學十年業成りて今

や沼社會の舞臺に登らんとする巴里の青年者に向ひ、試みに其滿心の冀望を問はゞ、彼等の十中九までの答へは『我等は富と位階と地位に熱望し、我等は權勢と名譽を熱望し、又快樂を欲す』と云ふに止まる。結婚と云ふことを希望の一に數へるものは殆んど無いと云つても宜しい。さて何故に妻を要せぬかと問はゞ彼等の答へは斯うである『何故妻を迎ふる必要があらう。我等が世渡りの上に永久の障碍物、精神上の重荷、名譽の毀損者、又財産の消耗者たる妻なる者を迎へて何の益する處があらう。尤も我等も絶對に結婚せぬではないか、結婚するには一つの條件を要する。それは外ではない。其結婚の爲めに我冀望の目的が達せらるゝと云ふ場合である。此場合には我等は目をつぶつて權力、門閥、金錢と結婚し、此取引に對する避くべからざる附屬物として妻を取るのである。婦人と生れた罰科に對して處女なる者は多額の金を以て許しを買はねばならない。』

右の理由によつて、巴里には年を取つた處女が實に夥しいもので、多少資產のある家の娘は兎もかく、貧家の娘は生涯緣が無くて終るもの滔々皆然りと云ふ有樣である。社會生活上の組織も、自然と此一般の傾向に應ずるやうになり、家庭生活から脫出した連中の養育院とも云ふべき料理店は非常の勢を以て其數を增し、又全街、多き處は全區、獨身者棲居の家のみを以て滿たされたる處多く、獨身者の要求を特に滿足せしめるやうに出來た一種の獨身者向き家主の職業が盛んになり、又俱樂部とか何とか、家庭の靄々たる和樂に對する、主我的なる代理物が、一代に五倍も增加を見るに至つた。

此獨身生活流行の弊として、自然と社會に淫蕩の氣風を導く譯で、是等の獨身者中一人として此氣風の圏外に立つ者はあるまい。されば巴里に於ては、男子は結婚の門前を忍び足に通り脫けて、宛がら妙計の適中した時の如く愉快げに笑ひながら、竊かに彼の燈光ほの暗き處、中には望みの儘の戀愛が、手招きしようと待つて居る半ば開いた怪しい戶口に入り込みつゝあるの

であつて、又社會の組織も、いよ〳〵これに適應するやうに絶えず準備を進めつゝあるは明らかである。今や劇の作者連は、此獨身生活なるものゝ表面を、社會の僞善が掩うて居るところの幕をあけて、内部の實相を現はさうとして居る。即はち彼等は、結婚せざる爲めに内實何の不自由も感せず、結婚したりとて何の益もなきが故に、堅く結婚を忌避するといふ男子と、人に嫁せずして、全く一種新手の方法によりて身の保護を得やうとする婦人との生活の實相を、世間萬衆の前にさらげ出さうとして居るのである。いや幕の揚げ方は唯此位では濟むまい、片隅をあげ了れば又片隅が揚げられ、終に全く幕を揚げ盡したならば、如何なる現象が我等の目に出逢ふであらうか。嗟！　實に今日の文明は更に一轉して再たび原始時代の社會組織に還り、女は單に男の玩弄物となり、夫婦など云ふの關係もなく、生れた兒は其種族が共同の養育に任すと云ふのが如き狀態になるであらうか。巴里生活の内幕は已に其有樣に陷りつゝあるのである。

飲酒の風習

佛國に於ける國民的病患の一とも云ふべきは飲酒である。數年前に於ける或人の統計に據れは、其時より過去十年間に於ける佛國民飲酒の料は、一人に付一ケ年平均、葡萄酒七斗、ウヰスキー一升六合餘、麥酒一斗二升、林檎酒約五升五合に當つたとのことゝ而も此計算は國内人口へ割宛てたのであるから、婦人も幼兒も其中へ這入つて居る道理で、成年以上の男子に在つては、右の平均量の倍位は飲む勘定であらう。又其統計家の說に、アルコールの消費額は過去五十年間に倍加し、而も其間人口の增加は、始め三千二百五十萬のものが、三千五百萬になつて、僅か二百五十萬即ち七十分の一にも足らぬ增し方である。又酒屋の數も斷えず增加の一方に傾き、全國酒店の數三十七萬三千軒に近く、即ち人口百〇二人に付、酒店一軒の割合になる、これは飲酒の盛んなる露國にても見ざるところの多數である。

佛國に於て酒料が如何なる程度まで用ゐらるゝかと云ふことに就ては、到底他國人に計算は立たない。實際佛國人は皆酒を飲み、男女、老若、其他人物の地位等の區別はない。搖籃の中に居る嬰兒ですら葡萄酒を飲まるゝ位だから、少年となればもう盛んに飲む。小學校通ひの小供が、學校鞄の外に、赤葡萄酒の瓶に入つた小さな籠を提げて行くは普通のことで、獨り男女のみならず、女生までも、學校で休みの時間に飲むために葡萄酒の小さな瓶を持つて行くのである。

職工連中に至つては一人として大酒家ならぬはない。尤も彼等は決して酩酊する程には至つて居らぬが、絶えずに、アルコールの刺激を受けるやうにして、朝、晝、夕の區別なく食時には酒を用ゐるのである。下等社會ばかりでなく、上流の人々にもやはり右と同一の習慣を保つて居る人が多く、食時毎に多量の葡萄酒、珈琲一杯毎にコンヤク酒を用ゐ、午後五六時の頃には特にアブサンス酒を用ゐる。貴婦人連も男子の如く常に酒を嗜むが、唯表面はうまく取繕うて飲まぬ風を裝ふのである。されぱアブサンス酒などは勿論婦人の飲まぬところで、若し誰か其面前でそんな酒の名でも云つたら「おゝ厭だ！」とさも／＼氣味惡げに云つてしまふが、其實陰では「消化を進める」とか「神經を鎮める」とか、何とか体裁の好い名を付けて、絶えず酒を用ゐるのであつて、そんな療治の結果は後終に鼻の尖が赤くなつたりするのである。

渴きを止めるに水の代りに酒を用ゐる、珈琲店料理店に水呑樣のコップは備へてない。若し咽喉が渇くと云ふ客人があらば、主婦は酒を出すのが常である。是非水が要るといふ場合には、半分ばかり水の入つたコップに、舍利別と、大きな砂糖盃とを出す。實に巴里人の多數は生れてから死ぬるまで、純粹の水と云ふものを飲んだことはないと云つても宜しいのである。

(右二項ノルドー氏の巴里スケチに據る)

狂歌

青山せい子

姫君よそなに遠慮慰勞會
かゝる時こそあむ限りを

時局彙聞

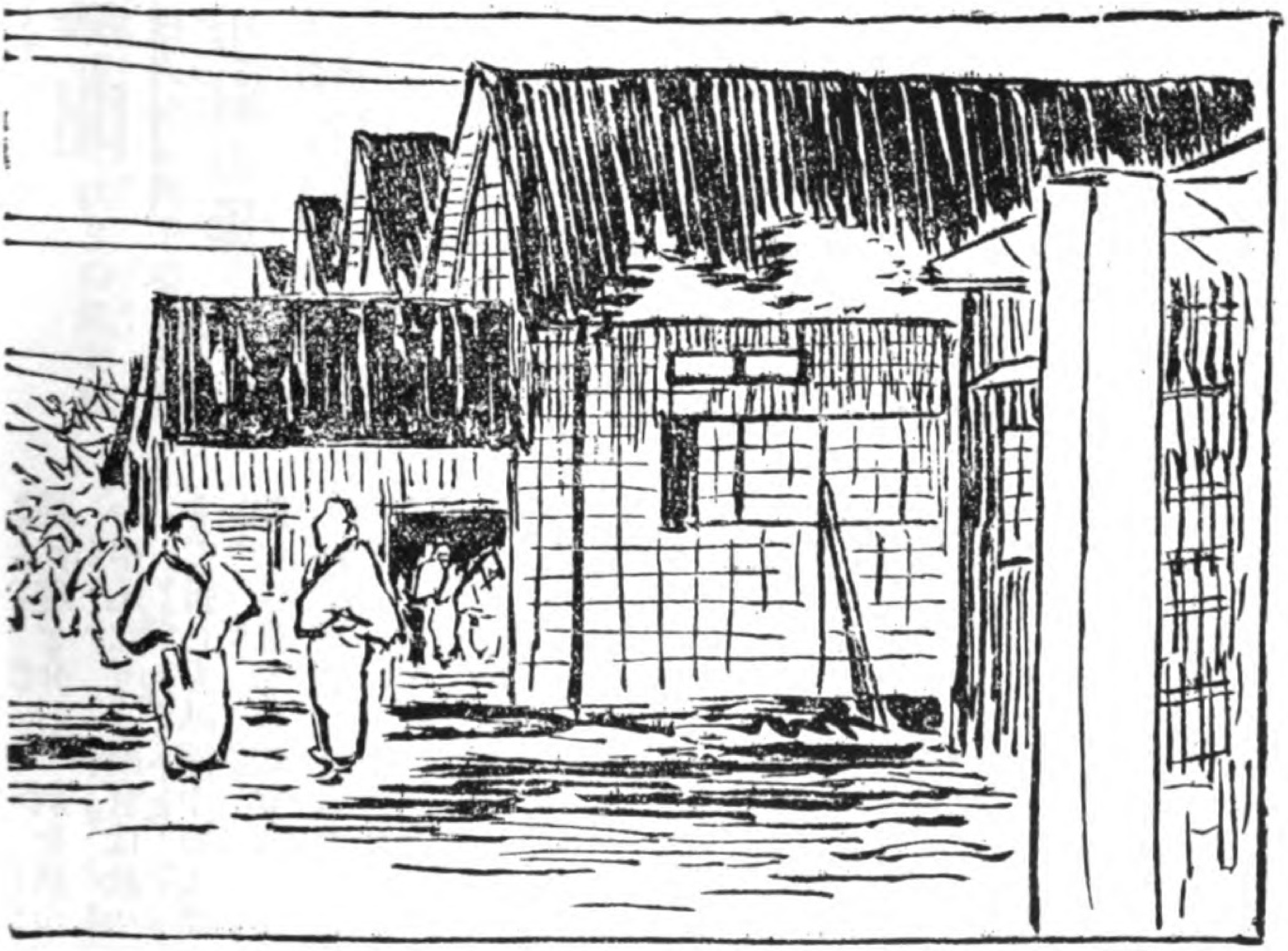
東郷大將と亡き少尉の母

東郷大將再征の途上、汽車の大垣驛に着くや、突如として大將に面會を願出たる婦人あり、彼女はある重要の任務を帶びて旅順港外に壯烈なる戰死を遂げられし海軍少尉黒川永次氏の母刀自にてます子といふものなるが、愛子の戰死を聞くより只管少尉の冥福を祈られけり然る處旅順開城と共に海戰に一段落を告げ我が聯合艦隊の司令官東郷大將は上村中將と共に凱旋せらるゝ事となりしより、ます子は大將の大垣停車場を通過せらるゝ折之を迎へて面謁を乞ひ我子のうけたる恩顧を謝せんと思ひ居りしも病の爲め之を果すを得ざりき、さるに今度大將が再度の出征あると聞き今度こそはと二月六日午前三時、寒き夜風を冒して大垣停車場へ赴き到着を待受ける、旋て四時三十分、大將を乗たる汽車着せしにぞます子は欣喜雀躍して吉村大垣町長代理を介して刺を秋山副官の許に通じ大將への面謁を申込たり、副官は故少尉の母堂と聞き暫し待たれよとて折しも臥褥中の大將を搖起して其旨傳へければ大將には直ちに起立ち「黒川少尉の母御とな！」と傍への軍服を纏ひて「さらば此處へお連れ申すべし」とます子を窓際に招き寄せ「余は東郷平八郎なり、御身の令息は旅順に於て花々しき最後を遂げられしこそ悲しき事の限りなれど其死に因つて購ひ得たる國家の利益は如何ばかりなりしぞ……子息も地下に冥せらるべし、」と種々慰められしかばさなきだに涙に脆き老婦は感涙に咽び「役にも立たぬ永次を一方ならずおいつくしみ給ひし事何とて御禮を申上げんや……大將閣下より直々に斯面目身に餘る御言葉を下し給へる妾は死するも忘れざるべし」と喜悦の涙袖に冷かなりき、かくて五分ばかり種々の物語を爲せしがやがて發車の時刻に迫ければ、ます子は涙を拂ひて「何卒御壯健に……」との言語を殘し汽車は轟々として駛り初めぬ、時に大將の双眼に涙の露の深かりしは有繫に情ある英雄の常

情と貰ひ泣の涙に咽びし者も尠なからざりきと。

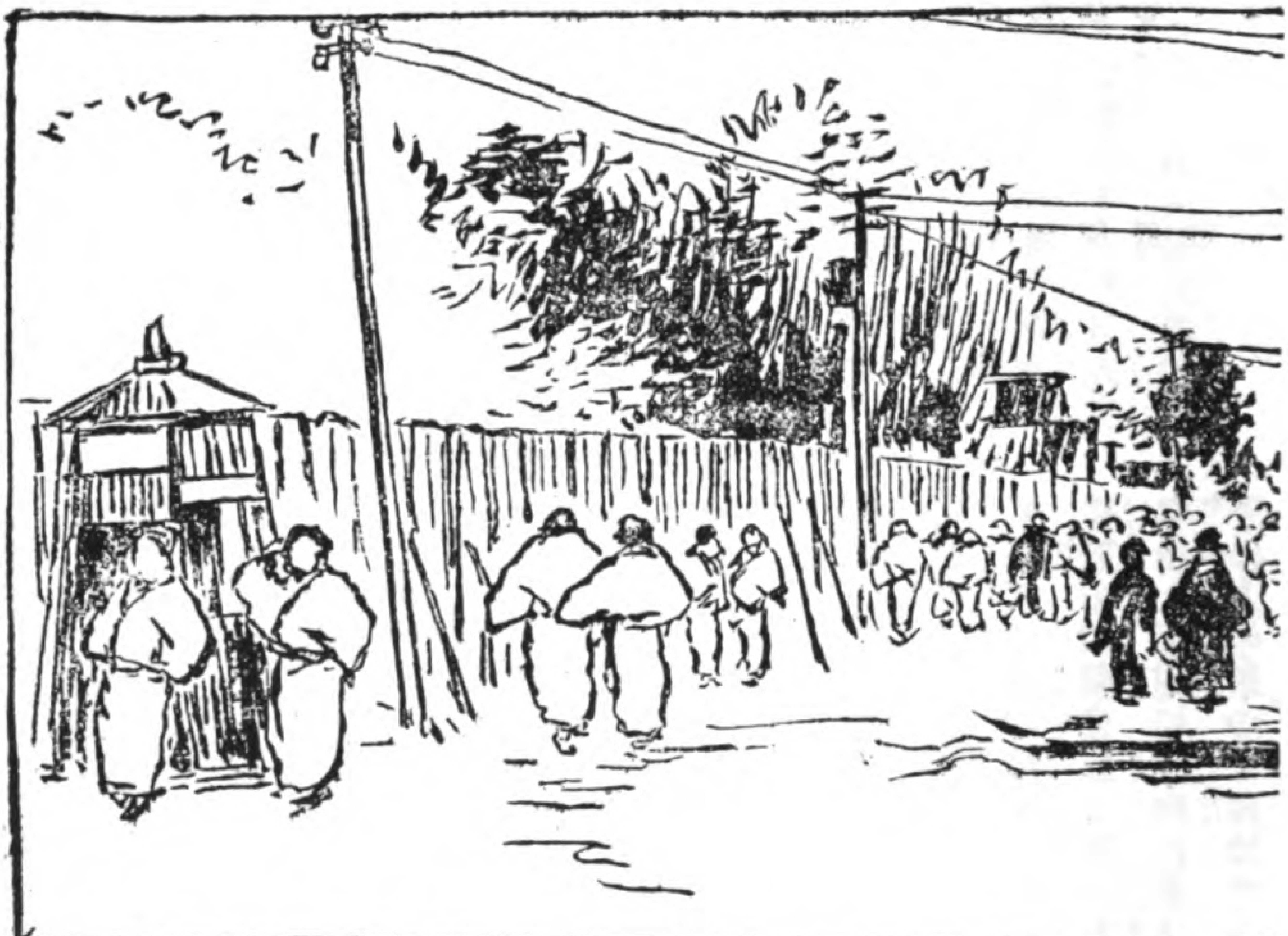
伏見若宮邸の庭園

伏見若宮には草花を好ませ玉ひ、御邸内に温室を御建設遊ばし、御手づから御培養あらせ玉ふ由、されば數千種の花は芳を鬪し、幾種の蘭は研を競ひて、眩き許り美しく拜觀さるゝと、今其の模樣を承るに温室は五室に區劃され建物の總坪數六十六坪鐵管を通じて温氣室内に滿ち六十五度より七十度の温度を保たしむ。室は木造にして磨ける石を敷詰め寒水石の花壇には蘭の美



しき花を飾られたり、從來温室の搆造には鐵骨の建物多きも、こは錆の生じ易ければとて殊に木造に建てられしは其清潔を好ませ給ふ殿下の斯くは御差圖あらせ給ひしなりと承はる茲に養ひ玉ふ、蘭の鉢數は千三百以上にしてマニラ產の蘭「フアレノフシース」は桃色を含み「アマビリス」は純白にして雪の如く又ブラジル產の「カトリア」は尤も秀なるものなり、草花には「シネラリア」「ノーゼンスラリン」「フリヂヤ」等の花香り床しく亞弗利加地方の虫取り（ネペントス）は一種の液

を湛て奇觀云はん方なし此液に虫の誤つて入る事あれば忽ちに死すとて此名あり、其他覺え盡せぬ花の内に伏見大將宮殿下の過ぐる頃御渡米の折桑港より御土產にとて御持ち歸りの「カトリア」の鉢は殊に珍しき物なりシンガポールより御取寄せの「グラマトヒラム」「バンダトリロコー」（蘭の一種）等は他に比すべき物稀なりと云ふ殿下は温室の花卉を愛でさせ給ひ、御親ら御手を卸し給ひし程なるに開戰以來軍事にのみ御心を勞させ給ひ近侍の者より御勸め申上ぐる時の外此温室に成らせらるゝ事なしと誠に恐懼の次第なり。



東京豫備病院氷川分院の寫生

軍中の風流

一月中旬の事とかよ、沙河を控へて敵と相對する我が滿洲軍の陣營に於て、風流の士相集つて『旅順陷落祝捷俳句會』といふを催したり、運座の面々は何れも軍服嚴しい男なるが、士官も士卒も皆な其の階級を捨てゝ極めて平等圓滿な俳諧のホームを造りしと『課題は『落』字讀込（春、冬季雜題）にて互選に入りたるは左の如くなりしと

孤城落日遂に消えけり春の雪　[illegible]

正月や旅順落ちたる雑煮膳　同
月落ちて營の風の寒さかな　同
落ちて行く後ろ姿や冬の空　同
落城の歴史を語る霜夜かな　同
孤城に日露をろ〳〵の枯野哉　秋峰
城落ちて更に妓を召す春の宵　同
旅順口落る其日や初日の出　激沖
春風に落城の傳騎走りけり　同
天顔に旅順落ちけり御世の春　同
木枯や落武者の影あはれなり　碩山
曉や雪の營に月落ちる　同
陥落を祝ふや屠蘇の朝機嫌　胡雲
書初や旅順陥落と大筆す　桂水
初夢や遂に落ちたる旅順口　稻郎
陥落の祝捷會や松の内　観水
落城の營見ゆるや冬の月　同

夫れより更に春冬混題の雑吟を行ひ、左の秀句を得たりと、

臥新嘗膽十年にして初日の出　最洲
開城の報傳はるや松の内　同
東風吹くや旅順の城の日の御旗　同
吉報や巳の年の春花の春　同
冬枯や敗兵の靴ところ〳〵　秋峰
彈痕の殘りし松に時雨るゝよ　同
屠蘇の酔再ひ酒を呼ひにけり　激沖
堪へ難き心や折れて何の雪　碩山
攻圍軍の手柄を語る火燵哉　胡雲
御世〳〵盡きぬ功績や春の山　同
新玉の祝捷會や屠蘇の酔　同
日章旗一際目立つ枯野哉　稻郎
城旭初東風光る營かな　観水
陽炎の燃えて血潮の雲に入る　同
血潮凍てゝ胡沙吹く風の寒さ哉　同

かくて散會したるは夜の十時、陣中に似合はぬ盛會なりしと、敵を前にして此の吟懐を恣にす、文あり武ある勇士達かな。

故松村將軍の事

南山の激戦に、將た旅順二〇三高地の攻略に絶倫の偉功を奏されたる一師團長松村中將は、旅順の事畢へて更に沙河の敵を伐つべく出立せられたる北征の途上に於て、腦充血を發し容體危篤と聞えたるが、藥石功なくして遂に陣中に逝去されたりと傳へらるゝは、天下の人の挙つて哀悼する所、今將軍生前の功績と英風

を偲ぶのあまり、將軍の逸話二三を左に錄すべし。

將軍は舊加州藩士にして御膳番たりし松村源左衛門氏の二子なり六歲の折嚴君に永訣し母堂の手一ッに人と成りたるが其謹嚴なる母堂の庭訓は少年時代の將軍に特殊の感化を與へたり斯くて將軍は十六歲の時同藩の指揮官小川清太の部下に屬して伏見鳥羽の戰に臨みたるが是ぞ即ち總角の初陣にして此當時既に豪膽なる若武者として嶄然頭角を現はしたりと云ふ西南の役起るや當時將軍は大尉を以て士官學校の教官たりしかば戰場に出づると能はざるを遺憾とし玆に躍起運動をなしたる結果近衛に中隊長たるとを得て戰陣に臨み田原阪の激戰には味方僅かに七八人となるまで奮闘勇戰し左手に傷きたるも毫も屈する色なく天晴れ戰功を現はしたり。

將軍は容貌魁偉又膂力衆に絕し宴に臨みては斗酒をも辭せず將軍に接する人は元龜天正時代に於ける古英雄を見るの感を發したる程なりき而も將軍の頭腦は頗る緻密にして嘗て第一、第六師團に參謀長として其適材たることを示し日清の戰役に際しても將軍の籌策宜しきを得て偉大の勳功ありしと。

將軍の嚴格なりしは儕輩の畏服する所、苟も一人の非行を知る時は一步も假借することなかりき、然れども部下を愛するの念深く嘗て臺灣に混成旅團長として赴任するや其軍隊生活の如きも從來氣候風土の關係上內地とは大いに趣を異にする所あるを見て玆に舊慣を打破して面目を一新し且つ教育の程度を進めたりと云へり又將軍の勤勉なることは諸人の驚く所にして軍隊に在りては終日軍務に鞅掌し家に歸りては知人其他よりの書信に對し必ず自ら返書を裁して怠ることなく又常に交際を重んじ極めて友情に厚かりしと聞く。

俘虜の宴會

靜岡收容

聖德無彊なる我が　皇上陛下には畏くも紀元節の佳辰を以て靜岡收容の敵國俘虜一同に對し菓物の御下賜あり、更に日本酒肴を給せられたれば委員及び俘虜將校は之に感激して合同宴會を開きたるが、豫て俘虜將校

の内兼て日本茶道、生花、琴曲、尺八等を所望せる將校ありたれば、同日午前九時より收容所事務室を抹茶席にあて靜岡市人宿町三丁目靜岡裁縫教授場より寄進に係る場主吉田琴子同生徒加茂千代子伊藤きく子寺尾とく子齋藤ふじ子五名の千家表流の點茶あり伊藤少尉室田高須の兩通譯斡旋の下に俘虜將校四十餘名覺束なくもかはる〴〵賓客となりたり何が扨日頃坐したる事なき彼等なれば窮屈らしくて私かに腿を撫で爪先を擦りなどして辛抱する樣のいとゞ氣の毒らしく見受けられたりと猶ほ前記女子の服裝は殊更注意を用ゐ總て純粹の日本風となし、髮は高島田に衣服は縮緬裾模樣帶は立てやの字に結び緋の模樣付の裲襠を着せしめ頭のさし物に至るまで日本的なりしかば捕虜等は服裝の優美なるを感賞せり點茶終つて露國二等大尉グリゴーリー氏は室田通譯を經て俘虜一同を代表して感謝の辭を述べ、終つて堤委員長は吉田琴子及生徒一同を別室に延きて挨拶あり更に五六の俘虜將校を紹介し抹茶の沿革歷史等種々の談話ありたり、次に生花の展覽あり琴曲は舊茶席(慶喜公茶席)に於て靜岡精華女學校琴曲教師岡野ちよ子外一名演奏し、尺八は海野平太郎氏吹奏せり、共に靜岡一流の名士なり。餘興として軍樂隊、手品、糝粉細工等ありて午後四時一同退散せり。

學校紹介

日本淑女學校（本郷區駒込千駄木林町）

◎位置。紅塵萬丈の都心を避けて、幽清閑寂の氣を湛へたる處、清楚なる建築物は樹間に聳立てり。是れぞ即ち堅固なる道德主義を以て誇りとなせる日本淑女學校也。地は駒込千駄木の森を負ひ、一條の徑を過ぐれば直ちに道灌山の佳景に通ず。四邊、春は落英の繽紛あり、秋は蟲聲の喞々の鳥韻、宛然これ水彩畫中の物たり。相和してあり。初夏の新綠憶ふに、校主が殊更に此地をトせるは、蓋し天然美の感化に依て、至純なる女子の德性を美化せんが爲めなるべし。

◎主義、滿都の女子を擧げて、滔々墮落の淵に沈めんとする現下海老茶式部の風潮を歎き、慨然として堅牢なる日本固有の道德主義を標榜して起ちしものなれば、一切の虛飾を拆け、先づ自己の心鏡を磨くを第一となし、玲瓏玉の如き淑女を養成するにあり。故に毎朝必ず校主が嚴然容儀を正して捧讀するところの信條は、言辭簡なれども、恐くば一點[illegible]邪の魅來さるを退くに足るべし、其信條の一つ二つ、(十條の中)

一、吾等は善く父母又は先祖を敬ひます。
一、吾等は友達其他の人には必ず信實を以て交ります。
一、吾等は學問をなし才智を磨き、又人道を修めて、世の中に利益となることを仕ます。

◎學科。を分ちて大學、中學、高等師範の三部とし何れも系統的階段を作れり、

- 大學部（文學科、家政學科）
- 中學部（普通科、家政科）
- 高等師範部（國語漢文科、家政科）

◎現狀。創立の日未だ淺ければ、生徒の數甚だ尠けれども、校主は鋭意教育に熱中し小杉物集兩博士を初めとし、廿餘人の學士諸師等、上記の主義を實成して教務を執ることなければ、前途の好望期して待つべし。

女報

▲女子職業學校の榮譽　一ツ橋なる女子職業學校生徒一同は去月十五日畏き邊りの御沙汰に接し造花、編物、繪畫、刺繡等を製作し宮内省に奉獻すと聞えけるが其最も優麗なるは花瓣に電燈を裝置したるものにて之に次ぎては戰捷紀念十二ヶ月屏風の如き共に未だ其類を見ざる程の丹精を凝したる品なり其他留學中なる清國女學生の手に成りし造花もありと。

▲上野女學校の開始　前女子高等師範學校舍監安達安子女史首唱者となり下谷櫻木町に校舍を新築し新學年度より開校する由なるが同地は東臺の幽閑にして喧塵に遠ければ最も適當の地なり教授は專ら實用を主とし學校程度を便宜上四ヶ年と五ヶ年とに分ち英語の如きは隨意科として專ら家政と裁縫とに重きを置くと云ふ。

▲各女學校の書冊寄贈　早稻田及び慶應義塾大學生等の發起に係る傷病兵に贈るべき書籍の募集に就きては昨今其第二回目を勸誘中なるが第一回に集められたる書物一萬五千七百六十五冊の中女各學校寄贈の分は左の如し

華族女學校（三百五十）、女子職業學校（五百）三輪田高等女學校（五十）香蘭女學校（九百四十九）立教女學校（七百五十）佛英和女學校（五百七十五）戸板裁縫女學校（二百五十）麻布家事專修塾（五十）實踐女學校（三百十七）

▲日本女學校の奉公　曾て手縫の手巾及び毛布を軍隊に寄贈せし日本女學校生徒は今回再び慰問袋を寄贈したるが此袋は手拭もて製し納めし物品を取去りし後は之を解き手拭として直に使用し得る樣になしたるものなりと

▲東京女學館の貯金法　女學館にては貯蓄を獎勵し一口十錢より五圓と限られたる内十錢を貯金せば學校より一錢を加へ五圓を貯金せば又學校より五十錢出しツマリ一割宛學校にて出し與ふることとなりて三十六年一月以來實行せられ居れり而して右金額中九百廿五圓だけ第三回の國庫債券に應じたりと尚ほ第四回の債券にも應ずる筈なりと

▲東京保姆養成所の開設　一ツ橋私立幼稚園主多田久氏の發企によりて標題の如きもの全國稀なる内に新設せられたり仝所は幼稚園保姆に必要なる諸學科を教授し其の年限は六ヶ月、授業料は一人一ヶ月金壹圓なりと

▲「姉妹舍」の開始　女子文學院首唱者木久夫人かほる女史の監督の下に姉妹舍なるものを同院と番地を一にせる牛込田町三丁目に開始し各府縣の高等女學校と氣脈を通じ本月より一般の女學生に對し食費僅に四圓八十錢にて宿舍を許すと云ふ

▲西洋料理講習　芝白金臺町なり普連土女學校教師ピンオールト氏は現今家庭の必要に鑑み自宅に常盤西洋料理會を開設し毎月二回西洋料理の簡短なる方法を實費十錢を要するのみ無束脩無月謝にて教授する由

▲女子宗教學講演　女子の品性を修養する目的を以て起りたる同會の宗教講話は毎日曜日神田錦町女子商業學校に開會來聽者は女子に限る由なり。

▲女學校と留學女生　目下我國に遊學せる外國女學生は下田歌子氏の實踐女學校を首め其他の女學校に清國留學女生三十四あり此の外暹羅の女學生三名は女子職業學校に通學し、イーストレーキ氏の長女マリー孃は上野の美術學校に、次女ローズコンスタンチン孃は本鄕の女子美術學校に通學し此外神田高等佛英和女學校に多數の外國女學生あり上野美術學校の如きは男生のみ故女生は奈何との說もありしが外人なりとて特別に入學を許可したる次第にて西ヶ原農事試驗場、女子高等師範學校、二葉裁縫女學校等にも來る新學期には入學を許す可き外國女學生多數ありと聞く

▲雅樂會の修學旅行　東京音樂學校講師鈴木米

次郎氏を聘して隔日に音樂の研究に熱心したる支那留學生三十七名と女學生三名との同會員は此程函根の七湯廻りに出掛けたるが何れもヴアイオリンを携へたる外オルガン二個を旅行先に運び到る處に一同撮影して愉快に數日を送りたりと我國にては男女學生の合同旅行は所詮行はれざるべきも切めては樂器携帶の大旅行は試みさせたきものなり

▲米國婦人の柔術教授　市俄古に於ける北西大學教授の妻女連は過般來大學構内に柔術奬勵會を創立せんとて奔走中なりしが近頃其計畫熟せしと見え不日右柔術のクラス開かるべく決定し之に主幹たるは同女子部體育會長ヒユーヤン孃に決せりと云ふ同孃は熱心なる日本崇拜者にして其授業には幾多之に關する説明をなせり孃は日本の柔術を以て米國婦人の體育上無二の訓練法と信じ殊にシカゴ婦人の如き屡々剽盜等の難境に遭遇易きものは自衛の爲め之を研究し置かざるべからずと物語れる由

▲女學生の理想人物　新潟縣高等女學校に於て某教師が「今代女流の欽慕すべきもの二三」と云ふ題出をしたるが、全生徒八十五名は之に對して左の如く答案を出したと云ふ

下田歌子、二九△吉田松陰の母、五△税所篤子、四△奧村五百子、二三△瓜生岩子、六△跡見玉枝、四△棚橋絢子、一△三輪田眞佐子、二△鳩山春子、二△中島湘烟、二△野口小蘋、一△大山捨松、一△野中千代子、一△矢島楫子、一△鄕濱子、三

▲女生間に流行する名刺　近來女子の名刺を携ふる者愈々多く從て女學生の中にも漸次增加し來りたるが今其流行の嗜好を聞くに最小形にて花摸樣或は金緣のもの多くなりしと然るに男生間に於てもリボンや牡丹色の風呂敷の流行する如く名刺も亦た次第に前者に倣ふて小形となり文字も寳堂風の優しきが多くなり來れりとは慶ぶべき現象ならんか。

新刊紹介

海賊　木村鷹太郎譯

文界の奇才木村鷹太郎氏にバイロンの文界大寬王を出し、今又この海賊を譯す、熱情火の如きバイロンの詩よくこの詩才によりて譯出せられたるか否かを知らずと雖も讀者は是によりて幾分かバイロンの面影を彷彿するを得ん。

幻影　田口掬汀著

女夫波の著者として文名江湖に嘖々たる田口掬汀氏の著作集なり、短篇小説あり、雜記あり、評論あり、清新の筆縱横の才紙上に溢れ、著者の技倆の非凡なるを伺ふに足る。(東京牛込區新小川町一丁目新潮社發行)

家政百箇條

料理、裁縫、洗濯、衛生、教育、禮法等の定則より家庭に關する諸法令に至るまで家事日常の法則を集めたるもの、家政の局に當る婦人逹の坐右に備ふべき良書とす、(大日本女學會發行)

浮かれ笛　巖谷小波編

世界お伽噺の三十七篇として「浮かれ笛」出たり、本篇は愛蘭土お伽噺の中にある面白き噺を例の輕妙の筆を以て譯出されたるものなれば、趣味教育を兒童に施す上には好箇の讀物。(博文館發行)

便利堂發行の繪葉書

本鄕妻戀坂上の便利堂より發行する繪葉書は高尚と優美の二要素を兼ねたれば、世評最もよし最近のものにては市川秀方女史の四季の美人、日本美人十二ヶ月、戰爭紀念繪はがき等を出したるが、印刷も意匠も美術的にして、趣味の横溢するを覺ゆ。

文苑

春の郊外

逆川

櫻—は早かり、梅散りしきて桃は今おくれたり、吹きくる風あたゝかく、心浮く彌生の空なり。

淵の曲りたればなるべし、曲り橋とぞ呼ぶ。濁りたれば水底見え分かねども、小き川あり、深くもあるまじ、櫨の樹、熊笹、對ひの岸を蔽ひつ、通りこせば、道は林の徑に入りて、松杉生ひ茂る小高き丘なれば、越し方の田圃をへだてゝ、市街を斜に、物見心地好き、夏はまことに納涼場所なり、日影うらゝかに四邊を靜めて、薫りある風そよ〳〵と吹きわたりぬ。

柳の枝彼方此方にゆらめきし、柳の樹は、雨に打たれ風に朽ちて、そぼち、傷き、枯れにしを、何時しか樹の下より小さきが生ひ出でゝ、やがて今ほどになりたるが珍らしと、道往く人は手をさし伸べて、指先きにあしらひつゝ、屆くかぎりは、小枝、悉く輪となりて殘れり。

去年の春、都なる學びの庭に入るべく、夜ひと夜、泣きあかし、四ツの袖うるほしゝをり、桃代は、往く末を啣ち、越し方を繰りかへしつ、其のころは、分けて物ごゝろなき幼馴染なりしを、たゞ人のまゝに、我れも御身もと、漫りにたはむれたりし、柳の糸のえにしむすばれて、解かんに由なき遺身はこゝにと、然る小枝指して俯きたる、眞白き襟足に、春の夜のおぼろ月はかゝりて、ハラ〳〵と後れ毛の影を宿せるに、我れにもあらで寄りそひて、いぢらしさに其のやさしき肩を抱きし也、彼れは其のとき、ひたと、美くしの面わおしあてゝ、身震ひせんばかりに噓唏り上げつゝ、四歳のわかれをと、泣きて惜しみしも、あはれ幸か不幸か、身は病氣に侵されて、父母の膝下になつかしみ、歸り來しけるものを、即夜、ひとり茲に徉徜ひて、一年昔を偲びぬ。

田圃を後にし、柳の幹に片足かけて、橋の此方に立

ちて、青年は、物おもひの堪へ難く、青白き顔もたげて、行方を見やりぬ、半丁ばかりやあらむ、その坂の半程には、手を擧げて、此方を差し招けるなりき。

林を右に、綠の土手を左に、通ずる途に立ち、手にせる菫の愛らしきを、紅の莟の唇におしあて、清しき眼に見やりながら、ほゝゑみて立ちし、痩せ形の白き衣着たる、品の好さ、さても美くしの少女や、含みし花のこゝろは何ぞ。

『薫さん、何うして？ 馬が、彼方から、來るぢやありませんか。』

はりのある聲、年は十七とのみ聞きたれ。

『薫さんてば。』

『ア、今行くよ、先きに往つてお出で。』これはまた懶き云ひぶり

『否、否、妾否です、ひとりぢやア行れやしないわ。』

『サア、早く一緒に往きませうね。』と、此の度はすかすやう。

『桃代さん、僕は病人だよ、少しやあ休まして呉れなきや。』彼れは笑ひながら、二歩三歩。

『おゝいやだ、あきれが肩を越しますわ。』と、愛らしき眼光、珠のごとく輝かしつゝも、犇とばかり其の花に接吻したり。

林を出づれば、根上り松の大きやかなるを堺に、此の丘に隣れる小山あり躑躅、檜、椎、樫など、斑に生ひ立ち、狐の衣、山羊齒、山蘭の類、隙間もなく、蔓りて其の間を埋む。

途は、谷に沿ひて上れり、萠え出でし若草足を包まんばかり、土筆、たんぽゝ、すみれ、此處にも彼處にも、羊齒の中、躑躅の樹影、唯見る春の光りを受けて、紅、黄、紫、萌黄、とり〴〵たゝへし色の中に、我れも人も居ながらに漂はんとす。

其の花の香に醉ひつゝ、互に手を引きつれて、徐に徑辿り行きし兩人、桃代は歩みを止めつゝ振り返りて莞爾。

『薫さん、桃代さん、疲労れて？ 妾や足が大丈夫よ、薫さんは。』

ッと添ひて、擦れ合はんばかりにして、其の顔をのぞき見たり。

今更の如く懐かしさに、押へし手を力こめて握り緊め、うッとりとして、彼れは桃代の肩のあたりに片手おきつ。

『何時までも恁うだよ、桃代さん。』『ほんと？アラ／＼奇麗だこと、あんなのが、花が、薫さん、可愛い奇麗なのよ、取つて頂戴な。』

そも彼の女がならひとて、能くは知られたり、話は忽ちあらぬ方に向ひつ、今そのやさしき心、清しき瞳孔には、羊歯をこえて狐の衣生ひ茂れる、籔の彼方に化粧して咲き出でたる、美くしの小花を宿せるのみ、又何物かあるべき。



『取つて頂戴よ、え、取つて。』と獨り身を悶ゆるを、此方は去り氣なく、尚ほも嬲らして樂まんとしぬ。

『あれを取らないの、ハッハ、要るなら自分で取つてお出でよ、お氣の毒だが、あれは桃代さんの花だもの。』

詮方なさに桃代は、可弱き足を、花の方へ向けて、すた／＼と草群ふみ分けたり。

乙女は如何にしけん、あゝつと飛び退きて、薫にすがりぬ。

『え、何うした、桃代さん。』

慌てゝ、抱き起して、薫は急き込みぬ。血の氣は失せて顔の色なし。

「蛇よ、蝮だわ、少しは疼むけど、毒があるから腫れるのよ、これ。」

兩手もて確乎と押へたる、太股のあたり、口もて示しぬ。早くも毒氣廻りしと見え、ぽおッと腫れ上りたるが、其の傷口のまはり、杯ほどは、颯と紅おびて、眞白き雪の肌を彩れる、哀れ只美くしと稱ふべき乎。

「あのね、廻ると可けないッてね、其の小刀で剔ッて頂戴な、サ、早くして頂戴よ、薫さん。」

「それやあさうだが、併し。」「いゝえ、えゝから一思ひにそれで、早く、え、早く。」

餘りに迫られて、可哀さに、さりとて、まのあたり、迸る血潮の紅、何として染めらるべき。

「サ、早く。」

暫時ためらひて、痛々しげに傷口眺めやり、顔色そと覗へり、血の氣失せて色蒼ざめぬ。

刹那、小刀を刃先き鋭く、雪の肌に突き入れて、ぐるりと剔ぐりたれば、何かは以て堪るべき、パッととばしる唐紅。

手よりもぎ取られて、慌てゝ色ひける薫の前に、俄のごとき血のまみれたる、小刀片手に突きつけながら、莞爾とゑみし彼の女が、神々しさ。

時ならず、叢の裡に、天下りまし〻神の少女も、靜かに息を入れつゝ、莟の唇、さすがに慄はしたり。

「薫さん、貴郎の思はなかッたのを、妾は、自分で噛形にしたの、だけど、これが切れたと一緒に、薫さんと妾との間も、ちやーんと切れましたよ、可いんですか。」

涙さしぐめるは、薫のみかは、桃代のみかは。かへて、春のかをり吹きおへる風、山の頂に起りしが、一流れ、谷の眞清水と共に、此の徑を沿うて、樹の葉にさわぎ、小枝を動搖がしつゝ、麓の方へ走り行きぬ。

稻荷詣

春潮

品川より京濱電氣鐵道の穴守行に乘つて、羽田の停留場で下ると直ぐ渡船場である。渡船場では五厘の乘船切符を賣つてゐる、今日は初午と云ので、參詣の客夥しく、そこの土手のダラ〳〵坂には人が溢れてゐる、船より上つて來る歸客は右側に雜魚の群の如く集り、其中には種々の風俗もあれど、一際目立つて雜種女が一人、髮は黃金色の束髮、茶綾羅紗の吾妻コートに兩刳の駒下駄、といふ打扮で、乙に取濟してゐる之と連立つて夫は袖付外套を着た男で受負師とも見える人、



さて蹈潰されさうな思をして平駄の船に乘ると、軈てザクリと竿の音して船は岸を離れた。二艘揃つた渡船、水は舷を餘す二三寸、青々として幾尋なるを知らず、操つる艪は左に傾き右に傾いて、甚だ險呑である。「坐つてゝ下さい、坐つてゝ下さい」と船頭が叫ぶや否、船はドシンと前岸に着く、命に從はで立つた人々前へグラ〳〵。「其れ危い!!」對岸に渡つて土手を下れば眞直の一本道、往く人還る人織るが如く、實に盛んなものである。此の一本筋の道の始端に鳥居が立つて、右側には張子の達摩薄の木兎種々の麥稈細工を賣る店が並び、左側には鰒提灯の店が二三軒、そこでは一生懸

命に鰒提灯を製造してゐたが、其法は甚だ珍らしい、自分の覗いた店では目盲縞の腹懸に袢天着た細工人が、店先の縁臺に一寸腰を懸け、左右の足に力を入れて八の字に踏張り、左の手に肉を拔去つて鰒の皮を捧げ、右の手に唐剪刀を持つて、皮の内部に殘つてゐる肉を剪み去つてゐる。詰り此の皮に籾糠を押込んでガラ〳〵に乾かし、其から口を付け金具を箝め提灯に仕立るのである。そこで出來上つた鰒提灯は腹の手頃の髄に繋がれ、店頭に曝されるが、其の眼は生ける如く輝き、其の尾は又た生ける如く刎ね上がつてゐる。

家並が一寸絶えて、又た續く處に赤塗の華表が有る、往く者還る者ゾロ〳〵と此を潛つて込合ふ中に、「旦那樣御慈悲でございます、奧樣戴かせて下さいまし、ハイ母子三人が助りますと哀を訴ふる乞食の群。華表の右手に鳥居の隧道、小い赤い鳥居が隙間なく立列なつて、二三町が程道の右側に續いてゐる、其入口で「甚麽だい、一番潛つて見やうぢやねえか」「可からう此ん中日も射すめえな」と、若衆が叫んだかと思ふと最う入つて行く。又そゝくさと女連が「入つて行きませうね」と續いて這入る。自分も何だか入つて見たくなつて來たので、其の女連の後に踉て入ると、鳥居の中は人が辛と通れる程の高サで、頭が支へさう、而も薄闇くして、隙間漏る天の色がチラ〳〵と窺はれる許。奧深く行けば行く程に暗さを增して、天井は次第に低くなるかのやうに思はれ、中行く人は我にも有らで自然に屈み加減となるのである。是がまた仲々の長サで、飽々する程歩き出がある。斯くて隧道を出るとズドンと花火の音が前の田甫に聞えて。少し歩くと又大華表が在る、其又た右側に鳥居の隧道が出來てゐる。が、前のに飽きて最う入つて見る氣になれない、そこで唯だ近寄つて見ると、其の無數の柱には一々施主の名が記してある、鳥居は施主の心々に奉納したものであるから、大小高低いろ〳〵のがあつて甚だ不規則である、見渡せば恁なのが此の先にも又一つ、其から右へ丁字形を爲してゐる橫道にも又一つ。

それより三番目の石鳥居を潛り。更に進むと中央新聞

の時計臺がある、高さ六間計りなのが屹然として空に聳へ、家並を壓して立つてゐるさま、一寸偉觀である、しかし其の下を通る時「止つてゐやあがら」と叫んだものが有る、振仰いで行ると成る程さうだ、北の面が五時二十分東の面が九時十分、此では建つた効がない。四番目の大鳥居に——甚麼も鳥居盡めで讀む人も五月蠅であらうが、稻荷に鳥居は附屬物であるから、止を得ないと思召せ——草鞋掛の番頭が貼札を爲てゐる。彼は懐中から「伊勢七」と刷出した小さいビラを取出し、携帶の糊を一寸なすり、二間に餘る細竿の先に著け差伸ては高い鳥居の横桁に貼り付けてゐるのである。自分はよく社寺の殿堂一面に小ビラを汚きまで貼付けあるを見て、能く



那麼高い處へ屆たものだと不思議に思ふてゐたのが今漸やく氷釋した。其より道は益々雜沓を極めて、肩摩轂擊の大繁昌、虫眼鏡を取添へて「粟粒程」の出世大黒を賣り居る店から右へ折るゝと、もう本社が見えてゐる。西側には天麩羅、鮓、汁粉、扨ては御料理と看版出したもの軒を連べ、風船球、カリン糖、ボツタラ燒の露店が又た其の間々に並んで、何の店も何の店も千客萬來、奧の座敷などは人山を築いてゐる。最後の大鳥居前に行くと、暖簾を懸け連ねた店右手に洗濯屋の屋根みたやうに、あり。此にも人の山を築てゐる。

さて社前に進んで、先づ目に入るは寶珠の玉に狐を彫刻した御手洗。茜染の涎掛した或は鐵網に圍れた狐の

石像、大小數十の幟の中を通つて本殿に着くと、古ぼけた社殿に種々の人が集つて、種々の願事をしてゐる。境内左の一隅には今しも神樂の大鼓が鳴り響てゐる、繪馬殿の天井には張替の大提灯骨計りなのが吊下がつてゐる。

社殿の右手社務所の玄關側に異岡紋付、小倉袴の老人が、鬮判斷をしてる。その左手に狹い通があるが、此處が鬮場例の通りガラガラと鬮筒を振り、八十六番四十五番など引切りなしに呼止てゝゐる。其に面した建物の内に又稻荷樣がある、此處は丁度社前より社后にゆく關門であるから、其の雜沓名狀すべからず、而して此の稻荷樣が一寸面白い。

其は人の腰丈程の小い眞鍮の鳥居が先頭で、其から床下の闇い所へ向いて、幾つも〳〵も小い赤の鳥居が並んでゐる、さて件の眞鍮の鳥居前には、十本計の蠟燭が上つて、其の下が菰被の入る程位掘下げられてある。多分其の奧に穴があつて狐でも……否稻荷樣が鎮座ましますのであらう。固より其の前には、入替り〳〵一向專念の信心者が額いてゐるので仲々寄付かれたものではない。そして彼等は新聞紙砂糖袋を廣げては靈地の土――實は掘凹めた穴が砂――を拯ひ入れて持歸るのである。それから此の稻荷と同じ棟の下に供物店があつて、御供、油揚、御捻などを賣つてゐるが、是が亦た御信心連に依つて非常に繁昌してゐる。そこで此の關門を突拔ると、左手の山の松の木立の間に幾列となく小鳥居の隧道が出來てゐる、其の中を小供が覗ながら歩いて「ヤア穴がある、油揚が上つてゐる」と叫んでゐる。其から假神殿といふ粗末な建物が有つて、眞向ふの壁に一間程の硝子の神鏡が懸つてゐる、勿體ない事には前行く人の履物までが手に取る如く映る。社殿に向つて幾何かの賽錢を投げると、社人でもない世話燒でもない神主では尙無ない、草色の羽織着た老人がヨボ〳〵と立つて來て幣を振つて呉れる、迷信的とはいへ、兎に角穴守と云ふ所は面白い所である。

詞藻



塚越停春撰

（天）　名古屋市新出來町五丁目桑川方　志村すみ子

浪の音も霞みにけりな玉くしけ
　二見の浦の春のあけぼの

評。調高く語麗。能く新古今の風韻を得たるもの歟。

（地）桃　河内北河内郡川越村　岡市喜志子

をさの音やさしきふしの唄やみて
　垣根靜かに桃の花散る

評。光景睹るが如し。春闌にして、兒女婚期の過ぎむとするを歎ずるをさの音、やさしきふしの唄、桃の花、語用ゐ得て、唐突ならず。

（人）枕橋朧月　東京神田西小川町二丁目九　高宮安子

月も花もおほろになりてうたゝねの
　枕の橋にかゝる舟かな

評。枕橋の朧月を賦して、婉麗を窮む。「うたゝね」の冠辭、何ぞ巧妙なる。

秀逸

〇〇餘寒風　河内國北河内郡交野村私部　矢寺はぎ子

かきこもる窓の朝東風身にしみて
　冴ゆるや春のすきまなるらむ

「春のすきま」とは、何等の嶄新ぞ、何等の奇峭ぞ。

〻〇〇夕花　東京赤坂青山南町六ノ卅一、増野方　萩野花子

村がらすねぐら爭ふ聲すれど
　花の梢は暮れむともせず

暮色の字を點破せず、花明の字を點破せず、而して善く暮色花明を說く。凡手を窺ふべけむや。

〇〇春月　長崎市戶町西山入番　鐵谷りん子

靑柳の綠のかみにさし添へて
　櫛とも見ゆる春の三日月

必ずしも新意を出したるものに非ざれども、灑清峭の趣を失はず。

○○月前梅　大坂　清野美子

見えわかぬ梅の林のおぼろ夜は
月やにほへる花や照らせる

下句絶妙。

○○夕雲　大坂梅花女學校　白ゆり

紅の裾うちかけて山の端に
しばし休らふ夕ぐれの雲

着想奇警、用語亦凡ならず。

ゝ○○春曙　城縣水戸市常盤八幡町　檜山者枝子

いつはあれどいづくはあれどみよし野の
花よりあくる春のあけぼの

ゝ○○春曙　京都小川一條上ル　濱部愛子

心ある人に見せばや櫻さく
浦のとま屋のあけぼのゝ空

以上二首、陳を化して新となし、殆ど其妙を極む。

○○梅花浮水　牛込赤城下町三三、佐藤方　小西ちよの子

梅の花うかぶを見れば衣洗ふ
この水上の郷ぞゆかしき

上游定めて別天地あるべし。

○○春雨　河内國北河内郡山田村　竹内敬子

かきくもり降る春雨に袖ぬれて
猶立ちまどふ花の下蔭

同じくば濡るとも花の陰に隠れむとしたる古詩人も、春を惜むの意は爭でか之に過ぐべきやは。

ゝ○○折にふれて　廣島市大手町八丁目二番小路　大島鎮子

旅僧のすてし小笠のくちめより
菫もえいでぬ小蝶たはむれぬ

春恨自ら長からざるを得す。

○○逸題

日のみ旗こゝにかしこにひらめきて
港々の春のどかなり

和氣祥色、新勝國の星光自ら麗かなるを見る。

○○春の歌の中に　呉市和庄通三七五　熊谷ふさ子

たそがれて夢となりゆく須磨の浦や
霞をもるゝ浪の音もなし

眞に須磨浦上春夜の景。

ゝ○○逸題　石見國那賀郡波子村　千代延俊子

富士が根の雪をかすめて細矛
千足の國を春の風ふく

警抜甚し。細矛千足の國と云ひ、春風と云ふ、武士道國を歌ふに、語句もしたるに非ざるを見る。

○○戰勝春　茨城縣古河町大工丁　佐藤綾子

春や大和櫻緋桃をかざしつゝ
　歡喜にみてる民五千萬

意義に語勁。

ゝ○櫻　東京本所外手町廿五　天沼ます江

渡殿にさし入る月の朧にて
　櫻さく夜を朗詠の聲

雅家の手ぞ、風流甚し。

○○春の夕暮　信濃更科郡上山田村　小出春江

巡禮の小さき笠にほろ〳〵と
　桃の花散る春の夕暮

婉娩。

ゝ○逸題　野州小山町　新井琴子

薄月夜渡殿かよう姫君が
　朱の袴に花吹雪する

光景如畫。

ゝ○春眺望　甲斐國東山梨郡日川村　米山秀枝

牛の背に箱吹く童ほの見えて
　黑川堤抑畑れる

亦一幅の畫。

ゝ○椿　石見國邇摩郡静間村　宮內登美子

茂りあひて日かげも洩れぬ山寺の
　裏の坂路椿花咲く

花は人の見ざるが爲めに芳ばしからざるはあらず。

ゝ○折にふれて　岡山市西中山下　橋本芳子

何となくもの思はるゝ夕ぐれを
　かざしの花のそとくづれけり

亦見るべし。

ゝ○人の逝きしを悲みて　大坂豐能郡小曾根　榎原英野

泣かでやは君にたぐへし花は散り
　花にたぐへし君は逝きけり

遣語妙。

ゝ○逸題　武藏國南埼玉郡大澤町稻波屋內　江村俊子

十萬の蒙古よせぬと昔に聞きし
　玄界灘の雨の夕ぐれ

感慨多。

ゝ○逸題　岩代國伊達郡小島村　菅野和子

埋火に征衣ぬふ手をあたゝめて
　吹雪のおとに耳そばだてつ

吹雪の音に耳をそばだつ、思婦の恨知るべきのみ。

ゝ○稚子　京都寺の內大宮西　三の宮　つゆ子

乳といひ膝にはひよる稚子の

笑がほし見れば物思ひわする

哀ると云ふ、亦新意。

〇春野營　熊本市西備身崎町四〇羽田方　豐子

もの〵ふの夢やいづこをめぐるらん
菫吹く野に砲枕して

菫吹く野に砲枕とは面白し〳〵。

〇雪中行軍　大坂東區東高津南ノ町二三　田中常子

降りしきる雪を蹴立てゝ野を横に
鐵騎三百日はくれかゝる

〇逸題　香川縣丸龜市通町　前田喜美子

ことゝへばこたうる歩哨のかげも見へず
シベリア千里只吹雪のみ

以上二首、語壯意健。

〇折にふれて　岐阜市橋詰町　山田ふさ子

みだるれば亂るゝまゝに黑髪の
ながき愁を人は知らじな

閨怨。

〇春雨のあがりたるに　長崎市西上町　竹下たか子

春雨の柳雫を皿にうけて
畵の具ときたり富士見ゆる窓

此の人あり、此の景あり。

〇逸題　長門豐浦郡王司村千鳥濱　倉岡月代子

罪おほき來し路の春を花かげに
泣かずてあらむ朧夜の月

亦妙。

佳調

●春季雜題　名古屋　原田こと

いくさ人いかにますらむあつふすまかされてもなほさむきよすから

●　神戸　鷗屋とみ子

すみのえの岸の松風音たえて濱の上遠くかすむ月かな

●　和歌山　木本加代子

天の川みなぎる波の末ならし雲よれおつる那智の大たき

●　京都　西澤まつ子

春來ても降るや霰の玉くしげふたゝび冬にあふ心地して

●　羽後　菊池隆子

月三更人影絶えし朧夜を南山のあたり雁鳴き行きぬ

●　群馬　武藤靜枝

君逝きぬ紅葉ちりぬ春の夕ぐれ思ひ出多き

●　廣島　撫子

兩岸の梅いま盛り舟窓のみぎにやよらむ左をや見む

●　東京　田中宵

やぶかげの梅香るあたり水白く苔の細道月になりゆく

●美作　大谷あき子

春のみ神こむらむ野邊か若草のしげみかくれにすみれさくみゆ

●信濃　百合女

ちゝの子は泣かぬものぞと更くる夜を又忍ひては自らも泣く

●京都　佐久間律

七重八重立ちこめたれど鶯の聲に霞はさはらさりけり

●三河　成瀬咲子

三萬の敵兵今やかげもなし首靈山上月淡く照る

●山城　古川米子

なほ一つとほくかすみて紫の雲うすれ行春のあけぼの

●佐賀　きのした

霜柱踏に砕く寒くとりで靜かに夜はふけ渡る

●陸奥　秀子

ながむれば行くもかへるも雪をいでゝ雪にきえゆく人のかげかな

●岡山　横山田呂

物問へば烟打つ男ねもごろに鍬の手やめて指さし教ゆ

●牛込　佐藤いつ子

あふきみる高ねの松に日は出ぬ千代の友鶴今か鳴らん

●牛込　小西ちよの子

ほの〳〵とかすめる見れば遠山のかなたよりこそはるは來ぬらむ

●静田　高宮安子

ゆくかりのなみだの雨のふりそひて花もつゆけき曙のそら

●石見　宮内登美子

吹かれ来て氷を走る枯芦の穗綿もさむき沙河の夕暮

●名古屋　山村榮子

匂はすは雪のふるえと見て過ぎむひとつ色なる梅の初花

●京橋　翠子

去年めてし此月影の下にして君見るらんか此櫻の花

●芝　鈴木まさ子

牛ひきて小川をわたる童見えて堤の柳うちけふるなり

●熊本　安田文子

君かみてふれますきては花菫その香その色あせしとぞ思ふ

●伊勢　澄子

寒さをも物かはと咲くしら梅の心よりこそ人はめづらめ

●函館　佐瀬美佐

八重かすみ如何なる花か罩ころらん鐘の音匂ふ遠の一村

●名古屋　木下しげ子

としこめしひと間の中もともしびのうごくを見れば風やあるらん

●熊本　岡島かず子

長閑なるかけはいづくも有明のあますみ空も花に酔けりや

●陸中　谷澤野菊

すべなしとあきらめつゝといれてはもろくもをつる我涙かな

●尾張　梶田愛子

いづる日のもかりかすみぬ久高の天みはらより春は立つらん

●兵庫　磯部てい

別れ行く船はいつしか霞みけり岸うつ浪の音ばかりして

●伊豆　古見彩子

鐘樓の朱の庇に日は落ちて廻廊垣間見る落花目映き

●下關　松本文女

あわ雪の布留の中道遠けれど今日もたづれて若菜つみにき

●
月おぼろ梅が香かほろほそとのに笛とりたゝす君逢やたれ　牛込　文子
●
かやぶきをめぐれる庭の築山に春あたゝかく桃の花咲く　靜岡　佐藤雪枝
●
花の上の胡蝶ならねど夢のことうかれうかるゝ春の野邊かな　和歌山　木本加代子
●
この頃は月のひかりもにほふらん梅さきつゞくみやま路のさと　横濱　さち子
●
薄絹の霞のそでに包まれぬわか草もゆる妹と背の山　河内　岡市岸子
●
よべふれる峰の淡雪とけやらでゆめさながらの春の山かな　兵庫　白旗清
●
おもふとちあかぬ櫻の木の本に酒くみかはしあそぶたのしさ　大阪　山中ます子
●
空もして夜渡る雁のありくと枯野三里に月さやかなり　小石川　淺井琴
●
われながらおさな心かしらま弓はるまつばかり床しきはなし　泉南　瀬川義子
●
むくろにはいたで負ふともそびらをば仇にな見せそやまとますらを　尾道　中尾民子
●
天高く夫が月毛の馬肥えぬ西比利亞の野に嘶かせてむ　名古屋　石原よし子
●
梅のかきを低うゑきかし湃月夜詩の靈何の花にうかるゝ　小石川　竹川花子
●
　小石川　桐田桂子

●
はくきとき見かへる十里菜の花の花に遠くを水たゝかるゝ　前橋　田部井かく子
●
まだかたき梅のつほみの山里も鶯すなきで春は來にけり　長崎　西之瀞
●
松か枝に巣やかゝるとなかむれば賤がかまどの烟なりけり　栃木　鈴木そめ子
●
圓の月をうつや霞のゆめさめて枕に來し雁のひとこゑ　大阪　かほる子
●
六の花ふりしく庭の松か枝にうくひす鳴くやあかつきのそら　堺市　松谷せい子
●
たえなんを恋みに文をかきながらくしき涙はとゞめもあえず　足利　をばな
●
兄君はいくさにいでゝ歸りこず淋しき庭に白梅の散る　和歌山　木本加代子
●
袖たれてつはなあされる少女子のふりわけ髪に春風そふく　神戸　竹馬とし子
●
常春はわかあめつちと鶯のらうたき聲になきくらすなり　美作　淺尾よし
●
春にあぐみ庭に出つれば白梅の二つ三つ四つほころひてけり　京都　長澤正子
●
末かけて結ひおきつる琴の緒のなにゆへたえて音せさるらん　安房　神作清子
●
百千鳥さへづる聲にねさむれば白みにけな花のあけばの　下野　松本方靈子
●
たかどのに氷るが如き冬の夜の月を眺めて君しのぶかな

●　甲斐　岡　久代

夕寒み小鳥も鳴かぬ山寺の寒紅梅に雪靜かなり

●　大阪　田中しゆん子

紅の椿にほへる門のうち琴の音やみて手毬唄きこゆ

●　青森　菊千代子

梅の花文よむまどに咲きしよりふき來る風も香に匂ひける

●　大阪　池田靜子

母やみてわれはやつれて乳兒やせぬ歸ります君如何にお在さん

●　青森　きよふ

ふきすさぶ雪におごれる梅の花人のみさほもかくてこそあれ

●　伊勢　吉村靜枝

くつばみの音かとゞろに片破の月影いまに落ちゆかんとす

●　上總　淵米源

衣手の寒けき今夜遠征の背るやいかにと先づ思ふかな

●　越後　須藤曾和

香ぐはしみ色美くしの蜂も來ぬ胡蝶も訪ひぬうばらさく宿

●　羽前　小林いわ子

天地のくちぬ限りは日の本のたからなるらん大和魂

●　下野　高塩正子

戰場の民がすてたる稚子の腹につゝめる故鄕の忍ばるゝ夜や

●　香川　丸山匡子

御軍に主人めされて田面坂戸たてし門に椿花さく

●　阿波　牧岡けん

すきもれておぼろに匂ふ梅なれやゆめさながらの春の夜の月

●　大阪　山中富子

大そらもくもるばかりにおぼろにて梅かやかすむ月かさの山

●　美濃　梅田雪花

朝日さす軒ばの竹にけふもまたふしおもしろくうぐひすのなく

●　陸中　佐藤竹子

血にそみしテントに月の影さえて荒野五十里たゞものすごき

●　岡山　横山濟子

天の咀ひ未だ東亞の風やまず北滿洲を黒嘆走る

●　盛岡　山田繁子

夫のせし船の姿きたえ失せてなみ間に氷る冬の夜の月

●　陸中　河野華子

うれひをばつゝみて我は幾年か此おばしまに春の月見る

●　大阪　佐々木とく

春風に日の大御旗ひらめきて旅順口内日は長閑なり

●　豐前　長田節子

いくさかち今日歸る身のこし方を思ひぞ出づる玄海のなだ

●　伊勢　川村くめ子

紅梅の一枝手折りて瓶にさして友まちわぶる夕まぐれ哉

●　備前　三村しづ

花はさき鳥はうたへどこの春はともに語らむ友のなくして

●　神奈川　岩橋しな子

のどかなる春の日數ともろ共にながく成り行く青柳の糸

●　下野　永井勤子

身をすてし我子はものゝかずならず我大君のめぐみ思へば

●　京都　喜多村朝子

月がせの野にも山にも雪つむと見るまで香る白梅の花

●暖かき春の日なたに蓑乾せし小舟のほとり梅の花散る　京都　奥平歌子

●もの思ふ窓をさしくる冬の月夫の劍に今か照るらん　東京　吉田麗子

●雪霜にたゆまずにほふ梅の花外つ國までも香をぞ送らん　福岡　植村一郎

●鶯のあしたのどけき一聲にはなのねむりもさめにけるかな　牛込　杉山壽嘉子

●やがて君か月の桂を手折り得て歸り來まさむをりを待ちてむ　横濱　民子

●小さき聲に吾名よぶなりいづかたぞ畑のほそ道なの花すゝき　横濱　丹羽春子

●ふと見れば青く草葉の其中に淸く咲きけり白すみれ花　兵庫　柳田貞子

●かすむともふるともわかぬ春雨を玉にぬきたる青柳の糸　牛込　峯崎いと

●きのふけふ立ちにし春は淺けれどにほひは深しにはの梅がえ　栃木　しらゐ

●朝戸出のかすみの袖を拂へども寒くはあらぬ春の風かな　本郷　横田よしの

●久方の雲井の庭の松ヶ枝に千代をぞ呼ぶもろ鶴の聲　岡山　井口貞子

●まくらべの淸き瀧の音耳にしてあすの山路の景色をぞ思ふ　靜岡　秋子

●風たえて波も音なき春の夜の月のおぼろに舟一つ見ゆ　石見　椋木まつ子

●聞くは味方の胸かはた敵かしのびの一聲高粱に入る　名古屋　戸田すみ

●ますら夫の露營のゆめや寒からん春とは名のみ雪のあれのは　長崎　古賀ひで子

●北へかへる雁がねいつか消え行きて三日月ひとり影おぼろなり　東京　森戸はつ子

●朝ぼらけ波風たゝぬ海の面に霧かすみこめて春立ちにけり　甲斐　花輪きみ子

●鐘樓に定めの鐘の響絶えて下る若僧の衣手さむし　能登　杉下ふみを

●汐干より歸るあとには波見えて磯邊靜かに月ぞ霞める　近州　白きく

●待顏に垣根の梅もかをりけり今年はめでん人もなくして　岩代　志賀麗子

●沙河の邊戈とる夫や此夕如何に聞くらむ歸る雁の音　下谷　下田輝子

●床の間にいけたる梅の花咲けり日頃訪來る友あらなくに　青森　吉村ちゑ子

●夜はおぼろながむる空を雁なきて一人折戸に思ひみだるゝ　三重　橋本春の子

●うぐひすは春つけがほにきなけどもまだとけやらぬ峯のしら雪　神戸　水島秀子

●なくれしの心の胸に觸そへて花ゆゑいそぐ春の山ぶみ

● 山口　河村冬子

山の端に十日あまりの月さへて咲く白梅の色まさりけり

● 丸亀　香川藤枝

朧月笑みし異かな花のかげ立ちて歌かく人美しき

● 麻布　金澤とく子

我がせこのいませる方をのぞむとき春の夜さむく星隕ちにけり

● 愛知　桂子

あたゝかき春の日かげのこほれきて山の端ごとに花霞みけり

● 越後　坪井わか子

夜をこめてゆくてを急ぐ武夫も過かてに見る梅の一むら

● 栃木　大橋しの

梅一輪十疊一間稚兒ひとり寫眞の口に凱旋の日を問ふ

● 山形　石塚はる子

武士の道てふ道は日の本の玉の花とぞ咲き匂ひける

● 豊前　草野とみ子

小舟にて霞のうちを友と二人沖の小島の春を見んとて

● 八王子　丹葉生

賤が家のいほりの梅にゆかしくも春告鳥の聲匂ふなり

● 京阪　淺井靜江

若草のもゆる雲消の烟よりかすみ初むらむ春日野の原

● 岡山　美戸田しげ子

おぼろよの梅の林の笛の音はいかなる人のすさびなるらむ

● 久留米　香山さだ子

美くしき春の女神の戀のなごりやわかき小草の露散らばりぬ

● 大阪　大垣淑衣

雪ふかき信貴の山里たそがれて木枯の風落葉をぞ巻く

● 美濃　鍋島美根子

入りかたの秋の日影を身にあびて夫送り行野路の松原

● 山梨　春圃

ほの〴〵とかすみし空の風冴えてゆきけにくもる月のかげかな

● 下野　春江子

かゝりせば敵やしらんと燈の夜をあかす歩哨の身や凍るらん

● 長門　木村イク

山田守る翁もしばし若がへり嫁を助けつたすけられつゝ

● 長崎　久子

こゝろあらば幾百年の後の世にかくとかたれよ沙河の河波

● 近江　森しな子

ねやの戸をおしあけ方にながむれば庭の梢にうぐひすぞなく

● 大阪　中村恒子

何となく丸まげ姿の恥かしく隣の門をそと走り行く

● 大阪　白ゆり

里人のふもとに急ぐ顔見えて風と共に月ふけにけり

● 福岡　堀内八重

あどけなき乳子の寐顔見まもりて軍の夫を思ふ夜半かな

● 長崎　久子

父は征き母病みふせる枕邊に幼子ひとりうつしゑおがむ

● 姫路　荒牧澄江

出征の兵士載せたる汽車を見れば鋤の手やめてたゞふしおがむ

● 豊前　島村りゆ子

細引きし畝の畦事いつしかに青葉に暮れて郭公啼く

俳句

春季雜題

虚子選

芹摘や女同士の馴れ易き　　大阪　羽岡つや

女らしき句なり。

姉の雛妹の雛に古びけり　　同　同

「雛に」といへるは「に較べて」とか「に對して」とかいふ意なるべし。

波塲にみのほしてある柳陰　　大和　三宅わき

初午や電車を下りて羽田道　　靜岡　矢入哲女

青柳や校門見ゆる女學校　　岡山　横山清子

朧夜を祝捷會の花火かな　　備前　松本もと

島を出る白帆見ゆるや春の海　　下總　よし子

海に向いて梅かほるなる漁村哉　　四谷　工藤露泉

彫勝や夫の好みの雜煮餅　　埼玉　飯塚たい子

鶯や門もあらざる溪の寺　　武藏　江村俊子

籠の鈴出せば春の風　　伊勢　太田榮子

箏にならし見るなり雛の琴　　神戸　水越順子

梅くゞり〳〵て離れ座敷かな　　同　同

犬吠の岬は高し春の海　　秋田　太田順子

梅か香に病おこたる廊かな　　京橋　太田秀子

素朴なるところよし。

春かぜや山路こすにもつれのある　　美濃　飾島美根子

女の句として始めて面白味あり。男の句とすれば何の價値もなし。

春風や物編むで居る草の上　　和歌山　紅葉小百合

富島へ春風舟の一里哉　　同　同

「春風舟の」と文字詰りたる所珍らしといふには非れどかゝる句法もあるにて初學の心に知らさん爲め特に取る。

たかどのゝうたげもはてゝおぼろ月　　新潟　小田香蘭子

攻め取りし砦ぶしんやはるの風　　同　同

「攻め取りし砦」といふだけにては平凡なれど「砦普請」としたる爲め生命あり。作句の場合には此手段を心得べし。

嫁入りの簪舟出しけり春の川　　仙臺　生江とよし

「出しけり」とせる爲め活動せり。

花七日門なき寺も名所かな　　東京　志村すみ子

竹馬に乘て逃けり二日灸　　紀伊　東晴枝

參内の牛車徐かに櫻散る　　甲斐　米山芳枝

春の夜や寺に催す婦人會　　岡山　横山清子

たま〳〵の客來てうれし保養院　　仙臺　佐藤日吉

春の海や父の舟まつ貝拾ひ　　兵庫　大西敏子

雛段に琴彈いてきかせまゐらせん　　伊豫　渡邊梅子

やさしき主觀なり。

湖の入江々々や春の草　　靜岡　伊藤孤女

たらちねの雛を寐物語かな　　上野　百合子

美しき事に櫻の雫かな　讃岐　柳田政子
菜の花に空一ぱいの入日かな　茨城　檜山ひさ
春寒の琴に鼠のいばり哉　大阪　梅坂晋子
梅の咲く窓に干菜湯貰ひけり　同　同
けむらせて風呂焚く家や梅の花　陸前　佐藤はるぢ
従卒は手習ひすなり冬ごもり　伊賀　服部かつ子
糸車ひゞく小家や花ざかり　岩代　服部けさ子
金鞍の馬嘶きぬ夕さくら　本郷　一條はな子
嫁入を渡す舟あり春の月　同　同
朧夜の鐘が鳴るなり道成寺　京都　佐伯マサ子
「道成寺」といへる爲め平凡を脱す。
小狐の化け稽古する春の夜ぞ　同　同
暮の中は竹刀の音やちる櫻　京橋　染野かすみ

（人）
蝶舞ふや髪を洗へば出て見たき　京都三條大橋東三丁目廿九　西澤まつ子
下十二字女でなければいへず。

（地）
灯ともして影かさなりし雛かな　山形市香澄町木ノ實小路二一三　岡田千代子
濃艶なる句なり。

（天）
遠山の櫻にあそぶ二階哉　神戸市元町一丁目二〇三　隼田
おとなしき句なり。

端書文

花見に誘ふ　京都　西澤まつ子

嵐山此頃花の盛りなるらむ。春をこめて春風に心動かされ給はずや。

平凡なれども簡潔なるを取る。

嬉しなみだ　大阪　刀禰小春

「北風凛々として白雪萬家を埋む併しながら無事對陣」とは満洲よりの兄様が手紙。妾はまたゝきもせで見つめつゝありしがはや涙頬をつたひぬ。

これだけにては物足らず。

出征軍人　赤阪　森ふさ

二人の兄弟、弟なる子供の今出でんとする父にすがりて泣き、別れを惜む事限りなくよそ目にもあはれなりし。理りや父出征後間もなく不歸の客となれり。父の身がはりに行きしなり。哀れ父のこれを聞かば。

「二人の兄弟」「弟なる」と直ちに接續せるところ簡潔にてよし。全篇に筆路暢達なり。

綾子さんの所へ　越中　佐藤つき子

だん〳〵暖かくなつてきました。貴女には御障りもありませんか。露子さんに聞きましたら御身重とのこと。同窓の貴女はやがて御母あさん、妾はまだ生徒。まあ羨しいことれえ。御身大切になさいまし。

「まあ羨しいことれえ」の一句よし。倉一轉して「御身大切になさいまし」と結ぶところ働きあり。

夫に出産を知らする　下野　うばら

良人喜で下さい、昨日の朝身輕になりましたから。ハイそして玉の樣な

男の子、自分の兒の泣聲を聞くのは始めてゞすから、何となく愉快に感はれました。男なら御褒美などの御約束でしたが、何を下さいますか。

輕快なるをよしとす。

親しき友の安産をいはふとて

名古屋　玉村多歌子

よべ御安産、わきて玉の如き御男子とよ。満洲野なる君いかに御後安くや。御名は兼ての御約定とて武夫様とか、軍神の御ゆかりも御懐しう愛で度うて。近きに御目のあたりとは思ひつゝも、玉の礎數増したる嬉しさの餘りを筆走らせてかしこ。

熱したる筆路なり。「國の礎」云々は少しこと〳〵しく覺ゆ。

白梅を送る文

名古屋　篠田濱子

去年御出でになりました時、此枝が大變面白いと云つて、貴嬢が絹糸を御結びになりました、アゝ裏庭の、白梅が咲きましたから、絹糸の付いた儘御送り致します。何卒床の間に挿けて置いて頂戴。

絹糸を結び付けたりといふ事柄面白し。此文章の面白味は其事柄に在り。但し結句損はず。

長篠きよの君へ返せし文

名古屋　森井せき子

君のやさしき御心もて御筆もて御なぐさめ下され、彼の戰さの大野に草葉の露と消え候夫もいかで思を殘し申べき。妾も今は早や黒染衣まとふ身となり申候。まづは御返しまで。

「戰さの大野」といふ言葉面白し。

戰地の夫へ

山城　古川米子

お變りもありませんか。一同は至極丈夫に暮して居ます。節分には父上の御年いくつと子供二人して數へて神棚にあげ寫眞に上げましたよ。二三日中にはまた作文も御清書だつて、この頃の夜にせいだして居ます。澤山ほめやつて下さい。

飾り氣なき處よし。

東京　田中千賀子

初春源平の戰には未だかたかりし庭の紅梅、今朝窓の初音ゆかしくほころびそめし花漸輪いともやさしく候ほどに、兼ての御約束あだならずば是非にあこがれ出で給ひてよ。

「初春源平の戰」の一句よし。

古戰場の春

下谷　石渡しげ子

古戰場の春たづぬれば、遠山に霞かけたるなどよそにかはられど、あたりにはいくさの名殘とて太刀の折しも落ち散り、のどかな春風すら何とは無く物すごう覺えて、あぶみのかげに咲ける菫花草一輪、これも矢叫のあと吊ふかとぞ思はるゝ。

古戰場は唯松風に古塚などあるべし。太刀、鎧など落散り居るは實らしからず。唯文字の圓熟せる所を取るべし。

京都　福井千代子

御兄上様こそおこしのせつ御賞讃遊され候紅梅の花此程さきそめ申候。紅の二ひら三片紙面に印しまゐらせ候まゝ、せめて此端書御覽の前へ御供へ下されたく候かしこ。

端書に紅梅の紅を印するといふとまことらしからず。

姫路　小山靜子

其後は御變りもなく軍務に御つくし遊さるゝと存じ候。寒氣凛烈なる戰場の模様推しまゐらせ候。私事も留中の梅花を龜鑑に日夕見候の保育につとめ居候間御安心被下度候　早々。

「梅花を龜鑑に」は文章として陳腐なり。

（人）

山形市香澄町木ノ實小路二ノ三　岡田千代子

柳櫻こきませし都の春、さぞかし花やかに候はむ。よき程にうかれ給へ。かまへて深入りなし給ひぞ。今宵はいと靜かなる夜に候。うすものに包める如き月、今し庭の梅にかゝり候。故鄕戀しうは思はさずや⁉

「今宵はいと靜かなる夜に候」と一轉化せる筆力侮る可からず。此文章は此一句にて力あり。

（地）　寫眞を送られし友の許に

と　く　子

赤き心を白衣に包みて立ち給へる御すがた、恰も愛の化神の樣、傷負へる大丈夫も、君の厚きみとりのもとに、さぞや心身共に安らかならん。御身御健かに、いよゝ君の爲國の爲盡し給へよ。

假りに「寫眞を送られし友の許に」といふ題を課せられて此文章を作りしものとすれば、其は普通の人の寫眞とせず看護婦としたる處働あり。如何なる文章を作る上にも取材の上に此の心掛け肝要なり。尙「赤心を」云々の一句面白し。「御身御健に」と御の字を重ねたるもよし。

（天）　姉に出京を勸める文

讃岐善通寺町大通筋　櫛田正子

姉樣東京は今旅順陷落のお祝で甚く賑ひます。兼てお話しの流行姿を御覽になるのは斯る機會が宜しからうと存じます。新流行の春着物も到る所の呉服屋に飾り立てゝ有ります。御買物旁〳〵御出京を待て居ます。

流行姿を見に來よなどいふ文、女らしくて春し。當國不氣取り人氣取りなる文章などより斯る天眞爛熳の文章こそ好ましけれ

▲和歌（題隨意）

▲狂歌

▲俳句（春季雜題一人五句限）

▲新體詩

▲謎々　題「露國の擾動」「晩餐」

▲端書文（はがき一枚四行限）

▲川柳　題「人形」「蝶」

◎賞品　各種天、地、人に限り左の賞品を呈す

天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

◎投稿締切　三月十五日限

◎新體詩を除くの外投稿はすべて端書に限る

雪やこん〳〵

白井準繩作

雪やこん〳〵霰やこん〳〵、
　燈籠も白い笠を着て、
　　わたいも跣足(はだし)で雪(ゆき)んなか。

雪やこん〳〵霰やこん〳〵、
　皆と一處に雪ぶつけ、
　　そこで歸は竹馬(たけうま)で。

雪やこん〳〵霰やこん〳〵、
　そんなら跣足にならないで、
　　上だけならばいゝでしやう。

ちいつとも出ちやァいけないの、
　雪釣りするから今直ぐに、
　　上手に結んで雪釣りを、
　　　乳母(にーや)も速く手傳つて。

お庭の竹はお辭儀して、
　あら〳〵白犬(しろ)が飛んで來た、
　　駈づり廻つて遊びたい。

いゝな兄樣(にーさん)學校で、
　わたいもついて行きたいな、
　　歸て來たい駈(かけ)だして。

出てころんぢやァあぶないの、
　ちいとばかし飛石の、
　　轉びはしない大丈夫。

そんなら此處の椽がはで、
　糸と炭とを持つて來て、
　　姉樣拵へて頂戴よ、
　　　雪釣り拵へて頂戴よ。

雪やこんこん

ト調 二拍子

5 1 5	6 6	5 1 3 1	2 2
ユ キ ヤ	コン コン	ア ラ レ ヤ	コン コン
ゆ き や	こん こん	あ ら れ や	こん こん
ユ キ ヤ	コン コン	ア ラ レ ヤ	コン コン
ちぃと も	で ちやぁ	い け な い	の ー
じゃうづ に	むす んで	ユ キ ダ リ	チ ー

6 6 6 6	1 6 5	6 6 6 6	6 0
オ ニ ハ ノ	メ ケ ハ	オ ク ギ シ	テ
い ー な あ	にー さ ん	が く こ ー	で
デ テ コ ロ	ン ヴャー	ア ア ナ イ	ノ
そ ん な ら	こ こ の	え ん が は	で
チ ー サ マ	ロサヘ テ	チョタ ダ イ	■

6 6 5	3 3 1	2 2 2 2	2 0
トーロ モ	シ ロ イ	カ サ チ キ	デ
ワタイ モ	ハダシ デ	ユ キ ン ナ	カ
みんな と	イッショニ	ゆ き ぶ つ	け
そーし て	かへり は	た け う ま	で
ソンナ ラ	ハダシ ニ	ナ ラ ナ イ	デ
ウヘダ ケ	ナ ラ バ	イ イ デ シャ	ウ
ゆきつ り	するか ら	い ま す ぐ	に
ばーや も	は や く	で づ だ つ	て

3 1 3 1	6 6 5	6 6 6 1	5 0
ア ラ ア ラ	シ ロ ガ	ト ン デ キ	メ
カ ケ ヅ リ	マハツ テ	ア ソ ビ メ	イ
わ た い も	つ い て	ゆ き た い	な
か へ つ て	き た い	か け だ し	て
チ ー イ ト	バ カ シ	ト ビ イ シ	ノ
コ ロ ビ ハ	シ ナ イ	ダ イ ヂャウ	ブ
い ー と と	すみと を	も つ て き	て
ゆ き つ り	こさへ て	ちゃ う だ い	よ

小説

磯菜

江見水蔭

上

「大層御馳走が出來たね。」
食卓の上に並べられた洋食の一皿、烟の出て居るチキンシチウ。馬鈴薯は白く、胡蘿蔔は紅く、見るからが如何にも美味。余は會社から戻つて、入浴を了へて、此晩餐に就くのが何よりの快樂で、小壜のビール一本で、大滿足の酔を買ひ得、一日の執務に疲勞したのを全くこれで取返して、安らけく翌日の朝まで眠るのである。
「今日は助手が寐んで居りますで、巧く參りませんでしたが、未だ此他に牡蠣のフライが御座いますから……。」
妻は白の胸當を未だ脱して居らぬ。
「おう、お磯の病氣は如何かな……。」と余は妻に問うた。
「どうもね、熱が出ましてね……それに咳が未だ止みませんでねえ。」と恒子は答へた。
お磯といふ女中は、病氣で昨日から臥て居るのである。
「咳は未だ止まんかなア。」
余は思はず知らず嘆聲を發して、唇の下まで持つて行つた洋盃を俄に下に置いた。

『どれ、妾は、次ぎの御馳走を拵へまして、それから御一所に食事を致しませう。』

恒子は料理法の獨習を實行すべく、いそ〳〵として臺所へ去つた。

余は此二三年來、寔に平和なる家庭を作つて、頗る幸福に人生を送つて居るのである。

妻の恒子と女中のお磯と、飼犬の『ポン』といふのが椽の下に居る。これだけであるから、これで平和な生活の出來ぬといふ事はない譯だ。

この平和、しかし最初から容易に得た余ではない。暴風雨の後の快晴である。悲慘の歷史を額の皺に印して本年三十八歲でありながら、髮の大部分を白くするまでに苦境を往來して、それで求め得た高價なる平和なので、若し此上の暴風雨が來たなら、最うそれには耐え得られぬ程勇氣を失うて居るのである。

大希望もあつた。大目的もあつた。しかし、皆今日では捨て了つて、唯、人の人として守るだけの處を守り職務に忠實にして、然して、滿足に樂しむといふ、極めて臆病な遣り方であるか知らぬけれど、兎に角、それを以て安心立命して居る今日此頃。

この平和の境を譬へて見ると、山岳重疊せる其間に、淸水の堪へられた一小池、それである。風も吹來らず浪の立つなし。雨も降込まず、濁の生ずるなし。鏡の如く平かなる水の面、其所に悠々として閑古鳥が游いで居る、先づ小倉治三郞の一家はそれであるのだ。

然るに、突然、何者か小石を投込んだ。閑古鳥は驚いて立つた。池の平和は此處に破れざるを得ない。浪も立たず、水も濁らず、由々しき一大事と云はざる可らず。

小倉家の平和は女中のお磯の咳から破れたと云はねばならぬ。小石を投込んだ響きは、咳の聲にあるのだ。

恒子は未だ知らぬ。けれど余は此間から注意して居たのであつた。殊に昨夜不圖眼が覺めて居た時に、連りにお磯が咳入つて居た聲を聽いた時には、平和どころでは無い、此方の胸までが破れたかと思ふ程。

『さア出來まして御座います。柚が添えて御座います

から……。』

フライの皿を持來つて、胸當を取去つた恒子は、同じく食卓に就いたのである。

常ならば最う此頃、余の顏は熱し、膝もくづれて、ビールの醉を認めるのであらうが、今宵に限つて然らざるに心着いた妻は不審を打つて、フオークを手に取らうとも爲ず。

『貴郎、どうか爲さッたので御座いますか。』余は聲を潜めて。

『私は大變な事が出來たと思ふよ。』

恒子は吃驚した顏で、不安の眼光を此方に配るのである。



『や、然う心を動かしてはイケないから、極めて靜かに考へるやうにして下さい。研究しなければならんのだから……。』

『まア何んで御座います？』と恒子は急込むやうな調子である。

『お礒の咳の研究さ。』

『咳の研究ですッて……。』

初めは呆れて、それから次ぎに笑出して。

『おほゝゝゝ、あれは貴郎、風邪ですもの……。』

「然う單純に考へて、事を容易に濟ました時代もあつたが、今日の小倉治三郎は、然うは行かね。あの咳の具合が甚だ宜しくない。私は醫者でないけれど、經驗上、どうも……。」と云ひて、次ぐ言葉を淀むだ。恒子は余の杞憂を笑ふかの如く。

「肺病だと仰有のですか……。」

「先づ、肺病だらうと……。」

「だッて、お磯ですよ貴郎、お磯の體格ですよ。」

「それはイケない、お磯の體格の健全な事もあれの兩親が壯健な事も、それア分ッてるさ。だから、遺傳とは私も思はないけれど感染と云ふ事は考へなければならない。」

「だッて、誰から感染しましたらう。」

「お前は最う忘れて居ますな。あれが家へ來る前に。



奉公して居た家さね、秋浦とか云ッたね、其所の夫人が肺病であつたといふ事は、私はお前から聽いたのだが、お前は直接に當人から聽いたのではなかッたか。」

「然うで御座いました。」

「それ、御覽なさい……唯それだけ私が耳にしたゞけなら、何も心配は仕ないのだけれど、それはお前も憤慨したし、私も同感であつた、それ、それ秋浦家の女中の待遇法だね、それに就て耳にして居た事があるものだから、それで私は、あの咳具合……肺病が感染し

たのではあるまいかと、今から心配に耐ないので……』

『あッ……本統に然うで御座いましたねえ。』漸く恒子は思當つた。

およそ今の世ほど不完全な時代はあるまいである。その不完全だらけの社會の中で、主人と下女といふ問題くらゐ解決の區々なのはあるまい。奴隷同然に視て居るのが十中八九、或家では犬よりも猫よりも劣等にあつかうて居る。一個の傭人として相當の待遇をする新家庭は數へる程しかあるまいである。

別して秋浦何某とやら、聞けば、財産家ださうだが、女中に對する觀念が甚しく舊式で、過酷に立働かせるのみならず、休養を與へるのが頗る吝かで、殊に食事に就ては極端で、敢て美食せしめるには及ぶまいが女中にとて相當の副食物を分つた事なく、皆主人側の食殘しをたべさせるので、奉公人は厭がつて、半月と辛抱するのは無いさうな。其所にお磯は一年餘り居た夫人の氣に入つて居たさうだ。人の半月と辛抱し得ぬ家に、一年餘りも居たのだから、氣に入らずして何んとしやう。扨、其夫人の氣に入つた結果、常に夫人の殘肴はお磯の皿に盛られたさうな。

夫人は間もなく死去した。お磯は最う居る氣にならぬ其所を出て然うして家へ來たのだ。

夫人は何で死んだ？　肺病!!!

肺病患者の殘肴を一年餘も食べて居たお磯、如何に彼の胃が健全だからとて、感染せずに居られやうぞ。此話を聴いた時に、旣に余は顏を顰めたのであつた。

『本統に感染したので御座いませうか。』

恒子は非常に胸を痛めたらしい。

『能く綿密に良い醫者に見て貰つた上でなければ云へぬけれど、あの咳具合では、先づ感染したものと見るのが適當だらうね。』と余は云つた。

『然うでしたら如何したら好う御座いませう。』

『其所が研究だ。』

『如何御研究爲さいます。』

『感染した病氣だよ。我々に又感染しないとは云はれないよ。』

「それア最う肺病は危險ですからねえ。」

「先の主人は、あれに肺病を感染させた。今度の主人は、あれから感染させられると云ふ場合と爲つた。」

「然うで御座いますね。」

「秋浦の夫人はお磯に殉死させるのだ。我々は又お磯を殉死させる樣な殘酷な事は仕ない代りに、お磯の道連れと爲つて肺病で死ぬのは御免蒙りたい。」

「ぢやアお磯を止すのですか、あれを罷るのですか。」

と恒子は涙含むのである。

「まことに忠實な女中で、何處の簞笥の何番目の抽斗に、何が仕舞つてあるといふ事まで殘らず承知して居て呉れる。まるで家族同樣の女中ではあるけれど、こればかりは暇を取らせねばならぬ。病氣と聞いて放逐するのは、如何にも輕薄なやうだけれど、二人の生命に關する問題で、お前が感染しても、私が感染してもどちらにしても困るのだから、一先づ引取らすのが好からうと思ふね。勿論良醫の宣告の有つた後に……。」

と余は斷乎として云つた。

「ぢやア如何しても、あの、お磯を……。」

恒子は到頭、咽入つた。

中

恒子が斯う泣咽ぶまでに、お磯を出すのを厭ふのには大いなる理由がある。余にも亦お磯は深い關係を有して居る娘で、考へて見ると涙——涙の歷史!!!

余が政治界に乘出して居た時代、しかも失敗して伊豆の伊東に隱れて居た、其時代に、余と恒子とのあはれなる生活に就て、非常に同情を寄せて呉れた漁師の一家があつた。お磯は其所の娘なのである。

お磯が未だ十歳ばかりで、髮の毛は赤く、顏の色は黑く、女だか男だか分らぬ程であつたが、何となく愛らしい處があるので、恒子と余とは非常に愛した。子の樣にして可愛がつた。其兩親は子を愛して呉れる人に向つて、多大なる同情を拂つて呉れて、それ風呂の水を酌む。庭の掃除を爲る。魚が取れたからの、餅を搗いたからのと、種々に余等をいたはつて呉れた。米屋

が拂ひの滯りを口實に、兵糧攻を試みた時に、向鉢卷で談判に行つて呉たのは、お磯の父紋次郎であつた。余の夫婦が、一番失意の時に、一番多く功を添へて呉れたのは、お磯の一家で、漁村の詫住居に何の樂しみとて他にあるなくお磯を愛するといふ事を唯一の事業として居たのだ。

伊豆の伊東を去つて、大坂にも行き九州にも行き、一勝一敗、浮世と戰つたが、勝つた時にも、お磯を思ひ敗けた時にもお磯の一家を想ひ、常に余等の念頭を去らぬのであつたが、漸くにして今の地位を得て、東京に安らけく生活する事とは爲つた。

お磯を引取つて、女中ともつかず、養女ともつかず、傍に置いて教育も仕たいと、久々で伊東へ手紙を出したら、今は東京の秋浦といふ家へ奉公に入つて居るとの返事。

お磯は前にも述べた如く其秋浦に一年餘り辛抱して、夫人の死んだのを機會として逃げる樣にして家へ來のであつた。

斯ういふ間であるから、通り一遍の下女が病氣に爲つたと同じ樣に、家から出された譯のものではないが、問題は生死に關するので、これ計りは如何も其儘には出來ぬ。愛情の爲に一身を抛つといふ詩人的行動は會社員には出來ぬ。

『如何しても暇を出すより他に方法はあるまい。然うして其代り、出來るだけの事をして療養させる……ねえ、肺病には海岸が好いといふのだから、家へ歸れば又あの體だ。意外に全治するかも知れないのだから……。』と余は云た。

『如何も仕方が御座いませんですね……全く感染しては困ますからね。』

恒子にも余の硬的態度の理由が解せられて、一先づ歸鄕させるといふ事に同意はした。

斯くの如くにして近來全く見ざる淋しい晩餐を了らうとした。

咳が障子一重の外に響いた。

吃驚した。余と妻とは顏を見合せた。

続いて起るのは涙に咽ぶ聲。あゝ、お磯は立聞きして居たのであつた。

「お磯……お前、まア、如何して此方へ……」と恒子は問うた。

「奥様……旦那様……誠に妾は相濟まないので御座います……惡い病氣を此方へ持つて參りまして……もし萬一の事が御座いましたら、本統に如何して宜しいか分らないので御座います……。」と又泣入る。

「や、未だ醫者に能く念を入れて視て貰はないだから肺病と斷定は出來んではないか……。」

と余は慰めた。

「いえ、思當つて居るので御座います。妾が馬鹿ですから、先の御主人の殘肴を食べまして……全く妾が足りないからで御座いました。」

嗚呼、此位悲慘な聲は多くあるまい。障子の外で云ふので、姿を見ないけれど、其樣子が想ひ見られて、余も恒子も溜らなく爲つた。

不完全だ!!!　不完全だ!!!　社會の組織が不完全だ!!!

其不完全から及ぼす影響を形として現はしたのは、お磯であるのだ。お磯は犧牲に爲れたのだ。さるにても秋浦何某、嗚呼、斯ういふ人達が社會の上級に居るやうでは、日本の進歩も捗取らぬ譯だと、思はず知らず嘆聲を洩した。恒子は兎も角もお磯を此方へ入やうとした。けれど障子を押へてお磯は如何しても入らず。

「明日はお暇を願ひます。」

下

今日は御暇を頂きますと、お磯の云ふのを無理に引留めて、某大醫の診察を受けさせる事にした。願はくば普通の感冒にてあれかしと念じた甲斐もなく、某大醫は首を傾けて――今の内海岸へ行つて靜養した方が好からうと、ケリウソートを授けられた。宣告は終つたのである。

お磯は、しかし、却々氣の張つて居る女で、宣告されてから却つて元氣づいて、大釜に湯を煮沸らして、器物を悉く洗ひ清め、塵は殘らず燒捨て、布團は日光に

晒らして、立つ鳥の濁さぬ水や、然うして身支度を綺麗にして、いよ〳〵の暇乞すべて余の室の椽側に來て手をつかへ。

『色々御心配を掛まして、相濟ませんで御座いました……子供の内からの御恩を少しも報じませんで……。』

手拭で連りに眼の端を拭くのである。

『や、何も然う力を落さんでも……お前のは初期なのだらうから、充分に手宛をして全治した上は是非又家へ來て貰はねばならんのだから……。』と余も眶をしばたゝいた。

『治りますか如何ですか知れませんが、若し壽命がありましたら……。』後を得云はぬのである。

恒子は彼方で泣いて居る。

譯を知らぬ『ポン』は椽側へ首を載せて、鼻を鳴らして何かねだるのである。

表面から見たら、下女の出代りに他ならぬが、此樣な悲劇が多くあらうかと、浮世馴れて涙の乾いて居る余が、腸を寸斷に切刻まれて。

『不完全な社會の罪だ!!! お磯、お前は何も知らぬのであつたものを……。』

思はず知らず抱締めて、彼の女の涙を我が懐中に絞らしたいとまで感じた。

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

それからの三年目、年末から新年へ掛けて、夫婦で伊東へ避寒旅行をした。

痩せ細つたお磯を見て、又涙と思ひの他、頗る健全なるお磯の姿を見て、嬉し泣きに泣かざるを得なかつた海岸生活が病根を絶つたのであらう。磯菜は磯に生長する如く、お磯は漁村の人なのである。

始終心に懸つて居た彼の時の余の態度、あまりに强硬に失しは爲なかつたかと思うて居たのが、今日に於て矢張適當であつた事を發見して、余の滿足は世の常でない、愁ゐ小さな愛情の爲に彼の女を都の内に留めなかつたのは、最も其所致を得たものと知れて見れば、祝盃をお磯にさして、お磯からの返盃を懸念なくに受けられるといふもの。

（完）

子寶

下

大江小波

柳部伯は、餘儀なく取次の代理をつとめて、玄關の戸を明けに行つたと思ふと、やがて村瀨と云ふ男を連れて入つて來た。この村瀨（四十五六）と云ふのは、當家の三太夫古井の知人で、同じ、某伯爵家の家來であるが、今夜は暇を貰つたので、何所かでやつた一杯機嫌に、古井の所へ遊びに來たのである。

村瀨はまだ柳部伯を知らないから、三太夫の風俗を假裝とは知らず、同じく正物と思つて腰元の美人と、何か味な交情でもあらうかと云ふ早合點。

村瀨　（室に入りながら）イヤ、これは御邪魔で御座い……私は古井さんに會ひ度いのですが……

ト、少しテレ／＼氣味で云ふ、夫人靜子氣の毒さうに

夫人　古井さんですか……一寸あの……出まして御座いますが、何ぞ御用なら承つて置きませう。

村瀨　イヤ……直々に申さんと解らん事ですから、甚だ御迷惑でも、暫時待して、貰ひませう。

ト、遠慮無く椅子に掛け、而も卓の上の卷煙草を取つて、直ぐにこれを吹かし初める、伯は苦々しい顏で見て居る。

村瀨はまた夫人に向ひ、

村瀨　私は村瀨一直と申して、古井とは親戚同樣にして居る者で、皆さんにやア初めて御目に掛りますが、古井がいろ／＼御厄介に成つて居ります。……併し御女中！お前さんは何と仰有るんだね？

ト、そろ／＼馴々しく成る、伯はムッとして何か云はうとすると夫人は進つて、

夫人　私は……私は辨と申します。（ト、腰元の名をかたる）

村瀨　お辨さん？　さう、お名前は兼て承つて居ました。お辨さんたアお前でしたかイ？　成る程好い御容色だ。イヤお辨さんには取分け親切にして貰つてるなんて、古井も喜んで居りますよ。ハヽヽ！

村瀬　時にお辨さん！　此の方は？（ト、伯の方へねじ向き）古井の御同役の方ですかナ？

夫人　この方ですか？……あの……つい近頃入らしつたんです。

村瀬　ア、、さうですか。道理でまだ。不馴だと思つた。イヤ君！　君は何と云ふんですナ？

伯（こらへかれて）私か、私は伯爵柳部……

村瀬　そりやア解つとる。伯爵柳部家の御家來で、名は何と云ふんだと云ふ事さ。

伯　何を？

ト、伯のいきまく様子を、夫人は傍より引取つて、

夫人　此の方はあの……少々耳が遠くつて居らつしやるんですから、何かお聞き違ひなすつたんでせう。……

……お名はあの……伊、伊田さんと仰有ります。

村瀬　伊田さんか……成る程古井にも聞かなかつた名だ。それはさうとお辨さん！　お前さんの眼は大層赤く成つてる……泣いてましたナ？

夫人　いゝえ、貴君！（ト云ひながらギロツトする。）

村瀬　ハ、ア、さてはその伊田とか云ふ人に、お前さんいぢめられたんだね。

ト、憎くさうに一寸伯を見る。伯周章てゝ、

伯　ナニ、私がいぢめたんぢや無い。……主、主人に叱られたんです。

村瀬　事實かね？　お辨さん！

夫人　……はい！

村瀬　可哀さうに、こんな好い人を叱るなんて……イヤ主人と云ふ者は、何所のも隨分邪見な物と見える。……然し、其所へ行つちやあ私の主人なんぞは、物は解つてるし、情は有るし、今時一寸珍らしい方だなア

夫人　へエ、そんなに好いお方なんですか？

村瀬　左様！　我々初め下々の者にも、滅多に小言なんぞ仰有つた事は無い。今夜も今夜で、御自分が夜會へ入らしやるに付いちやア、婢僕にも娯樂をさせてやり度いと云ふんで、かうして私にも暇を下だすつた。それに引きかへて、當家の柳部伯は如何です？　自分達ばかり浮かれて出て、お前さん方に留守番ばかり、

その癖御褒美の御土産も無いんだらう、それぢやア成る程やり切れんワ。ハヽヽヽ！

伯夫婦は顔を見合せて忍入ある。村瀬は少しも氣が付かず、尚圖に乗つて、

村瀬　全体御當家の御主人は、あんまり評判の好い方ぢやア無い。

伯　何だと？

夫人　何うなんです？

村瀬　イヤ、何でも無い事さ。

夫人　それは村瀬さんいけませんよ。ほんとに御評判が惡いのなら、私共も亦その心算で、それ〲覺悟も御座いますから、何卒仰有つて下ださいましな！

村瀬　成る程……ぢや仕方が無い。お話仕やうか。だが……何だか……ヽヽ、シラフぢやア云ひにくいなア。

夫人　そんなら一杯さしあげませうか。

村瀬　ナニ一杯？　頂ける？　そりやア難有い……

夫人　丁度此所に御座いますから、伊田さん！　ついでお上げなさいな！

ト、隅の臺の上から、ブランデーの入つた立派な切子の罎に、小さなコップの付いたのを、卓の上に運んで來る。

村瀬　こりやア豪氣だ。

夫人　伊田さん、酌いであげて下ださいな！

伯　私がか？

村瀬　同じ事ならお辨さん！　お前さんに願ひ度いですナ。

夫人　では私が……

ト、夫人酌いで出す、村瀬一口飲んで舌鼓打ち、

村瀬　柳部伯は上戸だけあつて、成る程酒も吟味してある。イヤ、こりやア決して廉ひ價ぢやアありませんナ。

夫人　そんな事アどうでも宜しう御座いますから、はやく肝腎の御話を！

村瀬　肝腎の話とは？

夫人　アラ、御當家の評判の惡い事を……。

村瀬　オヽ、さうでしたナ。ぢやア云ひませう。

伯夫婦左右から寄つて耳を引立る。

村瀬　だがお前さん達、決して御主人も素破抜いちやアいけませんせ。そりやアほんの是ッきりの話なんだから……

夫人　それはもう……ほんの心得の爲めに伺ふんですから、何で御上へ申し上げませう。ねェ伊田さん！

伊田　さうですとも……私なんぞは殊に新參だから、是非念の爲めに聞いておき度いです

（ト、是もやうやく化け了うせる）

村瀬　そんなら云ふが、第一御當家の御主人達は、夫婦の愛情と云ふものを知らない。考へて見りやア不幸な方々さ。聞きやア御縁組が出來てから、もう三年に成るッて事だが、御夫婦と云ふなア名ばかりで、此頃ぢやア御二人とも、面白く無い日を送つて居らつしやるざうぢやアないか。……それと云ふのも、私に云はせりやア、お互ひに御心得が惡いからだ。



ト、またコップに一口、二人は顏見合せながら詰めよる。

村瀬　早い話が、夫婦共稼と云ふ樣な、貧乏世帶を持つてると、存外交情好く暮らせるもんだが、貴族だの財産家だのと云ふ奴は、得て夫婦間が冷淡に成つて、家庭が面白く行かないものさ。それと云ふのが、畢竟他に苦勞が無いからだ。で、二人とも閑なもんだから
いゝ、いゝ
しよざいが無さに欠點の探しッこを初め、その小言を云ひ出しやア、云はれた方でも抗辨する。抗辨をされりやア尙癪にさはる。と、まア云つた樣な理で、果は



殿樣は表へ飛び出して、何か面白い事を見付ける樣に成り、他所に面白い者が出來ると、奥樣はまたそれを嗅ぎ付けて、いよいよ御氣嫌が惡くなる。それが何所の御邸にもある奴サ。

伯　成る程……成る程……

村瀬　ねエ君！それに相違無からう。で、この柳部家の如きも、家柄は好し、財産は有り、何不足無い樣なもんだが、それで居て御夫婦の間が、始終面白く行かないと云ふもの

は、畢竟御兩方に仕事の無いのと……それに第一、一家に無くて成らない物が、生憎欠けて居るから仕方が無い――いくら金があつても、道具があつても、この寶が無かつた日にやア、如何に立派な柳部家でも、夫婦共稼の貧乏世帯にも及ばない、お氣の毒な話さね。

夫人　モシ、家に無くて成らない物……その寶物とは何の事ですか？

村瀬　成る程お前さん方はお若いから、その寶の難有味は知るまい。

夫人　ですから敎へて下さいましな！　ねエ貴君！　伊田さん！　伺つて置き度いわねエ。

伯　さうぢや。これは是非敎へて貰はう。

村瀬　その寶と云ふのは、他でも無い子寶の事さ。

伯夫人　ヤッ、子寶

村瀬　この柳部家には、夫婦を乘せる立派な馬車はあるが、まだ若樣の乳母車が無い樣だ。……若樣に限らない、御孃樣でも結構！　何でもお子樣と云ふ寶さへありやア、その子寶の功德によつて、御夫婦は睦まじく、御家は安泰、柳部伯萬歲と云ふ事に成るんだ。ねエお辨さん！　伊田君！　何うだいさうぢやあるまいか。

ト、朦朧とした醉眼に伯夫婦をぢつと見詰める、二人は暫時顏を見合せたが、初めて生き蘇つた樣に、

伯　村瀬さん！　好い事を敎へて下すつた。

夫人　ほんとに貴君難有う。

村瀬　イヤ、さう眞面目にお禮を云はれる事は無い。

伯　（頻りに點頭き乍ら）成る程、その通りぢや、その通りぢや！

夫人　（も感に入つて）ほんとに今まで氣が付かなつた事！

伯　（ぢつと夫人を見て）靜！　私が惡かつた。

夫人　（嬉しさうに）アラ、私が惡いので御坐いますよ。

ト、互ひこ打ち解けて、さも懷しさうに双方からより添う。村瀬合點の行かぬ體で、

村瀬　オイ〱お辨さん！　伊田さんも何を言ふてるんだ？

伯夫婦は村瀬を顧みもせず、

伯　今日から改めて交情好くせうぜ

夫人　今までの事は水に流して……

伯　……もう馬車は出來た時分ぢやが……

夫人　馬車も馬車で御坐いますが、はやく乳母車の要ります樣に……

ト、互ひに眼と眼を合はせてニッコリ。

所へ馭者入つて來て、

馭者　御前！　御馬車が宜しう御坐います。

村瀨は思はず坐を立つて、

村瀨　何だ、御前？　ト、伯の顏を見る。

伯　イヤ、失禮した。私達はもう出なけりや成らん

夫人　その中古井も歸りませう。まアゆつくりお遊びなさい！　と、二人連れ立つて玄關の方へ出かける。

村瀨は呆氣に取られて居たが、やがて我と我が頭を抱へて、

村瀨　南無三！　一杯喰はされたか……

ト、獨語をはやくも聞きつけ、夫人は戸口で振りかへり、ブランデイの罎を顧で指ながら、

夫人　何卒澤山召し上つて！　（をはり）

女子教育上の一大問題

各女學校では賤業者の子女を如何に取扱ふか、との問題に付、婦女通信社が東京市中の各女學校長、舍監を訪問して得る實狀を聞くに左如し▲女子大學　是れまで嘗て花柳社界の娘を收容したるものなし、然れど賤業者の娘なればとて一圖に之れをハネ付るは教育の本義ならず、然りとて直ちに入學を許しなば監督上意外の弊を來すやも知れず「入學を許すか許さぬか」に就いては目下研究中▲三輪田女學校　寧ろ歡迎の有樣にて現に花柳社界の娘の通學生五名あり斯かるものを教育すること面白く且つ教育者の本分なりとの意見あり而も現學生は何れも成蹟良好なりと▲跡見女學校　一切入學を許可せざるものに定め其方針を履行せり▲日本女學校　或る條件の下に入學を許し居れり、即ち廓外より通學するか寄宿舍に入るか自宅より通學するを許さず、生徒は願書に某の養女若くは某々の子女と明記して入學し來れるやうなり▲女子美術學校　本郷弓町なる同校にては「公認されたる營業者の娘を何ぞ拒むの理あらん云々」とて公然入學を許し居れり、本年度の入學志望者中には花柳社界の娘七八名ありと▲女子職業學校　現在に入學を拒絶し居れり、又履歴に偽りて入學したるものある時は保證人を介して退學せしめ居れり▲第二高等女學校　第一、第三の高等女學校と共に府立と云ふ名義の下に花柳社界の娘の入學を許可し居れり、此の問題に對して第二高等女學校長女子師範學校長たる林吾一氏は「花柳社界の娘を良家の娘と一緒にして教育するとは全然反對なり、甲さんは待合の娘じやげな乙さんは貸座敷の娘ぢやげなと話し合ふ間に今まで此の營業者なるもの丶性質を知らざりし良家の娘は、先づこれを覺えると同時に其の如何なるもの婦女通信二月二十一日ノ六（第三種郵便物認可）かなも耳にするに至り果ては交互に相往來するに到れるものと見做さゞる可からずされば花柳社界の娘は一緒に集めて教育するの要あり」云々▲其外　芝公園の美術學校、青山女學院、虎ノ門女學館など以上三種の方針にて無意味に入學を許し居るものと、條件をつけたりと絶拒し居る斯の如く此の問題に對する女子教育家の意見は區々にして一定せず、或者は絶体的に入學を禁じ、或者は半ば餘儀なく之を許し、或者は敢て拒まずと云ふが如く、方針を異にせるは奇異の現象といふ可、これは元より愼重に研究すべき問題にて、輕々に許否を斷ず可らずと雖も、而も吾人を以て之を見ば、敢て處置に苦しむの必要なきが如し、玉石淘汰の原則に基き彼等を良家の子女と、其良化を傳ふると教育家の本ある分なる可けれ、其の惡感化を憂ふるが如きは、未だ教育の手腕に缺く所ある者丶杞憂なりと信す、

第五卷第五號記事豫告

四月五日發行

毎月五日發行

定價表	
一册（紙數二百八頁）	金二十錢
四册（三ヶ月分）	前金七十五錢
八册（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）	前金二圓八十錢
内（定刊數……十二册　增刊四回……一、四、七、十月價格同一）	
郵稅 一册	二錢

廣告料	二十四字詰一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	割引 四十圓
一等	五十四錢	十七圓二十八錢	割引 三十三圓
二等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引 二十七圓
三等	三十七錢	十一圓八十四錢	割引 二十三圓

▲等級の位置〃切日等御照會次第御報可致候

注文略規
●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治卅八年三月五日發行　第五卷第四號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工場
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

（後付の一）

學校賞與品　發兌元

日本少年傳　大町桂月君著　（全一册洋裝）　正價拾錢　郵稅壹錢五厘

新撰日本小歷史　增田于信君著　（全一册洋裝）　正價拾五錢　郵稅六錢

花の白雲　萩野、落合、小中村、三君合著　正價拾八錢　郵稅四錢

紅葉の錦　萩野、落合小中村、三君合著　正價拾八錢　郵稅四錢

枯野の雪　萩野、落合、小中村三君合著　正價拾八錢　郵稅四錢

卯花月夜　萩野、落合、小中村、三君合著　正價拾八錢　郵稅四錢

軍神廣瀨中佐　博文館編輯局編　正價拾錢　郵稅壹錢五厘

平相國　高山樗牛君著　（全一册洋裝）　正價拾五錢　郵稅四錢

少年讀本

▲全部五拾册大判洋裝並綴毎册密圖拾餘個挿入約百參拾頁正價一册拾三錢宛
全部五圓拾錢　郵稅四錢

- 第一編　高島秋帆　福地櫻痴君著
- 第二編　白河樂翁公　中村秋香君著
- 第三編　河井繼之助　戸川殘花君著
- 第四編　三條實美公　依田學海君著
- 第五編　曲亭馬琴　饗庭篁邨君著
- 第六編　井伊掃部頭　巖谷小波君著
- 第七編　山田長政　遲塚麗水君著
- 第八編　錢屋五兵衛　桐生悠々君著
- 第九編　春日局　岸上質軒君著
- 第十編　水戸烈公　野口珂北君著
- 第十一編　桐野利秋　春山育次郎君著
- 第十二編　藤田東湖　大和田建樹君著
- 第十三編　伊能忠敬　幸田露伴君著
- 第十四編　新井白石　武島羽衣君著
- 第十五編　水野越州　中島二葉君著
- 第十六編　池大雅　田山花袋君著
- 第十七編　木內宗吾　松原廿三階堂君著
- 第十八編　西鄕隆盛　川崎紫山君著
- 第十九編　坂本龍馬　阪崎紫瀾君著
- 第二十編　横井小楠　大野洒竹君著
- 第廿一編　貝原益軒　石原笠軒君著
- 第廿二編　渡邊華山　渡邊霞亭君著
- 第廿三編　中濱萬次郎　石井研堂君著
- 第廿四編　近衛忠熙公　勢多章之君著
- 第廿五編　間宮倫宗　笹川臨風君著
- 第廿六編　周布政之助　堺枯川君著
- 第廿七編　荻生徂徠　內田不知庵君著
- 第廿八編　松平伊豆　森山吐虹君著
- 第廿九編　中江藤樹　國府犀東君著
- 第三十編　島津齊彬公　春山鶴峯君著
- 第卅一編　高野長英　千河岸櫻所君著
- 第卅二編　橋本左內　桐生悠々君著
- 第卅三編　釋月性　千河岸櫻所君著
- 第卅四編　平野國臣　白河鯉洋君著
- 第卅五編　熊澤蕃山　幸田成友君著
- 第卅六編　雲井龍雄　玉木椿園君著
- 第卅七編　野中兼山　北村秀陽君著
- 第卅八編　大鹽平八郎　堀紫山君著
- 第卅九編　佐久間象山　塚原澁柿君著
- 第四十編　小栗上野介　勢多章之君著
- 第四十一編　阿部伊勢守　熊田葦城君著
- 第四十二編　松尾芭蕉　國府犀東君著
- 第四十三編　石川丈山　田岡嶺雲君著
- 第四十四編　德川吉宗　草野正義君著
- 第四十五編　烈女お藤　藤本藤陰君著
- 第四十六編　林子平　松居眞玄君著
- 第四十七編　塙檢校　長谷川天溪君著
- 第四十八編　本居宣長　落合直文君著
- 第四十九編　高田屋嘉兵衛　中村冷露君著
- 第五十編　大槻磐水　大槻如電君著

適切圖書廣告　博文館

大町桂月君著 **學生訓**（全一册洋裝）正價貳拾錢 郵稅四錢

大町桂月君著 **續學生訓**（全一册洋裝）正價廿五錢 郵稅四錢

大町桂月君著 **女學生訓**（全一册洋裝）正價廿五錢 郵稅四錢

大町桂月君著 **處生訓**（全一册洋裝）正價廿五錢 郵稅四錢

菅綠蔭君著 **成功要錄**（全一册洋裝）正價廿八錢 郵稅四錢

菅綠蔭君著 **言行要錄**（全一册洋裝）正價參拾錢 郵稅六錢

中村敬宇君譯述 **西國立志編**（全一册洋裝）正價廿七錢 郵稅八錢

澁江保君著 **世界格言大全**（全一册洋裝）正價四拾錢 郵稅四錢

石井研堂君著

少年工藝文庫

（每編有名畫家密圖數十個插入）

第一編●鐵道の卷
第二編●水道の卷
第三編●瓦斯の卷
第四編●寫眞の卷
第五編●電話の卷
第六編●硝子の卷
第七編●紡績の卷
第八編●活版の卷

第九編●汽船の卷
第十編●製紙の卷
第十一編●銅山の卷
第十二編●電燈の卷
第十三編●陶器の卷
第十四編●漆器の卷
第十五編●時計の卷
第十六編●マッチの卷

第十七編●織物の卷
第十八編●染色の卷
第十九編●煙草の卷
第二十編●砂糖の卷
第廿一編●釀造の卷
第廿二編●石油の卷
第廿三編●機械の卷
第廿四編●建築の卷

▲全部廿四册 大判洋裝並綴
正價一册拾五錢 郵稅一册四錢
全部三圓貳拾錢

農學博士横井時敬君校閲　農學士井上正賀君著

通俗農藝文庫

第一編●農學初步
第二編●作物生理
第三編●作物病理
第四編●土壤編

第五編●肥料編
第六編●氣候編
第七編●作物栽培
第八編●園藝編

第九編●養畜編
第十編●養蠶編
第十一編●養鷄編
第十二編●農業經濟

▲全部拾二册洋裝大判並綴
每編木版數拾個入紙數約百六十頁
正價一册廿錢 全部貳圓四拾錢
郵稅一册四錢

天城安政君著

少年商業文庫

（每編有名畫家密圖插入）

第一編●勤儉貯蓄
第二編●商業の栞
第三編●世界金傑譚
第四編●商業算の話
第五編●商人修身訓
第六編●簿記の栞

▲全六册洋裝大判並綴
紙數一册約二百頁
正價一册金拾五錢 六册八拾五錢
郵稅一册四錢

（後付の三）

學校賞與品

發兌元

新撰明治字典　太田淳軒君著　（袖珍版美本）　正價 卅八錢　郵稅 四錢

讀書法　星野久成君著　（全一册洋裝）　正價 拾錢　郵稅 四錢

學術自修法　飯泉規矩三君著　（全一册洋裝）　正價 拾貳錢　郵稅 四錢

處生要訓　本田增次郎君著　（全一册洋裝）　正價 參拾錢　郵稅 四錢

成功遂志 勤學要訣　吉田巳之助君譯　（全一册洋裝）　正價 廿八錢　郵稅 六錢

明治書翰文　大和田建樹君著 一六先生書　正價 參拾錢　郵稅 四錢

夜學讀本　堀江秀雄君著　（全一册洋裝）　正價 廿五錢　郵稅 六錢

小僧讀本　村井弦齋君著　正價 拾貳錢　郵稅 四錢

理科十二ヶ月

石井研堂君著　（有名畫家密畫十數個挿入）

第一編●新風船　第二編●雪達磨　第三編●花の錦　第四編●汐干狩

第五編●植物園　第六編●蜻蛉祭　第七編●游泳臺　第八編●富士詣

第九編●暴風雨　第十編●銃獵者　第十一編●幻燈會　第十二編●歸省録

▲全部十二册　大判洋裝紙數一册約八拾頁　正價壹册金拾錢全部壹圓郵稅一册貳錢

少女文庫

華族女學校學監下田歌子女史編　（毎編密畫數拾個挿入）

第一編●お伽噺教草　第二編●庭訓お伽噺

第三編●內國少女鑑　第四編●外國少女鑑

第五編●家庭の心得　第六編●學校の心得

全部六册大判和裝一册約二百五十頁正價一册參拾五錢全部一册壹圓九拾錢郵稅一册六錢宛

家庭文庫

華族女學校學監下田歌子女史編

第一編●女子書翰文　第二編●女子普通禮式　第三編●詠歌の栞　第四編●料理手引草

第五編●婦女家庭訓　第六編●母親の心得　第七編●家事要訣　第八編●女子手藝要訣

第九編●女子普通文典　第十編●女子作文の栞　第十一編●女子遊戲の栞　第十二編●（卷四所見）家庭敎育

▲全部拾貳册大判和裝美本　紙數壹册貳百五拾頁以上　正價一册卅五錢全部參圓七拾錢　郵稅一册八錢宛

（後付の四）

適切圖書廣告　博文館

青年訓　大町桂月君著（全一冊洋裝）正價廿八錢　郵税四錢

作文錦囊　井上敏夫君著（全一冊洋裝）正價卅五錢　郵税六錢

學生必携 作文資料　堀江秀雄君著（全一冊洋裝）正價拾五錢　郵税四錢

女學生の栞　松原岩五郎君著（全一冊洋裝）正價卅五錢　郵税六錢

日本女禮式大全　坪谷善四郎君著（函入壹圓廿錢小包拾五錢）洋裝美本正價九拾錢　小包料拾五錢

二宮尊德　幸田露伴君著（全一冊洋裝）正價拾貳錢　郵税四錢

河村瑞軒　高橋太華君著（全一冊洋裝）正價拾貳錢　郵税貳錢

近江聖人　村井弦齋君著（全一冊洋裝）正價拾貳錢　郵税貳錢

少年讀本

巖谷小波君著（毎編有名畫伯密畫十數個挿入）

第一編●日本歴史　第二編●日本地理　第三編●世界歴史　第四編●世界地理（減價）　第五編●日本立志談　第六編●世界立志談（減價）

△全部六册　大判洋裝　紙數一册百四十頁　正價一册拾五錢　減價分一册拾錢　郵税一册四錢宛

少年日露戰史

巖谷小波君著（毎編寫眞銅版口繪及有名畫伯密畫十數個挿入）

第一編●開戰の卷　第二編●決死隊の卷　第三編●九連城の卷
第四編●南山の卷　第五編●得利寺の卷　第六編●摩天嶺の卷
第七編●大石橋の卷　第八編●黄海の卷　第九編●遼陽の卷

毎月一回發行　紙數一册百頁以上　正價一册拾貳錢　六册六拾七錢　十二册壹圓廿八錢　郵税一册四錢ッヽ

日本歴史譚

大和田建樹君著（毎編有名畫伯密畫十數個挿入）

第一編●日本開闢　第二編●畝傍山　第三編●三韓征伐　第四編●聖德太子　第五編●菅公　第六編●九郎判官　第七編●曾我兄弟　第八編●惡七兵衛
第九編●相模太郎　第十編●楠公　第十一編●日蓮　第十二編●大塔宮　第十三編●豐太閤　第十四編●七本槍　第十五編●關ケ原　第十六編●水戸黄門
第十七編●四十七士　第十八編●平田篤胤　第十九編●櫻田門外　第二十編●七卿落　第廿一編●彰義隊　第廿二編●城山　第廿三編●平壤　第廿四編●威海衛

全部二十四册　大判洋裝　紙數一册百頁　正價一册金八錢　全部壹圓六拾錢　郵税一册四錢宛

（後付の五）

發兌元　學校賞與品

紀文大盡（全一册和裝）
村井弦齋君著
正價拾貳錢　郵稅四錢

日露開戰軍歌（全一册）
大和田建樹君作歌上眞行君作曲
正價參錢五厘　郵稅三册迄貳錢

露西亞征討の歌（全一册）
佐々木信綱君作歌上眞行君作曲
正價參錢五厘　郵稅三册迄貳錢

征露新軍歌（全一册）
久保天隨君作歌上眞行君作曲
正價四錢　郵稅三册迄貳錢

露國征伐軍歌（全一册）
大町桂月君作歌上眞行君作曲
正價四錢　郵稅三册迄貳錢

征露の歌
井上文學博士作歌山田源一郎君作曲
正價貳錢五厘　郵稅八枚迄貳錢

征露軍歌 **旅順の海戰**
巖谷小波君作歌　山田源一郎君作曲
正價貳錢五厘　郵稅八枚迄貳錢

征露軍歌 **決死隊**
巖谷小波君作歌　東儀鐵笛君作曲
正價貳錢五厘　郵稅八枚迄貳錢

武田櫻桃、木村小舟兩君編

教訓繪ばなし

第一編●家庭の卷
第二編●お噺の卷
第三編●海軍の卷
第四編●陸軍の卷
第五編●動物の卷
第六編●植物の卷
第七編●ポンチの卷
第八編●遊戲の卷

第九編●地理の卷
第十編●歷史の卷
第十一編●立志の卷
第十二編●冒險の卷
第十三編●修身の卷
第十四編●お伽の卷
第十五編●戰爭の卷
第十六編●逸話の卷

第十七編●奇談の卷
第十八編●娛樂の卷
第十九編●理科の卷
第二十編●博物の卷
第廿一編●發明の卷
第廿二編●衞生の卷
第廿三編●尙武の卷
第廿四編●談話の卷

▲全部廿四册　洋裝大判美本
密畫數十個入　正價一册金五錢
全部金壹圓　郵稅一册貳錢宛

巖谷小波山人作　武內桂舟君畫

明治お伽噺

第一編●お伽十番
第二編●お伽三幅對
第三編●新八犬傳（上）
第四編●新八犬傳（下）

第五編●お伽四天王（上）
第六編●お伽四天王（下）
第七編●新伊蘇普物語
第八編●お伽十二支（上）

第九編●お伽十二支（下）
第十編●お伽洋行船（上）
第十一編●お伽洋行船（下）
第十二編●お伽立志噺

▲全部拾貳册　大判洋裝美本
正價一册拾貳錢　全部壹圓廿八錢
郵稅一册四錢ツヽ

木村小舟君作歌　田村虎藏君作曲

家庭唱歌

▲全部拾貳册　洋袖珍美本
實價一册貳錢五厘　六册拾四錢
十二册廿七錢　郵稅一册貳錢ツヽ

國府犀東君著　**鎭西八郎**（全一册洋裝）　正價拾五錢　郵税四錢

中内蝶二君著　**旭將軍**（全一册洋裝）　正價拾五錢　郵税四錢

大町桂月君著　**鬼吉川**（全一册洋裝）　正價拾五錢　郵税四錢

菅緑蔭君著　**カーネギー**（全一册洋裝）　正價貳拾五錢　郵税四錢

横井農學博士著　**農業讀本**（全二册和裝）　正價一册拾四錢　郵税一册四錢

稻垣農學博士著　**農學入門** 合本（全一册）　正價參拾五錢　郵税八錢

園田孝吉君著　**赤心一片**（全一册洋裝）　正價四拾錢　郵税八錢

大町桂月君著　**軍國訓**（全一册洋裝）　正價貳拾八錢　郵税四錢

巖谷小波君編

世界お伽噺

（每編有名畫家密畫數十個插入）

第一編●世界の始
第二編●五色の石
第三編●珊瑚島
第四編●魔法博士
第五編●無人島大王
第六編●鬼婆と少女
第七編●法螺先生
第八編●二人王子
第九編●小人島
第十編●孫悟空
第十一編●驢馬姫
第十二編●大人國
第十三編●豫言者
第十四編●王城乘取
第十五編●續法螺先生
第十六編●猿智惠小僧
第十七編●舍長征伐
第十八編●夢の三郎
第十九編●鷲の踊
第二十編●光明姫
第廿一編●鷄の使
第廿二編●日の車
第廿三編●三人片輪
第廿四編●白い鳥
第廿五編●消炭太郎
第廿六編●十二王妃
第廿七編●狐の裁判（上）
第廿八編●狐の裁判（下）
第廿九編●奇躰の洋燈
第三十編●獵師大臣
第卅一編●九重塔
第卅二編●虹の橋
第卅三編●魔法の卵
第卅四編●岩の船
第卅五編●鐵の王子
第卅六編●鐵の狼
第卅七編●浮かれ胡弓
第卅八編●豆の王
第卅九編●三つの難題
第四十編●德利長者
第四十一編●梨の殿樣
第四十二編●黒足小僧
第四十三編●黄金の船
第四十四編●幸福の花
第四十五編●大洪水
第四十六編●刀三本
第四十七編●石の行方
第四十八編●手無し姫
第四十九編●啞の女王
第五十編●骸骨島
第五十一編●三筋の金髪
第五十二編●鬼大名
第五十三編●魔法學校
第五十四編●鶯王子
第五十五編●朝星夕星
第五十六編●法螺くらべ
第五十七編●指輪の魔力
第五十八編●双子草紙
第五十九編●鬼だまし
第六十編●二人半助
第六十一編●病魔降伏
第六十二編●金馬將軍
第六十三編●熊娘
第六十四編●龍宮の使
第六十五編●森の女
第六十六編●日の罰

（世界各國の傳説口碑）
▲全部壹百册洋裝大判
紙數壹册約七拾頁正價
壹册八錢全部百册六圓
參拾錢郵税一册貳錢

（後付の八）

明治卅三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

女學世界

第五巻第四號

明治卅八年三月五日發行
毎月一回五日發行



(定價金貳拾錢)

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㉞
明治38年2月(第5巻第3号)、3月(第5巻第4号)

2007年12月10日　第1刷発行　　定価(本体20,000円+税)

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14(〒113-0021)
電話　03-3947-8251[営業] 03-3947-8254[編集]
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3287-4　C3321